

# 初代文集

E. G. ホワイト著  
福音社編集部訳

EARLY  
WRITINGS

of

Ellen G. White

Printed and Published by  
Japan Publishing House  
1966 Kamikawai-cho, Asahi-ku  
Yokohama, Japan



# 目

# 次

## 経 験 と 幻

序・・・・・・・・・・・・・・・・	10
-------------------	----

「経験と幻」初版の序文・・・・・・・・	14
---------------------	----

本書の歴史的背景・・・・・・・・	16
------------------	----

大再臨覚醒／預言の期間の計算／失望とその影響／エレン・ハーモンに幻が与えられる／二種類の再臨信徒／聖所に関する光の始まり／真理は幻によって確認された／安息日遵守の始まり／安息日の重要性が示される／重要な安息日会議／開拓者たち、出版を始める／「レビュー・アンド・ヘラルド」誌の発刊／出版事業の発展／バルト・クリーク、出版の中心となる／「閉ざされた門」と「開かれた門」／困難に直面

経験と幻	57
最初の幻	61
その後の幻	90
印する働き	96
神の民に対する神の愛	100
もろもろの天体が揺り動かされる	104
開かれた門と閉ざされた門	105
信仰の試み	111
小さい群れへ	115
最後の災いと審判	121
二千三百日の終わり	124
悩みの時に備えてなすべき務め	127
心霊現象	131

## 補

## 遺

使命者たち・・・・・134

獣の刻印・・・・・139

盲人の手引きをする盲人・・・・・144

終末のための準備・・・・・146

祈りと信仰・・・・・150

集められる時・・・・・154

ホワイト夫人の夢・・・・・161

ウィリアム・ミラーの夢・・・・・166

説明・・・・・172

福音の秩序・・・・・189

教会の諸問題・・・・・200

霊の賜物

教会の希望	205
キリストの再臨の準備	210
集会に忠実であること	215
未経験な人々へ	221
自制	226
不敬な言葉	227
偽りの牧者	228
人間への神の賜物	232
序文	238
サタンの墮落	254
人類の墮落	257

救いの計画・	260
キリストの初臨・	266
キリストの伝道・	273
変貌の山・	279
キリストに対する裏切り・	283
キリストの裁判・	289
キリストの十字架・	298
キリストの復活・	308
キリストの昇天・	322
キリストの弟子たち・	324
ステパノの死・	332
サウロの回心・	335
ユダヤ人、パウロを殺そうとする・	338
パウロ、エルサレムを訪問する・	344



大背教・	349
不法の秘密・	355
死は永遠の責苦ではない・	361
宗教改革・	368
教会と世俗の結合・	374
ウィリアム・ミラー・	378
第一天使の使命・	383
第二天使の使命・	390
再臨運動の説明・	394
再臨運動の説明――続・	402
聖所・	409
第三天使の使命・	414
堅固な土台・	420
心霊術・	425

録

[illegible]



経  
験  
と  
幻

## 序

百年以上も前の書物が、今も発行され、ますますその需要が増し、現代の諸問題に関する最近の書物と同じように読まれることは、この移り変わりの激しい時代にあつて、実に珍しいことである。ところが、『エレン・G・ホワイトの初代文集』は、このような羨望に値する記録を持っているのである。長年にわたつて、版が重ねられてきたが、本書は、アメリカにおける第五版である。

本書は、「エレン・G・ホワイト夫人のクリスチャン経験と幻」初版一八五一年、「経験と幻の補遺」一八五四年発行、「霊の賜物」第一巻一八五八年発行、というホワイト夫人の初期の三冊の著書の再発行であるから、文字通りの初代文集なのである。

『初代文集』が、このように広く、いつまでも人々に読まれるのは、預言の霊によつて、初期の教会に与えられた知識と励ましのメッセージを、手もとにおいて研究しようとする切なる願いが衰えないためであろう。

本書の第二版は、「経験と幻」と「補遺」とを第一巻、「霊の賜物」を第二巻として、全二冊の書物として一八八二年に出版された。そのとき、これら二巻の原著の第一巻に対して行われたある種の補足とわずかの編集上の変更について、発行者は次のように述べている。

「年代と説明を加えた脚注、また、原著で言及されてはいたが説明されていなかった二つの興味深い夢を追加したことは、この版の価値を高めるものであると思う。このほか、この版においては意味を明瞭にするために新しい用語を用い、また、構文を変えたこと以外には原著を少しも変更せず、また、省略もしなかった。また、著者自身の監修と全的承認を経ずして、原著の思想または感情におけるいささかの変更も、どんな字句的変更をも行わなかった。」

この二冊の書物は、一八八二年に『初代文集』と題して、一冊にまとめて再発行された。一九〇六年には、版が改められて、アメリカ版の第三版が発行され、広く配布されて、ますます増大する需要に応えた。この版のページがすべての引用と、その後に発の行されたホワイト夫人著書索引のための標準となった。

『初代文集』の第四版は、一九四五年に発行された。四十年にわたる印刷のために、新版

が必要になっていたのである。新版は第三版のページどおりに組まれた。現代的綴りと句読点が用いられて、簡単に本書の歴史を述べた新しい序文がつけられた。

この第五版の特徴は、歴史的序言を加えて、本書の時代的背景や種々の記事にまつわる事柄を説明し、また付録においては、それが書かれた時代ほどに現今では、十分に理解されていない言葉や、状況の説明を追加している点である。E・G・ホワイトの原文は、第四版と少しも変わっていない。したがって、「エレン・G・ホワイト著書大索引」にも調和している。

一八四〇年から四四年にわたる再臨運動におけるホワイト夫人の経験を簡単にたどった彼女の最初の略伝が、「経験と幻」のなかに述べられている。それに続いて、初期のいくつかの幻が記されているが、これらの多くは、最初、大判紙、または雑誌の記事として発行されたものである。

「補遺」は、前著のなかで、誤解、または曲解されたいくつかの言葉を説明し、また、教会に追加的勧告を与えている。この出版は、「教会へのあかし」と題する最初のパンフレットが出る一年前のことである。

「霊の賜物」第一巻は、キリストと彼の天使たちと、サタンと彼の天使たちとの間の長期

にわたる争闘についての、最初に出版された記事で、その顕著な点だけを簡潔に生き生きと描写していることが、尊重されている。その後、この簡単な争闘の物語が、大いに敷衍されて、「預言の霊」全四巻となって、一八七〇年から八四年にかけて出版された。この四巻が、広く配布された後で、さらに多くの啓示によってホワイト夫人に示された細かい点を記した有名な大争闘シリーズが発行されて、広く読まれるようになった。「創世時代と父祖」「預言者と王」「キリストの生涯」「初代教会と使徒」「各時代の大争闘」という詳しい書物があるにもかかわらず、この簡単、明瞭で、単純に表現された最初の著述は、「経験と幻」と共に、常に多くの人々から求められているのである。

エレン・G・ホワイト著書刊行会

ワシントン・D・C・

一九六三年三月



## 「経験と幻」初版の序文

われわれは、真剣に真理と聖書の清めを求めている人々の多くが、幻に対して偏見を抱いていることをよく知っている。まず第一に、偽りの幻と現象とを伴った狂信が、多かれ少なかれ、ほとんど至る所に存在してきた。したがって、多くの誠実な人々は、この種のものをすべて疑うようになったのである。第二に、催眠術があらわれ、また、一般に「不思議なたたく音」と呼ばれている現象であるが、これらは、人々を欺き、神の霊の賜物とその働きについて疑惑を抱かせようとして、巧みに計画されたものである。

しかし、神は不変である。ヤンネとヤンブレがサタンの力によつて、モーセの行ったものと同じような奇跡を行うことが許されたけれども、神がパロの前で、モーセによつて行われた奇跡は、完ぺきであった。偽物は使徒時代にもあらわれた。しかし、霊の賜物は、キリストの弟子たちの中にあらわされたのである。そして、神は、この欺瞞に満ちた時代において、神の民に聖霊の賜物とその働きとをあらわさないではおかれないのである。

偽物の目的とするところは、実在するものをまねることである。であるから、このような誤りの霊のあらわれは、神が、聖霊の力によってご自分を神の子供たちにあらわし、神のみ言葉を、栄光のうちに成就しようとしておられる証拠である。

「神がこう仰せになる。終りの時には、わたしの霊をすべての人に注ごう。そして、あなたがたのおすこ娘は預言をし、若者たちは幻を見、老人たちは夢を見るであろう。」（使徒行伝二ノ一七。ヨエル書二ノ二八参照。）

催眠術に関しては、われわれは、常にそれを危険なものに見なしてきた。だから、われわれは、これとは全く関わりはない。われわれは、催眠術にかかった人を見たこともなければ、催眠術についてなんの経験もないのである。

われわれは、この小著が聖徒たちの慰めになることを願いつつ、世に送り出すものである。

ジエームズ・ホワイト

ニューヨーク州、サラトガ・スプリングス

一八五一年八月

## 本書の歴史的背景

『初代文集』は、セブンスデー・アドベンチストにとって、いつまでも特に興味深い書物である。というのは、これが、エレン・G・ホワイト著書中の最も初期のものを含んでいるからである。これらの書物は、一八四〇年代と一八五〇年代の初期に、著者と同様の経験をもった安息日を守る再臨信徒たちの徳を高め、教えを与えるために書かれた。そのようなわけで、著者は、再臨運動の歴史と、一八四四年に起こったセブンスデー・アドベンチスト運動の発展については、読者が、よく知っているものと考えている。そのために、当時よく知られていた出来事が、単に言及されているに過ぎなかったり、また、初期の安息日を守る再臨信徒の歴史的背景のなかで考慮しなければ正しく理解できない表現が、用いられたりしている。

一八五八年、エレン・ホワイトは、黙示録十四章の三天使の使命の宣布について書いたときに、その働きに参加した人々の経験を述べ、われわれが期待するような、これらのメ

ツセージの特徴に関する明快な発表をするのではなくて、それらの経験から学ぶべき教訓を指摘している。<sup>\*</sup>また、エレン・ホワイトは、時々、「名目的再臨信徒」、「閉ざされた門」、「開かれた門」など、いまでは聞きなれない言葉を用いている。

今日、われわれは、そうした勇氣に満ちた時代から一世紀以上も隔たっている。読者ははっきりと、このことを覚えていなければならない。そこで、エレン・ホワイトと同時代の人々が、よく知っていた歴史をふり返り、本書に収められた記事が最初に出版された時をさかのぼること十年から二十年の間の、安息日を守る再臨信徒たちが経験したことの重点に触れてみたいと思う。

ホワイト夫人は、冒頭において、自分の回心と初期のクリスチャン経験について、簡単に述べている。また、彼女は、キリストご自身が再臨されるという聖書の教理、しかも、それが間近であることを聞いたことを語っている。ここにこのように簡単に言及された大再臨覚醒というのは、世界的に広がった運動であつた。それは、多くの人々が、預言的な聖句を綿密に研究した結果起こったものであり、世界中の多くの人々がイエスの再臨という福音を信じた結果であつた。

## 大再臨覚醒

しかし、再臨のメッセージが、最も広く伝えられ、最も多くの人々が信じたのは、米国であつた。多くの教派の有能な男女が、キリストの再臨についての聖書の預言を信じたときに、熱心に再臨を信じる人々が多く起こつた。しかし、注目すべきことは、他とは別箇の特殊な宗教団体が組織されたものではなかつたことである。再臨の希望は、深い信仰復興へと人々を導き、すべてのプロテスタント教会に利益をもたらした。そして、多くの懐疑論者や無神論者が、聖書と神を信じることを公然と告白した。

再臨運動が一八四〇年代の初めに、その頂点に近づいたときに、数百人の牧師たちが一致して、その使命を宣布した。その先頭に立つたのが、ニューヨーク州の東の端に住んでいたウィリアム・ミラーであつた。彼は、町の傑出した人物で、農業を職としていた。彼は、豊かな宗教的経験の持ち主であつたが、若い時に、懐疑論に陥つた。彼は、神の言葉に対する信仰を失い、理神論的考えを持つようになった。しかし、ある日曜日の朝、バプ

テスト教会で、説教を読んでいたときに、聖霊が彼の心に働き、彼は、イエス・キリストを自分の救い主として受け入れた。ミラーは、神のみ言葉の研究を始めた。そして、彼のあらゆる質問に対する満足な解答を聖書の中に発見し、そのページの中に示されている真理を自分で学ぼうと決心した。

彼は、二年の間、聖書を一節ずつ研究するために彼の時間の多くを費した。彼は、研究している一つの聖句に対する満足な説明を見つかるまでは、次の聖句に進んでいかなかったことにした。彼は、聖書とコンコーダンス(用語索引)だけしか用いなかった。やがて、彼は、その研究において、キリストが字義的にみずから再臨なさるという預言に直面した。彼は、また、時に関する大預言、特に、ダニエル書八章、九章にわたる二三〇〇日のダニエルの預言を研究し、それを、黙示録一四章の預言と、神の審判の時を宣言した天使のメッセージとに結びつけたのである(黙示録一四ノ六、七参照)。本書の三七八ページに、ホワイト夫人は、「天使をつかわして」ウィリアムミラーの「心を動かし、彼に預言の研究をするように導かれた」と言っている。

ホワイト夫人は、少女の時に、ミラーが、メイン州ポートランド市で行った二つの連続講演を聞いた。それは、彼女の心に深い消えることのない感銘を与えた。ミラー牧師が、

預言の計算を、どのように聴衆に示したかは、ホワイト夫人のその後の著書、『各時代の  
大争闘』に次のように書かれている。

### 預言の期間の計算

「キリストの再臨の時を最も明らかに示していると思われる預言は、ダニエル書八ノ一四  
の『二千三百の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する』と  
いう預言であった。ミラーは、聖書を聖書自身の注解書とするという彼の規則に従って、  
象徴的預言においては、一日が一年を表わすことを知った（民数記一四ノ三四、エゼキエル  
書四ノ六）。彼は、預言の二千三百日は字義的には二千三百年であって、ユダヤ時代の終結  
する時をはるかに越えているから、その時代の聖所を指すものではないということを知った。  
ミラーは、キリスト教時代においては、地上が聖所であるという一般の見解を受け入  
れた。そこで彼は、ダニエル書八ノ一四に預言されている聖所の清めとは、キリストの再  
臨の時に、地上が火で清められることであると理解した。したがって、二千三百日の正確

な起算点を発見することができれば、キリスト再臨の時は容易に確かめることができる。彼は結論した。こうして、大いなる終結の時、すなわち現在の状態が『そのあらゆる高慢と権力、華麗と虚飾、罪悪と圧迫とともに終わり』のろいが『地から除かれ、死が滅ぼされ、神のしもべたち、預言者や聖徒たち、また、神の名を恐れる者たちに報いが与えられ、地を滅ぼすものが、滅ぼされる』時が、明らかにされるのであった。

ミラーは、新たな、そしていっそうの熱心さをもって、預言の研究を続け、今や驚嘆すべき重要性和尽きない興味にあふれていると思われる問題の研究に、日夜没頭した。彼は二千三百日の起算点の手がかりを、ダニエル書八章には見つけることができなかった。天使ガブリエルは、幻をダニエルに理解させるように命令されてはいたが、彼に部分的説明しか与えていなかった。教会にふりかかる恐ろしい迫害が、預言者の幻に展開されたときに、ダニエルは体力が衰えてしまった。彼は、もう耐えられなくなり、天使は、しばらく彼を離れた。ダニエルは、『疲れはてて、数日の間病みわずらった。』『しかし、わたしはこの幻の事を思つて驚いた。またこれを悟ることができなかった。』

しかし神は、『この幻をその人に悟らせよ』と天使に命じてあられた。この命令は遂行されねばならなかった。天使は、それに従つて、しばらくたったときに、ダニエルのところ



にもどって、『わたしは今あなたに、知恵と悟りを与えるためにきました。』『ゆえに、このみ言葉を考えて、この幻を悟りなさい』と言った（ダニエル書八ノ二七、一六、九ノ二二、二三、二四―二七）。八章の幻のなかで、重要な点が一つ説明されていなかった。それは、時、すなわち二千三百日の期間に関するものであった。それゆえに天使は、再び説明を始めるにあたって、主に時の問題に関して述べた。

『あなたの民と、あなたの聖なる町については、七十週が定められています。……それゆえ、エルサレムを建て直せという命令が出てから、メシヤなるひとりの君が来るまで、七週と六十二週あることを知り、かつ悟りなさい。その間に、しかも不安な時代に、エルサレムは広場と街路とをもって建て直されるでしょう。その六十二週の後にはメシヤは断たれるでしょう。ただし自分のためではありません。……彼は一週の間多くの者と、堅く契約を結ぶでしょう。そして彼はその週の半ばに、犠牲と供え物とを廃するでしょう。』

天使は、ダニエルが八章の幻のなかで理解しなかった点、すなわち、『二千三百の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する』という、時に関する言葉を説明するという目的のために、特につかわされたのであった。『このみ言葉を考えて、この幻を悟りなさい』と命じたあとで、天使が最初に語った言葉は、『あなたの民と、あなた

の聖なる町については、七十週が定められています』ということであつた。ここで『定められています』と訳された言葉は、字義的には、『切り取る』という言葉である。七十週、すなわち四百九十年は、特にユダヤ人のために切り取られていると天使は宣言した。しかし、それは、何から切り取られたのであろうか。二千三百日がダニエル書八章において述べられている唯一の期間であるから、七十週が切り取られたのは、それからに違いない。したがって七十週は、二千三百日の一部であり、この二つの期間は、同時に始まるものでなければならぬ。七十週は、エルサレムを建て直せという命令が出た時から始まると、天使は言明した。この命令の年代を発見することができるなら、二千三百日という長い期間の起算点も確かめることができる。

この命令は、エズラ記の七章に示されている（一一―二六参照）。それは紀元前四五七年に、ペルシャ王アルタシヤスタによって、最も完全な形で發布された。しかしエズラ記六ノ一四には、エルサレムにある主の家が、『クロス、ダリヨスおよびペルシャ王アルタシヤスタの命によって』建てられたと言われている。勅令を発し、確認し、完成したこれら三人の王によつて、預言が二千三百年の起算点として要求していることが成し遂げられた。勅令が完全なものとされた紀元前四五七年を出発点として、七十週に関する預言はすべて

成就されたことがわかった。

『エルサレムを建て直せという命令が出てから、メシヤなるひとりの君が来るまで、七週と六十二週ある』——すなわち、六十九週、つまり四百八十三年ある。アルタシヤスタ王の勅令は、紀元前四五七年の秋に実施された。その時から、四百八十三年がたつと、紀元二七年の秋になる。その時、この預言は成就した。『メシヤ』とは『油を注がれた者』という意味である。キリストは、紀元二七年の秋、ヨハネからバプテスマを受け、聖霊の油を注がれた。使徒ペテロは、『神はナザレのイエスに聖霊と力とを注がれました』とあかししている（使徒行伝一〇ノ三八）。そして、主ご自身も、『主の御霊がわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してくださいましたからである』と宣言された（ルカ四ノ一八）。彼は、バプテスマの後、ガリラヤに行き、『神の福音を宣べ伝えて言われた、「時は満ちた」（マルコ、一ノ一四、一五）。

『彼は一週の間多くの者と、堅く契約を結ぶでしょう。』ここで言われている『一週』は、七十週の最後の週のことである。それは、ユダヤ人のために特に定められた期間の最後の七年である。紀元二七年から三四年に及ぶこの期間内に、最初はキリストご自身によって、そしてその後は彼の弟子たちによって、福音の招きが特にユダヤ人たちに与えられ

たのである。使徒たちが、天国のよろこばしい福音を宣べ伝えるために出て行ったときに救い主は、『異邦人の道に行くな。またサマリヤ人の町にはいるな。むしろ、イスラエルの家の失われた羊のところに行け』とお命じになった(マタイの五、六)。

『彼はその週の半ばに、犠牲と供え物とを廃するでしょう。』紀元三一年、われわれの救い主は、そのバプテスマから三年半の後に十字架にかかられた。カルバリーにおいてさげられた大いなる犠牲によって、四千年の間神の小羊を指し示してきた犠牲制度は終わった。型は実体と出会い、儀式的な制度のあらゆる犠牲と供え物は、そこで終わるのであった。

ユダヤ人のために特に定められた七十週、すなわち四百九十年は、これまで見てきたように、紀元三四年で終わった。ユダヤ国民は、その時、サンヒドリンの決議によって、ステパノを殉教させ、そしてキリストの弟子たちを迫害することにより、福音の拒否を決定的なものにしてしまった。それ以後、救いのメッセージは、もはや選民に限られることなく、全世界に伝えられた。迫害のためにエルサレムを逃げなければならなくなった弟子たちは、『御言を宣べ伝えながら、めぐり歩いた。』『ピリポはサマリヤの町に下って行き、人にキリストを宣べはじめた。』ペテロは、神に導かれて、カイザリヤの百卒長、神を敬

うコルネリオに福音を伝えた。また、キリストに対する信仰へと導かれた熱心なパウロは、『遠く異邦の民へ』福音を伝える任命を受けた（使徒行伝八ノ四、五、二二ノ二一）。

ここまで、預言に指示されたことはみな、驚くばかりに成就した。そして七十週が紀元前四五七年に始まり、紀元三四年に終わることが、疑いの余地なく確定した。この年代から二千三百日の終わりを見いだすことは、難しいことではない。七十週、すなわち四百九十日が二千三百日から切り取られると、あとに千八百十日が残る。四百九十日が終わったあとで、千八百十日もまた成就するはずであった。紀元三四年から千八百十年たてば、一八四四年になる。この大いなる預言の期間が終わったところで、「聖所は清められる」と神の天使はあかししたのである。こうして、聖所の清め―それはキリストの再臨の時に起こるものと、ほとんどすべての人が信じていた―の時が、はつきりと指示された。

ミラーとその仲間たちは、初め、一八四四年の春に二千三百日が終わると信じたが、預言では同年の**秋**になっていた。この点についての思い違いは、主の再臨の時として早いほうの時期を定めていた人々に、失望と困惑をもたらした。しかしこれは、二千三百日が一八四四年に終わって、その時聖所の清めということとで表わされている大事件が起こる、という議論の確かさについては、なんの影響もなかった。

ミラーは、聖書が神の啓示であることを証明するために、聖書の研究を始めたのであって、最初、このような結論に到達することは、全く予期していなかった。彼自身、自分の研究の結果を信じることができないほどであった。しかし、聖書の証拠は、非常に明白で力強いものであったので、無視することができなかった。

彼は、二年間、聖書の研究に没頭していたが、一八一八年に、あと約二十五年でキリストが神の民を贖うために出現される、という厳粛な確信を抱いた」(各時代の大争闘下 巻一〇―一六ページ)

### 失望とその影響

再臨信徒たちは、主が帰って来られると予想した日を、非常な楽しみをもって待った。彼らは、ダニエルの預言が指示している時は、一八四四年の秋であると理解した。しかしこうした熱心な信徒たちは、苦い失望をなめなければならなかった。むかしの弟子たちが

イエスの初臨に関する預言の成就として起きる出来事の真相を理解しなかったために失望に陥ったように、一八四四年の再臨信徒たちも、期待したキリストの再臨に関する預言の展開について失望した。この事について、エレン・ホワイトは、本書の中に次のように書いた。

「イエスは、喜びに満ちて待望した人々の期待したように、火で地を清めて、聖所を清めるためには来られなかった。わたしは、預言の期間についての彼らの計算は正しかったことを見た。預言の時は、一八四四年で終わり、イエスは、その期間の終わりに、聖所を清めるために、至聖所に入られた。彼らの間違いは、聖所とは何であり、その清めとは何であるかを理解しなかったことであつた。\*」

十月二十二日の失望後、間もなく、再臨使命を信じていた多くの信徒や牧師たちが去っていった。この人々の中には、恐怖にかられて、運動に加わった者もあつて、予期した時間が過ぎると、彼らは希望を捨てて去ってしまった。また、狂信に走る者もあつた。再臨信徒たちの約半数は、キリストが天の雲に乗って間もなく現れるという確信を抱いていた。彼らは、世の人々から軽べつされ嘲笑されたが、それは、世の中の人々の恵みの時が過ぎた証拠であると、彼らは考えた。この人々は、主の再臨が、非常に近いと堅く信じていた。

しかし幾週間経過しても、主が出現されなかったもので、彼らの意見が分かれて、分裂が起きた。多数派は、一八四四年に預言は成就せず、預言の期間の計算に間違いがあったに違いないという立場をとった。彼らは、キリストの再臨が、将来のある特定な時に起こるとして、それに彼らの心を向けはじめた。セブンスデー・アドベンチストの先駆者たちであった少数派は、この大再臨覚醒のなかに、神の霊が働いていたことを確信したので、この運動が神の働きでなかったと言うことは、恵みのみ霊を侮ることであると思った。彼らは、そのようなことはできないと感じた。

### エレン・ハーモンに幻が与えられる

彼らは、この信徒の一団の経験と彼らのしなければならぬ働きが、黙示録十章の最後の数節に描かれているのを発見した。再臨に対する待望を復興しなければならなかった。神が彼らを導いておられた。神は、なお、彼らを導いておられたのである。彼らの間に、



エレン・ハーモンという若い女性がいた。そして、彼女は、失望からまだ二か月もたない一八四四年の十二月に、神から預言的啓示を受けたのである。この幻のなかで、主は、再臨信徒たちが、新しいエルサレムに向かって旅をする光景を彼女に示された。この幻は失望の原因を説明しなかった。その説明は、聖書の研究によって与えられ得るものでありまた、それによって与えられたのであるが、幻は、神が、これまで彼らを導いておられたことと、彼らが天の都に向かって進む間も引き続いてお導きになるという確信を、彼らに与えたのである。

若いエレンに示された象徴的な道のはじめに明るい光があつて、天使はそれが、夜中の叫びであると言った。これは、キリストの再臨が切迫したという説教が、一八四四年の夏と秋に、その最高潮に達したことに関連した表現であつた。この幻のなかで、彼女は、リストが人々を神の都へ導いておられるのを見た。人々の会話は、その旅が思ったより長いものであることを示していた。ある者は、イエスを見失つて道から落ちていった。しかし、イエスと都を眺めていた者は、安全にその目的地に着いた。この事が「最初の幻」に描かれているのである。

## 二種類の再臨信徒

最初、この進んだ光をもって前進していたグループと行動を共にしたのは、ほんのわずかしかなかった。一八四六年には、彼らの数は約五十名であつた。

一八四四年に預言が成就したという確信を失った多数派は、約三万を数えた。その指導者たちは、一八四五年四月二十九日から五月一日まで、ニューヨーク州、アルバニーの会議に集まった。そこで、彼らは、自分たちの立場を再検討した。彼らは、「特別の啓示」を受けたと主張する人々、「ユダヤの伝説」を教える人々、また「新しい試金石」を設ける人々に対して、警告を発するということを正式に決議して記録にとどめている（アドベント・ヘラルド、一八四五年五月一四日）。こうして彼らは、安息日と預言の霊に関する光に、扉を閉ざしてしまった。彼らは、預言が一八四四年に成就したのではないと確信した。そして、二千三百日の期間の終わるときをさらに将来に定めるものもあつた。いろいろの時間が定められたが、それらは、つぎつぎと、みな過ぎ去っていった。再臨の希望という結合

力によって結ばれたこの人々は、教理的立場には相当の違いはあっても、初めのうちは、いくつかのグループにばく然と結ばれていた。こうしたグループのあるものは、やがて消えていった。残ったグループが、アドベント・クリスチャン教会になった。このような人のことが、本書では「第一日再臨信徒」または、「名目的再臨信徒」と呼ばれていた。

### 聖所に関する光の始まり

しかし、われわれはここで、預言は一八四四年十月二十二日に成就したと固く信じた人や、心を開いて、安息日と聖所の真理を、自分たちの道を照らす天来の光として受け入れた人々を、ふりかえってみなければならぬ。このような人々は、どこか一か所に集中していたのではなくて、個人または小グループが、米国の中央北部と東北部とにここかしこ点在していた。

このグループのひとり、ハイラム・エドソンは、ニューヨーク州の中央にあるポート・ギブソンに住んでいた。信徒たちは、一八四四年十月二十二日に彼の家に集まって、主の

来臨を待った。彼らは、静かに忍耐強くこの大事件を待った。しかし、真夜中がきて、彼らが、期待していた日が過ぎ去ったことを知ったとき、イエスは彼らが考えていたほど早くは来られないことが、明らかになった。それは、苦い失望の時であった。朝早くハイラム・エドソンと他数名の者は、家畜小屋に行つて祈った。そして、彼らが祈ったときに、彼は、光が与えられるという確信を抱いた。

しばらくたってから、エドソンと彼の友人は、回信の再臨信徒たちを訪問するために、とうもろこし畑を横ぎっていた。すると、手が彼の肩にさわったような感じがした。彼が――幻でも見るかのように――見上げると、天が開かれた。そして、キリストは、彼らが教えていたように、火でこの世界を清めるために、至聖所から出て来られるのではなくて、天の至聖所に入られたのであつて、そこで神の民のための働きを始められたのである、ということを見たのである。ハイラム・エドソン、医師のF・B・ハーン、学校教師のO・R・L・クロージャーなどの綿密な聖書研究の結果、二千三百年の終わりに清められる聖所というのは、地上ではなくて、天の聖所のことで、キリストが、至聖所で、われわれのためにとりなしておられるということが、間もなく明らかになった。このキリストの仲保の働きが、第一天使の使命(黙示録一四ノ六、七)の中で叫ばれた「神のさばきの時」

に合致するのである。学校の教師であつたクロージャーが、この研究グループの研究の結果を書き上げた。それは、その地方で印刷された。そして、次にオハイオ州、シンシナティで出版されていた、「デー・スター」という再臨信徒の機関誌に詳しく発表された。一八四六年二月七日の特別号は、聖所問題に関するこの聖書研究の特集号であつた。

### 真理は幻によつて確認された

この研究が進行中で、まだ彼らの活動が公表される前に、はるか東部のメイン州で、エレン・ハーモンに幻が与えられ、その中で彼女は、二千三百日の終わりにおいて、キリストの働きが、聖所から至聖所に移ったことを示された。この幻の記録は本書の一二四―一二七ページに記されている。

その後、しばらくして与えられたもう一つの幻について、ホワイト夫人は、一八四七年四月に書いた文の中で、次のように言っている。「一年以上も前に、主はクロージャー兄弟が聖所の清めについて真の光を持っていることを、幻の中でわたしに示された。また、ク

ロージャー兄弟が、一八四六年二月七日の『デー・スター特別号』に彼の見解を書いて載せたことは、神のみこころであつたことを示された。わたしは、すべての聖徒に特別号を推薦するように、主から十分な権限が与えられていると感じる」(小さい群れへの言葉一二ページ)。こうして、聖書研究者たちの研究の結果は、神の使命者の幻によって確認されたのである。

エレン・ホワイトは、その後、聖所の真理とそのわれわれに対する重要性について、多くの事を書いた。そして、『初代文集』には、この事についての記事が多い。特に四〇九ページの「聖所」と題する一章に注目していただきたい。天の聖所におけるキリストの働きを理解することが、大失望の秘密を開く鍵となった。われわれの先覚者たちが、神のさばきの時が来たことを告げた預言は、一八四四年に起きた事件によって成就はしたが、イエスがこの地上に来られる前に、天の至聖所において、なすべき務めがあるということをはつきり理解した。

第一天使と第二天使の使命は、再臨使命の宣布によって伝えられた。そして今や第三天使の使命が宣布され始めたのである。この使命のもとで、第七日目安息日の意義が重要になってくるのである。

## 安息日遵守の始まり

初期の再臨信徒間における安息日遵守の起原の物語をさかのぼると、ニューハンプシャー州の中心部にあるワシントンという町の小さな教会へたどりつく。この州は、東メイン州に隣接し、西は、ニューヨーク州の境界線から六十マイル以内のところにあつた。ここで独立キリスト教会の信者たちが、一八四三年に再臨使命の宣教を受け入れた。彼らは、熱心な人々であつた。そこへ、第四条は守るべきものであることを書いたトラクトを配布して、セブンスデー・バプテストのレーチエル・オークスが訪れた。一八四四年に、幾人かの者が、この聖書の真理を受け入れた。その中のひとりのウィリアム・ファンズウォースは、ある日曜日の朝の礼拝の時に立ち上がって、自分は、第四条の神の安息日を守るつもりであると言った。ほかに十二人が彼に加わり、神のすべての戒めを守るという固い決心をした。彼らが、最初のセブンスデー・アドベンチストであつた。

この群れの世話をしていたフレデリック・フィーラーという牧師も、間もなく、第七日目

安息日を受け入れて、最初のセブンスデー・アドベンチストの牧師になった。同じ州に住んでいたもうひとりのアドベンチストの牧師、T・M・プレブルも、一八四五年二月に、安息日の真理を受け入れて再臨信徒の雑誌の一つである「イスラエルの望み」に記事を載せ、第四条は、守るべきものであることを示した。マサチューセッツ州、フェアヘーブンに住んでいた著名なアドベンチストの牧師、ジョゼフ・ベーツは、プレブルの書いた記事を読んで、第七日目安息日を受け入れた。その後、しばらくたってから、ベーツ長老は、ニューハンプシャー州のフシントンに行つて、そこに住んでいる安息日を守る再臨信徒と一緒に新たに見出した真理の研究をした。彼は、安息日の真理に対する十分な確信を抱いて、家に帰った。やがてベーツは、第四条は守るべきものであることを書いたトラクトを出版する決心をした。彼が書いた四十八ページの安息日に関するパンフレットは、一八四六年八月に出版された。その一部が、八月末に結婚したジエームズ・ホワイトとエレン・ホワイトの手に入った。彼らは、そこに示されていた聖書的証拠に基づいて、安息日を守り始めた。エレン・ホワイトは後にこの事について、「われわれは、一八四六年の秋に、聖書の安息日を守り始めて、それを教え、また擁護し始めた。」と書いた(教会へのあかし第一卷七五ページ)。



## 安息日の重要性が示される

ジエームスとエレン・ホワイトは、ベーツ長老のトラクトに書かれていた聖書的証拠だけに基づいて決心した。そして、彼らが七日目の安息日を守って教え始めてから七か月後の、一八四七年四月の最初の安息日に、メイン州トプシヤムにおいて、主は、ホワイト夫人に幻を与えて、安息日の重要なことを強調された。彼女は、天の聖所の箱のなかに律法の板を見、第四条のまわりに栄光が輝いているのを見た\*。こうして、神のみ言葉の研究によつて、以前にとつた立場が確認された。また、幻は、安息日遵守に関する信徒の見解を広げるのにも役立った。ホワイト夫人はこの幻のなかで、時の終わりにまで連れていかれて、安息日が、神に仕えるか、それとも背信の勢力に仕えるかを、人々が決定する大試金石になることを見た。彼女は、この時のことを振りかえって、一八七四年に次のように書いた。

「わたしは、安息日についての幻をなにも見ない前に、安息日問題についての真理を信じ

た。安息日の重要性と第三天使の使命におけるその位置について示される数か月前に、わたしは、安息日を守りはじめていた。L・E・G・ホワイト手紙二、一八七四年。

### 重要な安息日会議

神の摂理のうちに、数名の安息日を守る牧師たちで、これらの新しく見出した真理を教えていた人々が、一八四八年に五つの安息日会議を開いて、多くの信者たちと共に集まった。彼らは、断食と祈りをして、神の言葉を研究した。安息日問題の主唱者、ベーツ長老が、まず、安息日は守るべきものであることを主張した。会議のいくつかに出席したハイラム・エドソンと彼の同僚たちは、聖所に関する光を強調した。綿密な預言の研究者であったジェームズ・ホワイトは、キリストの再臨前に起こる諸事件に彼の関心を集中した。このような会議において、今日、セブンスデー・アドベンチストが信じている主要な教理がまとめられたのである。

エレン・ホワイトは、この経験を振りかえって次のように書いた。

「わが教会の人々の多くは、われわれの信仰の基礎がどんなに強固に置かれたかを自覚していない。わたしの主人、ジョゼフ・ベーツ長老、ファーザー・ピアス（注・開拓者たちの中の、年とった兄弟たちが、昔をしのんでここに挙げられている。『ファーザー（老父）ピアス』というのは、スチーブン・ピアスのことで、彼は、初期の時代に牧師と行政の働きに携わった）、『ハイラム』・エドソン長老そしてその他の人々は、明敏、高貴、誠実な人で、一八四四年の時が過ぎ去ったあとで、隠れた宝のように真理を探究した人々の中に属していた。わたしは、彼らと会った。われわれは、研究し、熱心に祈った。われわれはよく夜おそくまで集まり、時には、光を祈り求めて、聖書を研究しながら、徹夜することもあった。これらの兄弟たちは、何度も何度も、聖書を研究するために集まった。それは彼らが、その意味を理解して、力強く教えることができる用意をするためであった。彼らが、その研究において、『われわれは、もうこれ以上何も出来ない』といったときに、主の霊がわたしに臨んで、わたしは、幻のうちに取り去られて、研究していた聖句の意味が、はつきりとわたしに与えられ、効果的な働きと教えの方法が指示されるのであった。こうして、キリストとキリストの任務、そして彼の祭司職についての聖書の理解を助ける光が与えられた。その時からわれわれが神の都にはいるまでの一連の真理が、わたしに明らか

に示された。そして、わたしは、主がわたしにお与えになった教えを他の人々に伝えた。

この間ずっと、わたしは、兄弟たちの理論がわからなかった。わたしの心は、錠をおろしたように閉ざされ、われわれが研究している聖句の意味がわからなかった。これは、わたしの生涯における最も大きな悲しみの一つであつた。われわれの信仰の重要な点がすべて、神のみ言と調和して、われわれにはつきりとするまで、わたしは、このような心の状態にあつた。兄弟たちは、わたしが、幻を見ない時には、これらの事について理解することができなかったことを知っていた。そして、彼らは、与えられた啓示を天からの直接の光として受け入れたのである」(セレクトエッド・メッセージズ第一巻二〇六、二〇七ページ)。

こうして、セブンスデー・アドベンチスト教会の教理的基礎は、忠実な神のみ言葉に基づいて置かれた。そして、開拓者たちが、行きづまったときに、エレン・ホワイトは光を与えられ、彼らの難問題を説明し、さらに研究を続ける道を開いたのである。幻は、また正しい結論に神の承認の印を押した。こうして、預言の賜物は、誤りを矯正し、真理を確認するものとしての役割を果たしたのである(福音宣伝者英文三〇二ページ参照)。

## 開拓者たち、出版を始める

一八四八年に開かれたこうした安息日会議の五番目が終わって間もなく、マサチューセッツ州ボストン近郊のドーチエスターにあるオティス・ニコルスの家で別の集会が開かれた。兄弟たちは、主が、彼らの道に照らされた光を伝える責任について、研究し祈っていた。彼らが研究していると、エレン・ホワイトは、幻のうちに取り去られた。この啓示のなかで、彼女は、この光を出版する義務が兄弟たちにあることを示された。彼女は、「ライフ・スケッチズ」のなかで、この事について次のように言っている。

「幻から出てきた後で、わたしは主人に言った、『あなたにお伝えすべき言葉が、わたしに与えられました。あなたは、小冊子を印刷し始め、それを人々に送らなければなりません。初めは、小さいものでよいでしょう。しかし、人々が読むにつれて、印刷する資金を送って来ます。それは、最初から成功します。それは、この小さい出発から世界を取り巻く光の流れのようになることが、わたしに示されました』」（一二五ページ）。

ここに行動を起こすようにという招きが与えられた。ジェームズ・ホワイは何ができたろうか。彼は、この世の財産はほとんどなかった。しかし、幻は、神の指令であった。そして、彼は信仰をもって前進しなければならなかったと感じた。そこでジェームズ・ホワイは、七五セントの聖書と、両方の表紙がとれてしまったコンコードダンスとを用いて、安息日の真理その他それに類する記事を小冊子に印刷するため、準備し始めた。こうしたことに時間がかかったが、やがて、彼は、コネチカット州ミドルタウンの印刷屋に、原稿を手渡した。印刷屋は、この注文を後払いで引き受けてくれた。製版、校正も修了して、一千部の小冊子が出来上がった。ジェームズ・ホワイは小冊子を、ミドルタウンの印刷屋から、彼らが一時滞在していたベンデン家に運んだ。印刷物は、横六インチ、縦八インチの大きさで、八ページのものであり、その題は、「現代の真理」であった。それは、一八四九年七月のことであった。床の上に、印刷物の小さい山ができた。それから、兄弟姉妹たちは、その回りに集まって、目に涙を浮かべて、送り出される印刷物の上に神の祝福を祈り求めた。印刷物は、折って、包んで、宛名を書き、ジェームズ・ホワイが、八マイル離れたミドルタウンの郵便局に持って行った。こうして、セブンスデー・アドベンチストの印刷事業は始まったのである。

このようにして、四号まで発行され、その度ごとに、彼らは、印刷物を郵便局へ持って行く前に祈った。まもなく、印刷物を読んで安息日を守り始めた人々から手紙が来た。また、お金が入った手紙も来た。ジエームズ・ホワイトは、九月に、四号分の代金、六四ドル五〇セントをミドルタウンの印刷屋に支払うことができた。

### 「レビュー・アンド・ヘラルド」誌の発刊

ジエームズとエレン・ホワイトは、あちらこちらと旅行し、その先々で二、三か月滞在中に、印刷物を二つ三つ発行する準備をしていた。ついに、最後の十一号が一八五〇年十一月、メイン州パリスで出版された。ホワイト夫人は、「現代の真理」にいくつかの記事を載せた。その大部分が、『初代文集』の初めの部分に収められている\*。

また、十一月にパリスで会議が開かれて、兄弟たちは、出版事業の発展について研究した。彼らは、印刷物を大きくし、その名称を、「ザ・セカンド・アドベント・レビュー・アンド・サバス・ヘラルド」と変更することに決めた。それは、数か月間、メイン州パリス

で発行されたが、その後、ニューヨーク州サラトガ・スプリングスで発行された。その後これは、セブンスデー・アドベノチスト教会機関誌として、今日に至るまで発行されている。

### 出版事業の発展

一八五一年八月、ジェームズ・ホワイトは、サラトガ・スプリングスに滞在中、ホワイト夫人の最初の言葉で、本書の十一―八三ページの「エレン・G・ホワイトのクリスチャン経験と幻の略記」を印刷する手筈を整えた。これは六四ページのパンフレットに過ぎなかった。

一八五二年の春、ホワイト夫妻は、ニューヨーク州ロチェスターに移った。そして、ここで自分たちで印刷することができるよう印刷所を設立した。兄弟たちは、印刷機購入の資金に対する訴えに答えて奮起し、設備確保のために六百ドルを調達した。初期の信徒たちはわれわれの刊行物が、わが教団の印刷機で出版されることをどんなに喜んだことだろう。



彼らは、三年あまりの間、ロチエスターに住み、そこでメッセージの出版を行った。ジェームズ・ホワイトが一八五二年に発刊した「レビュー・アンド・ヘラルド」と「ユース・インストラクター」のほかに、彼らは時々ラクト類も発行した。ホワイト夫人の第二のパンフレット、「エレン・G・ホワイトのクリスチャン経験と幻の補遺」は、一八五四年一月、ロチエスターで発行された。これは、『初代文集』の一七二―二三五ページに収められている。

### バトル・クリーク、出版の中心となる

ジェームスとエレン・ホワイトと彼らの助手たちは、一八五五年十一月に、ミシガン州バトル・クリークに移転した。印刷機その他の印刷の設備は、彼ら自身の印刷所を設立する資金を提供した数名の安息日を守る再臨信徒たちが建てた建物の中に設置された。彼らの働きが、バトル・クリークで発展したときに、この小さな町がセブンスデー・アドベンチスト教会の本部となったのは当然のことであった。しかし、ジェームズ・ホワイトが、

印刷事業を維持することは、やさしいことではなかった。

『初代文集』の背景を研究する時に、われわれは、初期の安息日を守る再臨信徒たちが、初めのうちは、安息日の真理を、大再臨覚醒運動の中での以前の兄弟たちに伝えることだけを、彼らの務めであると考えていたことに注意しなければならない。すなわち、それは彼らと共に第一天使と第二天使の使命を伝えた人々である。であるから、一八四四年から約七年間、彼らの働きは主として、まだ第三天使の使命を受け入れていなかった再臨信徒たちの間に限られていた。こうした事情に精通している者には、このことが良く理解できるのである。

### 「閉ざされた門」と「開かれた門」

一八四四年の夏、再臨の使命宣布の特別運動が行なわれたときに、その指導者たちは、マタイ二五章の十人のおとめのたとえの中に、彼ら自身の経験を認めたのである。花婿の来るのが「おくれた」。その次に、「さあ、花婿だ、迎えに出なさい」と呼ぶ声がした。こ

れが一般に、「夜中の叫び」と言われている。ホワイト夫人は、その最初の幻において、再臨信徒が進んでいく道のはじめにあって、彼らを後ろから照らしている輝かしい光がこれであることを示された。たとえば、用意のできていた者たちは、花婿と共に婚宴のへやにはいり、「そして戸が閉められた」と言われている（マタイ二五ノ一〇）。そこで、彼らは、一八四四年十月二十二日に、広く伝えられたメッセージを信じなかった人々にとって恵みの門は閉ざされてしまったと結論を下した。ホワイト夫人は、幾年か後にこれについて次のように書いた。

「救い主が来られると期待していたその時が過ぎたあとも、なお彼らは、再臨は近いと信じていた。彼らは、今や重大危機にさしかかったと考え、神の前における仲保者としてのキリストの働きは終わったと考えた。人類の恩恵期間は、主が天の雲に乗って実際に来られる少し前に終わると聖書に教えられているように、彼らには思われた。このことは、人が恵みの扉の前で求め、たたき、叫ぶけれども開かれないという時を示す聖句から見て明白なように思われた。そして、彼らがキリストの再臨を待望していたその期日が、キリスト再臨直前のこの期間の開始を意味するものなのかどうかということが、彼らにとっての疑問であった。審判の切迫の警告を発した彼らは、世界に対する彼らの務めをなし終え

たと感じ、罪人の救いに関する魂の重荷を感じなくなった。他方、神を敬わない人々の、大胆で冒瀆的な嘲笑は、神の恵みを拒んだ人々から神の霊が取り去られたことを示す、もう一つの証拠であるように思われた。こうしたことはみな、恩恵期間は終わった、すなわち、彼らの表現によれば、『恵みの扉は閉ざされた』と、彼らに固く信じさせたのであった」(各時代の斗争闘下巻一四六、一四七ページ)。

それから、ホワイト夫人は、どのようにして、この問題について、光が輝き始めたかを つづいて次のように書いている。

「しかし、聖所の問題を研究するにつれて、より明白な光が与えられた。今や彼らは、二千三百日が終わる一八四四年は、重大な危機を画するものであると信じたことが正しかったことを知った。しかし、人々が千八百年にわたって神に近づく道を見いだしてきたところの、望みとあわれみの扉が閉じられたことは事実であったが、もう一つの扉が開かれて至聖所におけるキリストの仲保によって、人々に罪のゆるしが与えられるのであった。彼の務めの一部は終わったが、それは、それに代わってもう一つの働きが行なわれるためには、ほかならなかつた。依然として天の聖所には『開いた門』があり、そこでキリストは、罪人のために奉仕しておられるのであった。

まさにこの時代の教会にあてられた、黙示録の中のキリストの言葉の適用が、今わかってきた。『聖なる者、まことなる者、ダビデのかぎを持つ者、開けばだれにも閉じられることがなく、閉じればだれにも開かれることのない者が、次のように言われる。わたしは、あなたのわざを知っている。見よ、わたしは、あなたの前に、だれも閉じることのできない門を開いておいた』(黙示録三ノ七、八)。

イエスの仲保による祝福にあずかる者は、贖罪の大事業をなさるイエスに、信仰によって従っていく人々である。一方、この働きに関する光を拒む者は、その祝福にあずかることができない。」(同一四七、一四八ページ)

### 困難に直面しての二通りの態度

ホワイト夫人は、次に、一八四四年十月二十二日の大失望の経験に対して、二つの再臨信徒の群れが、どのように対処したかを書いている。

「一八四四年の時が過ぎて、その次に、まだ再臨の信仰を持っている人々には、大きな試

練の時期が来た。彼らの真の立場を確かめることについて唯一のたのみは、天の聖所に彼の心を向けた光であつた。預言の期間に関するこれまでの計算に対しての信仰を放棄し、再臨運動に伴った聖霊の強力な力を、人間やサタンの力によるものであるとした人びともあつた。また、過去の経験は主の導きによるものであると、堅く信じた人々もあつた。そして、彼らが、神のみ心を知ろうとして、待ち、見守り、祈ったときに、彼らは、彼らの大祭司が、奉仕のもう一つの業を始められたのを知つた。そして彼らは、信仰によつて彼に従つていき、教会の最後の働きを知るに至つた。彼らは、第一と第二の天使の使命をいっそう明瞭に理解した。そして、黙示録一四章の第三天使の厳粛な警告を受けて、それを世に伝えるように準備させられた」(同一四九、一五〇ページ)。

「開かれた門」と「閉ざされた門」については本書の一〇五——一〇六ページにも言及されている。これは、初期の信徒たちの歴史的背景を考慮して初めて、正しく理解することができるものである。

失望後間もなく、開拓者たちは、光をはっきりと拒んだ人々はそれによつて彼らの救いの門を閉ざしてしまつたけれども、まだメッセーヂを聞いたこともなく、またそれを拒んだこともない人々がほかに多くあることを認めた。そして、このような人々は、人間のた

めに備えられた救いの道の恩恵に浴することができると考えた。一八五〇年代の初期ごろまでに、このような点が明らかになってきた。そして、第三天使の使命を宣布する道が開かれ始めた。偏見がなくなってきた。エレン・ホワイトは、失望後の彼らの経験を振りかえって、次のように書いた。「その時、未信者に接近することは、ほとんど不可能なことであつた。一八四四年の失望は、多くの人々の心を混乱させた。そして、彼らはこの事についてどんな説明にも耳をかそうとはしなかった」(レビュー・アンド・ヘラルド一八八三年一月二〇日)。

しかし、一八五一年に、ホワイト長老は、次のように報告することができた。「今や、真理を宣布するために、ほとんど至るところで門が開かれた。そして、以前には、研究しようとする興味が全くなかったような多くの人々が、印刷物を読む心の備えができた」(レビュー・アンド・ヘラルド一八五一年八月一九日)。

教会組織に対する呼びかけ

しかし、このように新しい機会が与えられ、多くの人々が真理を受け入れるにつれて、少しではあったが、不調和な分子が、彼らの間に現れた。もし、こうしたものが阻止されなかったならば、働きは、大いに損害をこうむったことであろう。しかし、われわれは、ここにおいてもまた、神が摂理的に、神の民を導いておられたのを見るのである。エレン・ホワイトは、一八五〇年十二月二十四日に幻を与えられて、次のように語っている。「わたしは、神がいかに偉大で聖なる神であられるかを見た。天使はわたしに、『神の目前では注意深く歩きなさい。神は高くあげられている。そして、その衣のすそは神殿に満ちている』と言った。わたしは、天にあるすべてのものが、完全な調和を保っているのを見た。『ごらんなさい。キリストは頭であられる。秩序正しく動きなさい。秩序正しく動きなさい。すべてのものに意味を持たせなさい。ごらんなさい。天の秩序がどんなに完全でまた、美しいものであるかを悟りなさい。それに従いなさい』と天使は言った」（エレン



・ G・ホワイト原稿一一、一八五〇年）。

福音の秩序の必要と価値を信徒一般に認めさせるのには、時間がかった。彼らが分離してきたプロテスタント教会における過去の経験によつて、彼らは用心深くなっていた。信徒たちは、実際にその必要が明瞭である場所を除いては、形式主義を招来することを恐れて、教会の組織をしなかった。一八五〇年の幻から十年ほど経過して初めて、一層充実した教会の組織がついに実施されるに至った。「エレン・G・ホワイトのクリスチャン経験と幻・補遺」の中に公にされた「福音の秩序」という意味深い一章が、その実現に重大な役割を果たしたことは疑う余地がない。これは本書の一八九―二〇〇ページに出ている。

一八六〇年に、出版事業の組織と共に、名称が選ばれた。「神の教会」が適当だという人もあったが、教会の独特の教えを反映した名称がよいという意見が圧倒的であった。彼らは、「セブンスデー・アドベンチスト」という名称を採用した。その翌年に、いくつかの信徒の団体が教会に組織されて、ミシガン州の諸教会が、州年会を組織した。間もなくいくつかの州年会ができた。そして、一八六三年五月に、セブンスデー・アドベンチスト世界総会が組織された。これは、『初代文集』の時代からは五年後のことである。

## 大争闘の幻

一八五五年十一月に、ニューヨーク州ロチェスターからミシガン州バトルクリークに出版事業を移転したことは、前述のとおりである。ホワイト長老夫妻は、バトルクリークに居を定め、働きが一段落ついてからは、伝道地の巡回を続けることができた。一八五八年二月と三月に、オハイオ州を訪問中、ロベッツ・グローブの公立学校において、ホワイト夫人に重大な大争闘の幻が与えられた。二時間に及んだこの幻の模様が、「ライフスケッチズ」の一六一、一六二ページに記されている。一八五八年九月、「霊の賜物」の第一巻「キリストと彼の天使たちとサタンと彼の天使たちとの間の大争闘」が出版された。この二九ページの小著が『初代文集』の第三部になっている。

ホワイト夫人は、最初の十五年間のこうした数冊の著述に続いて、神の戒めを守り、イエス・キリストを信じる信仰を持ちつつける人々にとって、実に重要な諸問題に関する多くの著書を著わした。しかし、最も初期のこれらの著書は、すべてのセブンスデー・アド

ベンチストにとって、常に、特に貴重なものであると言えるであろう。

エレン・G・ホワイト著書刊行会

ワシントンD・C・

一九六三年三月

経験と幻

親しい友人たちに求められるままに、わたしは自分の経験したことと幻を簡単に書くことにした。わたしは、これが、主に信頼する謙虚な人々の励ましと力になることを望んでいる。

わたしは、十一才のときに改心し、十二才のときにバプテスマを受けて、メソジスト教会員になった。(ホワイト夫人は、一八二七年十一月二十六日、メイン州、ゴーハムで生まれた。)わたしは、十三才のときに、メイン州のポートランドで、ウィリアム・ミラーの第二回目の講演を聞いた。そのとき、わたしは、自分が清くなく、イエスを迎える準備ができていないのを感じた。そして、祈りをするために、教会員や罪人が前に進み出るようにという招きが発せられたときに、わたしは最初の招きに答えて出ていった。それは、わたしが、自分が天国にふさわしくなるには、多くのことを神にしていたただかなければならないことを、知っていたからである。わたしの心は、価なくして与えられる全き救いを渴

望していたが、どうしてそれを得たらよいかを知らなかった。

一八四二年に、わたしはメイン州のポートランドで開かれた再臨集会にずっと出席して主が来られることを心から信じた。わたしは、完全な救い、すなわち神のみこころに全く一致することを、飢え渴くように求めていた。わたしは、地上のすべての富をもっても買うことのできないこの尊い宝を得たいと、昼も夜も思い悩んでいた。わたしが、この祝福を求めて、ひざまずいて祈っていたときに、わたしは、公の祈禱会に行って祈らなければならぬことが示された。わたしは、まだ集会で声を出して祈ったことがなかったので、もし祈ろうとすればうるたえてしまうことを恐れて、この義務を果たさずにいた。わたしは、ひとりで祈りをするたびに、この義務を果たしていないことを思い出し、ついには祈ることをやめてしまった。そして、心は憂鬱になり深い絶望に陥ってしまった。

このような状態で、三週間が過ぎ去ったけれども、わたしを取り巻いた暗雲を照らす光は、一すじも与えられなかった。そのとき、わたしは二つの夢<sup>\*</sup>を見て、それによってかすかな光と希望が与えられた。そのあとわたしは、愛情深い母に、わたしの心を打ち明けた。母は、わたしが失われてはいないことをわたしに話し、当時ポートランドの再臨信徒に説教していたストックマン兄弟のところへ行行って、彼に会うようにわたしに勧めた。彼は、

熱心で愛情深いキリストのしもべであったので、わたしは彼を非常に信頼していた。彼の言葉は、わたしを動かし、希望を与えた。わたしは家に帰って、もう一度主のみ前に出た。そして、もしわたしがイエスを喜ばせることができるのであれば、わたしはどんなことでもして、それに耐えることを約束した。前と同じ義務がわたしに示された。ちょうどその晩、祈祷会が開かれることになっていたので、わたしはそれに参加し、他の人々が祈るためにひざまずいたときに、わたしはふるえながら、彼らと一緒にひざまずいた。そして、二、三の人が祈ったあとで、わたしは知らないうちに口を開いて祈っていた。そして、神の約束は、求めさえすれば与えられる数多くの尊い真珠のように思われた。わたしが祈っていたときに、長い間の魂の重荷と苦悩とが去って、神の祝福が静かな露のように、わたしの上にくだった。わたしはこのような感じを持つことができたことに對して神に栄光を帰したが、もっとそのような境地にはいることを熱望した。わたしは、神に満ちているもので満たされるまでは、満足することができなかった。イエスに対する言い表わしのような愛が、わたしの心を満たした。栄光の波が、次から次へとわたしに押し寄せてきて、ついにはわたしの体は固くなった。わたしは、イエスと栄光のほかは、何もわからなくなつた。そして、自分の周囲に起こっていることには何も気付かなかつた。

わたしは、長い間、このような体と心の状態のままでいた。そして、周囲のことに気付いたときには、すべてのものが変わって見えた。すべてのものは、栄光に輝いて新しく見え、あたかもほえんで神を賛美しているかのようであった。そのとき、わたしは、どこへ行ってもイエスを告白したいと思った。六か月の間わたしの心には、一片の黒い雲もかからなかった。わたしの魂は、毎日救いの水を十分に飲んだ。わたしは、イエスを愛する人々は、彼が来られることを大いに歓迎するものと思った。だから、家庭での集会に行つて、イエスがわたしになさったこと、また、イエスが来られることを信じるることによつてわたしの心がどんなに満たされたかを話した。すると、集会の指導者はわたしをさえぎつて、「それは、メソジストの教義によつてです」と言った。しかしわたしに自由を与えたのは、キリストであり、彼が間もなく来られるという希望であつたから、わたしはメソジストの教義に栄光を帰すことはできなかった。

わたしの父の家族の者は、ほとんどみな再臨を心から信じていた。そして、この輝かしい教理についてのおかしをしたために、われわれ七人の者は、一度にメソジスト教会から追放された。そのとき、預言者の次の言葉が、われわれにとって非常に尊いものとなった。「あなたがたの兄弟たちはあなたがたを憎み、あなたがたをわが名のために追い出して言っ

た、『願わくは主がその栄光をあらわしてわれわれにあなたがたの喜びを見させよ』と。  
しかし彼らは恥を受ける」（イザヤ書六六ノ五）。

この時から、一八四四年十二月まで、わたしはわたしの周囲の愛する再臨信徒たちと同じような喜びと試練と失望を経験した。このとき、わたしは、再臨を信じる姉妹たちのひとりを訪問した。そして、われわれは、朝の家庭の礼拝の時にひざまずいて祈っていた。それは、興奮した状態のものではなかった。そこには女ばかりが五人集まっていただけだった。わたしが祈っていると、わたしは、これまでに感じたこともないような神の力が与えられた。わたしは、神の栄光の幻に包まれて、この地上から高く高く上げられるように感じた。そして次のような聖なる都への再臨信徒の旅が見せられた。

## 最初の幻

この幻は、一八四四年の大失望後、間もなく与えられた。そして、一八四六年に最初に



出版された。この時には、将来の出来事は、わずかしが見せられなかった。後の幻は、もと詳しく。

神が、聖なる都に向かう再臨信徒の旅と、婚宴から帰って来られる主を持つ人々に与えられる豊かな報いとを、わたしに示されたので、神がわたしにあらわされたことの概略を述べることは、わたしの義務であると思う。愛する聖徒たちは、多くの試練を経なければならぬ。しかし、われわれのこのしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させてくれる。わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くのである。わたしは、天のカナンから、良い報告といくつかのぶどうを持って帰ろうとした。そのために、多くの者は、イスラエルの会衆が、良い報告をもたらしたカレブとヨシユアを石で打とうとしたように、わたしを石で打つことだろう（民数記一四ノ一の参照）。しかし、主にある兄弟姉妹がた、そこは、良い地である。われわれは、のぼって行って、それを所有することができる。

わたしが、家庭の礼拝で祈っていたときに、聖霊がわたしにくだった。そして、わたし

は、暗い世界から、高く高く上にのぼっていくように感じた。わたしはふり向いて、地上にいる再臨信徒たちを捜したが、見つからなかった。すると、「もう一度見なさい。もう少し上を見なさい」という声が聞こえた。それでわたしが目をあげてみると、地上のはるか上の方に、まっすぐな狭い道がかかっていた。この道の上を、再臨信徒たちは、都に向かつて旅していた。都は、その道の向こうの端にあった。道のはじめに、明るい光があつて、彼らを後ろから照らしていた。あれは夜中の叫びですと、天使がわたしに言った。この光が、道をずっと照らし、彼らがつまずかないように、足もとを明るくしていた。もし彼らが、彼らのすぐ前にいて彼らを都に導いておられるイエスに目をとめていれば、彼らは安全であつた。しかし、やがて、ある者たちは疲れてきて、都はまだ遠い、もっと早く都に入れると思つていた、と言った。するとイエスは、その輝く右手をあげて、彼らを励ました。彼のみ手から光が流れ出て、再臨信徒の一団の上に照りわたり、彼らは、「ハレルヤ！」と叫んだ。他の者たちは、無分別にも彼らの後ろの光を拒んで、自分たちをここまです導いてきたのは神ではない、と言った。彼らの後の光は消えて、彼らの足もととは真っ暗になった。そして彼らは、つまずき、目標とイエスとを見失つて、道から暗い邪悪な地上へと落ちていった。やがてわれわれは(付録参照)、多くの水の音のような神の声を聞いた。

その声が、イエスの再臨の日と時とをわれわれに知らせた。十四万四千の生きている聖徒たちは、その声を知って理解したが、悪人たちは、それを雷鳴と地震だと思った。神は時を告げられたときに、われわれに聖霊を注がれた。それで、われわれの顔は、モーセの顔が、シナイ山から下りてきたときに輝いたように、輝きはじめた。

十四万四千の人々は、みな印せられ、完全に一致していた。彼らの顔には、神、新エルサレムと書かれ、そして、イエスの新しい名がついた輝く星が書かれていた。悪人たちはわれわれの幸福な聖い状態を見て激怒し、荒々しく襲いかかってわれわれを捕え、投獄しようとしたが、われわれが主の名によって手を伸ばすと、彼らはどうすることもできずに倒れてしまった。そのとき、サタンに属する人々は、互いの足を洗いきよい接吻をもって兄弟たちとあいさつをかわすことができるわれわれを神が愛しておられたことを知って、われわれの足もとに伏して礼拝した。

やがて、われわれの目は、東のほうにひきつけられた。それは、人間の手の半分ぐらいの大きさの、小さい黒雲が現われたからである。われわれはみな、これが人の子のしるしであることを知っていた。われわれはみな、その雲が、近づくにつれてますます明るく輝き、さらに輝きを増してついに大きな白い雲になるのを、厳粛な思いで黙って見ていた。

雲の下のほうは火のように見えた。雲の上にはにじがあつた。その周りでは、無数の天使たちが、この上なく美しい歌を歌っていた。雲の上には人の子が座しておられた。彼の髪の毛は白く波打って肩にかかっていた。彼の頭には、多くの冠があつた。彼の足は火のように見えた。彼の右手には鋭いかまがあり、左手には、銀のラッパがあつた。彼の目は火の炎のようで、彼の民を心の奥底までさぐつた。そのとき、すべての者の顔は青ざめた。神に拒否された人々の顔は絶望で真つ青になった。そのとき、われわれは、みな、「だけれが、その前に立つことができようか。わたしの着物には、しみがついていないだろうか」と叫んだ。すると天使たちは、歌うのをやめ、恐ろしい沈黙が、しばらく続いた。そして、イエスは、「手が清く、心のいさぎよい者が、その前に立つことができる。わたしの恵みは、あなたに対して十分である」と言われた。これを聞いてわれわれの顔は輝き、すべての者の心は、喜びにあふれた。天使たちは、ふたたび高らかに音楽をかなでて、歌いはじめた。雲はますます地上に近づいた。

それから、イエスが火の炎につつまれて、雲に乗っておりて来られたとき、彼の銀のラッパが鳴り渡った。彼は、眠っている聖徒たちの墓をぐらんになった。そして、彼の目と両手とを天にあげて、「さめよ、さめよ、さめよ、さめよ、土の中に眠っている者たちよ、起きよ」と

叫ばれた。すると、大きな地震が起こった。墓は開かれて、死んでいた者たちが、不死をまとして出てきた。十四万四千の人々は、死によって引き裂かれていた友人たちを認めて「ハレルヤ！」と叫んだ。それと同時にわれわれも変えられて、空中で主に会うために、彼らと共に引き上げられた。

われわれは、一緒に雲の中に入り、七日間のぼって行って、ガラスの海に着いた。そのとき、イエスは、冠を持って来られて、ご自分の右の手で、それをわれわれの頭にのせてくださった。彼は、われわれに黄金の立琴と勝利のしゅろの枝をお与えになった。十四万四千の人々は、このガラスの海の上に、真四角に並んだ。星が重そうについた冠もあれば、わずかしがついていないのもあった。すべての者は、自分たちの冠に心から満足していた。そして、彼らはみな、肩から足までとどく輝く白い衣を着ていた。ガラスの海の上を都の門に向かって進むわれわれを天使たちが、取り巻いていた。イエスは、力強い栄光のみ手をあげて、光り輝くちようつがいのついた真珠の門を押し開き、「あなたがたは、わたしの血によって、あなたがたの衣を洗い、わたしの真理のために堅くたった。中に入りなさい」とわれわれに言われた。われわれはみな進み入り、都に入る完全な権利が自分たちにあるのだと感じた。

ここで、われわれは、命の木と神のみ座を見た。み座から清い水の川が流れ出て川の両側に命の木があった。川のこちらにも幹が一つ、川の向こう側にも幹が一つあって両方とも清く透き通った金であった。はじめ、わたしは二本の木を見たと思った。もう一度よく見ると、二本の木は上でつながって一本の木になっているのを見た。こういうわけで命の川の両側に、命の木があった。その枝は、われわれの立っている所に垂れ下がっていた。その実は見事で、銀の混じった金のものであった。

われわれは、みな木の下に行って座り、あたりのすばらしい光景をながめていた。するとそこへフィッチ兄弟とストックマン兄弟（付録参照）がやってきた。彼らは天国の福音を説教していたが、神は彼らを救うために眠らせられたのである。彼らは、彼らが眠っていた間にわれわれがどんな経験をしたかを尋ねた。われわれは、自分たちの最大の試練を思い出そうとしたが、われわれを取り巻く、あふれるばかりの永遠の重い栄光と比べたときに、それらはあまりにも小さく思われて、口にすることができなかった。われわれはみな「ハレルヤ、天国はなんと安いのだろう」と叫び、輝く立琴をかきならして、天空になり響かせた。

われわれはみな、イエスを先頭にして、都からこの地上の大きな山の上におりてきたが

その山は、イエスを支えることができずに、崩れ去って大きな平原となった。そのとき、上を見ると、十二の土台と十二の門のある大いなる都が見えた。門は各々の側に三つずつあつて、それぞれの門に天使が立っていた。われわれはみな、「都が、大いなる都がありてくる。神のもとを出て、天から下ってくる」と叫んだ。都は、おりてきて、われわれが立っていた所にとどまつた。それからわれわれは、都の外の輝かしい光景に目を向けはじめた。そこでわたしは、実に輝かしい家々を見た。それらは銀のように見え、美しい真珠をちりばめた四本の柱に支えられていた。これには聖徒たちが住むのであつた。どの家にも黄金の棚があつた。多くの聖徒たちが家の中に入つて行つて光輝く冠を脱いで棚の上に置き、それから家のそばにある畑へ出て行つて土を扱うのをわたしは見た。それは、地上のわれわれがしなければならぬこととは全く違つていた。輝く光が彼らの頭の周りを照らし、彼らは絶えず声をあげて、神を賛美していた。

わたしは、あらゆる種類の花が満ちている別の野原を見た。そしてわたしは、花を摘みながら、「これは、しばむことがない」と叫んだ。次にわたしは、この上もなく美しい背の高い草の生えた野原を見た。それは、生き生きとした緑色で、銀と金を反映し、誇らかに揺れ動いて、王なるイエスに栄光を帰していた。それから、ライオン、小羊、ひょう、お

おかみなど、あらゆる種類の動物がいっぱいいて、みな仲良く一緒にいる野原に入った。われわれが、動物たちの中を通ると、彼らは静かについて来た。それからわれわれは森に入ったが、それは、この地上の森のように暗くはなかった。それは明るく、一面に輝いていた。木の枝は揺れ動いていた。われわれはみな、「心を安んじて荒野に住み、森の中に眠る」と叫んだ。われわれは、森の中を通り抜けてシオンの山へ向かって行った。

われわれは、進んで行く途中で、辺りの栄光をながめている一団の人々に出会った。わたしは、彼らの着物の縁が赤いのに気づいた。彼らの冠は輝かしく、彼らの衣は純白であった。われわれが彼らにあいさつをしたときに、わたしは、彼らがだれなのかをイエスに尋ねた。彼らはイエスのために殺された殉教者たちであると、イエスは言われた。彼らと一緒に数えきれないほどの子供たちがいた。彼らの着物の縁も赤かった。シオンの山はわれわれのすぐ前にあった。そして山の上には輝かしい神殿があった。その周りには、ほかに七つの山があって、バラやユリが生えていた。子供たちがのぼったり、あるいは、飛びたければ、彼らの小さい翼を使って山々の頂上に飛んで行ってしばおこのない花を摘んだりするのをわたしは見た。神殿の周りには、あらゆる種類の樹木が生えていて、その場所を美しくしていた。からまつ、すずかけ、いとすぎ、オリーブ、ミルトス、ざくろなどが



あり、いちじくは、ちょうど実った実の重みで枝が垂れ、これらの木々があたり一帯を美しくしていた。われわれが聖なる神殿に入ろうとすると、イエスは、麗わしい声をあげて「十四万四千の人々だけが、ここに入る事ができる」と叫んだ。

この神殿は、光り輝く真珠をちりばめた透き通る黄金の七つの柱に支えられていた。わたしは、そこで見た数々の驚くべきものを、描写することができない。ああ、わたしに力ナンの言葉が話せたならば、少しは天国の栄光を語ることができだろうに。わたしはそこで、十四万四千の人々の名が黄金の文字で刻まれた石の板を見た。神殿の栄光を見てから、われわれは外に出た。イエスは、われわれをそこにおいて、都に行かれた。間もなく「わたしの民よ、来なさい。あなたがたは、大いなる患難に会い、わたしの意志を行い、わたしのために苦しみを受けた。夕食に入って来なさい。わたしは帯をしめて給仕をしよう」という彼の麗しい声がもう一度聞こえた。われわれは、「ハレルヤ！ 栄光があるように！」と叫んで、都の中に入った。わたしは純銀のテーブルを見た。それは、何マイルもあるものであった。しかし、われわれの目は、それをずっと見渡すことができた。命の木の实、マナ、あめんどろ、いちじく、ざくろ、ぶどう、その他多くの果物をわたしは見た。わたしはイエスに、果物を食べさせてくださいと頼んだ。イエスは、「今は、いけない。この国

の果物を食べるものは、二度と地上にはもどらない。しかし、あなたが忠実であるならばもうしばらくして、命の木の実を食べることも、泉の水を飲むこともできるだろう」と言われた。それから彼は「あなたは、もう一度、地上に帰って、わたしがあなたに示したことを他の人々に語らなければならない」と言われた。そして天使が、静かにわたしをこの暗い世界に連れもどした。時々、わたしはもうここにはいられないような気がする。この地上のものはすべて、非常に陰うつに見える。わたしは天国を見たので、ここにいるのを非常に寂しく思う。ああ、わたしに鳩のような翼があったならば、飛んで行って、休みに入ることができるとに。

幻から出てきたあとのわたしには、すべてのものが変わって見えた。目に見えるすべてのものの上に暗い影がかかっていた。ああ、この世界は、なんと暗黒に見えたことだろう。わたしは、自分がここににいるのに気づいて泣き、ふるさとに帰りたくなった。わたしは、天国を見たのだから、この世に興味がなくなった。わたしは、この幻をポートランドの小さい一団の人々に話した。すると彼らは、それが神からのものであることを心から信じた。それは、力に満ちた時であった。永遠の厳粛さがわれわれの上にあった。それから約一週間

後に、主はわたしにもう一つの幻を与えて、わたしが経なければならぬ試練を示された。わたしは、神がわたしに示されたことを出て行って人々に語らなければならぬこと、また、出かけていけば大きな試練に会って苦悩を味わわなければならぬことを示された。しかし、天使は、「神の恵みは、あなたに対して十分である。神は、あなたを支えられる」と言った。

わたしは、この幻から出てきたあとで、非常に苦しんだ。わたしは体がたいへん弱く、年令はまだほんの十七才であった。わたしは、多くの人々が、高慢になったために墮落したのを知っていた。そして、もし自分が何かのことでたかぶったなら、神から捨てられ、わたしは失われるにきまっていることを知っていた。わたしは祈りのうちに主のもとへ行き、だれか他の人にこの重荷が負わせられるように願った。自分はそれには耐えられないとわたしには思えた。わたしは長い間うつぶしていたが、与えられた光は、「わたしがあなたに示したことを人々に知らせなさい」ということだけだった。

わたしは次の幻の中で、主がわたしに示されたことを人々のところに行って話さなければならぬのなら、わたしが高慢にならないように、主の保護が与えられることを熱心に主にお願ひした。そのとき、主は、わたしの祈りが聞かれたことを示された。そして、も

しわたしが高慢になるような危険があれば、彼の手がわたしの上におかれて、わたしが病気になることが示された。天使は「もしあなたが忠実に使命を伝え、最後まで耐え忍ぶならば、あなたは、命の木の実を食べ、命の川の水を飲むであろう」と言った。間もなく、幻は催眠術（付録参照）によって起こるということがみなに伝えられ、多くの再臨信徒もすぐにそれを信じてそういうわさを広めた。有名な催眠術師でもあったある医者も、わたしの幻は催眠状態であるとわたしに言った。また、わたしは催眠術にかかりやすいたちであるからわたしに催眠術をかけて幻を与えることができると、彼は言った。わたしは、主が幻の中で、催眠術は悪魔から来るものであって、底知れぬ所からのものであること、またそれは、それを用い続けているものと共に、間もなくそこへ行くのだということわたしに示されたことを、彼に告げた。それから、もし彼にできることであれば、わたしに催眠術をかけてもよいと言った。彼は、いろいろの方法を用いて、三十分以上も試みていたが、とうとうあきらめてしまった。わたしは、神を信じる信仰によって、彼の力に抵抗することができ、なんの影響も受けることはなかった。

もしわたしが、集会の中で幻を見ると、それは興奮によるもので、だれかがわたしに催眠術をかけたのだと言う人が多かった。それでわたしは、神のほかはだれも見聞きできな

い森の中へ行って、ひとりで神に祈った。神はそこでも時々幻をお与えになった。わたしは喜んで、わたしに影響を与える人がだれもないところで神がわたしひとりに示されたことを、人々に話した。ところが、わたしは自己催眠にかかったのだという人々があつた。

神の約束が与えられることを嘆願し、神の救いを請い求めて、まごころからただひとりで神に祈り求める者が、催眠術のいまわしい破滅的影響を受けたものであるとまで非難されるに至ったのかと、わたしは思った。われわれが、天にいます慈悲深い父に「パン」を求めるのに、受けるのは、ただ「石」と「さそり」だけだというのだろうか。このようなことに、わたしの心は傷つけられ、激しい苦悩にさいなまれて、ほとんど絶望するばかりであつた。また、聖霊は存在しないとか、また、神の聖徒たちの経験したことはすべて催眠状態にすぎず、サタンの欺瞞であるとかいうことを、わたしに信じさせようとした人々が多くいた。

この時、メイン州に狂信が起こつた。ある人々は、働くことを全くやめてしまった。そしてこの点に関する彼らの考えや、また彼らが宗教的義務であると主張する他の点を受けいれない人々をみな除名した。神は、これらの誤りを幻の中でわたしに示し、誤りにおいている神の子供たちにそれを伝えるために、わたしをおつかわしになった。しかし、

彼らの多くは、その言葉を全く拒否し、わたしが世の中と妥協していると言ってわたしを非難した。他方では、一般再臨信徒たちは、わたしを狂信的であると非難した。わたしは実際は狂信を正そうとしていたにもかかわらず、狂信の指導者であると偽って伝えられ、また中傷して伝えられた。さまざまな時が、主の再臨の時として次々に定められ、それが兄弟たちに強要された。しかし、主は、そのような時がすべて、過ぎ去ることをわたしに示された。なぜなら、キリストの再臨の前には悩みの時がこなければならぬからである。また、定められた時が、どれもみな過ぎていくことは、ただ神の民の信仰を弱めるだけであることを、わたしは示された。このために、わたしは、「自分の主人は帰りがおそい」と心の中で思う悪いしもべの仲間であると言って非難された。

こうしたことが、すべて、心に重くのしかかって、わたしは混乱のあまり、自分自身の経験を疑いなくなったことがたびたびあった。ある朝、家庭で祈っていたときに、神の力がわたしにのぞみ始めた。その時わたしは、これは催眠術だという考えを起こして、それに抵抗した。すると、わたしは、ただちに物が言えなくなった。そして、ほんのしばらくの間、まわりのことがわからなくなった。その時わたしは、神の力を疑った自分の罪を知った。そして、そのようなことをしたために物が言えなくなったこと、また、二十四時間以

内には、わたしの舌がとけることがわたしにわかった。わたしの前にカードがかかげられて、それに金の文字で、五十の聖句が書かれていた（注）。わたしは幻から出てきたときに手まねで、石板を持ってきてもらい、それに、わたしが物が言えなくなったことや、わたしが幻の中で見たことを書いた。また、大きな聖書をもってきてほしいと書いた。わたしは聖書を手にして、カードに書いてあった聖句をみな、すぐに開いてみることができた。わたしは一日中話すことができなかった。翌朝早く、わたしの心は喜びに満ちた。そして舌はとけて声高らかに神を賛美した。その後は、人がわたしのことをどのように思っても疑いを抱いたり、一瞬でも神の力に反抗したりはしなかった。

一八四六年、マサチューセッツ州フェアヘーブンに滞在中、いつもそのころわたしと同じ行していたわたしの姉妹と、A姉妹、G兄弟、そして私とが、ウエスト島に住む家族を訪問するために、帆船に乗って出かけた。われわれが発したときは、もう夜であつた。まだ少ししか進まないうちに、突然、暴風雨が起こつた。雷が鳴り、稲光が光り、雨が滝のように降つた。神が救つて下さらなければ、われわれはどうてい助からないように思われた。

わたしは、船の中でひざまずいて神に助けを求め始めた。荒れ狂う波が船の甲板を洗つ

ているときに、わたしは、幻のうちに取り去られた。そして、わたしの働きは、まだ始まっただけであるから、われわれはどんな大海の水の中にあっても滅びうせないことが示された。わたしは、幻から出て来たあとは、全く恐怖心がなくなり、歌をうたって神を賛美した。そして、われわれの小さな船はベテルであった。『アドベント・ヘラルド』の編集者は、わたしの幻のことを「催眠術の結果」だと思われると言っていた。しかしこうしたときに、催眠術を行う機会がだれにあっただろうか。G兄弟は、船を操縦するのが精一杯であった。彼は錨をおろしたが、錨はよく止まらなかった。われわれの小さい船は、波にゆられ、風に流されていた。それに、あたりはまっ暗で、船の端から端までを見ることもできなかった。やがて、錨が止まった。そして、G兄弟が助けを求めた。この島には、家が二軒しかなかった。そして、われわれは、その中の一軒の家の近くに来ていることがわかったが、それは、われわれが行こうとしていた家ではなかった。家の人々は、みな寝ていたが、小さい子供がひとり起きていて、水上から助けを求めている声を摂理的に聞いた。やがてこの子の父親が、小さいボートに乗って助けに来てくれて、われわれを岸につれていってくれた。われわれは、神のわれわれに対する驚くべき恵みについて、ほとんど一晩中、神に感謝と賛美をささげて過ごした。



注

「時が来れば成就するわたしの言葉を信じなかったから、あなたはおしになり、この事の起る日まで、ものが言えなくなる。」  
ルカーノ二〇

「父がお持ちになっっているものはみな、わたしのものである。御霊はわたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるのだと、わたしが言ったのは、そのためである。」

ヨハネ一六ノ一五

「すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した。」  
使徒行伝二ノ四

「『主よ、いま、彼らの脅迫に目をとめ、僕たちに、思い切って大胆に御言葉を語らせて下さい。そしてみ手を伸ばしていやしをなし、聖なる僕イエスの名によって、しるしと奇跡とを行わせて下さい。』彼らが祈り終えると、その集まっていた場所が揺れ動き、一同は聖霊に満たされて、大胆に神の言を語り出した。」  
使徒行伝四ノ二九―三一

「聖なるものを犬にやるな。また真珠を豚に投げてやるな。恐らく彼らはそれらを足で踏みつけ、向きなあってあなたがたにかみついてくるであろう。求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。すべて求める者は得、捜す者は見いだし、門をたたく者はあけても

らえるからである。あなたがたのうちで、自分の子がパンを求めるのに、石を与える者があるうか。魚を求めるのに、へびを与える者があるうか。このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物を知っているとすれば、天にいますあなたがたの父はなおさら、求めてくる者に良いものを下さないことがあるうか。だから、何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりによせよ。これが律法であり預言者である」。にせの預言者を警戒せよ。彼らは、羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、その内側は強欲なおおかみである。」

「にせキリストたちや、にせ預言者たちが起って、大いなるしるしと奇跡を行い、できれば、選民をも惑わそうとするであろう。」

マタイ二四ノ二四

「このように、あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたのだから、彼にあつて歩きなさい。また、彼に根ざし、彼にあつて建てられ、そして教えられたように、信仰が確立されて、あふれるばかり感謝しなさい。あなたがたは、おなしいだましごとの哲学で、人のとりこにされないように、気をつけなさい。それはキリストに従わず、世のもろもろの靈力に従う人間の言伝えに基くものにすぎない。」

コロサイ二ノ六―八

「だから、あなたがたは自分の持っている確信を放棄してはいけない。その確信には大きな報いが伴っているのである。神の御旨を行って約束のものを受けるため、あなたがたに必要なのは、忍耐である。『もうしばらくすれば、きたるべきかたがお見えになる。遅くな

ることではない。わが義人は、信仰によって生きる。もし信仰を捨ててゐるなら、わたしのたましいはこれを喜ばない』。しかしわたしたちは、信仰を捨てて滅びる者ではなく、信仰に立って、いのちを得る者である。」

ヘブル一〇ノ三五―三九

「なぜなら、神の安息にはいった者は、神がみわざをやめて休まれたように、自分もわざを休んだからである。したがって、わたしたちは、この安息にはいるように努力しようではないか。そうでないと、同じような不従順の悪例にならって、落ちて行く者が出るかもしれない。というのは、神の言は生きていて、力があり、もろ刃のつるぎよりも鋭くて、精神と靈魂と、関節と骨髓とを切り離すまでに刺しとおして、心の思いと志とを見分けることができる。」

ヘブル四ノ一〇―一二

「そして、あなたがたのうちに良いわざを始められたかが、キリスト・イエスの日までにそれを完成して下さるにちがいないと、確信している」。「ただ、あなたがたはキリストの福音にふさわしく生活しなさい。そして、わたしが行ってあなたがたに会うにしても、離れているにしても、あなたがたが一つの霊によつて堅く立ち、一つ心になつて福音の信仰のために力を合わせて戦い、かつ、何事についても、敵対する者どもにろうばいさせられないでいる様子を、聞かせてほしい。このことは、彼らには滅びのしるし、あなたがたには救のしるしであつて、それは神から来るのである。あなたがたはキリストのために、ただ彼を信じることだけではなく、彼のために苦しむことをも賜わつてゐる。」

ピリピノ六、二七―二九

「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であってそれは神のよしとされるところだからである。すべてのことを、つぶやかず疑わないでしなさい。それは、あなたがたが責められるところのない純真な者となり、曲った邪悪な時代のただ中であって、傷のない神の子となるためである。あなたがたは、いのちの言葉を堅く持つて、彼らの間で星のようにこの世に輝いている。」

ピリピニノ一三一―一五

「最後に言う。主にあつて、その偉大な力によって、強くなりなさい。悪魔の策略に対抗して立ちうるために、神の武具で身を固めなさい。わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである。それだから、悪しき日にあたつて、よく抵抗し、完全に勝ち抜いて、堅く立ちうるために、神の武具を身につけなさい。すなわち、立つて真理の帯を腰にしめ、正義の胸当を胸につけ、平和の福音の備えを足にはき、その上に、信仰のたてを手に取りなさい。それをもつて、悪しき者の放つ火の矢を消すことができるであろう。また、救のかぶとをかぶり、御霊の剣、すなわち、神の言を取りなさい。絶えず祈と願いをし、どんな時でも御霊によって祈り、そのために目をさましてうむことがなく、すべての聖徒のために祈りつづけなさい。」

エペソ六ノ一〇―一八

「互に情深く、あわれみ深い者となり、神がキリストにあつてあなたがたをゆるして下さつ

たように、あなたがたも互にゆるし合いなさい。」

エペソ四ノ三二

「あなたがたは、真理に従うことによって、たましいをきよめ、偽りのない兄弟愛をいだくに至ったのであるから、互に心から熱く愛し合いなさい。」

ペテロ第一・一ノ二二

「わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであらう。」

ヨハネ一三ノ三四、三五

「あなたがたは、はたして信仰があるかどうか、自分を反省し、自分を吟味するがよい。それとも、イエス・キリストがあなたがたのうちにあられることを、悟らないのか。もし悟らなければ、あなたがたは、にせものとして見捨てられる。」

コリント第二・一三ノ五

「神から賜わった恵みによって、わたしは熟練した建築師のように、土台をすえた。そして他の人がその上に家を建てるのである。しかし、どういつうに建てるか、それぞれ気をつけるがよい。なぜなら、すでにすえられている土台以外のものをすえることは、だれにもできない。そして、この土台はイエス・キリストである。この土台の上に、だれかが金、銀、宝石、木、草、または、わらを用いて建てるならば、それぞれの仕事は、はつきりとわかってくる。すなわち、かの日は火の中に現れて、それを明らかにし、またその火

は、それぞれの仕事がどんなものであるかを、ためすであろう。」

コリント第一・三ノ一〇―一三

「どうか、あなたがた自身に気をつけ、また、すべての群れに気をくばっていただきたい。聖霊は、神が御子の血であがない取られた神の教会を牧させるために、あなたがたをその群れの監督者にお立てになったのである。わたしが去った後、狂暴なおおかみが、あなたがたの中にはいり込んできて、容赦なく群れを荒すようになることを、わたしは知っている。また、あなたがた自身の中からも、いろいろ曲ったことを言って、弟子たちを自分の方に、ひっぱり込もうとする者らが起るであろう。」

使徒行伝二〇ノ二八―三〇

「あなたがたがこんなにも早く、あなたがたをキリストの恵みの内へお招きになったかたから離れて、違った福音に落ちていくことが、わたしには不思議でならない。それは福音というべきものではなく、ただ、ある種の人々があなたがたをかき乱し、キリストの福音を曲げようとしているだけのことである。しかし、たといわたしたちであろうと、天からの御使であろうと、わたしたちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら、その人はのろわるべきである。わたしたちが前に言っておいたように、今わたしは重ねて言う。もしある人が、あなたがたの受けいれた福音に反することを宣べ伝えているなら、その人はのろわるべきである。」

「だから、あなたがたが暗やみで言ったことは、なんでもみな明るみで聞かれ、密室で耳にささやいたことは、屋根の上で言いひろめられるであろう。そこでわたしの友であるあなたがたに言うが、からだを殺しても、そのあとでそれ以上なにもできない者どもを恐れるな。恐るべき者がだれであるか、教えてあげよう。殺したあとで、更に地獄に投げ込む権威のあるかたを恐れなさい。そうだ、あなたがたに言うておくが、そのかたを恐れなさい。五羽のすずめはニアサリオンで売られているではないか。しかも、その一羽も神のみまえて忘れられてはいない。その上、あなたがたの頭の毛までも、みな数えられている。恐れることはない。あなたがたは多くのすずめよりも、まさった者である。」

ルカー二ノ三一七

「『神はあなたのために、御使たちに命じてあなたを守らせるであろう』とあり、また、『あなたの足が石に打ちつけられないように、彼らはあなたを手でささえるであろう』とも書いてあります。」

ルカ四ノ一〇、一一

「『やみの中から光が照りいでよ』と仰せになった神は、キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために、わたしたちの心を照して下さったのである。しかしわたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでないことが、あらわれるためである。わたしたちは、四方から患難を

受けても窮しない。途方にくれても行き詰まらない。迫害にあっても見捨てられない。倒されても滅びない。」

コリント第二・四ノ六―九

「なぜなら、このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させるからである。わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである。」

コリント第二・四ノ一七、一八

「あなたがたは、終りの時に啓示さるべき救にあずかるために、信仰により神の御力に守られているのである。そのことを思つて、今しばらくのあいだは、さまざまな試練で悩まねばならないかも知れないが、あなたがたは大いに喜んでいる。こうして、あなたがたの信仰はためされて、火で精錬されても朽ちる外はない金よりもはるかに尊いことが明らかにされ、イエス・キリストの現れるとき、さんびと栄光とほまれとに変わるであらう。」

ペテロ第一・一ノ五―七

「なぜなら、あなたがたが主にあつて堅く立ってくれるなら、わたしたちはいま生きることになるからである。」

テサロニケ第一・三ノ八



「信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、へびをつかむであろう。また、毒を飲んでも、決して害を受けない。病人に手をおけば、いやされる。」

マルコー六ノ一七、一八

「両親は答えて言った、『これがわたしどものおすこであること、また生れつき盲人であつたことは存じています。しかし、どうしていま見えるようになったのか、それは知りません。また、だれがその目をあけて下さつたのかも知りません。あれに聞いて下さい。あれはもうおとなですから、自分のことは自分で話せるでしょう』。両親はユダヤ人たちを恐れていたで、こう答えたのである。それは、もしイエスをキリストと告白する者があれば会堂から追い出すことに、ユダヤ人たちが既に決めていたからである。彼の両親が『おとなですから、あれに聞いて下さい』と言つたのは、そのためであつた。そこで彼らは、盲人であつた人をもう一度呼んで言った、『神に栄光を帰するがよい。あの人が罪人であることは、わたしたちにはわかつている』。すると彼は言った、『あのかたが罪人であるかどうか、わたしは知りません。ただ一つのことだけ知っています。わたしは盲人であつたが、今は見えるということです』。そこで彼らは言った、『その人はおまえに何をしたのか。どんなにしておまえの目をあけたのか』。彼は答えた、『そのことはもう話してあげたのに、聞いてくれませんでした。なぜまた聞こうとするのですか。あなたがたも、あの人の弟子になりたいのですか』。」

ヨハネ九ノ二〇―二七

「わたしの名によって願うことは、なんでもかなえてあげよう。父が子によって栄光を受けになるためである。何事でもわたしの名によって願うならば、わたしはそれをかなえてあげよう。もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。」

ヨハネ一四ノ一三一―一五

「あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたにとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。あなたがたが実を豊かに結び、そしてわたしの弟子となるならば、それによって、わたしの父は栄光をお受けになるであろう。」

ヨハネ一五ノ七、八

「ちよつどその時、けがれた霊につかれた者が会堂にいて、叫んで言った、『ナザレのイエスよ、あなたはわたしたちとなんの係わりがあるのです。わたしたちを滅ぼしにこられたのですか。あなたがどなたであるか、わかっています。神の聖者です』。イエスはこれをして、『黙れ、この人から出て行け』と言われた。」

マルコーの二三―二五

「わたしは確信する。死も生も、天使も支配者も、現在のもものも将来のものも、力あるものも、高いものも深いものも、その他どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのである。」

ローマ八ノ三八、三九

「ヒラデルヒヤにある教会の御使に、こう書きおくりなさい。『聖なる者、まことなる者、

ダビデのかぎを持つ者、開けばだれにも閉じられることがなく、閉じればだれにも開かれることのない者が、次のように言われる。わたしは、あなたのわざを知っている。見よ、わたしは、あなたの前に、だれも閉じることのできない門を開いておいた。なぜなら、あなたには少ししか力がなかったにもかかわらず、わたしの言葉を守り、わたしの名を否まなかったからである。見よ、サタンの会堂に属する者、すなわち、ユダヤ人と自称しているが、その実ユダヤ人でなくて、偽る者たちに、こうしよう。見よ、彼らがあなたの足もとにきて平伏するようにし、そして、わたしがあなたを愛していることを、彼らに知らせよう。忍耐についてのわたしの言葉をあなたが守ったから、わたしも、地上に住む者たちをためすために、全世界に臨もうとしている試練の時に、あなたを防ぎ守ろう。わたしは、すぐに来る。あなたの冠がだれにも奪われないように、自分の持っているものを堅く守っていなさい。勝利を得る者を、わたしの神の聖所における柱にしよう。彼は決して二度と外へ出ることはない。そして彼の上に、わたしの神の御名と、わたしの神の都、すなわち、天とわたしの神のみもとから下ってくる新しいエルサレムの名と、わたしの新しい名とを、書きつけよう。耳のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くがよい。』」

## 黙示録三ノ七一—三

「彼らは、女にふれたことのない者である。彼らは、純潔な者である。そして、小羊の行く所へは、どこへでもついて行く。彼らは、神と小羊とにささげられる初穂として、人間の

中からあがなわれた者である。彼らの口には偽りがなく、彼らは傷のない者であった。」

黙示録一四ノ四、五

「しかし、わたしたちの国籍は天にある。そこから、救い主、主イエス・キリストのこられるのを、わたしたちは待ち望んでいる。」

ピリピ三ノ二〇

「だから、兄弟たちよ。主の来臨の時まで耐え忍びなさい。見よ、農夫は、地の尊い実りを前の雨と後の雨とがあるまで、耐え忍んで待っている。あなたがたも、主の来臨が近づいているから、耐え忍びなさい。心を強くしていなさい。」

ヤコブ五ノ七、八

「彼は、万物をご自身に従わせうる力の働きによって、わたしたちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じかたちに变えて下さるであろう。」

ピリピ三ノ二一

「また見ていると、見よ、白い雲があつて、その雲の上に人の子のような者が座しており、頭には金の冠をいただき、手には鋭いかまを持っていた。すると、もうひとりの御使が聖所から出てきて、雲の上に座している者にむかつて大声で叫んだ、『かまを入れて刈り取りなさい。地の穀物は全く実り、刈り取るべき時がきた』。雲の上に座している者は、そのかまを地に投げ入れた。すると、地のものが刈り取られた。また、もうひとりの御使が、天の聖所から出てきたが、彼もまた鋭いかまを持っていた。」

黙示録一四ノ一四―一七

「こういうわけで、安息日の休みが、神の民のためにまだ残されているのである。」

ヘブル四ノ九

「また、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意をととのえて、神のもとを出て、天から下って来るのを見た。」

黙示録二一ノ二

「なお、わたしが見ていると、見よ、小羊がシオンの山に立っていた。また、十四万四千の人々が小羊と共におり、その額に小羊の名とその父の名とが書かれていた。」

黙示録一四ノ一

「御使いはまた、水晶のように輝いているいのちの水の川をわたしに見せてくれた。この川は、神と小羊との御座から出て、都の大通りの中央を流れている。川の両側にはいのちの木があつて、十二種の実を結び、その実は毎月みのり、その木の葉は諸国民をいやす。のろわるべきものは、もはや何ひとつない。神と小羊との御座は、都の中にあり、その僕たちは、彼を礼拝し、御顔を仰ぎ見るのである。彼らの額には、御名がしるされている。夜は、もはやない。あかりも太陽の光も、いらない。主なる神が彼らを照し、そして、彼らは世々限りなく支配する。」

黙示録二二ノ一―五

## その後の幻

一八四七年、メイン州トプシヤムで、兄弟たちが、安息日に集まっていたときに、主は

わたしに次のような幻をお与えになった。

われわれは、いつもとは異なった特別の祈りの霊を感じた。そして、われわれが祈っていると、聖霊がわれわれの上にくだった。われわれは非常に幸福であった。まもなく、わたしは地上の事柄から離れて、神の栄光の幻に包まれた。わたしはひとりの天使が、速やかにわたしの方に飛んでくるのを見た。彼は、わたしを地上から聖なる都へ速やかに連れて行った。わたしは都の中に神殿を見て、その中に入って行った。わたしは入口を通って行って、第一の幕の所に来た。この幕があげられて、わたしは聖所の中に入った。ここに香壇と七つのともしびがついた燭台と供えのパンを置いた机とがあるのをわたしは見た。聖所の栄光を見たあとで、イエスは第二の幕をあげて下さった。そして、わたしは至聖所に入った。

わたしは、至聖所で箱を見た。それは上も横も純金でおおわれていた。箱の両側に美しいケルブが立っていて、箱の上にその翼を広げていた。彼らは互いに向き合い、下の方を見つめていた。天使たちの間に黄金の香炉があった。箱の上の方の天使たちが立っている所に、非常に明るい栄光が輝いていて、それは神があられるみ座のように見えた。イエスは箱のそばに立っておられた。そして、聖徒たちの祈りが彼の所にのぼってくると、香炉

の中の香が煙って、彼は香の煙とともに彼らの祈りを彼の父にささげられるのであった。箱の中には、マナの入った黄金のつぼと、芽が出たアロンの杖と、書物のようにたたまれた石の板とがあった。イエスはそれを開かれた。そしてわたしは、そこに神の指で書かれた十誠を見た。一枚の板には四条、もう一枚の板には六条が書かれていた。最初の板の四条は、他の六条よりももっと明るく輝いていた。しかし、第四条の安息日の戒めは、他のどの戒めよりも輝いていた。というのは、安息日は、神の聖なるみ名をあがめて守るようにと聖別されたものだからである。聖安息日の戒めは、光り輝いていて、そのまわりに栄光の輪があった。安息日の戒めが、十字架につけられたのではないことをわたしは見た。もしそうであれば、他の九つの戒めも同様で、われわれは第四条を破るのと同じように、それらをみな勝手に破ってもよいことになる。わたしは、神が安息日を変更されなかったのを見た。なぜなら、神は変わることのないからだだからである。しかし、法王が、それを週の七日目から第一日に変えたのである。彼は、時と律法とを変えようとするのであった。

もし神が安息日を第七日目から第一日目に変えられたのであれば、神は、今日の神殿の至聖所の箱の中にある石の板に書かれた安息日の戒めを変更されたはずで、そこには、第一日があなたの神、主の安息日であると書かれているはずである。しかし、それは、神の指

によって石の板に書かれて、シナイ山でモーセに与えられた時と同じに、「七日目は、あなたの神、主の安息である」と書かれているのをわたしは見た。わたしは聖安息日が、今も、また将来も、神の真のイスラエルと未信者との間を分け隔てる壁であり、また、安息日は、神を待ち望む神の愛する聖徒たちの心を結合させる大きな論点であることを見た。

わたしは、神が、安息日を理解してもいなければ守ってもいない子供たちを持っておられるのを見た。彼らはまだ安息日についての光を拒んではいなかった。悩みのときの開始にあたって、われわれが出ていってもっと徹底的に安息日を宣べ伝えたとき、われわれは聖霊に満たされた\*。このことは諸教会と名目的再臨信徒たち（付録参照）を激怒させた。彼らは安息日の真理に反論することができなかったからである。そして、この時、神に選ばれた者たちはみな、われわれが真理を持っていることをはっきりと知って、出てきて、われわれと一緒に迫害に耐えた。わたしは、地上に剣、ききん、疫病、大混乱が起こるのを見た。悪人たちは、われわれが彼らの上に災害をもたらしたものと考えた。そして彼らは立ち上がって、地上からわれわれを滅ぼし去ろうと相談した。彼らは、そうすれば災害がやむものと考えたのである。

悩みの時に、われわれはみな、町々村々から逃れたが、悪人たちは追いかけてきて、聖



徒たちの家に剣をもつて入ってきた。彼らは、われわれを殺そうとして剣を振りあげたがそれは折れて、わらのように弱々しく地に落ちた。そのとき、われわれはみな、昼も夜も救いを叫び求めた。そしてその叫びは神のみに達した。太陽が昇った。そして、月は止まった。川の流れは止まった。黒雲が現れて、互いにぶつかり合った。しかし、栄光の輝く晴れわたったところが一か所あって、そこから多くの水の音のような神の声が聞こえてきて、天地を震動させた。空は開いたり閉じたりして動揺していた。山々は風にそよぐ葦のように揺れ、あたり一面にぞつぞつした岩石を投げ出した。海はるつぽのようになえたり、石を陸上に投げ出した。そして、神がイエスの再臨の日と時間とを告げ、ご自分の民への永遠の契約を宣言されたとき、神はひとくぎりずつ語って、間をおかれた。み言葉はその間に全地に鳴り響いた。神のイスラエルは天を仰いで立ち、大きな雷のように地に鳴り響く主のみ口から出る言葉に、耳を傾けた。それはまことに莊嚴そのものであった。聖徒たちは一つの文章が終わるごとに、「栄光あれ、ハレルヤ！」と叫んだ。彼らの顔は神の栄光に輝いていた。彼らは、シナイ山からおりて来た時のモーセの顔のように、栄光に輝いていた。悪人たちはあまりの輝かしさのために、彼らを見ることのできなかつた。そして、神の安息日を清く守って神に栄光を帰した人々に永遠の祝福が宣言されたとき、獣

とその像とに対する大いなる勝利の叫びがあがった。

それからヨベルの年が始まり、地は休まねばならなかった。わたしは、信心深い奴隷が彼をつないでいた鎖をふるい落として、意気揚々と勝利のうちに立ち上がるのを見た。他方、彼の邪悪な主人はあわてふためいて、そのなすところを知らなかった。悪人たちは神の語られた言葉を理解することができなかったからである。まもなく大きな白い雲が現れた。それはこれまでのどんなものよりも美しく見えた。その上に人の子が座っておられた。

最初、われわれには、雲の上におられるイエスが見えなかったが、雲がだんだん地上に近づくにつれて、彼の麗しい姿を見ることができた。この雲が最初に現れたとき、それは天における人の子のしるしであった。神のみ子の声が、眠っている聖徒たちを呼び起こし、輝かしい不死の衣を彼らに与えた。生きている聖徒たちは、一瞬間の間に変えられ、彼らとともに雲の車の中へと引き上げられた。雲の車がのぼって行くのは、実に輝かしい光景であつた。車の両側に翼があり、その下の方には輪があつた。車が回りながらのぼって行くとき、輪は「聖なるかな」と叫び、翼は動きながら「聖なるかな」と叫び、雲のまわりに付きそう聖天使たちも、「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者にして主なる神！」と叫んだ。そして、雲の中の聖徒たちは、「栄光あれ、ハレルヤ！」と叫んだ。そして車

は聖なる都へのぼって行った。イエスは、黄金の都の門を広く開いて、われわれを迎え入れてくださった。ここで、われわれは歓迎された。われわれは「神の戒め」をまもり、「命の木にあずかる特権」を持っていたからである。

### 印する働き

一八四九年一月五日、聖安息日が始まるとき、われわれは、コネティカット州ロッキンヒルで、ベンデン兄弟の家族とともに祈っていた。そのとき、聖霊がわれわれの上にくだった。わたしは幻の中で、至聖所へ連れて行かれた。そこで、わたしは、イエスがなおイスラエルのために執り成しておられるを見た。彼の衣のすそには、鈴とざくろがついていた。それから、すべての者の運命が、救いかまたは滅びかに決定されるまで、イエスは至聖所から出られないこと、また、イエスが至聖所における働きを終了し、彼の祭司の服を脱いで、報復の衣をまとわれるまでは、神の怒りが下らないことを、わたしは見た。そのときイエスは天父と人間との間から退かれる。そして神は、沈黙を破って、ご自分の真理

を拒否した人々に神の怒りを注がれるのである。国々の怒り、神の怒り、そして死者を裁くときなどは、全く別の事件であって、相次いで起こるものであり、また、ミカエルは立ち上がっておらず、かつてなかったほどの悩みの時はまだ始まっていないことを、わたしは見た。今、国々は怒りつつあるが、われわれの大祭司が、聖所における働きを終えられて立ち上がり、報復の衣をまといられるときに、いよいよ最後の七つの災いが注がれるのである。

四人のみ使いが、聖所におけるイエスの働きが終わるまで、地の四方の風を引き止めており、その後で、七つの災いがくだるのを、わたしは見た。これらの災いは、悪人たちに、義人たちに対する激しい怒りを抱かせた。彼らは、われわれが彼らの上に神の刑罰をもたらしたのであって、われわれを地上から除けば災いがやむと考えた。聖徒たちを殺す布告が発せられた。そのため聖徒たちは、昼も夜も救いを叫び求めた。これがヤコブの悩みの時であった。そのとき聖徒たちは、みな心を悩まして叫び求め、神のみ声によって救い出された。十四万四千人は勝利した。彼らの顔は神の栄光に輝いた。それから、わたしは苦悩のうちに叫んでいる一団の人々を示された。彼らの着物には大きな文字で、「あなたははかりで量られてその量の足りないことがあらわれた」と書いてあった。わたしは、この

人々がだれであるかを尋ねた。「この人々は、一度は安息日を守ったがやめてしまった人々です」と天使は言った。わたしは彼らが大声で、「われわれは、あなたの再臨を信じた。そして、熱心に、それを教えた」と叫ぶのを聞いた。こう言っているときに、彼らは自分たちの着物に目を落とし、そこに書かれた文字を見て、大声で泣きわめいた。彼らは深い流れの水を飲んだのに、その足で残りの水をにがらせた、――安息日を足の下にふみにじった――こと、そして、そのために彼らは、はかりで量られて、その量の足りないことがあらわされたことを、わたしは見た。

次に、わたしと一緒にいた天使は、わたしの注意を再び都に向けた。そこにわたしは、四人の天使が都の門に向かって飛んでいるのを見た。彼らは門の所にいる天使に、黄金のカードを見せているところだった。そのとき、わたしはもう一人の天使が、最も輝かしい栄光に照り映えている方角から、速やかに飛んできて、手に持った何かを上下に振りながら、他の天使たちに大声で叫ぶのを見た。わたしはわたしに付き添っている天使に、わたしが見たことの説明を求めた。彼は、今はもうこれ以上は見ることにできないけれども、見たことの意味は、やがて彼が示してくれると言った。

安息日の午後、われわれの仲間の一人が、病気だった。そして彼はいやされるように祈っ

てほしいとわれわれに求めた。われわれ一同は心を合わせて、病人をいやし得なかったことのない医師であられるイエスに願い求めた。そして、いやしの力が与えられて病人がいやされたときに、聖霊がわたしに下って、わたしは幻を見せられた。

わたしは、地上でなすべき働きを持っていた四人の天使たちが、その働きを成し遂げる途中にあるのを見た。イエスは祭司の衣をまとっておられた。彼はあわれみの情をもって残りの民をgoranになった。それから、両手をあげて、深いあわれみのこもった声で、「**わたしの血、父よ、わたしの血、わたしの血、わたしの血！**」と叫ばれた。すると、白い大きなみ座に座っておられる神から、非常に輝かしい光がでてきて、イエスのまわり一面を照らすのを、わたしは見た。それから、イエスからの任務を帯びた一人の天使が、地上でなすべき働きを持っていた四人の天使たちの所に、速やかに飛んでいって、手に持った何かを上下に振って、大声で、「神のしもべたちの額に印が押されるまで、**待て、待て、待て！**」と叫ぶのを、わたしは見た。

わたしは、わたしと一緒にいる天使に、わたしが聞いたことの意味と、四人の天使が何をしようとしているのかを尋ねた。彼は、わたしに、諸勢力を制しておられるのは、神であって、神が地上のことに關して、天使たちに任務を与えておられるのであると言った。

また四人の天使たちは、四方の風を引き止める力を神から与えられていて、今にも風を吹かせようとしていたが、彼らが手をゆるめて、四方の風が吹き始めようとしたときに、あわれみ深いイエスの目が、まだ印されていない残りの民をごろんになって、彼は天の父に向かつて手をあげて、ご自分が彼らのために血を流されたことを訴えられたのだと言った。そこで、もう一人の天使が、四人の天使たちのところに速やかに飛んで行く任命を受けた。そして、神のしもべたちが生ける神の印を彼らの額に押されるまで、引き止めるようにと彼らに命じたのであった。

### 神の民に対する神の愛

わたしは、神の民に対して、神が持つておられるやさしい愛を見たが、それは非常に大きなものである。わたしは、天使たちが、聖徒たちの上に翼をひろげているのを見た。一人一人の聖徒には天使が付き添っていた。もし聖徒が失望して涙を流したり、あるいは危険に陥ったりすれば、いつも彼らに付き添っている天使たちは、すぐに天に飛んでいつて

そのことを知らせる。都の中の天使たちは歌うことをやめる。するとイエスは、別の天使に下って行って彼らを励まし、見守り、狭い道からそれないように彼らを保護することを お命じになる。しかし、もし彼らがこれらの天使たちの注意深い保護に心をとめず、さ迷いつづけるならば、天使たちは、悲しそうな顔をして涙を流す。彼らは、このことを天に知らせる。すると、都の中のすべての天使たちは涙を流し、大きな声で「アーメン」という。しかし、もし聖徒たちが彼らの前にある報賞に目を向けて、神を賛美して、神に栄光を帰するならば、天使たちは、この喜ばしい知らせを都にたずさえていく。すると、都の中の天使たちは、黄金の立琴をかなでて、大声で「ハレルヤ！」と叫び、天空は彼らの美しい歌に鳴り響くのである。

聖なる都には、完全な秩序と調和とがある。地上を訪れることを命じられた天使たちはみな、黄金のカードを持っていて、彼らが出入りするときに、それを都の門のところにいる天使たちに見せる。天国はよい所である。わたしはそこへ行って、わたしのために生命をお与えになった愛するイエスを仰ぎみて、彼の栄光のお姿に変えられることを熱望する。ああ、来たるべき輝かしい世界の栄光を表現する言葉がないものだろうか。わたしは、われわれの神の都を喜ばせる生きた水の流れを渴望する。



主は、わたしに他世界の光景を見せてくださった。わたしは翼が与えられ、一人の天使とともに都から明るく栄光に輝くところへ行った。その草は生き生きとした緑で、その鳥は楽しげにさえずっていた。そこには、大きな人もいれば小さな人もいた。彼らは、気高く威厳があり、美しかった。彼らは、イエスの本質の真の姿をしていて、彼らの顔は清い喜びに輝き、その場所の自由と幸福をあらわしていた。わたしは、彼らの一人に、なぜ彼らは地上の人々よりもそんなに美しいのかをたずねた。すると答えは、「われわれは、神の戒めに厳密に従い、地上の人々のように不服従によって墮落しませんでした」ということであつた。それからわたしは二本の木を見た。その一本は、都のなかの命の木のように見えた。両方の木の実美しく見えたが、その一つを彼らは食べてはならなかった。彼らは両方とも食することはできたが、その一つは食することを禁じられていた。そこで、わたしに付き添っていた天使が、「この場所の人はだれも禁じられた木の実を食べてはいません。もし彼らが食べるならば、墮落してしまうのです」とわたしに言った。それからわたしは、七つの月がある世界へ連れて行かれた。そこでわたしは、生きながら天にあげられたなつかしいエノクに会った。彼は、右の手に輝かしいしゅろの枝を持っていた。その一つ一つの葉には「勝利」と書いてあつた。彼の頭のまわりには、目もくらむばかりに

まぶしい白い花の冠があった。花の冠には葉もついていて、一枚一枚の中心に「純潔」と書いてあった。そして、花の冠の回りにはさまざまな色の宝石が、星よりも明るく輝いて文字を照らして浮き上がらせていた。彼の頭の後には、花の冠を結んだちよう結びがあった。それには「聖潔」と書いてあった。花の冠の上には、太陽よりも明るく輝く美しい冠があった。わたしは彼が地球から移されたのはここですかと、彼にたずねた。彼は答えて「そうではありません。わたしの家は都にあります。わたしは、ここを訪問しているので」と言った。彼は全くくつろいだ気持ちでその場所のあちらこちらをたずねていた。わたしは、わたしに付き添っている天使に、わたしをその場所におらせてくださいとたのんだ。わたしは、この暗い世界にもう一度帰って来ることなどは、とうてい考えることができなかった。そのとき天使は、「あなたは帰らなければなりません。そして、もしあなたが忠実であれば、十四万四千人と共に、すべての他世界を訪問し、神のみ手のわざを見る特権が与えられるでしょう」と言った。

## もろもろの天体が揺り動かされる

一八四八年十二月十六日に、主はもろもろの天体が揺り動かされる幻を、わたしにお与えになった。主がマタイ、マルコ、ルカに記録されているしをお与えになったときに「天」と言われたのは天のことであり、「地」と言われたのは地上のことであることをわたしは見た。天体とは、日、月、星のことである。これらのものは天を支配している。地の権力とは、地上を支配しているもののことである。天体は神の声によって揺り動かされる。そのときに、日、月、星は、それぞれの場所から動かされる。それらはなくなってしまうのではなくて、神の声によって揺り動かされるのである。

重い黒雲が現れて互いにぶつかり合った。大気は分かれて巻き去られた。そのときにわれわれは、オリオン星座の空間を通してその向こうを見ることのできた。そこから神のみ声が聞こえた。聖なる都は、この空間を通っておりてくる。わたしは、地の権力が今、揺り動かされて、いろいろの事件が次々に起こるのを見た。戦争と戦争のうわさ、剣、きき

ん、疫病などがまず地の権力を揺り動かす。そして、それから神のみ声が、日、月、星を揺り動かす、この地球をも揺り動かす。わたしはヨーロッパの強国が揺れ動いているのはある人々が教えているように、天体が揺れ動いているのではなくて、怒った国々が揺れ動いているのであることを見た。

### 開かれた門と閉ざされた門

一八四九年三月二十四日の安息日に、われわれはメイン州トブシャムで、兄弟たちと楽しく、また非常に興味深い集会を持った。聖霊がわれわれの上にくだった。そしてわたしは、聖霊によって生ける神の都へ連れて行かれた。そこで、わたしは、神の戒めと閉ざされた門に関するイエス・キリストのあかしとは分離することができないこと、また、神の戒めの重要性が明らかに照り輝き、神の民が安息日の真理のために試練を受けるのは、十戒の戒めを納めた箱のある天の至聖所の門が開かれたときであるのを見せられた。この門は、一八四四年に、イエスの聖所における奉仕が終わったときに開かれた。そのときイエ

スは立ち上がって、聖所の門を閉じ、至聖所の門を開き、第二の幕の中に入られた。今は彼は箱のそばに立っておられる。そして、今、イスラエルの人々の信仰はここに向けられている。

イエスが聖所の門を閉じられたので、だれもそれを開けることはできない。また彼が至聖所への門を開かれたので、だれもそれを閉じることができないことを、わたしは見た（黙示録三ノ七、八、補遺及び付録参照）。そしてイエスが、箱のある至聖所の門を開いて、戒めが神の民に対して輝き出ているので、彼らは安息日の問題によって試みられていることを、わたしは見た。

わたしは安息日についての現在の試みは、イエスが聖所における奉仕を終わって、第二の幕の中に入って行かれるまでは、起こり得なかったことを見た。従って、一八四四年七月に夜中の叫びが終わり、至聖所への門が開かれる前に眠りについたキリスト者たちは、安息日を守っていなかったが、今希望の中に眠っている。というのは、彼らは、門が開かれてわれわれに与えられた安息日の光や試みを持たなかったからである。わたしは、サタンがこの点について神の民のある人々を誘惑するのを見た。非常に多くの立派なキリスト者が、真の安息日を守らずに信仰の勝利を収めて眠っているのです、彼らは安息日が今、わ

れわれに対するテストであるかどうかについて疑惑をいだいたのである。

現代の真理の敵は、イエスが閉じられた聖所の門を開き、彼が一八四四年に開かれた至聖所の門を閉じようとしてきた。そこには箱があつて、その中には主の指で書かれた十誡の石の板が納められている。

今や、サタンはこの印する働きのときに当たり、あらゆる手段を用いて神の民の心を現代の真理から引き離し、彼らを迷わせようとしている。わたしは、神が悩みのときに神の民を守るために、彼らの上にかけておられる覆いを見た。そして、真理の側に立つ心の清い者は、全能の神の覆いに隠されるのであつた。

サタンはこれを知っていた。そして大いなる力をもって働き、できるだけ多くの人々の心を迷わせ、真理に堅く立たないようにしていた。わたしはニューヨークやその他の場所における不思議なたたく音は、サタンの力であつて、このようなことは宗教の仮面をかぶってますます広がり、欺かれた人々には大きな安心感を与えるものであつて、できることとならば、神の民の心もこうしたことに引きつけて、聖霊の教えと力とを疑わせようとするのを見た(補遺及び付録参照)。

わたしは、サタンが手下たちを使って、いろいろの方法で働くのを見た。彼は真理を拒

んで欺瞞に陥り、偽りを信じて滅びに陥った教師たちを用いて働いた。彼らが説教したり祈ったりしているときに、ある人々はうつ伏せに倒れ動かなくなった。これは聖霊の力によるのではなくて、サタンの力がこれらの手先を動かし、その影響を人々に及ぼしたのである。現代の真理を拒んだある自称再臨信徒たちは、説教や祈りや会話において、催眠術を用いて、信者を得ようとした。そして、人々は、それを聖霊であると考えたので、このような感化力を受けることを喜んだ。これを用いた者の中には、悪魔の暗黒と欺瞞に深く陥ってしまったて、それは彼らが用いるように与えられた神の力であると考える者もあった。彼らは、神を全く自分たちと同じようなものとなし、神の力をなんの価値もないものと考えた。

このようなサタンの手下たちのあるものは、聖徒たちのある人々、すなわち、彼らがサタンの力によって欺いて、真理から引き離すことができなかった人々の体に影響を及ぼしていた。ああ、すべてのものがこのことを、神がわたしに示されたように見ることで、サタンの策略をもっと知って警戒するようになってほしいと思う。サタンはちょうどこの印する働きのおいて、このような方法で、神の民の心を反らし、欺き、神から引き離そうとしているのをわたしは見た。ある人々は現代の真理に堅く立っていないのを

わたしは見た。彼らは真理にしっかりと立っていなかったもので、彼のひざは震え、彼らの足は滑べっていた。そして、彼らがこのように震えている間は、全能の神の覆いが彼らにかけられなかったのである。

サタンは印する働きが終わり、神の民の上に覆いがかけられるまで、彼らをそのままの状態にしておき、最後の七つの災いが下るときに、神の燃える怒りを彼らが避けることができないようにさせようと、あらゆる策を弄していた。神はこの覆いを神の民の上にかけて始められた。そしてそれは、ほふられる日に避け所が与えられるすべての者の上に間もなくかけられる。神は神の民のために力強く働かれる。そしてサタンも働くことが許されるのである。

わたしは不思議なしるしや奇跡、また偽りの改革が増し加わって広がるのを見た。わたしに見せられた改革は、誤りから真理への改革ではなかった。わたしに付き添っていた天使は、これまでのように人々が罪人のために心を悩ましているか見るようにわたしに命じた。わたしはそれを見ようとしたが、見つけることができなかった。なぜならば、彼らの救いときは過ぎ去ったからである（注）。



## (注)

この言葉の筆者は、この言葉がすべての罪人の救われるときはもう過ぎ去ったという意味であるとは考えなかった。彼女自身もこの言葉が書かれたちょうどそのときに、罪人の救いのために働いていた。またその後もずっと働いてきた。

彼女が、このことについて、それが示されたときにどう理解したかは、次を見ればわかる。その第一は、一八五四年、第二は、一八八八年に公にされたものである。

「ここに言われている『偽りの改革』というのは、もっと詳しく説明しなければならない。この幻は、特に、再臨の教理の光を聞いて拒否した人々に当てはまる。彼らは大いなる惑わしに陥った。このような人々は、以前のように罪人のために心を悩まさないのである。再臨を拒否し、サタンの惑わしに陥ってしまったのであるから、『彼らの救いのときは過ぎ去った』のである。しかし、これはまだ再臨の教理を聞かず、これを拒否していない人々にはなんの関係もないことである。」

「われわれの心を納得させ、感動させた真理を軽々しく扱うことは、恐るべきことである。神があわれみのうちにわれわれにお与えになった警告を拒めば、必ずその罰を受ける。天からのメッセーじが、ノアの時代の世界に送られた。そして、人々の救いは、彼らがそのメッセーじをどう扱うかにかかっていた。彼らは警告を拒んだ。そのために、神の霊は罪深い人類から取り去られて、彼らは洪水によって滅ぼされた。アブラハムの時代にも、神

のあわれみは罪深いソドムの住民に訴えることをやめてしまった。そして、ロトと彼の妻とふたりの娘たちのほかは、天から下った火に焼かれてしまった。キリストの時代においても同様であった。神のみ子は、その時代の神を信じないユダヤ人に、『お前たちの家は見捨てられてしまう』と言われた。この同じ無限の力は、終末をながめて、『自分らの救いとなるべき真理に対する愛を受け入れない』人々について、次のように言っておられる。

『そこで神は、彼らが偽りを信じるように迷わす力を送り、こうして真理を信じないで不義を喜んでいたすべての人々を、さばくのである。』彼らが神のみ言葉の教えを拒むゆえに神は聖霊を取り去り、彼らが愛している欺瞞の中に彼らを放置されるのである。」

### 信仰の試み

この試練のときに、われわれはお互いに励まし慰め合う必要がある。今、サタンの誘惑はこれまでになかったほどに激しい。というのは、サタンは自分の時が短く、間もなくすべての者の運命が生か死かに決定されることを知っているからである。今は失望と試練に打ちひしがれるときではない。われわれはあらゆる苦難に耐えて、ヤコブの全能の神に全

く信頼しなければならぬ。主は、われわれのすべての試練に対して、彼の恵みが十分であることをわたしにお示しになった。そして試練は、これまでにないほど大きいけれども、もしわれわれが全く神に信頼するならば、われわれはすべての誘惑に打ち勝ち、彼の恵みによって勝利することができるのである。

もしわれわれが試練に打ち勝ち、サタンの誘惑に勝利するならば、われわれは金よりもはるかに尊い信仰の試練に耐え、さらに強くなり、次の試練に当面する準備がよくなる。しかし、もしわれわれが、サタンの誘惑に圧倒されて負けるならば、われわれは弱くなり試練の報賞も受けず、次の誘惑に対する準備もよくできないのである。こうして、われわれは徐々に弱くなり、ついにサタンの思いのままに捕虜にされてしまう。われわれは神の武具をすべて身につけて、いつでも暗黒の勢力と戦う用意がなければならない。誘惑や試練が襲ってくるときに、神の所に行き、熱心に神に祈り求めよう。神は、われわれに何も与えずに去らせることをせず、われわれに、勝利するための、そして敵の力を打ち破るための、恵みと力をお与えになる。ああ、すべての者がこれらのことの真相を知り、イエスのよい兵卒として困難を耐え忍んでほしいものである。そのとき、イスラエルは、神にあって力強く、神の勢いによって前進するのである。

神は神の民を清め精練するために、彼らに苦い杯を飲ませられることを、わたしに示された。それは苦い杯である。そして、不平不満呟きによって、それをさらに苦くすることができ。しかし、このようにしてそれを受ける人々は、もう一つの杯を飲まなければならない。なぜならば、最初のものが、心にその意図された効果をあらわさなかったからである。もし二度目の杯が効果をあらわさなければ、その効果があらわれるまで、彼らはまたその次も、そしてまたその次の杯も、飲まなければならない。さもなければ彼らは、その心が汚れたまま放置される。この苦い杯は、忍耐、辛抱強さ、祈りによって甘くすることができ、それをこうして受ける人々の心に、その意図された効果をあらわし、神に栄光と誉れとが帰せられることをわたしは見た。キリスト者となり、神のものとなり、神に嘉されるということは、生やさしいことではない。主は現代の真理を信じると言いながら、生活がその言うところと一致していない人々をわたしにお示しになった。彼らの信仰の標準はあまりにも低く、聖書の聖潔にははるかに及ばない。おなししい行状にふけり、利己心をほしいままにしているものもある。われわれは、自分を喜ばせ、世の中の人々と同様の生活と行動をなし、世の快樂にふけり、世の中の人々との交わりを楽しみながら、キリストとともにみ国で支配することを期待することはできない。

もしわれわれが、来世においてキリストの栄光にあずかろうと思うならば、この世において、キリストの苦難にあずからなければならぬ。もしわれわれが、神をお喜ばせることと、神の尊いみ業を苦難に耐えて推し進めることを求めるかわりに、自分の利益と自分を最も喜ばせる方法を求めるならば、われわれは神のみ栄えと、われわれが愛すると公言している聖なるみ業の栄えを汚すのである。われわれが神のために働く時は、わずかしが残っていない。イエスの散らされ、裂かれた群れを救うために、犠牲にするのが惜しいものは、何一つあつてはならない。今、犠牲をもつて、神と契約を結ぶものは、間もなく故郷に集められて、豊かな報賞にあずかり、新しい王国を永遠に所有するのである。

われわれは、全的に主のために生き、規律正しい生活と敬虔な行状によつて、われわれがイエスとともにあることと、彼の柔和で謙遜な弟子たちであることとを、人々に示したものである。われわれは昼のうちに働かなければならぬ。困難と苦難の夜が来るならば、神のために働くには遅すぎるのである。イエスは彼の聖なる神殿におられて、今、われわれの犠牲、われわれの祈り、われわれの過ちと罪の告白を受けいれられる。そして、彼が聖所を去られる前に、イスラエルのすべての罪をゆるして、消し去られるのである。イエスが聖所を去られると、聖であつて義なる者は、聖で義なるままである。なぜなら、

そのとき彼らのすべての罪は消し去られて、生ける神の印を押されているからである。しかし、不義で汚れた者たちは、不義で汚れたままである。なぜならば、そのとき、彼らの犠牲、彼らの告白、彼らの祈りを、父なる神のみ座の前にささげる祭司がないからである。それゆえに、来るべき怒りのあらしから人々を救うためになすべきことは、イエスが天の至聖所を去られる前にしなければならぬ。

### 小さい群れへ

愛する兄弟がた。主は、一八五〇年、一月二十六日に、次のような幻をわたしにお与えになった。神の民の中のある人々は、ぼんやりと眠っていて、居眠り状態であることをわたしは見た。彼らは、われわれが、今、生存している時代を自覚していない。そして「ほうき」を持った人が、すでに来ていて、ある者は、掃き出されるおそれがあることを知らない（ウィリアム・ミラーの夢参照\*）。わたしは、イエスが彼らを助けて、彼らにも

う少し時間を与え、とりかえしがなくなる前に、恐ろしい危険を彼らが自覚して、準備をすることができるようになることを、イエスに願い求めた。天使は、「災がつむじ風のように臨む」と言った。わたしは、この世を愛し、財産に執着してそれを離れようとしていない人々、また霊的食物がないために滅びつつある飢えた羊を養う使命者を送り出すために犠牲を払おうとしない人々を、あわれみ、救ってくださるように天使に願った。

現代の真理をもっていないために、死んでいくあわれな魂、また、真理を信じると言いながら、神の働きを前進させるために必要な資金を出さないで、彼らを死ぬままにさせている人々を見たときに、その光景は、あまりにも痛ましかったので、わたしは、天使に、それをわたしから取り去ってくださるよう願った。神の働きが、人々の財産を要求する場合に、彼らは、イエスのところに来た青年のように（マタイ一九ノ一六―二二）悲しみながら立ち去ってしまう。そして、やがて、洪水のような災害が、彼らを襲って、彼らの財産をみな奪い去ってしまう。その時では、地上の財産を犠牲にして、天に宝を蓄えるにはもう遅すぎることを、わたしは見た。

それから、わたしは、立派で気高く栄光に輝いた贖い主を見た。彼は、栄光の国を去って、この暗いさびしい世界に來られて、彼の尊い生命を与えて、義なるかたであるにもか

かわらず、不義なる人々のために亡くなられたのである。彼は、残酷なあざけりとおち打ちに耐え、いばらの冠をかぶり、全世界の罪の重荷を背負って、ゲツセマネの園で、大きな汗を流された。天使は、「これはなんのためだろうか」とたずねた。わたしはそれがわれわれのためであったことを悟った。彼は、われわれの罪のために、このすべての苦しみを受け、彼の尊い血によって、われわれを贖おうとされたのである。

それから、イエスが父の前で、彼の血と彼の苦難と彼の死が人々のためであることを訴えておられるとき、また、人々が生ける神の印を受けるように、神の使命者たちが彼らに救いの真理を伝えているときに、滅びようとしている人々に真理を伝えて、彼らを救うためにこの世の財産を処分しようとしないう人々があるのを、わたしはもう一度見せられた。神からゆだねられた神ご自身の財産を使命者たちに手渡すことは、現代の真理を信じると言っているある人々にとっておぼろしいことなのである。

イエスの苦難と、人間のためにご自身の生命をお与えになったその深い愛とが、もう一度わたしの前に示された。また、彼の弟子であると言う人々の生活が見せられた。この人は、この世の財産を持っていないながら、救いの働きを助けることはあまりにも大変なことだと考えている。天使は、「このような人々は天国にはいれるだろうか」と言った。すると



もうひとりの天使が、「いや、決して、決してはいえることはできない。この地上において、神の働きに興味を持っていない人は、天で贖罪愛の歌をうたうことはできない」と答えた。わたしは、神がこの地上でしておられる急速な働きは、間もなく速やかになしとげられて、使命者たちは、散らされた群れをさがし出すために、急いで行かなければならないことを見せられた。一人の天使が、「すべての者が使命者なのか？」と言った。するともう一人が「そうではない。神の使命者は使命を持っている」と答えた。

わたしは、神からの使命を持っていない人々の巡回によって、神の働きが妨げられ、傷つけられたのを見た（付録参照）。そのような人々は、行かねばならぬ所でもない所へ出かけて行って費やした金銭に対して、神に申し開きをしなければならぬ。その金銭は、神の働きに役立ったはずだからである。神に召され選ばれた使命者が与え得たはずの霊の食物が欠乏していたために、魂は飢えて死んだ。わたしは、手で働く力があつて働きを支えることができる人々は、財産を持った人々と同じように、その能力に対して申し開きをしなければならぬことを見た。

大きなふりが始まった。そしてこれは続いていく。そして、真理のために勇敢に屈することなく立ち、神と神の働きのために犠牲を払うもの以外はみなふるわれる。「犠牲は

強いられてするものであろうか。そうではない。それは、心からのささげ物でなければならない。畑を買うためには、持ち物をみな売り払わなければならない」と天使が言った。わたしは、神が神の民をお助けになるように叫び求めた。彼らの中には、気を失い、死にそうになっている者がいた。それからわたしは、全能の神の審判が急速に下るのを見た。そしてわたしは、天使が彼の言葉で人々に語るように天使に嘆願した。すると天使は言った。「神のみ言葉の明らかな真理に動かされない者はシナイ山の雷鳴や稲光でさえも動かすことはできない。また、天使の言葉でさえも彼らを目覚めさせることはできない」。

それからわたしは、イエスの美と気高さを見た。彼の衣は、どんな白よりも白かった。どんな言葉も、彼の栄光と崇高なうるわしさを描写することができない。神の戒めを守るすべての者は、門を通過して都にはいり、命の木に近づく特権を持ち、真昼の太陽よりも輝かしい顔をしておられるうるわしいイエスの前にいつまでもいるのである。

わたしは、エデンにいるアダムとエバを見せられた。彼らは、禁じられた木の実を食べて、園から追われた。そして彼らが、その実を食べていつまでも死なない罪人にならないように、炎の剣が命の木のまわりにおかれた。命の木は、永遠の生命を保つものであった。わたしは、ひとりの天使が、「アダムの家族のものでだれか炎の剣を通過して、命の木の実を食

べたものがあるか」とたずねるのを聞いた。するともうひとりの天使が答えた。「アダム  
の家族のものは、ひとりとして、炎の剣を通ってあの木の実を食べたことがない。だから  
永遠に生きる罪人はいない。罪を犯した魂は永遠に死ぬ、それは復活の希望のない永遠の  
死である。そして、神の怒りは静められる。

聖徒は聖なる都にこい、千年の間王として祭司として支配する。それからイエスは、  
聖徒とともにオリブ山に降りて来られる。そして、山は裂けて神のパラダイスが基をおく  
大きな平原となる。地の他のところは、千年が終わるまで清められない。千年の終わりに  
悪人たちはよみがえらせられ、都を取りかこむ。悪人たちの足は、新しく造られた地を汚  
すことはない。火が天の神のところから下って来て彼らを滅ぼし、根も枝ともに焼きつ  
くす。サタンが根で、その子供たちが枝である。悪人たちを焼きつくした同じ火が、地を  
清めるのである。」

## 最後の災いと審判

一八五〇年九月、バーモント州サットンで開かれた現代の真理を信じる人々の総会において、わたしは、イエスが聖所を去られたあとで、最後の七つの災害が下されることを示された。「悪人に滅びと死をもたらすのは、神と小羊の怒りである。神の声を聞いて、聖徒たちは旗を持った軍勢のように強く恐るべきものとなる。しかし、彼らはそのときに、記録された審判を執行しない。審判の執行は、千年が終わったときである」と天使が言った。

聖徒たちが、不死のものとされてイエスとともに携え上げられ、彼らの立琴と衣と冠とを受けて都にはいつてから、イエスと聖徒たちは審判を行う。書物が開かれる。それはいのちの書と死の書である。いのちの書には、聖徒たちの善行が記されている。死の書には悪人たちの悪い行いが記されている。これらの書が、律法の書、聖書と比べられ、それに従って人々は審かれる。聖徒たちはイエスとともに、悪人たちに審判を下す。「見よ、あなたがた聖徒は、イエスとともに審判を行い、悪人たちが行ったことに応じた罰を与え、彼

らが審判の執行のときに受ける罰が、その名の所に書きとめられる」と天使が言った。わたしはこれが、聖なる都が地上に降りて来る前に、聖徒がイエスとともに、千年にわたって聖なる都において行う仕事であることを見た。それから、千年の終わりに、イエスは天使たちとすべての聖徒たちをつれて聖なる都をはなれる。そして、イエスが彼らとともに地上に下って来られる間に、悪人たちがよみがえらせられる。そして、「彼を刺しおした者たち」もよみがえらせられて、天使と聖徒たちを従えて栄光に輝く彼を遠くからなぐめ、彼のゆえに嘆くのである。彼らは、彼の手と足とに釘のあとを見、わき腹にやりのあとを見る。そのとき、彼の釘とやりのあととは彼の栄光となる。千年の終わりに、イエスはオリブ山に立たれる。山は裂けて大きな平原となる。そのときに逃げるのはよみがえらせられたばかりの悪人たちである。そのときに、聖なる都が降りて来てその平原に位置を定める。するとサタンは、悪人たちに彼の精神を吹き込む。彼は、都の中の軍勢は小さく自分の軍勢は大きい、そして自分たちは聖徒たちに勝利して都を占領することができる、と言って彼らをおだてる。

サタンが彼の軍勢を集めている間に、聖徒たちは都の中で、神のパラダイスの美と栄光をながめていた。イエスは先頭に立って彼らを導いておられた。突然、愛する救い主は、

われわれの間からあられなくなった。しかし間もなく、われわれは彼のうるわしい声が、「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい」と言われるのを聞いた。われわれは、イエスのまわりに集まった。そして、ちょうど彼が都の門を閉じられたときに、悪人たちにのろいが宣言された。門は閉じられた。そこで聖徒たちは彼らの翼を用いて都の城壁の頂上にのぼった。イエスも彼らとともにおられた。彼の冠は輝かしく栄光に満ちていた。それは、七重にかさなった冠であった。聖徒たちの冠は、星に飾られた純金でできていた。彼らの顔は、栄光に輝いていた。彼らはイエスの本質の真の姿であった。そして彼らが立ち上がって、いっしょに都の頂上のぼっていったときに、わたしはその光景にうっとり見とれてしまった。

そのときに、悪人たちは、彼らが何を失ったかに気づいた。そして、火が神から彼らの上に下って彼らを焼きつくした。これが審判の執行であった。そのとき悪人たちは、聖徒たちがイエスとともに千年の間に彼らに定めたところに従って罰せられた。悪人を焼きつくしたのと同じ神からの火が、全地を清めた。裂けて岩角のけわしい山々は激しい熱に焼けた。また、大気もすべての田畑も焼けうせてしまった。こうして、われわれの嗣業が、栄光に輝いて美しくわれわれの眼前に展開された。そして、われわれは、新たにされ

だ。た全地を受けついたのである。われわれは、みな大声で、「栄光あれ、ハレルヤ！」と叫んだ。

---

## 二千三百日の終わり

わたしは御座を見た。そして、その上に父なる神と御子が座っておられた。わたしは、イエスのお顔をじっと見つめて、彼の美しい姿を賛美した。わたしは、父なる神のお姿を見ることはできなかった。それは、栄光に輝く雲が、神をおおっていたからである。わたしは、父なる神が、イエスご自身と同じような姿をしておられるかを、イエスにたずねた。イエスは、同じ姿であると言われた。しかし、わたしは、その姿を見ることができなかった。「もしあなたが神のお姿の栄光を見たら、生きていることはできない」とイエスが言われたからである。わたしは御座の前に、再臨信徒たちを、すなわち教会と世俗とを見た。わたしは二つの群れを見た。一つは、深い関心をもって、御座の前に頭を下げている。

た。もう一つの群れは、無関心で不注意な態度で立っていた。御座の前で頭をたれていた人々は、祈りをささげて、イエスを仰いだ。するとイエスは、父なる神を仰ぎ見て、神に訴えておられるようすであつた。光が、父なる神から御子に輝き、そして御子から、祈っている群れへと輝いた。その時、わたしは、特別に明るい光が、父なる神から御子に輝き、御子から御座の前にいる人々へと及んでいくのを見た。しかし、この大きな光を受けられるものは、ほとんどなかった。多くの人は、その下から出て来て、直ちにそれに反抗した。他の人々は関心を示さず、その光を受けいれなかった。そのため、光は彼らから去っていった。ある人々は、それを受けいれて、祈っている群れのところへ行つて、彼らとともに頭を下げた。この群れはみな、光を受けて喜び、彼らの顔は栄光に輝いた。

わたしは、父なる神が御座から立たれて（補遺参照）、炎の車に乗つて幕のなかの至聖所にはいられ、お座りになるのを見た。それから、イエスが御座から立ち上がった。そして、頭をたれていた人々の大部分が、彼とともに立ち上がった。わたしは、イエスが立ち上がった後で、無関心な群集には、イエスから一条の光も輝かなかったのを見た。そして、彼らは全くの暗黒の中に取り残された。イエスが立たれたときに立った人々は、彼が御座を立って、彼らを少しばかり導き始められるのをじっと見つめていた。するとイエ



スは、彼の右の手を上げられた。そして、われわれは、彼がうるわしい声で、「ここで待っていないさい。わたしは、わたしの父のところへ行って御国を受けてくる。あなたがたの衣を汚さないようにしていなさい。しばらくすれば、わたしは婚宴に帰って来て、あなたがたを、わたしのところに迎えよう」と言われるのを聞いた。そのとき火の炎のような輪がついた雲の車が、天使たちにかこまれて、イエスがあられるところに来た。彼は、その車に乗って、父なる神が座っておられる至聖所にはいつていかれた。そこでわたしは、父なる神の前に立つておられる大祭司イエスを見た。彼の衣の縁には、鈴とざくろとがあった。イエスとともに立った人々は、至聖所のイエスを信仰をもって仰いで、「わが父よ、あなたの霊を与えてください」と祈るのであった。すると、イエスは、彼らに聖霊を注がれた。その息吹のなかに、光と力、そして多くの愛と喜びと平和があった。

わたしは、御座の前でまだ頭をたれている人々を見ようと思つてふりかえった。彼らはイエスがそこを去られたことを知らなかった。サタンは御座のそばで、神の働きを行おうとするかのように見えた。わたしは、彼らが、御座を見上げて、「父よ、あなたの霊をお与え下さい」と祈るのを見た。するとサタンは、彼らに汚れた力を吹きこむのであった。それには、光と多くの力とがあった。しかし、あたたかな愛、喜び、平和はなかった。サタ

ンの目的は、神の子供たちを欺いて、彼らを引きもどし、惑わすことであつた。

### 悩みの時に備えてなすべき務め

悩みの時の物質的の必要のための準備をすることは、聖書に反することであることを、主は、繰り返してわたしに示された。もし聖徒たちが、自分たちのところ、または畑に食糧を貯えていたりしても、もし国に戦争、ききん、疫病が起これば、それは暴徒たちに奪い去られ、他人が畑の作物を刈るようになることを、わたしは見た。それは、われわれが神に全く信頼する時である。そして神はわれわれをお支えになる。その時に、われわれのパンと水は必ず与えられ、われわれが物に乏しかったり、飢えたりすることがないことを、わたしは見た。なぜならば、神は荒野で、われわれのために食卓の用意をすることがおできである。もし必要ならば、彼がエリヤを養われたように、われわれを養うためにからすを送ったり、あるいは、イスラエルのためになさったように、天からマナを降らせることもなさるのである。

悩みの時に、家や土地はなんの役にも立たなくなる。その時、彼らは怒り狂った群衆か

ら逃げなければならぬ。そしてその時、彼らの財産は、現代の真理の働きを推進するために用いることができないからである。聖徒たちが、悩みの時がやってくる前にすべての邪魔物を切り捨て、犠牲によって神と契約を結ぶことが、神のみこころであることを、わたしは示された。もし彼らが、財産を祭壇の上において、なすべき務めについて、熱心に神に祈り求めるならば、神は、これらのものをいつ処理すべきかを教えてくださる。そうすれば、彼らは悩みの時に自由になり、負担となる邪魔物がなくなる。

もし彼らが、財産に執着し、自分たちの義務について主に尋ねることをしないならば、主は彼らに義務を知らされない。そして、彼らは財産を持っていることを許される。そして、悩みの時に、それは彼らを押しつぶす山のように彼らの前にあらわれるだろう。そして彼らは、それを処分しようとするのであるが、もう、それはできないことをわたしは見た。わたしはある人々が次のように嘆くのを聞いた。「働きは衰微していた。神の民は真理に飢えていた。それなのに、われわれはその欠乏を満たそうとしなかった。今、われわれの財産は役に立たない。ああ、われわれはそれを手放して、天に宝を蓄えておいたらよかったのに。」わたしは、犠牲が増加せず減っていき、燃えつきるのを見た。また、神はすべての神の民が同じ時に、財産を処分することを望まれないことを見た。もし彼らが喜

んで聞き従うことを望むならば、神は必要に応じて、いつ、またどれだけ売るべきかを示してくださるのである。過去において、再臨運動を支えるために、財産を処分するように要求された人々があつた。またその反面、必要な時が来るまで財産を持っていることを許された人々もある。働きが必要とする時が来るならば、売ることが彼らの義務なのである。

ある人々は「自分の持ち物を売って施しなさい」という言葉を明確にしておらず、また救い主の言葉の目的を明瞭に説明していないのを、わたしは見た。売る目的は、働いて自給することができる人々に施すためではなくて、真理を広めるためである。働くことができる人々に助けを与えて怠けさせることは罪である。ある人々は神に栄光を帰すためではなくて、「パンと魚」を得るために、あらゆる集会に熱心に出席した。このような人々は家にいて自分の手で働いて、家族の必要を満たすために「良い物」を得て、現代の真理を伝える尊い働きを支えるささげ物をすることができるようにしたほうがはるかに良い。今こそ、天に宝を蓄え、われわれの心を整えて、悩みの時のための準備をすべきである。手が清く、心のいさぎよい者だけが、その苦しい時に立つことができる。今こそ、神の律法がわれわれの思いと額にかくされ、心の中に書き記されなければならない時である。

主は、心が世の思い煩いに満たされることの危険をわたしに示された。わたしはある人

人が他の刺激的な本を読んで、現代の真理と聖書を愛する心から引き離されていくのを見た。また、他の人々は、飲食や衣服のことで心が悩みと苦勞に満たされていた。ある人は、主が来られるのははるか遠い先のことだと思っている。時は、彼らが期待したよりは数年長く続いた。そのために彼らは、時がさらに数年続くものと考える。このようにして、彼らの心は、現代の真理から引き離されて世に従っていく。わたしはこうしたことになかに大きな危険を見た。もしわれわれの心が他のことで満ちているならば、現代の真理は心からしめ出されて、額には生ける神の印を押す場所がない。イエスが至聖所におられる時は、ほとんど終了し、時は、あとわずかしが続き得ないことをわたしは見た。われわれの空いた時は、聖書の研究のために費やさなければならぬ。この聖書が、最後の日にわれわれを審くのである。

愛する兄弟姉妹がた、神の戒めとイエス・キリストのあかしを常に心に抱いていよう。そして、それに世の思いと煩いを閉め出していただこう。寝る時も起きる時もこれを瞑想しよう。人の子の来られることを常に考えて生活し、すべての行動をとろう。印する時は、非常に短くやがて過ぎ去ってしまう。四人の天使が四方の風を引き止めている今こそ、われわれの召しと選びとを確かなものにする時である。

心 靈 現 象

一八五〇年八月二十四日、わたしは心霊現象の「不思議なたたく音」がサタンの力であることを見た。あるものはサタンから直接に來たものであり、あるものは彼の手下たちによる間接的のものであったが、それはみな、サタンから出たものであった。それはサタンの働きであつて、彼がいろいろの異なつた方法で成し遂げたものであつた。しかし諸教会や世の中の多くの人々は、闇の中に閉ざされていたので、それを神の力であると思ひ、そう信じている。「民は、自分たちの神に求めるべきではないか。生ける者のために死んだ者に求めるであらうか」と天使は言った。生きている者が死んだ者に知識を求めるべきだろうか。死者は何事をも知らない。あなたがたは生ける神を求めて、死者のところへ行くのだろうか。彼らは、何事も知らない死者と語るために、生ける神から離れ去つた（イザヤ書八ノ一九、二〇参照）。

間もなく、この心霊現象に反対して語ることは、神を汚すこととみなされるようになる。

そして、それはますます広がり、サタンの力は増大し、彼に熱心に従うものの中には、奇跡を行う力を持ち、人々の前で天から火を降らせることさえするものがあることを、わたしは見た。この心霊現象と催眠術とによつて、これらの現代の魔術師たちは、われわれの主、イエス・キリストが行われた奇跡をすべて説明する。そして、多くの人々は、神の命子が地上で行われたすべての大いなる働きは、すべてこの同じ力によつて行われたものであると信じるようになることを、わたしに示された(注)。

(注)

この幻が与えられたときには、心霊術は起こったばかりで小さかった。霊媒の数も少なかった。心霊術は、この時以来、全世界に広がりその信者も数百万を数えるようになった。心霊術者たちは、一般に、聖書を否定し、キリスト教を嘲笑してきた。これまでに、こうした状態を嘆いてそれに抗議する者もときどきあったが、その数も少なくあまり注目をひかなかつた。ところが今では、心霊術者たちは、その方法を変更し、多くの者は自分たちを「キリスト者心霊術者」と呼んでいる。彼らは、宗教を無視するのではなくて、真のキリスト教の信仰を持っていると断言する。また、多くの著名な牧師たちが心霊術を支持していることを考えると、一八五〇年になされたこの予言が完全に成就される道が、今や開かれていることを知るのである。なお、補遺の著者の言葉「心霊現象」参照。

わたしは、昔のモーセの時代を示された。そして、神がパロの前でモーセに行わせられ

たしるしと不思議の大部分を、エジプトの魔術師たちがまねるのを見た。そして、神は聖徒たちの最後の救出の直前に、神の民のために力強く働かれる。そして、これらの現代の魔術師たちは、神の働きをまねることが許される。

その時が、間もなくやってくる。そして、われわれは、主の強い腕をしっかり握っていなければならない。なぜならば、悪魔のこうした大きなしるしは、みな、神の民をあざむいて、打ち負かすためだからである。われわれは神に頼り、悪人たちが恐れるものを恐れてはならない。すなわち、彼らの恐れるものを恐れず、彼らが尊ぶものを尊ばず、真理のために大胆で勇敢でなければならない。もしわれわれの目が開かれるならば、われわれのまわりに悪天使が群らがって、なんとかしてわれわれを苦しめて、滅びに陥れようとして新しい方法を考え出しているのを見ることであろう。また、われわれは、彼らの力からわれわれを保護している神の天使たちをも見ることであろう。神の目は、常に注意深く、イスラエルを幸福に保つために見守っている。そして、彼らが神に信頼するならば、神は、神の民を保護し救われるのである。主はせき止めた川を、そのいぶきで押し流すように、来られるからである。

「あなたは、魔法の力にとりつかれた国にいることを忘れてはならない」と天使が言った。



われわれは目を覚まし、神のすべての武具を身につけ、信仰の盾を手に取りなければならない。そうすれば、われわれは敵に立ち向かうことができ、悪しき者の放つ火の矢もわれわれを害することができないことを、わたしは見た。

### 使命者たち（付録参照）

主は、まだ現代の真理の光に浴していない離散した宝石のような人々の状態と必要のをし  
ばしばわたしに見せられた。そして、使命者たちはできるだけ早く彼らのところへ行つて  
彼らに光を伝えなければならないことを示された。われわれのまわりにいる人々の多くは、  
彼らの偏見が除かれ、われわれの現在の立場に対する証拠が言葉から示されさえするな  
らば、喜んで現代の真理を受け入れるのである。使命者たちは、言いひらきをしなければ  
ならない者のように、魂を見張っていないなければならない。彼らの生活は、尊いがしばしば  
侮辱を受けるキリストの働きの重荷を背負って、苦勞と心痛の多い生活でなければならな

い。彼らは、世的な利益や慰安を捨てて、現代の真理の働きの推進と滅亡にひんした魂の救いに全力を尽くすことを第一の目的としなければならない。

彼らは、また豊かな報賞を受ける。彼らの喜びの冠には、彼らに助けられ、ついに救われた人々が星のように永遠に輝く。彼らは、人々が現代の真理を深く愛して、それに清められ、豊かにされて、小羊の血によって洗われ、神のみもとに贖われるというはかり知れない特権にあずかるために、現代の真理を純粋に美しく伝えることができた満足を永遠にわたって味わうのである。

牧者たちが、自分たちでは聖書が支持していると考え重要な新しい点を主張するに先だって、彼らが信頼している人々、すなわち、すべての使命を信じて、現代の真理のすべての点に固く立っている人々に相談すべきであることを、わたしは見た。そうすれば、牧師たちは完全に一致し、牧師たちの一致が教会の人々に感じられるのである。このようにすれば不幸な分裂を避けることができる。また、尊い群れが分けられ、牧者がいなくて羊が散らされる危険もないことを、わたしは見た。

わたしは、また、神が神の働きに用いようとしておられる使命者があるのを見たが、彼らの準備はまだできていなかった。彼らはあまりに軽々しく軽率で、群れによい感化を及

ほすことができなかった。そして、彼らは、よい影響を及ぼすために神の使命者が自覚しなければならぬ働きの重要性と魂の価値とを感じていなかった。「**主の器をになう者よ、** **おのれを清く保て。**」と天使は言った。もし彼らが神に全く献身し、今、散らされた群れに与えられている最後のあわれみの使命の重要性と厳粛さを感じるのでなければ、彼らはよい成果をあげることとはできない。神の召しを受けていないある人々が、熱心に使命を伝えることを願っている。しかし、もし彼らが、働きの重要性とそのような地位の責任とを感じたならば、彼らは恐れおののいて、パウロのように、「いったい、このような任務に、だれが耐え得ようか」と言うだろう。彼らがなぜこのように出て行くことを望んでいるのかというと、それは神が彼らに働きの重荷を負わせておられないからである。第一天使と第二天使の使命を宣べ伝えた人々が、第三天使の使命を十分に信じた後においてさえも、そのすべての者が、それを伝えるべきではない。というのは、非常に多くの誤りと惑わしに陥った人々があって、そのような人々は、やっと自分の魂を救うことができるだけである。もし彼らが、他の人々を導こうとすればかえって彼らを滅びに陥れることになる。しかし、以前は狂信主義に深く陥っていたある人々が、神に召されて彼らの過去の誤りから清められる前に、今、最初に走ろうとするの

をわたしは見た。彼らは真理に誤りを混ぜているので、それをもって神の群れを養おうとする。もし彼らをそのままにしておけば、群れは病気になる、混乱と死を招く。わたしは彼らがすべての誤りから解放されるまで、ふるいにふるわれなければならないことを見た。さもないと、彼らは天国に入ることができない。使命者たちは、真理に立ち、大きな誤りに陥らなかった人々に対して持つことができた信頼を、誤りと狂信に陥った人々の判断と識別力に対しては、持つことができなかった。また、現代の真理を信じただばかりで、ほかの人々に道を示すどころか、自分たちが神の前に正しくあるために、多くのことを学び、行わなければならないような者を無理に勧めて、伝道地に送り出そうとする人々が多い。わたしは、使命者たちが特に、すべての狂信に気をつけていて、それがどこで起こっても阻止しなければならぬことを見た。サタンはあらゆる方面から迫ってくる。であるから、彼に気をつけ、その策略やわなに注意して、神のすべての武具をまもっていないと、悪しき者の放つ火の矢に打たれてしまう。神の言葉の中には尊い真理が多く含まれている。しかし、群れが今必要としているのは「現代の真理」である。わたしは、使命者たちが、現代の真理の重要点を離れて、群れを一致させ魂を清めるのになんの役にも立たない問題を長々と話す危険を見た。

しかし、二千三百日に関連した聖所問題、また神の律法とイエスの信仰などの問題は、過去の再臨運動を説明して、われわれの現在の立場を示し、疑う者の信仰を確立し、輝かしい将来に対する確信を与えるように十分に計画されたものである。わたしはしばしばこれらが、使命者たちが詳しく話すべき重要な問題であることを見た。

もし選ばれた主の使命者が、すべての障害物が取り除かれるまで待つならば、多くの者は散らされた羊を捜しに行くことはないだろう。サタンは彼らに義務を果たさせまいとして、多くの障害物をおくことだろう。しかし、彼らは、神の働きに彼らを召された神を信賴して、信仰をもって出ていかなければならない。そうすれば、神は彼らの幸福となり、神の栄光となるものであるかぎり、彼らの前に道を開いてくださる。大いなる教師であり模範であられるイエスは、まくらする所がなかった。彼の生涯は、苦勞と悲しみと苦難の一生であつた。そして、彼はわれわれのためにご自身をお与えになった。キリストに代わって、神の和解を受けるように人々に願うもの、また、キリストと共に栄光のうちに支配することを望む者は、この地上で彼の苦難にあずかることを予期しなければならない。「涙をもって種まく者は、喜びの聲をもって刈り取る。種を携え、涙を流して出て行く者は、束を携え、喜びの聲をあげて帰ってくるであろう」(詩篇一二六ノ五、六)。

獣の刻印

一八五〇年、六月二十七日に与えられた幻の中で、わたしと一緒にいる天使が、「時はほとんど過ぎ去った。あなたは、イエスのうるわしいかたちを十分に反映しているであろうか」と言った。それからわたしの注意は地上に向けられた。そして、第三天使の使命を最近信じた人々は、もつと準備を整えていなければならないことを見た。天使は、「準備しなさい、準備しなさい。あなたがたは、これまで以上にもつと世に対して死ななければならぬ」と言った。彼らのために大きな働きがなされるべきであつたが、それをする時がほとんどないのを、わたしは見た。

それから、わたしは、避難所を持っていない人びとの上に、最後の七つの災害がまもなくくだろつとするのを見た。しかし世の人々は、それを水のしずくが降ってくるぐらいにしか考えなかつた。それからわたしは、最後の七つの災害すなわち神の怒りの恐ろしい光景を見るのに耐える力が与えられた。わたしは神の怒りが非常に恐るべきものであるのを

見た。そして、神が怒ってみ手をのばすか、またはあげるかなさるならば、世界の住民はあとかたもなくなってしまう。あるいは、彼らは不治のでき物に悩まされ、恐ろしい災害に苦しむ、そして彼らは救われることができずに災害に滅ぼされるのである。わたしは恐怖に襲われた。その光景があまりにも恐ろしかったので、わたしは天使の前に顔を伏せてその光景を取り除き、わたしに見せないようにしてほしいと天使に願った。その時ほど、わたしは、聖書が獣とその像とを拝し額や手に刻印を受ける神を信じないすべての者の上にくだると宣言している災害を逃れるために、神のみ言葉を忠実に探ることの重要性を感じたことはなかった。このように恐るべき警告と非難が人々に向けられているにもかかわらず、彼らが神の律法を破り聖安息日をふみにじることができるとは、大きな驚きであった。

法王が、休息の日を七日目から第一日に変更した。彼は人間に創造主を思い起こさせるために与えられた戒めそのものを変更しようと思った。彼は十誡の中の最大の戒めを変更することによって、自分を神と等しくし、自分を神よりも高めようとさえした。主は不変であられるから、主の律法も不変である。しかし、法王は、聖と義と善である神の不変の律法を変えて、自分を神以上に高めた。彼は神の聖日を足の下にふみにじり、自分の権威

によって、六日の労働の日の一日をその代わりにした。国民全体が獣に従い、毎週、神の聖なる時を神から奪っている。法王は神の聖なる律法を破った。しかし、神の民がこの破れを繕い、荒れすたれた所を興す時がついに来たことをわたしは見た。

わたしは、神がさまよい出た神の民をあわれんで、彼らを救ってくださるように、天使に嘆願した。もし災害がくだり始めらば、聖安息日を破り続けている人々は、今、彼らがそれを守ることを避けるために挙げている理由を、申し立てることはないだろう。災害がくだり、大いなる立法者が、彼の聖なる律法を嘲笑し、それを「人間への呪い」、「人間を惨めにするもの」、「頼りにならぬもの」などと呼んでいた人々の審判を行われるときに、彼らは何も言うことができないだろう。彼らがこの律法の鉄のような力をその身に感じるときに、こうした言葉は彼らの前に生きた文字となって現われるだろう。そして、「聖であって、正しく、かつ善なるもの」と神の言葉が呼ぶ律法を彼らが嘲笑した罪を自覚するのである。

それから、わたしは天の栄光と忠実な者のために蓄えてある宝とを示された。すべてのものは美しく栄光に輝いていた。天使たちは美しい歌をうたうのであったが、歌をやめては、冠を脱ぎ、愛するイエスの足もとに輝く冠を投げ出して、美しい声で、「栄光がある



ように、ハレルヤ！」と叫ぶのであった。わたしは小羊に対する賛美とほまれの歌を彼らと一緒に歌った。そして、彼を賛美するため口を開くたびに、わたしは自分を取り巻く言うに言われぬ栄光を感じた。それは、永遠の重い栄光をあふるばかりに得させるものであった。「神を愛し、神の戒めを守って、最後まで忠実に仕える少数の残りの民は、この栄光にあずかり、常にイエスの前にいて、聖天使たちと共に歌うのである」と天使が言った。

それからわたしの目は栄光を離れて、地上の残りの民に向けられた。天使は彼らに言った。「あなたがたは、最後の七つの災害を避けたいと思うだろうか。あなたがたは神を愛し神のために喜んで苦難を忍ぶ者のために、神が備えられたすべてのものを、天国に行って受けたいと思うだろうか。もしそうならば、あなたがたは生きるために死ななければならぬ。準備しなさい。準備しなさい。準備しなさい。あなたがたは、今までよりもっと準備しなければならぬ。いきどおりと激しい怒りが容赦なくあらわされる主の日がやって来て、地上を荒廃させ、地上から罪人を滅ぼし去るのである。すべてを犠牲として神にささげなさい。自分も、財産も、すべてを生きた供え物として、神の祭壇の上にのせなさい。天国に入るためには、すべてのものが必要である。あなたがたは、自分のために盗人が近

づかず、さびもつかない天に宝を蓄えなさい。あなたがたは、将来、キリストと共に彼の栄光にあずかると思うならば、この地上でキリストの苦難にあずかる者でなければならぬ。」

もし苦難によつて、天国が得られるとするならば、それはまことに安価なものである。われわれは常に自己を否定し、日毎に自己に死に、イエスだけをあらわすようにし、絶えず彼の栄光を心に留めていなければならない。わたしは、近ごろ真理を信じた人々が、キリストのために苦しむとはなんであるか知らねばならないのを見た。また、彼らが激烈な試練を経なければならぬことを見た。それは、彼らが生ける神の印を受け、悩みの時を通過して、麗しく飾った王を見、神ときよい聖天使の前に住むようになるために、苦難によつて清められ、ふさわしいものにされるためである。

天上の栄光を受け継ぐためにわれわれはどうなるべきか、また、このように尊い嗣業をわれわれのために確保するために、イエスがどんな苦難に会われたかをわたしが悟ったとき、わたしはキリストの苦難のバプテスマを受け、試練にもひるむことなく、忍耐と喜びをもって、耐え忍ぶことができるようになることを祈り求めた。そしてわたしは、イエスが彼の貧困と苦難によつて、われわれを富んだ者にするために苦しまれたことを知った

のである。天使は「自己を否定しなさい。あなたがたは早く進まなければならない」と言った。ある者は真理に接し、一步一步進んでいき、進む度に次に進む力が与えられた。しかし、今や、時はほとんど過ぎ去り、これまで数年かかって学んだことは、数か月で学ばなければならぬ。また、彼らは前に学んだ多くのことを捨て去り、多くのことを学ばなければならぬ。布告が出される時に獣とその像の刻印を受けたくない者は、否、われわれは獣の制度を尊重しないと明言する決心を、今、しなければならぬ。

### 盲人の手引きをする盲人

わたしは、盲人の指導者たちが、将来何が起こるかを少しも自覚せずに、人々を自分たちと同じような盲目にしようとしているのを見た。彼らは、真理に逆らって自分たちを高める。そして、それが成功すると、これらの教師を神の人として仰ぎ、彼らに光を求めた多くの人々は、混乱に陥る。彼らは、これらの指導者たちに安息日について尋ねる。すると彼らは、第四条を除こうとしているのであるから、そうした答えを彼らにする。安

息日に反対して取られるいろいろの立場には、真に誠実なものはないことを、わたしは見た。その主な目的は、主の安息日を避けて、主が清め聖別された日とは別の日を守ることにある。もし彼らが、一つの立場から追われるとすれば、つい先程までは不合理であると非難していた全く反対の立場をさえ、取るのである。

神の民の信仰は、一致しつつある。聖書の安息日を守る人々は、聖書の真理について意見が一致している。しかし、再臨信徒の中の安息日に反対する人々には一致がなく、奇妙に分裂している。ひとりの人が、安息日に反対して立ち上がって、その理由をあれこれと述べて、結論を出して、問題はそれで理解したと思うのである。しかし、彼の努力は、問題の解決にはならない。安息日の運動は発展し、主の民は、なおも安息日を信じているので、また別の人が立ち上がって、それを破壊しようとする。しかし、安息日を守ることを逃れようとして、意見を述べるときに、真理に反対した最初の人の意見を全く打ちこわしてしまふのである。そして、われわれに対すると同様にその人の意見に対しても反対の説を述べるのである。第三、第四の人も同様である。しかし、そのどれも、「七日目はあなたの神、主の安息である」という神の言葉のように、しっかりしたものを持っていないのである。

わたしは、このような人々は、肉の思いを持っているために、神の聖なる律法に従わないのを見た。彼らは、自分たちの間でも一致していない。しかし、彼らは、その推論によって、聖書を曲解し、神の律法に裂け目をつくり、懸命になって第四条を変更または廃止し、あるいは、あらゆる方法によってそれを守らせないように努力する。彼らは、この問題について、群れを沈黙させようとする。だから彼らは、人々を静めようとして策動して、彼らに従ってくる人々の多くに、聖書をほとんど研究させないようにして、指導者たちが、誤りをやすやすと真理のように見せかけることができるようにする。そして、人々は、指導者よりも高いところを見ずに、それを真理として受け入れるのである。

### 終末のための準備

一八五〇年九月七日、ニューヨーク州オスウェゴにおいて、神の民が主の日の戦いに立つことができるようになる前に、彼らのために大いなる働きがなされなければならないことを主はわたしに示された。再臨信徒であると主張しながらも、現代の真理を拒否してい

る人々を、わたしは示された。そして、彼らは、くずれかけており、現在のこの集められる時において、主の手が彼らの中にあつて、彼らを分離し散らしているのを見た。それは、以前は欺かれていた、彼らの中の貴い宝のような人々が、目を開かれて、自分たちの真の状態を見ることができたためである。そして、今、真理が主の使命者によつて、彼らに伝えられると、彼らは快くそれに耳を傾け、その美のしさと調和を認め、彼らの以前の仲間や誤りを捨てて、貴い真理を受け入れ、はつきりとした態度をとるのである。

わたしは、主の安息日に反対する人々が、われわれの立場が誤っていることを聖書に基づいて示すことができないのを見た。であるから、彼らは、真理を信じて教える人々を中傷し、彼らの人格を攻撃する。以前は、良心的で、神と神の言葉を愛していた多くの人々が、真理の光を拒んだために心が非常にかたくなになって、聖安息日を愛する人々の悪口を言ったり、偽りの非難をしたりすることをも躊躇せず、真理を恐れなく主張する人々の感化をなんとかして傷つけようとするのである。しかし、こうしたことは神の働きを妨げない。実は、真理を憎む人々のこのような行動は、ある人々の目を開く手段そのものになる。すべての宝石が持ち出されて、集められる。主は、神の民の残りの民の回復に着手された。そして、彼は、彼の働きを立派に成し遂げられる。

真理を信じるわれわれは、われわれの善が、そしられる機会を与えないように十分注意しなければならぬ。われわれの一步一步の歩みは、聖書に従ったものでなければならぬ。なぜならば、神の戒めを憎む人々は、一八四三年に悪人たちが行なったと同様に、われわれの過ちや欠点を見て、喜ぶからである。

一八五一年五月十四日、わたしは、イエスの美とうるわしさとを見た。わたしが彼の栄光を見たときに、わたしが彼のみ前から離れることがあろうなどとは考えもしなかった。わたしは、父なる神を取りまいている栄光から照り出でる光を見た。そして、その光がわたしに近づいたとき、わたしの体は、木の葉のようにふるえ動いた。わたしは、その光がわたしの近くに来るならば、わたしは、それに打たれて消え去ってしまうだろうと思ったが、それは、わたしを通り過ぎて行った。その時、わたしは、われわれとかわりのある神の偉大さと恐ろしさを自覚することができた。また、わたしは、ある人々が神の神聖さについて、まことにかなかな考えしか持っていないことと、彼らが、大いなる恐るべき神であることをも考えずに神の神聖で尊ぶべき名をみだりに口に唱えていることを知った。多くの人々は、祈るときに、あわれみ深い主の霊を悲しませ、彼らの願いを天から閉め出すような不注意で不敬虔な表現を用いる。

わたしは、また、悩みの時に、聖所に大祭司があられないで神のみ前に生きるためにはどのような状態でなければならないかを悟っていない人が多くあるのを見た。生ける神の印を受け、悩みの時に保護される人々は、イエスのかたちを完全に反映していなければならない。

わたしは、多くの人々が、必要な準備をおろそかにしていながら、主の日に立ち得て神のみ前に生きるにふさわしいものとなるために、「慰めの時」と「春の雨」（後の雨）を待っているのを見た。ああ、わたしは、なんと多くの人々が、悩みの時に、避け所がないのを見たことだろう。彼らは必要な準備を怠った。だから、彼らは、聖なる神の前に生きるのに適したものと彼らをするためにすべての者が持たなければならない慰めを、受けることができなかった。預言者に切り刻まれることを拒み、すべての真理に従って、魂を清めることをしない者、そして、自分たちは、実際よりは、はるかによい状態にあると思い込んでいる人々は、災害がくだるときになって、自分たちが建物に合わせて切り刻まれ、四角にされなければならないことを悟るのである。しかし、その時には、そうする時間もなく、天の父の前で彼らの執り成しをしてくださる仲保者もあられない。この時に先だつて「不義なものはさらに不義を行い、汚れた者はさらに汚れたことを行い、義なる者はさ



らに義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うままにさせよ」という厳粛な宣言が発表されたのである。すべての罪、誇り、利己心、世を愛する心、すべての悪い言葉や行為に勝利するの でなければ、だれひとりとして、「慰め」にあずかることができないのを、わたしは見た。であるから、われわれは、ますます主に近づく、主の日の戦いに立ち得るために必要な準備をするように、熱心に求めなければならない。神は聖であられて、神の目前に住むことが出来る者は聖なる者だけであることを、すべての者が覚えているようにしよう。

### 祈りと信仰

わたしは、神の民が祈りを怠り、特に、密室の祈りを全くといっていいほどおろそかにしているのを、度々見た。また、多くの人々は、彼らの特権であり義務である信仰を働かせることをせず、信仰だけがもたらし得る感情を待っていることがよくある。感情は信仰ではない。この二つのものは全く別のものである。信仰は、われわれが働かせるものであ

るが、喜ばしい感情と祝福は、神がお与えになるものである。神の恵みは、生きた信仰という通路を経て、魂に達する。そして、われわれは、その信仰を働かせることができるのである。

真の信仰は、約束された祝福が、実現しそれを感じることが出来る前に、それをつかんで自分のものとする。われわれは信仰をもって、第二の幕の中に、われわれの願いをささげ、信仰によって、約束された祝福をつかみ、それを自分たちのものとして主張しなければならぬ。それから、われわれは、祝福を受けることを信じなければならない。なぜならば、信仰が祝福をつかんでいるのであって、言葉にあるとありに、それはわれわれのものだからである。「なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう」(マルコーノ二四)。ここに、われわれが祝福を受けたと感じる前に、受けることを信じる信仰、すなわち、真の信仰がある。約束された祝福が実現して、それが自分のものとなったときに、信仰はそれにつつまれてしまう。しかし、多くの人々は、聖霊を豊かに受けている時に、大きな信仰を持っていて、聖霊の力を感ずるのでなければ信仰を持つことができないと考えている。このような人々は、信仰と信仰によって与えられる祝福とを混同している。われわれが聖霊に欠けていることを感じ

る時こそ、信仰を働かせるべき時である。厚い黒雲が心を閉ざすように思われるそのときに、生きた信仰によって、暗黒をつらぬき、雲を散らさなければならぬ。眞の信仰は、神のみ言葉の中に含まれた約束に基づいていて、そのみ言葉に従う者だけが、その輝かしい約束を自分のものにする事ができる。「あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう」(ヨハネ一五ノ七)「そして、願い求めるものは、なんでもいだけるのである。それは、わたしたちが神の**戒め**を守り、みこころにかなうことを行っているからである」(ヨハネ第一・三ノ二二)。

われわれは、もっと密室で祈らなければならぬ。キリストはぶどうの木で、われわれは、その枝である。そして、われわれが、成長して豊かに実を結ぼうと思うならば、われわれは、生きたぶどうの木から絶えず水分と栄養分を吸収しなければならぬ。われわれはぶどうの木から離れてはなんの力もない。

イスラエルの中に信仰と力がなぜもつとないのだろうか、わたしは天使にたずねた。「あなたがたは、主の手をあまりに早く放し過ぎる。あなたの願いをみ座に訴え、強い信仰を持って訴えつづけなさい。約束は確実である。あなたがたが願い求めることは、受ける

と信じなさい。そうすれば、そのとおりになる」と天使が言った。それからわたしは、エリ書のことを示された。エリヤは、わたしたちと同じ人間であつたが、熱心に祈つた。彼の信仰は試練に耐えた。彼は、主のみ前で七回祈つた。そして、ついに、雲が現れた。われわれは確実な約束を疑い、われわれの不信仰のために、救い主のみこころを傷つけていたことを、わたしは悟つた。「武具を身につけなさい。その上に、信仰のたてを手に取りなさい。それが、悪しき者の放つ火の矢から、心臓、すなわち生命そのものを守るのである」と天使が言った。もし、敵が、失望した者の目をイエスからそらして自分たちをながめさせ、彼らに、イエスの尊さ、イエスの愛、イエスの功績、イエスの大きなあわれみなどを考えるかわりに、自分たちの無価値なことを考えさせることができるならば、彼は、彼らから信仰のたてを奪い去つて、自分の目的を達成することができる。人々は、敵の火のよきな攻撃にさらされる。であるから、弱い者は、イエスを仰いで、イエスを信じなければならぬ。その時、彼らは信仰を働かせるのである。

## 集められる時

九月二十三日、主は、神の民の残りの者を回復するために、再びみ手をのばされたこと、そして、その働きは、この集められる時に倍加されなければならないことを、わたしに示された（補遺参照）。イスラエルは散らされたときに、打たれ裂かれた。しかし、この集められる時に、神はご自分の民をいやし、つつまれるのである。真理を伝える働きは、彼らが散らされたときにはほとんど効果がなく、何もなしとげなかったといってもよい。しかし、神が神の民を集めるためにみ手を下されるこの集められる時に、真理を伝える働きはその計画されたとおりの結果をもたらすのである。すべての者は一致して熱心にその働きに当たらなければならない。集められる時にある現在のわれわれに対して、散らされた時のことを例にあげて、それと同様のことが行われなければならないと言うのは、間違いであることをわたしは見た。もし神が、あの時になさったことよりもっと多くのことをわれわれのためにしてくださらないならば、イスラエルは集められないことであろう。わた

しは、一八四三年の図表は、主の手によって導かれたもので、変更すべきものではないことを見た。数字は神のみこころの通りであった。また、神の手が数字の中のある間違いをおおい隠して、彼の手が除かれるまでは、だれもそれに気づかないようになっていたことがわかった。(注・これは一八四三年運動において用いられた図表を示すもので、特に、この図表に示された預言の期間の計算を指していた。神は、摂理のうちに、誤りがあるのを許しておられたことが、次の文章で説明されている。しかし、このことは、一八四三年の運動が終わり、その時の計算が目的を果たした後で、誤りが訂正されて、その次の図表が発行されるとを妨げるものではない。)

それから、「常供の幡祭」(デイリー・サクリファイス)(ダニエル書八ノ一二)の「幡祭」(サクリファイス)という言葉は、人間の知恵によつて附加されたもので、本文にはないものであることをわたしは見た。そして、主は、審判の時の叫びをあげた人々に、それについて正しい見解をお与えになった。一八四四年以前に、人々が一致していたときには、ほとんどすべての者が、「常供」について正しい見解を持っていた。しかし、一八四四年以来の混乱のなかで、ほかの意見をもつものが現れて、暗黒と混乱が起こった。一八四四年から後において、時は、テストでなくなつた。そして、時は、二度とテストとはならない

のである。

主は、第三天使の使命が、前進し、主の散らされた子供たちに宣言されなければならないが、しかしそれは、時に重点をおくものであつてはならないことを、わたしに示された。ある人々は、時についての説教から起きてくる誤った興奮を感じているのを、わたしは見た。しかし、第三天使の使命は、時の力以上に強力なものである。この使命は、それ自体の基盤の上に立つことができるもので、時によって強化される必要がないことを、また、きびしく、すみやかになしとげられることを、わたしは見た。

古い都エルサレムへ行くことが自分たちの義務であると考え、主が来られる前に、そこでなすべき働きがあると考えて、大いなる誤りに陥っている人々を、わたしは示された（付録参照）。このような考えは、第三天使の使命のもとにあつて主のためになすべき現在の働きから人々の心と興味をそらすように計画されたものである。まだエルサレムに行くべきであると思つている人々の心は、エルサレムのことを考えている。そして彼らの財産は、自分たちや他の人々をそこへ送るためのものになっており、現代の真理の働きのためにさげられてはいない。わたしは、このような任務は真の益をもたらさず、ごく少数のユダヤ人に、キリストの再臨どころか、その初臨のことを信じさせるためにも、長い期間が

かることを、わたしは見た。サタンはある人々を、この点について大いに欺き、彼らは、国内で彼らの回りにいるたくさんの人々を、神の戒めを守るように助け導くことができるのに、その人々を滅びるままにしているのを、わたしは見た。わたしは、また、昔のエルサレムは二度と建設されないことを見た。また、この集められる時に、サタンは、全力をあげて、神の民の心をこのような事へとそらし、主のみわざのために今しなければならぬ事に全力を尽くすのを妨げ、主の日に対する必要な準備を怠らせようとしているのを、わたしは見た。

愛する読者方。この小さい本を書くに当たって、わたしの心を支配していたのは、兄弟姉妹に対する義務の観念と、わたしの着物に魂の血がついていないようにという願いであった。わたしは、多くの人々が、幻について疑惑を抱いていること、また、キリストを待望していると言い、自分たちは「終わりの時」に生存していると教えている多くの人々も、幻をすべてサタンからきたものであると言っていることを知っている。わたしは、このような人々から多くの反対を受けることを覚悟している。幻は、ある人々の憎しみと嘲りを招くことであろう。だから、主がわたしに要求しておられると感じたのでなかったならば、



わたしは、自分の幻を、このようにして公にはしなかったことであろう。しかし、わたしは人間よりは神を恐れる。

主が、はじめに、神の民に伝えるべきメッセージをわたしにお与えになったときに、わたしは、それを彼らに言うことがむずかしかった。わたしはそれを何度となく耳ざわりよくした。そして、人々を悲しませないように、できるだけおだやかにした。主がお与えになったとありにメッセージを伝えることは、大きな試練であった。わたしは、幻の中で、イエスのみ前につれていかれるまでは、自分が不忠実であることを自覚せず、このような行為の罪と危険とを悟らなかった。イエスは、まゆをしかめて、わたしをごらんになった。そして、わたしから顔をそむけられた。そのときに、わたしが感じた恐怖と苦悶は、書きあらわすことができない。わたしは、彼の前で、顔を伏せて倒れたが、一言も物を言う力がなかった。ああ、わたしは、どんなにかおおいをかけられてその恐ろしいみ顔から隠されることを望んだことだろう。その時、わたしは、失われた人々が、「山よ、岩よ、さあ、われわれをおおって、み座にいますかたのみ顔と小羊の怒りとから、かくまってくれ」と叫ぶ時の気持ちが、幾分か理解できた。

間もなく、天使が、わたしに起きるように命じた。わたしが見た光景は、描写すること

ができない。一団の人々がわたしに見せられたが、彼らの髪の毛と着物は引き裂かれ、顔は絶望と恐怖そのものをあらわしていた。彼らはわたしのそばに来て、着物を手に取ってわたしの着物にすりつけた。わたしが自分の着物を見ると、それは血で汚れていた。そして、血が、着物に穴をあけていた。わたしは、もう一度、わたしと一緒にいた天使の足もとに死人のように倒れた。わたしはなんの弁解もできなかった。わたしの舌は何も言うことができなかった。そして、わたしは、このような聖なる場所から退きたいと願った。天使は再びわたしを立てせて、「あなたは、今こうなっているのではない。しかし、この光景が見せられたのは、あなたが、もし、主から示されたことを他の人々に伝えることを怠るならば、あなたがどのような状態になるかを知らせるためである。しかし、あなたが、もし最後まで忠実であるならば、命の木の実を食べ、命の水の川から飲むだろう。あなたは多くの苦しみに会うだろう。しかし、神の恵みは十分である」と言った。そのとき、わたしは、主がわたしに要求されることは、すべて喜んで行い、主のまゆをしかめた恐ろしいみ顔を見るのではなくて、主の是認にあずかるものになりたいと思った。

わたしは、しばしば、精神主義（注・すべてを霊的に解釈する考えをさす）に特有の見解を教えるという誤った非難を受けた。しかし、「デー・スター」（付録参照）の編集者が、

ああした欺瞞に陥る以前に、主は、彼とその他の人々が、精神主義的見解を教えることによって群れの中に起こす悲惨な状態を、わたしに示された。わたしはしばしばうるわしいイエスを見、イエスが個性を持っておられるのを見た。わたしは彼の父も個性を持っておられて、イエスご自身のようなかたちを持っておられるのかを、イエスに尋ねた。イエスは、「わたしは、わたしの父の本質の真の姿である」と言われた。

わたしは、精神主義的見解によって、天国のすべての栄光が奪い去られ、多くの人の心の中で、ダビデの王座とイエスのうるわしい姿とが、精神主義の火の中で焼き尽くされてしまったことをしばしば見てきた。欺かれて、このような誤りに陥った人々の中には、真理の光に導き入れられるものもいくらかはあるが、彼らが精神主義の欺瞞的力から完全に逃れることは、ほとんど不可能である。このような人々は彼らの誤りをすべて告白して、永久にそれを離れなければならない。

愛する読者方。わたしは、あなたがたの信仰と行為の基準として、神のみ言葉を推薦する。われわれは、その言葉によって裁かれる。神はその言葉の中で、「終わりの時に」幻を与える約束された。それは信仰の新しい基準としてではなくて、神の民の慰めと、聖書の真理を離れて誤りに陥る人々を正すためである。神は、ペテロを異邦人の伝道に遣わす

に当たって、このようなあしらいをなさったのである（使徒行伝一〇章）。

この小著を配布する人々に申し上げたいと思うことは、これは誠実な人々のためだけのものであって、神の霊のことを嘲る人々のためのものではないということである。

### ホワイト夫人の夢 （五八ページ参照）

わたしは、多くの人々が集まっている神殿を見ている夢を見た。終末のときに、その神殿に逃れた人々だけが救われるのであった。外に残っている者はみな、永遠に失われるのであった。外で、自分勝手な道を進んでいた群衆は、神殿の中に入る人々を嘲り、軽べつし、この安全計画は巧みな欺瞞であって、実際には避けなければならぬ危険などは何もないのだ、と彼らに言った。彼らは、幾人かの人々を捕えて、彼らが神殿内に急いで入ろうとするのを妨げることさえした。

わたしは、笑われ嘲られるのを恐れて、群衆が散らばってしまうまで待つか、または、彼らに気づかれずに中に入る事ができるまで待つのがよいと考えた。しかし、群衆は減

るどころか、増える一方なので、わたしはおそくなっではいけないと思い、急いで家を後にして群衆の中を進んで行った。わたしは、神殿に入ることばかり考えていて、わたしの回りの群衆のことには、少しも気づかなかった。建物の中に入ってみると、神殿は巨大な一つの柱に支えられていて、これに、全身傷つき、血が流れている小羊が縛りつけられているのを、わたしは見た。そこにいたすべての人々は、この小羊が、われわれのために裂かれ傷ついたことを知っているように思われた。神殿に入った人々はみな、その前に来て罪を告白しなければならなかった。

小羊のすぐ前のところに、高くなった席があつて、それに、非常に幸福そうな一団の人が座っていた。天の光が、彼らの顔を照らしているように思われた。そして、彼らは神を賛美し、天使の音楽かと思われるような喜ばしい感謝の歌をうたっていた。この人々は小羊の前で罪を告白し、許された人々であつた。そして、今、何かの喜ばしい出来事を楽しく待っているのであつた。

建物の中に入ったあとでも、わたしは恐れを感じ、このような人々の前で、面目を失うのは恥ずかしいことだと思つた。しかし、わたしは、前に押し出されているように感じ、小羊に直面するために柱のまわりをゆっくりと進んでいた。すると、ラッパが鳴って、神

殿は揺れ動き、大きな勝利の叫びが集まった聖徒たちからあがった。恐るべき光が建物を照らしたかと思うと、あたり一面はまっ暗になった。幸福な人々は、その輝きと共にみな消え去り、わたしひとり、夜の恐ろしい静寂の中に取り残された。

わたしは、苦しみもだえて目をさました。そして、それが夢であつたのだとは、どうしても考えられなかった。わたしの運命は決定し、主の霊はわたしから離れ、二度と帰ってこないように思われた。わたしは、深い絶望に陥った。

このあとしばらくして、わたしはもう一つの夢を見た。わたしは、絶望のあまり顔に手を当てて、次のように考えていたようである。もし、イエスが、地上にあられるならば、わたしは彼のところに行つて、彼の足もとに身を投げて、わたしのすべての苦しみをお話しするだろう。彼は、わたしから去って行かれないだろう。彼は、わたしをあわれまれるだろう。わたしは、いつも彼を愛し、彼に仕えるだろう。すると、ちょうどそのとき、戸が開いて、容姿の端正な人が入ってきた。彼は、わたしをあわれみ、「あなたは、イエスに会いたいのですか。彼はここにあられる。もし会いたいならば彼に会うことができます。持ち物をみな持つて、わたしについて来なさい」と言った。

わたしは、言い表しようのない喜びをもって、これを聞いた。そして、わたしのわずか

の持ち物、大切にしていた飾り物をみな集めて、案内者について行った。彼はわたしを、急で、一見もろそうな階段につれて行った。わたしが階段をのぼり始めると、彼はわたしが目まいを起こして倒れないように、いつも上を見ているようにと注意した。この急な階段をのぼっていた他の多くの人々は、上まで行かないうちに落ちてしまった。

われわれは、ついに、階段をのぼりつめて、戸の前に立った。ここで、案内者は、わたしが持ってきた物を全部、そこに残しておくように、わたしに命じた。わたしは喜んでそれらを置いた。そこで彼は、戸を開き、わたしにその中に入るように命じた。わたしは一瞬のうちに、イエスの前に立っていた。その美しい顔に間違いはなかった。このような慈愛と威厳に輝いた表情は、他のどんな人も持つことはできない。彼がわたしを見つめられたとき、わたしは彼が、わたしの生活のすべての環境とまた、わたしの心の思いも感じもみなよく知っており、それをすぐに知った。

わたしは、彼の、心の中を見通す視線に耐えられないと感じて、彼の目から逃れようとした。しかし、彼はほほえみながら近づいて来られ、彼の手をわたしの頭に置いて、「恐れてはならない」と言われた。彼のやさしい声の響きは、これまでに経験したことのない幸福な思いで、わたしの心を感動させた。わたしはあまりにうれしくて、何も言えなかった。

しかし、わたしは言い表せないほどの幸福に圧倒されて、彼の足もとにひれ伏した。わたしは、そこに力なく横たわっている間に、美しく栄光に輝く光景が、わたしの前を通り過ぎ、わたしは、天国の安らかさと平和に到達したように感じた。わたしは、ようやく力づいて立ち上がった。イエスは、なお、わたしに愛のまなざしを向けておられた。わたしの心は、彼のほほえみを見て、喜びに満たされた。彼の臨在は、わたしを聖なる畏敬と言い表せない愛で満たした。

わたしの案内者は、ここで戸を開き、われわれは共に外へ出た。彼はわたしが外に残しておいたものを、もう一度みな持つように命じた。わたしがそうすると、彼はわたしにしっかりと巻いた緑のひもを渡した。彼は、これをわたしの胸にあてておいて、わたしがイエスに会いたくなったら、それをわたしの胸から取り出して、できるだけのはすように命じた。彼は、それがもつれてのばしにくくなるといけないから、長い間巻いたままにしておかないように注意した。わたしは、そのひもをわたしの心臓の近くにおいて、喜んで狭い階段をおりて来た。そして、主を賛美し、会うすべての人に、どこに行けばイエスに会うことができるかを、喜びをもって知らせた。この夢は、わたしに希望を与えた。緑のひもは、わたしにとって、信仰を意味するものであった。そして、わたしの暗い心は、神に



信頼することが、どんなにうるわしく、単純なことであるかが、だんだんわかってきた。

ウィリアム・ミラーの夢（一一五ページ参照）

わたしは、神が見えない手で、長さ約十インチに六インチ四方の、入念に真珠がちりばめてある黒檀のきれいな宝石箱を、わたしにお送りになった夢を見た。その宝石箱には鍵がついていた。わたしはすぐに鍵をとって、小箱を開けてみたところ、驚いたことに、それには、あらゆる種類と大きさの宝石やダイヤモンド、そして、あらゆる大きさと価値の金貨や銀貨が、小箱の中で、それぞれの場所に美しく並べられてあった。そして、それはそのように並べられて、太陽だけが持っている光と栄光を反映していた。

わたしの心は、小箱の中の輝かしさと美しさとその価値とに、あふれるばかりの喜びを感じたけれども、この驚くべき光景を自分ひとりで楽しんでいてはならないと思った。そこで、わたしは、それをわたしの部屋の真ん中のテーブルの上に置いて、だれでも見たいと思う人はみな来て、この世の人がまだ見たことのない光り輝く光景を見るようにと言っ

た。

人々が入って来はじめ、最初は、その数が少なかったが、しだいに群衆になった。彼らがはじめ、箱の中を見たときに、彼らは驚いて喜びの叫び声をあげた。しかし、見物人の数が増加してきたときに、ひとりひとりが、宝石にさわって、それらを箱の中から出してテーブルの上に散らかし始めた。

わたしは、その持主が、箱と宝石とを返すように要求するだろうと考え始めた。そして彼らが、散らかすままにしておくならば、それらを、再び、元の場所に前のようにもどすことはできない。また、それは、莫大な金額になるから、とうてい自分でその責任を負うことはできないと感じた。そこで、わたしは、人々に宝石にさわらないよう、また、箱の中から取り出さないように頼んだ。しかし、わたしが頼めば頼むほど、彼らはますます散らかすのであった。そして、今では、部屋の中の床の上やどの家具の上にも散らばっているように見えた。

それから、本物の宝石や貨幣の中に、人々は無数のにせの宝石や貨幣をまき散らした。わたしは、彼らの卑劣な行為と忘恩とはげしく怒って、くり返し彼らを責めた。しかしわたしが彼らを責めれば責めるほど、彼らは、本物の中ににせの宝石や貨幣をまき散らし

た。

そこで、わたしの人間的心は、いらだってきて、腕力をふるって、彼らを部屋から押し出しはじめた。しかし、わたしがひとりを押し出している間に、ほかの三人が入ってきて泥やかんなくずや砂や、いろいろのごみを持ちこみ、とうとう本物の宝石やダイヤモンドや貨幣などを全部おおいかくして、見えなくしてしまった。また、彼らは、わたしの箱も粉々に破壊して、ごみの中に散らかしてしまった。わたしは、だれひとりとして、わたしの悲しみと怒りとをかえりみるものはいないと思った。わたしは、全く失望落胆して、座りこんで泣いた。

このようにして、わたしが、自分の大きな損失と責任のことを泣いて悲しんでいるときに、わたしは神を思い出して、神が助けを与えてくださるように、熱心に祈った。すると、直ちに戸が開いて、ひとりの人が部屋に入ってきた。そのころには、人々はみな外に出ていた。彼は、手にほうきを持っていたので、窓を開けて、部屋の中から泥やごみを掃き出し始めた。

わたしは、ごみの中に宝石が散らばっているから、やめるように彼に叫んだ。彼は、わたしに、「心配しなくてもよい。十分気をつけるから」と言った。

それから、彼が泥やごみを掃いていたときに、にせの宝石や貨幣はみな舞い上がって、雲のように、窓の外に出ていき、風が、それらを運び去った。この騒ぎの中で、わたしは一瞬目を閉じた。わたしが目を開けたときには、ごみはみななくなっていた。宝石、ダイヤモンド、金貨、銀貨などは、部屋中に散らばっていた。

そこで彼は、以前よりは、もっと大きくて美しい箱をテーブルの上において、宝石、ダイヤモンド、貨幣などを一握りずつ集めて、箱の中に入れ、あるダイヤモンドは、ピンの頭ほどの小さいものであったが、一つも残らず、集められて、箱に納められた。それから、彼は、「来てみなさい」とわたしを呼んだ。

わたしは、箱の中をながめたが、その光景に目くらむばかりであった。それは、前より十倍も輝いていた。わたしは、それらをまき散らして泥の中でふみにじった悪人たちの足によって、砂の中で磨かれたのだと思った。それらは、箱の中にきれいに並べられ、それらをもとにもどした人の苦労のあとはどこにも見られなかった。わたしは非常に喜んで叫んだ。そして、その声で目が覚めた。

補

遺



説  
明

愛するクリスチャンの友人がたへ。わたしは、一八五一年に、わたしの経験と幻を簡単に述べたものを出版したが、その小さい本の中のある点について、また、最近の幻について書くことが、わたしの義務であるように考えた。

1、九三ページに次のように記されている。「わたしは聖安息日が、今も、また将来も、神の真のイスラエルと未信者との間を分け隔てる壁であり、また、安息日は、神を待ち望む神の愛する聖徒たちの心を結合させる大きな論点であることを見た。わたしは、神が、安息日を理解してもいなければ守ってもいない子供たちを持っておられるのを見た。彼らはまだ安息日についての光を拒んではいなかった。悩みのときの開始にあたって、われわれが出て行ってもっと徹底的に安息日を宣べ伝えたとき、われわれは聖霊に満たされた。」

この幻は、一八四七年に与えられたが、そのころ、再臨信徒の兄弟たちで安息日を守っている人はほんのわずかで、安息日の遵守が、神の民と未信者とを区別するほどの重要な

ものであると考えたものは、ほとんどなかった。ところが、今、その幻の成就が見え始めた。「悩みの時の開始」とここに言われているのは、災害が降り始めるときのことではなくて、キリストがまだ聖所におられて、災害がくだり始める直前の短い期間をさしている。救いの働きが終了しつつあるその時、地上には悩みが起こり、諸国民は怒り狂うが、第三天使の働きを妨げないように、まだ抑制されている。その時に、「後の雨」、すなわち、主のみ前から慰めの時がきて、第三天使の大きな声に力をそえる。そして、最後の七つの災害がくだるときに、聖徒たちが立つことができるように準備を与える。

2、一〇五——一ページに記されている「開かれた門と閉ざされた門」の幻は、一八四九年に与えられた。黙示録三ノ七、八を天の聖所とキリストの働きに適用することは、わたしにとって全く新しいことであつた。わたしは、そのような考えを他の人が語っているのを聞いたことがなかった。ところが、聖所の問題がはっきりと解かってくるにつれてこの適用が、力強く美しいものに思われた。

3、一五四ページの主が、「神の民の残りの者を回復するために、再びみ手をのばされた」という幻は、キリストを待望していた人々の間に以前あつたところの一致と力、そして、神は再び神の民を一致させて立たせ始めてくださつただけを指している。



4、心霊現象（付録参照）。一〇七ページに次のように記されている。「わたしはニューヨークやその他の場所における不思議なたく音は、サタンの力であって、このようなことは、宗教の仮面をかぶってますます広がり、欺かれた人々には大きな安心感を与えるものであって、できることならば、神の民の心もこうしたことに引きつけて、聖霊の教えと力とを疑わせようとするのを見た。」この幻は、約五年前の一八四九年に与えられた。そのとき、この心霊現象は、ほとんどロチェスター市に限られていて、「ロチェスター・ノッキング」と呼ばれていた。そのときから、この異端は、だれもが予想していなかったほど広がった。

一三一、一三二ページの「心霊現象」と題する一八五〇年八月に与えられた幻の大部分は、その後成就し、また現在も成就しつつある。次は、その一部である。「間もなく、この心霊現象に反対して語ることは、神を汚すこととみなされるようになる。そして、それは、ますます広がり、サタンの力は増大し、彼に熱心に従うものの中には、奇跡を行う力を持ち、人の前で天から火を降らせることさえするものがあることを、わたしは見た。この心霊現象と催眠術とによって、これらの現代の魔術者たちは、われわれの主、イエス・キリストが行われた奇跡をすべて説明する。そして多くの人々は、神のみ子が地上で行われた大い

なる働きは、すべてこの同じ力によって行われたものであると信じるようになることを、わたしは示された。」

わたしは、心靈現象の欺瞞が、どんなに発展しつつあるか、また、それが、できれば選民をも惑わそうとするのを見た。サタンは、今イエスにあって眠っているわれわれの親族や友人だと言って、われわれの前に姿を現わす力を持つであろう。これらの友人たちはあたかも現に存在しているかのように思わせられる。彼らが地上にいたときに語った、われわれの聞きなれた言葉が語られ、彼らが生きていた時と同じ調子の声が聞こえるのである。こうしたことはみな、聖徒たちを欺いて、この惑わしに陥れようとするものである。

わたしは、聖徒たちが、現代の真理を徹底的に理解しなければならないことを見た。彼らは、それを、聖書によって支持しなければならない。彼らは、死の状態を理解しなければならぬ。悪霊たちは、愛する友人や親族だと言って彼らに現れて、安息日が変更されたことやその他の非聖書的教理をも唱える。悪霊たちは、人々の賛成を得るために全力をあげる。そして、彼らの言うことを確認づけるために、人々の前で奇跡を行うのである。神の民は、死者は何も知らない、また、彼らに現れるのは悪霊であるという聖書の真理によってこれらの霊に抵抗する準備がなければならない。われわれの心は、周囲の物事に注

意を奪われることなく、常に現代の真理のことを考え、われわれの望みについて、やさしく慎み深く説明する準備がなければならない。われわれは、この誤りと欺瞞の時代に立つことができるように、上からの知恵を求めなければならない。

われわれは、自分たちの希望の源泉をよく調べなければならない。というのは、われわれは、聖書に基づいて、その理由を述べなければならないからである。この欺瞞は広がる。そしてわれわれは、それと真正面から戦わなければならない。であるから、もし、その準備がないならば、われわれは、わなに陥り、打ち負かされてしまうのである。しかし、われわれが、目前に迫った戦いに備えて、自分たちのできる分を尽くすならば、神は神の分をして下さって、神の全能の力強い腕で、われわれを保護してくださるのである。神は、忠実な魂が、サタンの偽りの奇跡に欺かれて連れ去られるくらいならば、栄光のみ国からすべての天使を送って、彼らのまわりに障壁を設け、彼らをお助けになるのである。

わたしは、この惑わしが、速やかに広がっていくのを見た。電光のような速度で走っている列車が、わたしに示された。天使は、わたしに注意して見るように命じた。わたしは列車にじっと目を注いだ。それには、全世界の人が乗っていて、ひとりも残っていないようであった。「彼らは、束ねられて、燃えるばかりになっている」と天使が言った。それ

から、天使は、わたしに車掌を見せてくれたが、彼は威厳のある立派な人物のようで、乗客は、みな彼を尊敬していた。わたしは、当惑して、わたしと一緒にいる天使に、これだれであるかをたずねた。彼は次のように答えた。「これはサタンである。サタンは、光の天使の姿をした車掌である。彼は、世界を捕虜にした。人々は、強力な欺瞞に惑わされて偽りを信じ、さばきをうけるに至った。彼の次に位する者は、機関士で、その他に必要なに応じて、いろいろの役目をする手下たちが用いられていて、彼らは、みな、電光の速度で、滅びにむかっているのである。」

わたしは、天使に、だれも残っていないのかをたずねた。彼は、わたしに、反対の方向を見るように命じた。すると、わたしは、小さい群れが、狭い道を旅しているのを見た。すべての者は、真理によって束ねられ、一団となって固く結ばれているように思われた。天使は、「第三天使が、彼らを天の倉に入れるために束ねて印しているのである」と言った。この小さい群れは、あたかも激しい試練と争闘を経てきたかのように、疲れ果てていた。すると、太陽が雲のかげから昇ってきたかのように、彼らの顔を照らした。そして、彼らは、すでに勝利を得たもののように勝ち誇って見えた。

わたしは、主が、世界の人々に、わなを発見する機会をお与えになったのを見た。ほか

に証拠が何もなくても、キリスト者にはこの一事だけで、証拠は十分である。つまり、ここには、尊いものと卑しいもののとの区別がないのである。トマス・ペインの体は今、土に帰っている。そして、彼は、千年期の終わりの第二の甦りの時に生きかえらせられて、報いを受け、第二の死にあずからなければならないのであるが、サタンは、そのトマス・ペインが天にあつで、大いに高められていると言うのである。サタンは、この地上において、トマス・ペインをできるだけ長く活用し、今では、彼が天において大いに高められているように見せかけて、同じ働きを続けている。サタンは、彼が地上で教えたように、天においても教えているように思わせるのである。ある人々は、彼の生涯と死、また、彼の存命中の墮落した教えに嫌悪感を抱いたのであるが、今では、この最も下劣で腐敗し、神と神の律法を軽べつした人の教えに従っているのである。

(注)

読者は、このような言葉の真意を理解するためには、「C・ハモンド師」という霊媒が、「トマス・ペインの霊界における巡礼の旅」と題する書物を著したことを知らなければならぬ。この著書のなかで、トマス・ペインは「第七の天」にあげられた霊魂であると言われている。そして、「ニューヨークの研究会」においては、キリストご自身が、霊媒と

語り、自分は、「第六の天」にしていると言われたという事である。彼らは靈界において、靈魂は向上すると言っているのであるが、キリストは、千八百年以上も向上しながら第六の天におられ、トマス・ペインは、約百年にもかかわらず、第七の天に達したなどと言っていることを考えると、その不つりあいがわかるであろう。このことについて、ヘアー博士が、彼の亡くなった姉妹の靈魂の向上は、彼女がキリストの贖罪を信じたためにおくれたと言っていることによっても説明することができ。こうして、心靈術は、無神論者と無神論を高めているのである（付録も参照）。

偽りの父、サタンは、彼の天使たちを送って、使徒たちに代わって語らせ、彼らが地上にいたときに聖靈の指示に従って書いたこととは矛盾したようなことを言わせて、世界の人々の目をくらまし、欺くのである。こうした偽りを言う天使たちは、使徒たちに彼ら自身の教えの質を下げさせる。そして、そのような教えは、偽物であると言わせる。このようにして、サタンは、自称クリスチャンたちと全世界に、神の言葉に対する疑いを抱かせて喜ぶのである。聖書は直接サタンの道をさえぎり、彼の計画を妨害する。だから、彼は、彼らにそれが神から出たものかどうかを疑わせる。そこで、彼は、トマス・ペインのような無神論者を立てて、彼が死んだ時に天に迎えいれられて、今は、彼が地上で憎んでいた

聖なる使徒たちと共にいて、世界教化の働きをしているように思わせるのである。

サタンは、彼の天使たち各自に、果たすべき役割を与える。彼は、彼らすべての者に、悪賢く、巧妙、狡猾であるように命じる。ある者には、使徒たちの役をやらせて、彼らに代わって語らせ、他の者には、神をのろって死んだが、今では、非常に信心深くなった無神論者や悪人の役をやらせる。最も聖なる使徒たちと最も墮落した無神論者との間に何の区別もない。彼らは、両方ともに同じことを教えさせられる。サタンは、彼の目的が達成されさえすれば、だれに語らせてもかまわないのである。サタンは、この地上で、ペインと密接に連絡を保ち、彼の活動を援助していた。だから、ペインが使った言葉そのものや、自分に忠実に仕えて、自分の目的を大いに達成した者の筆跡そのものを知ることとは、サタンにとってやさしいことである。サタンは、ペインに指示を与えて、多くのものを書かせた。だから、今、彼の天使たちに意見を述べさせて、生きている時には悪魔の熱心なしもべであつたトマス・ペインがそれを言っているように思わせることは、サタンにとってやさしいことである。これは、サタンの傑作である。死んだ使徒たち、聖徒たち、または悪人たちから来ると主張されているこの教えは、みな直接、サタンから来るものである。

サタンから非常に好まれた者で、神を徹底的に憎んだという者が、今、天国において、聖

なる使徒たちや天使たちと共にいる、というサタンの主張は、それだけで、すべての人の心からおおいを取り除き、陰険で不可解なサタンの活動を暴露するのに十分である。彼は、世界と無神論者とはおかつて、あなたがたは、どんなに悪くても、また、神、あるいは聖書を、信じて信じなくても、好き勝手な生活をすればよい、天国はあなたがたの故郷である、と言っているようなものである。なぜならば、すべての人々は、トマス・ペインが天国にいて、そのように高められているならば、自分たちは間違いなく天国に行けると思うからである。この誤りは、非常に明白なので、知ろうとすればだれにでも理解できることである。サタンは、人間の墮落以来彼がしてきたことを、トマス・ペインのような人々を用いて、今行っているのである。彼は、彼の力と偽りの奇跡によって、クリスチャンの希望の基礎を破壊し、天国への狭い道を照らす太陽を除こうとしている。彼は、世界の人に、聖書は靈感によって与えられたものではなく、単なる物語に過ぎないと信じさせようとしている。他方、彼は、その代わりになるもの、すなわち、「心靈現象」を人々に提供しているのである。

これは、全くサタンにささげられ、彼に統御されている通路であって、サタンは自分の思うままのことを世界に信じさせることができる。サタンは、彼と彼に従う者たちに審判



をくだす聖書を、彼が望んでいるとおりの暗い影の中に押しやってしまう。彼は、世界の救い主を単なる普通の人間にしてしまう。そして、イエスの墓を守っていたローマの番兵が、大祭司や長老たちに言わせられた偽りを広めたように、このような偽りの心霊現象を信じる哀れな欺かれた信者たちは、それを繰り返して、われわれの救い主の誕生、死、復活にはなんの奇跡的なこともないと人々に思わせようと努めている。彼らは、イエスを背後におしやったあとで、世の人々の注意を自分たちと、自分たちの奇跡と不思議とにむけて、それらが、キリストのみ業よりもはるかにすぐれていると主張するのである。こうして、世界は、わなに陥り、最後の七つの災いが注がれるまで、彼らの安心感を抱いてしまつて、恐ろしい欺瞞に気づかないのである。サタンは、彼の計画が成功し、全世界がわなに陥るのを見て、喜ぶのである。

5、一二五ページにおいて、わたしは、栄光に輝く雲が、父なる神をおおっていたので、父なる神のお姿を見ることができなかつたと書いた。また、わたしは、父なる神がみ座から立たれるのを見た、とも書いた。父なる神は、光と栄光のうちに包まれておられ、そのお姿を見ることはできなかった。しかし、わたしは、それが、父なる神であることと、彼のお体から、この光と栄光とが出ていることを知った。わたしが、この光と栄光のかたま

りが、み座から立ち上がられるのを見たときに、わたしは、それは父なる神が動かれたためである。とわかったので、わたしは、父なる神が立たれるのを見たと言ったのである。わたしは、父なる神の栄光あるいは、その麗わしさを見ることはできなかった。それを見て生きていることができるものはいないのである。しかし、父なる神のお姿を包んでいた光と栄光のかたまりは、見ることもできた。

また、わたしは、「サタンが、御座のそばで、神の働きを行なおうとするかのように見えた」と書いた。また、「わたしは、御座の前でまだ頭をたれている人々を見ようと思つてふりかえつた」というもう一つの文章を、同じページから引用する。さて、この祈つている一団の人々とは、地上における死ぬべき状態にある人々であつたけれども、御座の前で頭をたれている人々として、わたしに示された。わたしは、この人々が、実際に新エルサレムにはいつていると考えたことはなかった。また、サタンが実際に新エルサレムにいるとわたしが信じたと思う人は、だれもないと思う。しかし、ヨハネは、天に、大きな赤い龍がいるのを見なかつただろうか。確かに見たのである。「また、もう一つのしるしが天に現れた。見よ、大きな、赤い龍がいた。それに七つの頭と十の角とがあつた」(黙示録一二ノ三)。天には、こんな怪物がいるのだろうか。ある人々がわたしの言葉を解釈

したのと同じように、ここにも嘲笑の可能性は十分あるように思われる。

6 一一五——二〇ページに、一八五〇年一月に与えられた幻が記されている。この幻の中で、使命者に対して、資金が与えられずにいたという部分は、特にその当時のことを言ったものである。その後、現代の真理を支持する人々が起こった。彼らは、自分たちの財産を善用する機会を持っていたのである。ある人々は、多く与えすぎて、それを受けた者に害を及ぼした。わたしは、約二年の間、主の資金の欠乏のことではなく、その不注意な使い過ぎのことを多く示された。

次は、一八五三年六月二日、ミシガン州ジャクソンにおいて与えられた幻からのものである。これは、主として、その兄弟がたに関するものである。「わたしは、兄弟たちが、彼らの財産を犠牲にし始めるのを見た。そして困難な神の事業を助けるという真の目的からではなくて、惜しげもなく多額のものを、度々与えすぎるのを見た。わたしは、教師たちが立ち上がって、このような誤りを矯正し、教会内により感化を及ぼすべきであつたことを見た。金銭は、何の価値もないかのように、早く手離せば手離すほどよいように、人は考えた。ある者たちは、多額の寄附を受けいれて、財産を持っている人々に、それら之余りにも気前よく不注意に用いないように警告を与えることもせず、悪例を残した。

彼らは、神が、そのように多額のものを献げることが兄弟たちに求めておられるかどうかを考えもせず、多額の資金を受け取って多すぎる献げ物を承認していたのである。

また、献げた側の人々も、実際に必要かどうかという実状をよく調べないで、過ちを犯した。財産を持っていた人々は、非常に当惑した。ある兄弟は、多くの資金を手にして、非常な害をこうおつた。彼は経済のことを考えず、ぜいたくな暮らしをした。また旅行してはあちらこちらで、なんの益にもならぬことのために資産を使つた。彼はこのように主の資金をむだに費やして、悪影響を及ぼした。そして、彼は、自分の心の中で、また他人におかつて、『J——』には、主が来られるまでに、使いきれないほどの財産がある』というのであった。ある人々は、このようなことによつて非常な悪影響を受け、誤った考えを持つて真理を信じ、自分たちの用いているものが主の資金であることを悟らず、またその価値を感じなかった。第三天使の使命を信じたばかりで、このような例を見せられた哀れな人は、自分を制し、キリストのために苦しむためには、多くのことを学ばなければならぬ。彼らは、安楽な生活を捨てて、自分たちの便宜や慰安を求めることをやめ、魂の価値を心に留めなければならない。自分たちが、『わざわい』であるという感を持っている者は、安楽に旅行をするために大げさな準備をしたりはしない。ある人々は、神の召しを受

けていないのに、伝道地へ出かけるように奨励された。他の人々は、このようなことに影響されて、節約や自己犠牲、また、主の倉に貯えることの必要を感じなかった。彼らは、『他にも財産を十分に持った人がいる。彼らが、印刷物のためにささげるだろう。わたしは何もする必要がない。印刷物は、わたしが助けなくても維持される』と感じてそう言うのである。」

ある人々が、わたしの幻の中の、財産を犠牲にして神の働きを支えることについて書いた部分を取り上げて、それを悪用するのを見ることは、わたしにとって少なからぬ試練であつた。彼らは、他の部分に書いてある原則を実行することを怠つていながら、資金をぜいたくに費やすのである。――八ページには次のように記されている。「わたしは、神からの使命を持つていない人々の巡回によつて、神の働きが妨げられ、傷つけられたのを見た。そのような人々は、行かねばならぬ所でもない所へ出かけて行つて費やした金銭に対して、神に申し開きをしなければならぬ。その金銭は、神の働きに役立ったはずだからである。」また、――八ページには次のように記されている。「わたしは、手で働く力があつて働きを支えることができる人々は、財産をもった人々と同じように、その能力に対して申し開きをしなければならぬことを見た。」わたしは、ここで一二九ページに記されているこの問題に関する幻に、特に注意を引き

いと思う。次はその短い引用である。「救い主の言葉（ルカ一二ノ三三）」の目的が明瞭に説明されていない。「売る目的は、働いて自給することが出来る人々に施すためではなくて、真理を広めるためである。働くことができる人々に助けを与えて怠けさせることは罪である。ある人々は神に栄光を帰すためではなくて、『パンと魚』を得るために、あらゆる集会に熱心に出席した。このような人々は、家にいて、自分の手で働いて、家族の必要を満たすために『良い物』を得て、現代の真理を伝える尊い働きを支えるささげ物をする。ことが出来るようにしたほうが、はるかに良い」。ある人々をせきたてて、資金を浪費させ、兄弟たちには彼らの財産を無分別に処分させて、このように不注意にあわただしく投げ出されたあり余る資金のために、魂が傷つけられて失われるに至り、そして、今、真理が広範囲に伝えられなければならない時に当たって、資金の欠乏を来たらせることが、これまでのサタンの計画であつた。彼の計画は、ある程度まで成功してきたのである。

主は、雑誌やトラクトの出版を維持するのを、財産をもった人だけに頼る多くの人々の誤りを示された。**すべての者が**、各自の分をなすべきである。自分たちの手で働く力を持ち、事業を支える資金を得ることが出来る人々には、財産を持っている人々と同じように、責任が負わせられている。現代の真理を信じると称するすべての神の子供たちは、この事

業のために、熱心に自分の分を尽くさなければならぬ。

一八五三年七月、わたしは、神が所有し承認された雑誌が、このようにたまにしか出ない状態であつてはならないことを見た。われわれが生存しているこの時代において、この事業は、雑誌を毎週発行しなければならぬ。(注「レビュー・アンド・ヘラルド誌」はこれまで不規則に発行されていたが、この時には、月に二回発行されていた。)また、現代、増加しつつある誤りを明らかにするために、もっと多くのトラクトを発行しなければならない。しかし、働きは、資金の欠乏のために妨害されている。わたしは、真理が前進しなければならぬこと、また、われわれは、雑誌やトラクトがむだになることを恐れずに配布して、それらが必要としない人が三人あつても、それらを大切にして益を受ける人がひとりでもあれば、見のがさないようにしなければならないことを見た。サタンの働きはますます増加するのであるから、終末時代のしるしをはっきりと示すことが必要であることを、わたしは見た。サタンとその手下の出版物は増加し、その勢力は増大しているのであるから、人々に真理を伝えるわれわれの働きは、急速に行われなければならない。

わたしは、真理が、今ここで出版されるならば、これは、最後の時代の真理であるから、耐えぬいていくものであることを示された。これは存続する。そして、あとになってそれ

について言及する必要はあまりないであろう。おのずから明らかで、鮮明に輝いているものを正当化するために、数限りなく言葉を紙面に書く必要はない。真理は、公明正大、明瞭明白であって、それ自体を大胆に擁護する。しかし、誤りは、そうではない。誤りは、曲がりくねっているから、そのゆがんだ形に従って、それを説明するのに多くの言葉を必要とする。ある場所では、人々の受けた光は、みな、印刷物から得たものであることを、わたしは見た。人々は、このようにして、真理を信じ、それを他の人々に伝えたのである。今、数人の人々があちらこちらにいるが、彼らは、この無言の使命者によつて起こされたのである。これが彼らの唯一の説教者であつた。真理の働きは、資金の欠乏によつてその進展が妨害されてはならない。

### 福音の秩序

わたしは、福音の秩序ということを、人々があまりに恐れ、また、おろそかにしているのを主に示された。(注 再臨信徒は、あらゆる教会から来た人々であつた。そして、は



じめ、彼らは、別の教会をおこす考えはなかった。一八四四年の後で大混乱が起きた。それで、大多数の人々は、福音の完全な自由に矛盾するという理由で、どんな組織にも強く反対した。ホワイト夫人のあかしと活動は常に、狂信に反対を示したものであって、混乱を防ぐためにある種の組織は必要であるということが、彼女を通して与えられた教えの中で、早くから強調されていた。)形式主義は、避けなければならない。しかし、そのために秩序をおろそかにしてはならない。天には秩序がある。キリストが地上におられたとき、教会には秩序があった。そして、彼が地上を去られた後も、秩序が彼の使徒たちの間で、厳格に守られていた。そして、今、この最後の時代にあつて、神が、神の民を信仰の一致に導こうとしておられるときに、これまでよりも、もっと真の秩序がなければならない。なぜなら、神が、ご自分の子供たちを一致させられると、サタンと彼の天使たちは、この一致を妨げ、それを破壊しようとして忙しく活動するからである。その結果、知恵と判断力に欠け、自分たち自身の家をよく治めず、神が家庭において彼らにゆだねられた少数の者の秩序を保ったり治めたりすることができないような人々が、あわただしく伝道地に送り出される。しかも彼らは、自分たちは群れの責任を負うことができると考えてるのである。彼らは多くの間違った行動をとるので、われわれの信仰をよく知らない人々は、すべての使

命者たちが、このように自分を指導者であると自認している人たちのような者であると考ええる。こうして、神の働きはそしりを受け、このようなことがなければ、「こうしたことは、ほんとうにそうだろうか」と熱心に、また率直にたずねるはずの多くの未信者たちが、真理を避けるようになってしまう。

その生活が清くなく、現代の真理を教える資格のない者が、教会や一般信徒の承認を得ないで伝道地に入っていくと、混乱と不統一を引き起こす。ある人々は、真理を知っており、論理的に話すことはできるが、靈性、判断力、経験に欠けている。彼らは、真理を教えることができるようになる前に、どうしても理解すべき多くの事を知らない。また、他の人々は、論理的には話せないが、この人々が立派な祈りをしたり、熱心な勧めをしたりするのを数名の兄弟たちが時折、聞いたことにより、彼らは、伝道地に送りこまれて、神が彼らに資格を与えておられず、また、それに対して十分な経験や判断力もない仕事に、携わらせられてしまう。彼らは、靈的誇りを持って高慢になり、自分たちは働き人だという惑わしに陥って行動する。彼らは、自分自身を知らない。彼らは、健全な判断力と忍耐強い理性に欠けていて、自分たちのことを自慢して語り、聖書によって証明できない多くのことを独断的に主張する。神はこれを知っておられる。であるから、神は、この危険な

時代に彼らを働きに召されない。兄弟たちは、神が召されない人を伝道地に送りこまないように注意しなければならない。

神に召されていない人々は、たいてい、自分たちこそ召されていると最も強く確信し、自分たちの仕事こそ非常に重大であると考えているのである。彼らは伝道地に出て行って、たいていは良い感化を及ぼさない。しかし、ある場所では、ある程度の成功をおさめる。そして、これが、彼らと他の人々とに、彼らが確かに神に召されたものであるという感を抱かせる。人々がある程度の成功を収めたからと言って、それは、彼らが神に召されたという確証ではない。なぜならば、今、神の天使たちが、神の誠実な子供たちの心に働いて、現代の真理を理解させ、彼らがそれを把握して生きるようにと導いておられる。であるから、自分勝手に出て行った人が、神に遣わされないところへ行き、教師であると称し、彼らの話を聞いて人々が真理を受け入れたとしても、これは、神が彼らを召されたという証拠ではない。彼らから真理を聞いた人々は、後に彼らが、神のみこころに従っていないかったことを知ったときに、試練と苦難に陥るであろう。たとえ悪人が真理を語ったとしてもだれかは、それを受け入れるだろう。しかし、それだからと言って、語った人々が、神に恵まれるのではない。悪人は、相変わらず悪人である。彼らは、神が愛された人々を欺い

たことと、教会に混乱を引き起こしたことによって罰せられる。彼らの罪は、神の激しい怒りの日に、おおわれずに暴露されるのである。このような自称使命者たちは、み事業にとってのろいである。誠実な人々は、彼らが神のみこころに従って行動しているものと思つて、彼らを信頼する。だから、彼らに儀式を行わせる。そして、先ず第一になすべき義務が明らかにされるときに、彼らからバプテスマを受けることになる。しかし、当然のことながら、光が与えられて、彼らが自分たちの考えていたような神に召されて選ばれた使命者でないことがわかったときに、彼らは試みを受け、自分たちが信じた真理に疑いを抱き、もう一度、それを学びなおさなければならぬと感ずるのである。彼らは、自分たちの経験がすべて神に導かれたものであったかどうかについて、敵になやまされ、苦しめられる。そして、もう一度バプテスマを受けて、新しく出発するのでなければ満足しないのである。このような誤った影響を及ぼした人々のいた場所へ行くことは、新しい伝道地へ行くよりも、神の使命者の心を疲労させる。神のしもべたちは、率直にあからさまに行動し、悪をおおいかくしてはならない。なぜならば、彼らは、生きている者と死んだ者との間に立って、自分たちの忠実さ、自分たちの任務、また、主が彼らを監督者としてお立てになったその群れに及ぼした影響について、言いひらきをしなければならぬからである。

真理を信じてから、このような試みに会った人々は、この種の人々が、出ていかないで、主が彼らのために計画されたつましい地位にいたとしても同様に真理を信じたことであろう。神の目は、神の貴重な人々の上に注がれており、神は、神が召して選ばれた使命者たち、すなわち、賢明に働く人々を、彼らのところに導かれたことであろう。真理の光は、この人々に、彼らの真の状態をあらわしてみせたことであろう。彼らは、真理をよく理解して受けいれ、その美と明瞭さに満足したことであろう。そして、彼らは、その力強い影響を感じたときに、強められて、聖なる感化を及ぼしたことであろう。

神の召しを受けずに旅行する人々の危険がまたわたしに示された。彼らがある程度の成功をおさめても、資格に欠けていることが感じられるのである。無分別な行動や知恵が欠けているために、尊い魂が、二度と手のとどかないところへ追いやられてしまう。わたしは、教会がその責任を感じ、教師であると公言する人々の生活、資格、一般の行為などに注意深く気をつけていなければならないことを示された。もし、神が彼らを召されたこと、また、彼らがこの召しに答えなければ「わざわざいである」ということについての、誤りのない証拠があるのでなければ、教会は、この人々が教師として教会の承認を受けてはいないことを、知らせる義務がある。教会には、責任が負わせられているから、教会として、

この問題を解決する方法はこれ以外にはないのである。

わたしは、この戸を閉じて、敵が侵入して群れを荒らし苦しめることのないようにすることができるとを見た。わたしは、天使に、それを閉める方法をたずねた。「教会は、神の言葉に逃れていって、これまで無視されおろそかにされていた福音の秩序に、堅く立たなければならぬ」と天使は言った。これは教会が信仰において一致するためには、どうしても必要なことであつた。使徒時代において、教会は、偽りの教師たちによって、欺かれ惑わされる危険があつたことを、わたしは見た。そこで兄弟たちは、家をよく治め、自分たちの家族の秩序を保ち、暗黒の中にいる人々に光を輝かすことができることを証拠立てた人々を選んだ。これらのことに関する神のみことごと、教会と聖霊の意向とに従つて、彼らは按手を受けて聖別された。彼らは、神の任命と教会の承認とを受けて、父と子と聖霊との名によって出て行き、バプテスマを施し、神の家の儀式をつかさどつた。そして、神の愛する子供たちに、主の苦しみと死を思い起こさせるために、十字架につけられた救い主の裂かれた体と流された血を象徴したものを、聖徒たちに分け与えるのであつた。

われわれは、使徒時代と同じく、今も偽教師の危険にさらされている。であるから、わ

れわれは、群れの平和と調和と一致を保つために、少なくとも彼らがとつたと同様の特別手段をとるべきである。われわれには彼らの模範があるので、それに従わなければならない。経験に富み健全な判断力を持った兄弟たちが集まって、神の言葉と聖霊の承認とに従って、熱心な祈りと共に、神の任命を受けたことの十分な証拠を示した人々に手を置いて、彼らを全く神の働きに献げるために聖別しなければならない。この行為は、彼らが神の使命者として、人間に与えられた最も厳粛な使命を伝えるために出て行くことを、教会が承認したことを示すのである。

神は、いわゆる完全主義（付録参照）や精神主義と呼ばれる誤りに前に陥って、その心と判断力が弱くなつた人々に、神の尊い群れを養うことをお委ねにはならない。彼らは、こうした誤りに陥っていたときの行為によつて、自分自身をはずかしめ、神のみわざに非難を招いたのである。彼らは、今、誤りから離れて、この最後の使命を教えるために出て行くことができると感じるかも知れないが、神は、彼らをお受けいれにならない。神は、尊い魂を彼らにお委ねにはならない。なぜなら、彼らの判断力は、誤りに陥っていた間にゆがめられ、弱くなっているからである。偉大で聖なる神は、ねたむ神である。神は、聖い人々に神の真理を伝えさせられる。神が、シナイ山から語られた聖なる律法は、神ご自身

の一部である。そして、その律法を厳格に守る聖なる人々だけが、それを他の人々に伝えて神をあがめるのである。

真理を教える神のしもべたちは、判断力をもった人々でなければならない。彼らは、反対に会ってもそれに耐えて、興奮しない人々でなければならない。なぜなら、真理の反対者たちは、真理を教える人々を攻撃する。そして、持ち出し得るあらゆる反対は、真理に対して、最悪の形で投げかけられてくるからである。使命をになう神のしもべたちは、真理の光によって、冷静と柔和な態度で、こうした反対を除去する準備がなければならない。しばしば、反対者たちは、神の使者たちに、挑発的な口調で語り、同様な性質を彼らにも起こさせようとする。そして、彼らは、できるだけそれを利用して、戒めの教師たちはうわさどおりに苦い精神をもった無情な人々であると、他の人々に言うのである。わたしは、反対には、忍耐、判断、柔和をもって答える準備がなければならないことを見た。反対にはそれ相当の重要性があることを認めて、はっきりした断言によって、それらを棄て去ったり片づけたりして反対者をやりこめ、彼に対して苛酷な精神をあらわすのではなく、その反対の重要性を認めたと上で、真理の光と力とを示し、その方が優れていることを悟らせて、誤りを除去しようではないか。このようにして、よい印象が与えられる。そして、誠



実な反対者であれば、自分たちが欺かれていたことを悟り、戒めを守る人々はうわさされているような人々ではないことを知るのである。

生きた神のしもべたちであると公言する人々は、兄弟たちよりも高められることではなくて、喜んですべての者のしもべとならなければならない。また、親切で礼儀正しい精神を持っていなければならない。もし誤りに陥ったならば、そのすべてを告白しなければならない。意図するところが正しかったからと言って、告白しなくてもよいという理由にはならない。告白は、使命者に対する教会の信頼を失わせるものではない。彼は、よい模範を示すのである。告白の精神が教会のなかで奨励されて、麗しい一致がもたらされるであろう。教師であると公言する人々は、敬神、柔和、謙遜の模範であって、親切な精神を持ち、人々をイエスと聖書の真理に導かなければならない。キリストの教役者は、その言葉と行為が清くなければならない。彼は、自分が靈感の言葉、聖なる神の言葉を扱っていることを、常に覚えていなければならない。彼はまた、自分には群れが委ねられていて、イエスが父の前でわれわれのためにとりなされるように、自分は彼らのことをイエスに訴えて、とりなさなければならぬということ、覚えていなければならない。わたしは、昔のイスラエルの民のことを示された。そして、聖所の働きをする者が、どんなに清く聖で

なければならぬかを見た。なぜなら、彼らは、その働きによって、神と密接に交わるからである。奉仕する者は、聖で純潔で、きずのない者でなければならない。そうでないと神は、彼らを滅ぼしてしまわれる。神は、変わっておられない。神は、昔と同じように聖で、純潔で、厳格であられる。イエスに仕える者であると公言するものは、体験と深い敬神の念とを持っていなければならない。そうすれば、いつでも、聖なる影響を及ぼすことができる。

今、使命者は、道が開かれているところへはどこへでも出て行くべき時であって、神は、彼らの前に行かれ、ある人々の心を開いて聞くようにしてくださることを、わたしは見た。新しい所へはいつて行かなければならない。そして、できることならば、ふたりずつで出て行って、お互いに助け合うようにするのがよい。次のような計画が示された。ふたりの兄弟が一緒に仕事を始め、反対が多くて働きが最も必要とされている最も暗い所へ共に旅行し、力を合わせ、強い信仰をもって、暗黒の中にいる人々に真理を伝えることは良いことである。また、多くの場所の訪問と多くの働きを達成するために、別行動をとるのもよい。しかし、そのような旅行の途中でも、時に落ち合って、互いの信仰を励まし力づけ合うことができる。また、彼らは、自分たちのために開かれた所について相談し、彼らのどの

才能がいちばん必要とされているか、また、どのような方法によって、最も効果的に人の心を捕らえることができるかということを決断するとよい。そうすれば、別れるときに、彼らは、新たな勇氣と力に満たされて反対と暗黒に立ち向かうことができ、滅びつつある魂を救うために、思いやりのある心をもって働くことができるのである。

神のしもべたちは、同じ働きの場合を、何度も何度も行くべきではなくて、新しい場所で魂をさがしもとめていなければならない。すでに真理に堅く立っている人々は、彼らの働きを、このように多く要求すべきではない。なぜならば、彼らは、自立して、彼らの回りの人々を強めるべきであるからである。その間に、神の使命者たちは、暗く孤立した所を訪ねて、今、現代の真理の光に照らされていない人々に真理を伝えるのである。

## 教会の諸問題

(注 一八五三年八月一日のレビュー誌より)

愛する兄弟姉妹がた。誤りが、急速に広がっているので、われわれは、神のみわざにお

いて、目をさましているように努め、われわれの住んでいる時代のことをよく自覚しなければならぬ。暗きは地をおおい、やみはもろもろの民をおおう。そして、われわれの回りの者はほとんどみな、誤りと惑わしの暗黒におおわれているのであるから、われわれは、愚かな行いを捨てて、神の近くで生活し、イエスのみ顔からの光と栄光に浴することができなければならぬ。暗黒が濃くなり、誤りが増すにつれて、われわれは、真理についてもっと徹底的な知識を持ち、われわれの立場を聖書によって擁護する準備がなければならぬ。

われわれは、真理によつて清められ、神に全く献身しなければならない。そして、主が、ますます、われわれに光を与え、われわれが、主の光に照らされて光を見、主の力によつて力づけられることができるように、自分たちの信仰の告白を実践しなければならない。われわれが、目をさましていない時は、いつでも、敵に陥れられ、暗黒の力に征服される危険が大いにある。サタンは、彼の天使たちに、気を配ってできるだけ多くの者を打ち倒すように命じている。また、真理を信じると公言する者の強情さやからみつく罪を見つけて、彼らの回りに暗黒を投げかけ、彼らに目をさましていることをやめさせ、彼らが愛すると公言しているみわざを汚し、教会を悲しませるような行動をとらせようとしている。

このように誤った道にはいり、油断している者の心は、暗くなり、天の光は、彼らから消えていく。彼らは、自分たちからみつく罪を見つけない。そして、サタンは、彼らのまわりに網をはって、彼らをそのわなにかけるのである。

神は、われわれの力である。われわれは、神の知恵と導きを求めなければならない。そして、常に、神の栄光と教会の利益とわれわれ自身の魂の救いを念頭において、からみつく罪に勝利しなければならない。われわれは、個人的に、毎日、新しい勝利を得るようにしなければならない。われわれは、自分ひとりで立ち得て、神に全く信頼することを学ばなければならない。この事を早く学べば学ぶほどよいのである。各自は、自分が何に失敗したかを発見して、その罪に負けることなく、それに勝利するように、よく警戒していないければならない。そうするとき、われわれは、神に信頼していることができる。そして、教会は、大きな困難に会わないですむのである。

神の使命者たちが、家を離れて、魂の救いのために働くときに、彼らは、その時間の多くを、長年真理を信じていながら不用意に気をゆるめ、目を醒ましていないために、そして敵の誘惑を招いてしまうために、依然として弱い人々のために、費やしてしまう。彼らは、小さな試練や困難に陥る。そして、主のしもべたちの時間が彼らを訪問するために費

やされるのである。彼らは、数時間も、時には数日も引きとめられる。神のしもべがささいな事と思うことがないように、彼らは自分たちの受けた苦痛をできるだけ重大なことのように見せかけて、小さい困難や試練を誇張して話す。神のしもべたちの心は、それを聞いて悲しみと痛みを感じる。彼らはこのような試練から逃れるために、神のしもべたちの助けに頼るかわりに、神のみ前に心をくだいて、試練が除かれるまで断食と祈りをしなければならぬのである。

ある人々は、神が、使命者を伝道地に召されたのは、彼らが自分たちの命ずるままに動き、自分たちを抱きかかえるためであると思っている。また、使命者たちの最も重要な働きは、自分たちが無分別な行動や、敵に敗北して、回りの人々に対して頑固でとがめだてる精神をあらわしたために、みずから招いたささいな試練や困難を、解決することであると考えている。しかし、この時に、飢えた羊は、いったいどこにいろのだろうか。彼らは、命のパンに飢えている。真理を知って、それを信じていながらもそれに従わない人々が、使命者を引きとめているために、神が彼らを伝道地に召された真の目的が達成されないのである。もし彼らが従っていたならば、このような多くの試練に会わなくてすんだのである。神のしもべたちは、教会内のこうしたことのために、心を痛め、勇気を失ってしまう。すべて

の人々は、彼らの重荷を少しでも重くしないように努め、励ましの言葉と信仰の祈りによって、彼らを助けなければならない。もし真理を信じると公言する人々がみな、自分たちに対する助けをそんなに求めないで、まわりを見て、他を助けようと努めるならば、彼らは、どんなに自由になることであろう。ところが、神のしもべたちは、真理がまだ伝えられていない暗い所へ出かけるときに、彼らの兄弟たちが不必要な試練に苦しんでいるのを悲しみながら出て行く。こうしたことのほかに、彼らは、反対者の不信と偏見にあい、あつる人々からは、踏みつけられるのである。

もし神のしもべたちが、失望や試練に会わず、自由な気持ちで、真理の麗わしさを伝えることができるならば、人々の心に何と容易に感動を与えることができ、何と大きな栄光を神に帰することができるであろうか。神のしもべたちの働きを多く要求し、自分たちで解決すべき試練などによって彼らに重荷を負わせていた人々は、自分たち自身を満足させることによって敵を満足させていたところのすべての時間と資金とに対して、神に言い開きをしなければならない。彼らは、兄弟たちを助ける立場にあるべきである。彼らは、自分たちの試練や困難の解決を引き延ばして全会衆に重荷を負わせたり、使命者のだれかが解決のために来るまで待たたりしてはならない。彼ら自身が神のみ前に出て、自分たちの

すべての試練を取り除いていただき、働き人たちが来る時には、彼らを弱めるのではなくて、彼らの手を支える用意をしていなければならないのである。

### 教会の希望

(注 一八五二年六月一〇日のレビュー誌から)

最近、わたしは、柔和で謙遜なイエスに従うへりくだった人々をみつけようと回りを見渡して、考えさせられた。キリストが速やかに来られることを待望していると公言する多くの人々は、この世と妥協し、神に喜ばれることよりは、回りの人々の賞賛を得ようと熱心に求めている。彼らは、ほんの少し前に離れてきた名目的諸教会のように、冷たく形式的である。ラオデキヤ教会にあてられた言葉が、彼らの現状を完全に描写している(黙示録三ノ一四―二〇参照)。彼らは「熱くもなく、冷たくもなく、なまぬるい」。そして、もし彼らが、「忠実な、まことの証人」の言葉に聞き従い、熱心に悔い改めて、「火で精錬された金」、「白い衣」、「目薬」を買わないならば、彼は彼らを口から吐き出されるの



である。

主が直ちに来られることを、かつては喜び大声で叫んだ人々の大部分が、かつて主の再臨を信じた彼らを嘲り、あらゆる虚偽を言いふらして彼らに対する偏見を起こさせ、彼らの力を無にしようとした諸教会や世俗の人々と、同じ立場をとるといふ時が来た。今もし、だれかが、飢えかわくように義を求め、生きた神を慕い求めて、神の力に触れ、心が神の愛に満ち溢れて満足を味わい、神を賛美して、神に栄光を帰するとするならば、その人は、主が間もなく来られることを信じると公言する人々から、惑いに陥った人間のように邪推され、催眠術をかけられたとか、または、何か悪霊につかれたとか言われるのである。

キリスト者であると公言する多くの人々は、世俗の人々と同様に装い、語り、行動している。そしてその違いは、口先で言うことが異なっているだけである。彼らは、キリストを待望していると口では言うが、彼らの思いは、天になく、この地上のことにある。「神の日の到来を熱心に待ち望んでいるあなたがたは、極力、きよく信心深い行いをしていないければならない」(ペテロ第二・三ノ一、一二)。「彼についてこの望みをいだいている者は皆、彼がきよくあられるように、自らをきよくする」(ヨハネ第一・三ノ二)。しかし、再臨信徒と称する多くの者が、神の言葉を学んで神に喜ばれる者になろうとすること

よりは、自分たちの体を飾って、世俗の人々の目によく見せようと努めていることは明らかである。

われわれの模範であられる麗しいイエスが、初臨の時のように、彼らの間や、一般に宗教を信じると公言する人々の間に出現されたならば、どうであろうか。イエスは飼葉おけの中でお生まれになった。彼の生涯と伝道の生活をたどって見よう。彼は、悲しみの人で、病を知っておられた。これらの自称キリスト者たちは、質素な縫い目のない上衣をまとい、枕するところももたれなかった柔和で心のへりくだった救い主を、はずかしく思うであろう。彼のしみのない自己犠牲的生活は、彼らを責め、彼の聖なる厳肅さは、彼らの軽率さやむなしい笑いを抑制する苦しいものとなるだろう。また、彼のいつわりのない会話は、彼らの世俗的で食欲な会話を止めさせ、彼らの飾りのない鋭い真理の宣言は、彼らの本性を明らかにする。そして彼らは、柔和な模範であられるうるわしいイエスを、できるだけ早く除こうと望むのである。彼らは、まっ先に、彼の言葉を捕えて彼をおとしいれようとする。そして、「十字架につけよ、十字架につけよ」と叫ぶのである。

イエスが、謙遜な姿で、ろばに乗って、エルサレムにはいられた光景を眺めてみよう。「大ぜいの弟子たちはみな喜んで、……声高らかに神をさんびして言いはじめた。『主の御名

によつてきたる王に、祝福あれ。天には平和、いと高きところには栄光あれ』と。ところが、群衆の中にいたあるパリサイ人たちがイエスに言った、『先生、あなたの弟子たちをおしかり下さい』。答えて言われた、『あなたがたに言うが、もしこの人たちが黙れば、石が叫ぶであらう』。キリストを待望していると公言する人々の大部分は、臆面もなく弟子たちを黙らせようとしたパリサイ人のように、「それは狂信主義だ、催眠術だ、催眠術だ」と、疑いもなく叫ぶことだろう。そして、上衣やしゆるの枝を道にしいた弟子たちのことを、法外な浪費と行き過ぎた行為をしていると考えるのである。しかし、神は、そのような冷淡で死んだ人々ではなくて、神を賛美して神に栄光を帰する人々を地上に持つておられる。神は、だれかから栄光を受けるのであつて、もしも神の戒めを守る、神に選ばれた人々が黙るなら、石でさえ叫ぶのである。

イエスは、来られる。しかし、それは、初臨の時にベツレヘムの赤子として来られたような姿ではない。また、弟子たちが神を賛美して、大声で叫ぶ中を、ろばに乗つてエルサレムに入っていかれたように、来られるでもない。彼は、天の父の栄光のうちにすべの聖なる天使たちを従えて、この地上に来られるのである。全天には、天使がいなくなる。彼がオリブ山から昇天されたときに、ガリラヤの人々が天を仰いだように、彼を待ち

望む聖徒たちは天を仰ぐのである。その時、聖なる人々、すなわち、柔和な模範に完全に従った人々だけが、彼を仰ぎ見て、「見よ、これはわれわれの神である。わたしたちは彼を待ち望んだ。彼はわたしたちを救われる」と、熱狂的な喜びに満たされて叫ぶのである。そして、彼らは、「終りのラッパの響きと共に、またたく間に、一瞬にして変えられる」。そのラッパによって、眠っている聖徒たちは呼び醒まされ、土の床から輝かしい不死をまとって出て来て、「勝利した！死と墓とに勝利した！」と叫ぶのである。それから、栄化された聖徒たちは、天使たちと共に引き上げられて、空中で主に会い、彼らの愛する者から二度と別れることはないのである。

このような期待、このような輝かしい希望、このような贖いをキリストは、ご自分の血によって、われわれのために買い取られたことを考えるときに、われわれは、黙っていることができるだろうか。われわれは、イエスがエルサレムに入城されたときのでしたちのように、大声で神を賛美すべきではないだろうか。われわれの将来の期待は、でしたちのよりは、はるかに輝かしいものではないだろうか。われわれがこのような、不死と栄光に満ち満ちた希望をもっているのであるから、大声で神に栄光を帰しても、われわれを禁じるものはだれもいないであろう。われわれは、来世の力を味わい、それをもっと味わおう

と望むのである。わたしの全身全霊は、生きた神を叫び求め、神に満ちているもののすべ  
てをもって満たされるまでは満足しないのである。

### キリストの再臨の準備

（注　一八五三年二月一七日のレビュー誌から）

愛する兄弟姉妹がた。われわれは、キリストが間もなく来られることと、われわれは、  
罪の世界に伝えるべき最後のあわれみの使命を持っていることを、心から信じているだろ  
うか。われわれの模範は、正しいものであるうか。われわれは、自分たちの生活と聖い行  
状とによって、われわれの卑しいからだをご自身の栄光のからだと同じかたちに変えてく  
ださるわれわれの主、救い主イエス・キリストの輝かしい出現を待ち望んでいることを、  
周囲の人々に示しているだろうか。われわれは、これらのことを十分に信じ、理解しては  
いないのではないかと思う。われわれが宣言している重大な真理を信じる者は、その信仰  
を実行しなければならぬ。娯楽やこの世に心を向けさせる物の追求が多すぎる。心は、

衣服のことに奪われ過ぎ、舌は、軽率でつまらぬ話をしすぎて、われわれの公言が偽りであることを示している。それは、救い主が天から来られることを待望しながら、われわれの生活態度が天に向けられていないからである。

天使たちは、われわれを守り保護している。われわれは、たびたびつまらぬ会話をしたり、むだ話しや冗談を言ったり、また、不注意で愚かな状態に陥ったりして、天使たちを悲しませることがある。時には、勝利を得ようと努力して、勝利することもあるが、もしもわれわれがそれを持続させずに、同じような不注意で無関心な状態に陥って、誘惑に耐えられず、敵に抵抗することができないならば、われわれは、黄金よりも尊い信仰の試練に耐えることができない。われわれは、キリストのために苦しんでおらず、患難をも喜んでいないのである。

クリスチャンの勇氣と原則に従って神に仕えることが、大いに欠けている。われわれは、自分を喜ばせ満足させることを求めないで、神に栄誉と栄光を歸し、われわれのなすこと言うことがすべて、ただ神の栄光のためでなければならぬ。もしわれわれの心が、次の重要な言葉に深い感動をおぼえ、常にそれを心に留めているならば、われわれは、そうしたやすく誘惑に陥ることはなく、われわれの言葉は、少なく、よく選ばれたものとなるであ

ろう。「彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために碎かれたのだ。彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ」「人はその語る無益な言葉に対して、言い開きをしなければならぬであろう」「あなたは……わたしを見ていられる」。

われわれは、こうした重要な言葉を思い、あわれなわれわれ罪人が、ゆるされてイエスの尊い血によって神に贖われるために、イエスが苦しまれたことを思いおこすときに、われわれは、神に強く心を動かされて、われわれのためにこのように苦しみを耐え忍ばれたかたのために苦しむことを、熱心に願い求めずにはおられなくなる。もしわれわれが、このようなことを常に心に留めているならば、自己は、その誇りとともに低められて、その代わりに、他人の譴責にも耐えて、軽々しくいきどおらない、幼児のような単純さが与えられる。わがままな精神は、心を支配しなくなる。

真のキリスト者の喜びと慰めは、天になければならず、また、そうなのである。来世の力と、天の喜びを味わった人々の心の熱望は、地上のことでは満足しない。このような人々は、ひまな時にも、なすべきことを十分に見いだす。彼らの心は、神にむかつて引かれる。宝のあるところには、心もあるのであって、彼らは、自分たちが愛し礼拝する神

との、楽しい交わりをもつのである。彼らの楽しみは、彼らの宝、すなわち、聖なる都、新しい地、彼らの永遠の故郷などを瞑想することである。彼らが、このように高く、清く、聖なることを考えているときに、天は、彼らに近づく。そして、彼らは、聖霊の力を感じる。そして、これは、彼らをますます世から引き離して、彼らの故郷である天に関するところに、彼らの慰めと大きな喜びとを感じさせる。神と天とへ引きつける力は、ますます強くなり、魂の救いと神に栄誉と栄光を帰すという大目的から、彼らの心を引き離すことができるものは、何もなくするのである。

われわれを正しい状態にするために、われわれのためにどれだけのことがなされたかを、わたしが自覚するときに、わたしは、あゝ、神のみ子は、われわれ哀れな罪人のために何という愛、何と驚くべき愛をもたれたのだろうかと叫ばざるを得ない。われわれの救いのために、できる限りのことがなされているときに、われわれは、何も感じず、無関心であってよいだろうか。全天は、われわれに関心を持っている。われわれは目をさまし、高くあげられたおかたに、栄誉と栄光を帰して、あがめなければならぬ。われわれの心は、われわれにこのように豊かな愛とあわれみを示された神に対して、愛と感謝にあふれなければならぬ。われわれは、自分たちの生活によって、神をあがめ、われわれの清く聖な



る行状によつて、われわれが上から生まれたものであることを示し、この世は、われわれの故郷ではなくて、われわれは、ここではよりよい国にゐかつて旅をしている旅人であり寄留者であることを、示さなければならない。

キリストの名を唱え、彼が速やかに来られることを待望していると主張する人々の多くは、キリストのために苦しむことが何であるかを知らない。彼らの心は、恵みによつて和らげられず、自己に死んでいないことが、しばしば、いろいろな点であらわれる。それと同時に、彼らは、試練に会っていると云っている。しかし、彼らの試練の主な原因は、和らげられていない心であつて、それが利己心を敏感にし、しばしば傷つくのである。もしこのような人々が、キリストの謙遜な弟子、真のキリスト者になることが何であるかを自覚したならば、熱心に働き始め、正しい出発をすることだろう。彼らは、まず、自己に死んで、常に祈り、心のすべての欲情を制するであろう。兄弟がた、自信と自己満足を捨てて、柔和な模範のおかたに従つていただきたい。イエスを常に心に宿して、彼をあなたの模範とし、彼の足跡に従つていかなければならない。信仰の導き手であり、またその完成者であられるイエスを仰ぎ見つ、走ろうではないか。彼は、自分の前におかれている喜びのゆえに、恥をもちとわなないで十字架を忍ばれた。彼は、罪人らの反抗を耐え忍ばれた。

彼は、われわれの罪のために、傷つき、裂かれ、打たれ、苦しめられ、ひとたびほふられた柔和な小羊であつた。

そこで、われわれは、彼と共に彼の栄光にあずかり、栄光と栄誉と不死と永遠の生命を与えられるために、喜んでイエスのために苦しみを忍び、日ごとに自己を十字架につけ、この地上において、キリストの苦しみにあずかる者とならうではないか。

### 集会に忠実であること

主は、安息日を守る人々が、彼らの集会を維持し、それを興味深いものにするために、大きな関心を持たなければならないことを、わたしに示された。この方面にもっと関心と力を注ぐことが、大いに必要である。すべての者は、主のために、何かを語らなければならない。なぜならば、そうすることによって、彼らは恵まれるからである。集会をやめることはしないで、たびたび互いに語り会う人々について、覚えの書が書かれている。残りの

民は、小羊の血と彼らのあかしの言葉によつて勝利すべきである。ある人々は、小羊の血だけで勝利するものと思つて、自分たちで特別の努力をしていない。神は、恵みのうちにわれわれに言葉の力をお与えになったことを、わたしは見た。神は、われわれに舌をお与えになった。われわれは、その用い方について神に責任を問われるのである。われわれは、われわれの口をもつて神に栄光を帰し、真理と神の限りないあわれみをほめたたえ、小羊の血によるわれわれのあかしの言葉によつて勝利しなければならない。

われわれは、集会に来て黙つていてはならない。集会に来て神の誉れと栄光と力について語る人々だけが、主に覚えられる。このような人々の上に神の祝福がくだり、彼らは新しい力を受ける。すべての者が、そのなすべきことをしたならば、尊い時間は失われることもなく、長い祈りや勧めに対する譴責もいらなくなる。すべての時間が、短い要領を得たあかしと祈りに用いられることであろう。求め、信じ、そして受けるのである。主を侮ることが多すぎ、祈りではなくて、天使を疲れさせ、神を喜ばせないような祈りが多すぎ無駄で無意味な願いが多すぎる。まず第一に、われわれは、必要を感じて、それから必要なものものを神に求めて、われわれがそれを求めている時においてさえ、神は、それをわれわれにお与えになることを信じなければならぬ。そうするならば、われわれの

信仰は成長し、すべての者は、徳を高められて、弱い者は強くされ、失望落胆した者は、上を見上げるようになる。そして彼らは、熱心に求めるすべての者に神が報いてくださることを、信じるようになる。

何も新しいことがなく、もし言うとすれば、同じ話を繰り返さなければならないという理由で、集会の時に黙っている人々がある。こういったことは、誇りが原因であって、神と天使たちは、聖徒たちのあかしを目撃し、それが毎週繰り返されることでも彼らにとって、大きな喜びと栄光であることを、わたしは見た。主は、単純と謙遜を愛される。しかし、自分たちは神の相続人で、キリストと共同の相続人であると称している人々が、集会において尊い時間を浪費することは、神のみ心を痛め、天使たちを悲しませる。

もし兄弟姉妹たちが、彼らの到達すべきところに達していたならば、彼らの罪のためにカルバリーの十字架にかかれたイエスの誉れのために、言うことがなくて困ることはない。われわれの罪とがのための犠牲の死をとげるために、愛するひとり子をお与えになった神の大きなあわれみと、罪深い人間に救いの道を開いて、ゆるしと生命を与えるために、イエスが受けられた苦難と苦悩を、彼らがもっと自覚することができたならば、彼らは、もっと心からイエスを高め賛美することであろう。彼らは、黙っておられず、感謝

の心にあふれて、神の栄光と神の力について語るのである。そして、そうすることによって、神の祝福が彼らの上に宿るのである。たとえ同じ話が繰り返されたとしても、神に栄光が帰せられるのである。天使は、「聖なるかな、聖なるかな、全能者にして主なる神よ」と昼も夜も叫び続けている人々を、わたしに見せた。「これは繰り返しの連続であるが、神はそれによって栄光を受けられる」と天使は言った。われわれも同じ話を何度もするかも知れないが、それは、神に誉れを帰し、われわれが神の恵みとあわれみを忘れていないことを示しているのである。

わたしは、名目的教会が倒れて、その中には、冷淡さと死がゆきわたっているのを見た。もし彼らが神の言葉に従ったならば、み言葉は、彼らを謙遜にしたことであろう。しかし、彼らは主の働きを見下している。彼らは、集まるときに、神の恵みについての同じ単純な話を繰り返すことは、あまりにも恥ずかしいことであると考える。そして、彼らは、何か新しい大きなものを発見して、人々に喜ばれる耳ざわりのよい言葉を言おうと研究するので、神の霊は、彼らを去られる。われわれが、聖書の地味な道に従うならば、神の霊の感動を受けるのである。もしわれわれが、真理の控え目な通路に従い、全的に神によりたのむならば、すべては楽しい調和を保って、悪天使に影響される危険はないであろう。魂が、

神の霊の導きから離れて、自分自身の力で動くときに、天使たちは、彼らを守護することを止め、彼らは、サタンの攻撃を受けるままに、放置されるのである。

義務は、神のみ言葉の中に示されていて、それを行うことによって、神の民は謙遜になり、世から離れて、名目的諸教会のように背信することから守られるのである。洗足と主の晩餐にあずかることを、もっと度々行わなければならない。イエスは、われわれに模範を示して、彼がなさったように行うことをお命じになった。わたしは、できるだけ彼の模範のとおりに従うべきであることを見た。しかし、兄弟姉妹たちは、洗足を必ずしも正しく行って来たとは言えず、混乱を引き起こした。新しい所、特に、この点についての主の模範と教えについて十分に教えられていない人々の所や、これについて人々が偏見を抱いている所では、慎重に賢く紹介しなければならない。多くの正直な魂は、以前に彼らが信頼していた教師の影響によって、この明白な義務について大きな偏見を抱いている。であるから、この問題は、適当な時に適当な方法で紹介する必要がある。

聖書の中には、兄弟たちが姉妹たちの足を洗う例は挙げられていないが、姉妹たちが兄弟たちの足を洗う例は一つ挙げられている（付録参照）。マリヤは、イエスの足を涙で洗い、自分の髪の毛でそれをふいた（テモテ第一・五ノ一〇参照）。わたしは、主が姉妹た

ちの心を動かして、兄弟たちの足を洗わせたことを見た。そして、それが、福音の秩序に従ったものであることを見た。すべてのものは、分別をもって行動し、洗足を退屈な式にしてはならない。

使徒パウロが、イエス・キリストの福音のなかで述べているきよいあいさつは、いつも、その真の性質を考えなければならない。**それは、きよい接吻である**(付録参照)。それは、クリスチャンの友人たちが別れる時や、数週間または数か月後に再会するときの、交わりのしるしであるともみなさるべきである。テサロニケ第一・五ノ二六において、パウロは、「すべての兄弟たちに、きよい接吻(せつぷん)をもって、よろしく伝えてほしい」と言っている。パウロは、同じ章のなかで、「あらゆる種類の悪から遠ざかりなさい」と言っている。きよい接吻が適当な時と場所で行われるならば、悪く思われることはないのである。

敵の強い手が、神の働きに対抗しているので、真理の運動を愛するすべての者の助けと力が動員されなければならないことを、わたしは見た。彼らは真理を擁護する人々が絶えず見張っていて、敵を閉め出すことができるように、彼らの手を支えることに、大きな関心を示さなければならない。すべてのものが、一つとなり、一致して働きに当たらなければならない。魂の全勢力を呼びさまさなければならない。なぜならば、なすべきことは、速や

かにしなければならぬからである。

次に、わたしは、第三天使を見た。わたしと一緒にいた天使は言った。「彼の任務は、恐るべき任務である。彼は、麦を天の倉に入れるために、麦を毒麦からよりわけて印をおし、たばねる。われわれは、こうしたことには全身全霊をかたむけ、すべての注意を向けなければならぬ」。

### 未経験な人々へ

真理の重要性やその及ぼす影響についての自覚を持たず、一時の衝動や興奮によって行動し、しばしば感情に走って、教会の秩序を無視する人々があるのを、わたしは見た。このような人々は、宗教というのは、主として騒音をたてることにあると考えているようである（付録参照）。第三天使の使命を受けいれたばかりの人の中には、長年真理に固く立ち、真理のために苦しみ、その清めの力を感じた人々を、譴責し教えようとする者がある。このように、敵にそのかされて思い上がった人々は、真理のきよめの力を感じ、真理を見出すときに、自分たちが「みじめな者、あわれむべき者、貧しい者、目の見えない者、



裸な者」であつたことを自覚しなければならぬだろう。真理を愛して、それを受けいれるときに、真理は必ず不純物を取り除いて、心を清めるのである。この大きな働きが行われた者は、自分は富んでいる、豊かになった、なんの不自由もないとは言わなくなる。

真理の根本原則を学ぶ前に、真理を公言し、すべてを知ったと考え、大胆にも教師の地位を占めて、長年真理に固く立つた人々を譴責する者は、真理とその結果とを理解していないことを明白に示しているのである。なぜならば、もし彼らが清めの力をいくらでも知っていたならば、彼らは、おだやかな義の実を結んで、その麗わしい強力な影響のもとで謙遜になったことであろう。彼らは、神の栄光となる実を結び、真理が彼らのために何をしたかを理解して、自分たちよりも他の人々を尊重するようになる。

わたしは、残りの民が、この地上に起ころうとしていることのために、準備をしていないのを見た。最後の使命を持っているという信仰を公言する人々の大部分は、昏睡状態のような無感覚に陥っている。わたしと一緒にいた天使は、非常な厳肅さをもって叫んだ。「準備せよ、準備せよ、準備せよ。神の恐ろしい怒りが間もなく臨もうとしている。神の怒りは、あわれみを混じえないで、注がれようとしている。それなのに、あなたがたは準備ができていない。衣を裂かないで、心を裂きなさい。残りの民のために、大いなる働きが

なされなければならない。彼らの多くは、小さい試練に心を奪われている」。天使は、また言った。「悪天使の軍勢が、あなたがたの回りにいて、あなたがたをわなにかけて捕えるため、その恐ろしい暗黒を忍びこませようとしている。あなたがたは、準備の働きと、この最後の時代のために何よりも重要な真理から簡単に心をそらせてしまう。そして、あなたがたは、小さい試練に心を奪われている。そして、ちょっとした困難の細かな点まで、だれかれの満足を得るために説明しようとしている」。両者の心が恵みによって和らげられていない時には、関係者間の話し合いが何時間も続き、彼らの時間だけでなく、それを聞くために引き留められた神のしもべたちの時間も浪費されるのである。もし、誇りと利己心を取り除かれれば、たいていの問題は、五分間で解決する。自己を正当化するために多くの時間が用いられることを、天使たちは悲しみ、神は不快に思われる。神は、自分を正当化する長い言葉に耳を傾けず、また、彼のしもべたちがそうするのを望まないことを、わたしは見た。こうして、罪人に彼らの道の誤りを示し、火の中から魂を救い出すために用いられるべき尊い時間が浪費されるのである。

わたしは、神の民が、魔法をかけられた国にあり、ある者は、時の短いことや魂の価値について、全くといっていいほど自覚を失っているのを見た。安息日遵守者の中に、誇り、

すなわち、衣服や外觀の誇りが忍びこんできている。「安息日を守る人々は、自己に死に、誇りと人の賞賛を求める心に死ななければならぬ」と天使は言った。

われわれは、真理、すなわち救いの真理を、暗黒の中にいる飢えた人々に与えなければならぬ。わたしは、多くの人々が、神に、謙遜にしてくださいと祈っているのを見た。しかし、もし神が彼らの祈りに答えられるとするならば、恐るべきわざにより、義のうちに答えられるのである。へりくだることは、彼らの義務であつた。もし、自己称揚がはいつてくることを許すならば、魂は、必ず道に迷い、それに勝利するものでなければ、彼らは破滅に陥ることを、わたしは見た。人が、高ぶつた思いをもって、自分には何かできることがあると思うようになる、神の霊は取り去られる。そして、彼は、自分自身の力によつて進んで行つて、ついに倒れてしまうのである。わたしは、もしひとりの正しい聖徒があれば、神の腕を動かすことができることを見た。しかし、もし間違っているならば、どんなに数は多くても、彼らは弱々しく、何もしないとげることができない。

多くの人々の心は、和らげられてもいなければ、謙遜にもなっていないで、罪人の魂のことよりは、自分自身のささいな不平や試練のことを考えている。もしも彼らが、神の栄光のことを考えるならば、彼らのまわりの滅びつつある魂に同情することであろう。そし

て、彼らが、人々の危険な状態を悟ったならば、神に対する信仰を働かせて活発に動き、神のしもべたちの手を支えて、彼らが大胆に、しかも愛をもって真理をのべ伝え、魂に警告を発して、あわれみ深いみ声が聞こえなくなる前に、彼らが救いを得られるようにすることであろう。「神のみ名を公言する人々は、準備ができていない」と天使が言った。わたしは、最後の七つの災害が、おおいのない悪人たちの頭上にくだるのを見た。その時、彼らの救いの妨げとなっていた人々は、罪人たちの激しい非難の声を聞いて、悩み苦しむのである。

「あなたがたは、つまらぬあらさがしをし、ささいな試練に心を奪われてきた。そのために罪人は失われなければならない」と天使は言った。神は、われわれの集会において、われわれのために働こうとしておられる。そして、神は、働くことを喜ばれる。しかし、サタンは、「わたしは働きを妨げる」と言っている。彼の部下たちは、「アーメン」と言っている。信者であると言っている人々は、サタンが引き起こしたささいな試練や困難に心を奪われている。浪費した時間は、二度と取り戻すことができない。真理の敵は、われわれの弱さを見てきた。神は悲しみ、キリストは、心を痛められた。サタンの目的は達成され、彼の計画は成功してきた。そして彼は勝ち誇っているのである。

## 自制

わたしは、聖徒たちが集会のために、大げさな準備をする危険を見た。あるものは、食物があまりありすぎて、持てあましていた。そして、食欲を制することが必要であることを、わたしは見た。ある人々は、パンや魚のために集会に出席する危険がある。汚れた煙草を用いて、それにふけていた人々は、みな、それを捨てて、その金銭をもっと良い事のために用いるべきであることを、わたしは見た。自分を満足させるために用いていたものを捨て、かつては食欲を満たすために用いていた金銭を主の倉に入れる人々は、犠牲を払っているのである。神は、やもめのレプタ二つのように、このような捧げ物に目をとめられる。その額は小さいかも知れない。しかし、すべてのものがこのようにすれば、それは神の倉において大いに役立つのである。もしみな、実際に必要ではないものに消費せず、衣服の点についてもっと経済を実行するように研究し、茶やコーヒーのような有害無益なものを捨てて、その費用をみ事業のために献げるならば、現世においてもっと祝福を

受け、天国では報賞を受けるのである。多くの人々は、神が彼らに財産をお与えになったのであるから、自分たちは何不自由のない生活をして、食物を豊富に食べて、衣服も十分に着ることができると考えている。また、十分にあるのだから、自分を制しても無益だと考えている。このような人々は犠牲を払っていない。もし彼らが、もう少し質素な生活をして、真理を前進させるために神のみわざに献げるならば、それは、彼らにとって犠牲となるであろう。そして、神がおのの行為に従ってすべての者に報賞をお与えになるときに、それは、神におほえられるのである。

### 不敬な言葉

わたしは、神の聖なるみ名は、尊敬と畏敬の念をもって用いなければならないことを見た。全能と神という二つの言葉を一緒にして、それを祈りの中で、軽々しく、不注意に用いる人があるが、神は、それをお喜びにならない。このような人々は、神や真理について、ほんとうの事がわかっていない。さもなければ、彼らは、やがて最後の日に彼らをお裁き

になる大いなる恐るべき神について、このように不敬な言葉を用いないであらう。「神のみ名は、恐るべきものであるから、この言葉を一緒にしてはならない」と天使は言った。神の偉大さと威光とを自覚する者は、聖なる恐れをいだきつつ、その御名を口にするのである。神は、近づくことができない光の中に住んでおられる。彼を見たものは、だれでも生きていることはできない。わたしは、教会が繁栄するに先だって、こうしたことをよく理解して、それを正す必要があることを示された。

### 偽りの牧者

偽りの牧者たちは酔っているが、それは酒のためではなく、彼らはよろめいているが、それは強い酒のためではないことを、わたしは示された。神の真理は、彼らに対して閉ざされていて、彼らはそれを読むことができない。彼らは、第七日目安息日は何であるかとか、それが聖書の真の安息日であるかどうかという質問を受けるときに、人の心を作り話にむける。わたしは、このような預言者たちが、砂漠のきつねのようなものであることを

見た。彼らは、裂け目に立ち、石がきを築いて、神の民が、主の日の戦いに立ち得るようになかった。だれかが心を動かされて、真理のことについて、これらの偽りの牧者たちに質問し始めると、彼らは、自分たちの目的の達成のためと質問者たちの心を静めるために、最も容易で都合な方法を取り、自分たちの立場さえ変更するのである。光は、これらの多くの偽りの牧者たちの上に輝いたけれども、彼らはそれを認めようとせず、真理を避けるために、そして、前の立場をとり続けていたならば当面しなければならぬ結論を回避するために、何度も自分たちの立場を変えたのである。真理の力は、彼らのよりどころを打ち破った。しかし、彼らは、真理に従うかわりに、自分自身も満足でない別の基盤を立てようとしたのである。

わたしは、これらの牧者たちの多くが、神のこれまでの教えを拒否したのを見た。彼らは、以前は熱心に支持した輝かしい真理を拒否して、催眠術やその他のあらゆる欺瞞に陥った。わたしは、彼らが、誤りに酔い、彼らの群れを死に導いているのを見た。神に反対する者の多くは、その寢床の上で悪を計り、昼間彼らの悪い計画を実行して、真理を沈黙させ、何か新しいことに人々の心を向けさせて、最も重要で尊い真理から人々の心をそらすようにするのである。



わたしは、群れを死に導いていた祭司たちが、まもなく彼らの恐ろしい生涯にとどめをさされるのを見た。神からの災いが降ってくる。しかし偽りの牧者たちは、この災いの一つ、または二つに苦しめられるだけでは十分ではない。その時神のみ手は、怒りと正義をもって、厳然と伸べられ、神の目的が完全に果たされるまでは、おろされないのである。金のために働いていた祭司たちは、聖徒たちが真理に固く立ち、神の戒めを守ったがゆえに、神が彼らを愛されたことを悟り、彼らの足もとに伏して、礼拝するようになる。また、すべての不義な人々は、ついに地上から滅ぼし去られるのである。

再臨信徒であると公言している種々の団体は、それぞれ、真理を少しづつ持っているが、神は、これらの真理をすべて、神の日のための準備をしている神の民にお与えになった。また、神は、これらのどの団体も知らず、また理解しない真理をお与えになった。主は、この人々には封じられている事柄を見て理解する用意がある者たちに、開示なさった。もし神が、人々に伝えるべき新しい光をお持ちの場合には、神が選んで愛しておられる人々に、それを理解させてくださる。彼らは、暗黒と誤りの中にある人々のところへ行つて光を受ける必要はない。

わたしは、われわれは最後のあわれみの使命を持っていると信じている人々は、毎日新

しい誤りを吸収している人々から離れることが必要であることを見た。わたしは、若い者も年を取った者も、彼らの集会に出席すべきでないことを示された。それは、魂に致命的な毒である誤りを教え、教理を教えるかわりに人間の戒めを教える彼らを、このようにして奨励することは悪いことだからである。このような集会の影響はよくない。もし神が、このような暗黒と誤りから救い出してくださったならば、われわれは、神がお与えになった自由の中に固く立って、真理を喜んでいなければならない。神は、われわれが、行かなくてもよいのに誤りを聞きに行くのを、お喜びにならない。なぜなら、意志の力によって人々に誤りが強いられているこれらの集会に、神がわれわれをつかわされるのでないかぎり、神は、われわれを保護されないからである。天使たちは、われわれを守護することをやめる。そして、われわれは、敵に攻撃されるままに放置され、サタンと彼の悪天使たちの力によって、暗くされて弱められる。そしてわれわれの回りの光は、暗黒によって汚される。

われわれは、作り話を聞いておだに費やす時間はないことを、わたしは見た。われわれの心は、このようにして他にそらされることなく、現代の真理に満たされていないなければならない。そして、われわれの立場について、もっと深い知識を得るように知恵を求め、柔

和をもって、聖書からわれわれの希望の理由を説明することができるようにならなければならぬ。偽りの教理や危険な誤りが、人々の心に強いられるならば、人々は、主の日に立つ準備をイスラエルの家にさせる真理に、十分心を向けることができないのである。

### 人間への神の賜物

わたしは、人間にゆるしと生命を与えるために、み子を死にわたされた神の、大いなる愛と恵み深い態度を示された。わたしは、アダムとエバが、エデンの園の麗わしい光景をながめる特権が与えられ、一つを除いては、園の中の木の実をすべて食べることが許されていたことを示された。しかし、へびがエバを誘惑し、エバは、彼女の夫を誘惑して、彼らはふたりとも禁じられた木の実を食べた。彼らは、神の戒めを破って罪人になった。この知らせは、全天に伝えられて、すべての立琴の音は止まった。天使たちは悲しんだ。そして、アダムとエバが、ふたたび命の木に手をのばして、その実を食べ、永遠の罪人になるのではないかと恐れた。しかし、神は、罪人を園から追い出して、命の木の道をケルビ

ムと炎のつるぎで守り、人間が、それに近づいて、その実を食べていつまでも生きることができないようにすると言われた。

人間が失われて、神の創造された世界が、悲惨と病気と死に定められた人間で満ち、人には逃れの道がないことを知って、天は悲しみに満たされた。アダムの家族の者は、みな、死ななければならないのだ。それから、わたしは、気高いイエスを見た。そして、その顔に、同情と悲しみの表情があらわれたのを見た。間もなく、わたしは、彼が、天父を取りかこんでいる非常に明るい光に近づくのを見た。わたしと一緒にいた天使は、「彼は、天父と親しく話しておられる」と言った。イエスが天父と話しておられる間、天使たちは非常に憂慮しているように思われた。彼は、天父のまわりの栄光の中に、三度入られた。そして、彼が天父のところから三度目に出て来られたときに、われわれは、彼の姿を見ることができた。彼の顔は、おだやかで、当惑や困惑の様子は少しも見られず、表現することのできない麗しさに輝いていた。その時、彼は、失われた人類のために逃れの道が備えられたことを、天使の合唱団に発表された。彼は、父に願い求めておられたのであった。そして、彼は、人類の身代わりとしてご自身の生命をささげて、彼らの罪を負い、彼の血の功績によって、彼らは過去の罪が許され、服従することによって、彼らが追放された園

に、また帰れることになることを、発表されたのである。こうして、彼らは、今、すべての権利を失ってしまった命の木の輝かしい不死の実に、ふたたび近づくことができるのであった。

すると、天は、言い表わすことのできない喜びに満ちあふれた。天の合唱団は、賛美と崇敬の歌を歌った。彼らは、立琴をかきならして、これまで以上に高らかに歌った。それは、神が、その大いなるあわれみと恵み深さをもって、神の愛するみ子を、反逆した人類のために、死にわたされるからであつた。次に、天父のみふところを離れることに同意し、他の人々に生命を与えるために苦難の生活と屈辱的死とを選ばれたイエスの克己と犠牲に對して、賛美と崇敬があふれ出た。

「天父が、愛するみ子を与えるのに、なんの苦しみもなかったとあなたがたは考えるだろうか。いや、決してそうではなかった」と天使は言った。罪を犯した人間を滅びるままにするか、それとも彼らのために愛するみ子を死にわたすかということとは、天の父にとつてすら苦しい戦いであつた。天使たちは、人間の救いに対して、大きな関心を持っていたので、彼らの中には、その栄光を捨てて、滅びゆく人間のために自分たちの生命を与えようという者もあつたほどであつた。「しかし、それは役に立たない」と、わたしと一緒にい

た天使は言った。罪は、天使の生命によつては、支払い得ないほど大きなものであった。神のみ子の死と執り成しの外に、失われた人類を絶望的な悲しみと悲惨から救うことのできるものはないのであった。

しかし、天使たちに与えられた任務は、苦難の生涯を送られる神のみ子を慰めるために、天からの励ましの香油をもって、のほりおりすることであつた。彼らは、イエスに仕えたのである。また、彼らの働きは、恵みの対象である人間を悪天使から守り、サタンが常に彼らの回りに投げかける暗黒から彼らを保護することであつた。わたしは、神が、失われた滅びゆく人間を救うために、神の律法を変更することは、おできにならないことを見た。であるから、神は、人間の罪のために、神の愛するみ子を死にわたされたのである。



霊  
の  
賜  
物



## 序 文

預言の賜物は、ユダヤ時代の教会に現わされた。しかし、その時代の末期の数世紀間には、教会が墮落したために、現われなかったが、その末期において再び現われ、メシヤの来臨を告げた。バプテスマのヨハネの父、ザカリヤは、「聖霊に満たされ、預言して言った」。シオメンは、正しい信仰深い人で、イスラエルの慰められるのを待ち望んでいたが、御霊に感じて宮にはいった。そして、イエスについて、「異邦人を照らす啓示の光、み民イスラエルの栄光であります」と預言した。そして、女預言者アンナは、彼のことを「エルサレムの救を待ち望んでいるすべての人々に語りきかせた」。また、「世の罪を取り除く神の小羊」をイスラエルに紹介するために神に選ばれたバプテスマのヨハネより偉大な預言者はいなかった。

キリスト教時代は、霊の賜物が注がれて始まり、信者の間に、様々の霊の賜物があらわれたのである。このようなことが、非常に多かったので、使徒パウロは、コリントの教会

に、「各自が御霊の現われを賜わっているのは、全体の益になるためである」と言うことができたほどである。すなわち、これは教会の中のすべての人のことであって、多くの人々が解釈したように、世界のすべての人のことではない。

大背教が起こってからは、こうした賜物は、あまり現われなくなった。このために、一般キリスト者たちは、霊の賜物は初代教会に限られたものと思うようになったのであろう。しかし、賜物が与えられなかったのは、教会の誤りと不信のためではないだろうか。そして、神の民が神の戒めとイエスを信じる信仰とによって、初期の信仰と行為とに立ち帰るときに、「後の雨」は、再び、賜物を生じさせるのではないだろうか。昔、起こったことがまた起こることを期待することができる。ユダヤ時代は、その背信にもかかわらず、その初めと終わりとに特別の神の霊の現われがあった。以前の時代と比較するならば、その明るさは、弱い月の光に対して、太陽の光にたとえられているキリスト教時代が栄光のうちに始まって、人に知られず衰微してしまうとは考えられない。キリストの初臨に対して、人々に準備を与えるために、霊の働きが必要であった。であるから、特に最後の時代は、過去のあらゆる時代よりも危険で、偽預言者が大きなしるしと奇跡を行い、できれば、選民をも惑わそうとするのであるから、再臨のためには、霊の働きがさらに必要である。

「そして彼らに言われた、『全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。信じてバプテスマを受ける者は救われる。しかし、不信仰の者は罪に定められる。信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で聖霊を追い出し新しい言葉を語り、へびをつかむであろう。また、毒を飲んでも、決して害を受けない。病人に手をおけば、いやされる』」(マルコ一六ノ一五―一八)。

キャンベルは、「信者には、このような奇跡的力が伴う」と訳している。賜物は、使徒だけに限らず、信者たちにも及んだ。だれに与えられるのだろうか。それは、信じる者にある。どれだけの期間だろうか。そこには、制限がない。約束は、福音を伝えて、信じる最後の者のところまで行けという大任命と平行している。

しかし、この助けは、使徒たちと、彼らの説教によって信じた者たちだけに約束されたものであり、彼らはこの任命を果たし、福音を確立したのでその賜物はその世代で終わった、という反対がある。では、大任命は、その世代で終わったのであろうか。マタイ二八章一九節二〇節、「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたことさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にい

るのである」。

この任命のもとにおける福音の宣教は、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいるのである」という約束によって、初代教会で終わっていないことが明らかである。彼は、わたしは、あなたがた使徒たちと地の果てまで、どこでも共にいるとは言われず、世、すなわち時代の終わりまで、**いつも**、あなたがたと共にいると言われた。これは、ユダヤ時代であるとは言えない。その時代は、十字架で終わってしまった。であるから、原始的福音の宣教と信仰とは、常に同じ霊の助けが伴ったのである。使徒に対する任命はキリスト教時代に属し、その全体を包んでいるのである。結局、賜物は、背信によってのみ失われたものであつて、原始的信仰と行為の復活と共に、回復されるものである。

コリント第一の手紙十二章二十八節には、神が教会の中に、ある一定の霊の賜物をお与えになったことが記されている。神が賜物を除かれたとか廃されたとか言う聖書的証拠はないのであるから、われわれは、賜物が存続するものとして計画されたものであるという結論を下さなければならない。では、賜物が廃されたという証拠はどこにあるだろうか。**ユダヤ的安息日**が廃されて、**キリスト教的安息日**の制定が記されている同じ章、すなわち不法の秘密の力と不法の者のことが記されているところである。しかし、反対者は、賜物

が止むという聖書的証拠が次の聖句のなかにあると主張する。「愛はいつまでも絶えることがない。しかし、預言はすたれ、異言はやみ、知識はすたれるであろう。なぜなら、わたしたちの知るところは一部分であり、預言するところも一部分にすぎない。全きものが来る時には、部分的なものはすたれる。わたしたちが幼な子であった時には、幼な子らしく語り、幼な子らしく感じ、また、幼な子らしく考えていた。しかし、おとなになった今は、幼な子らしいことを捨ててしまった。わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔を合わせて、見るであろう。わたしの知るところは、今は一部分にすぎない。しかしその時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであろう。このように、いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛とこの三つである」(コリント第一・一三ノ八一―一三)。

この聖句は、霊の賜物と、そして、信仰と希望もまた止むことを預言している。しかしそれらは、**いつ止んだのである**うか。われわれは、なお、

「希望が、喜ばしい実を結び、

信仰が、現実となり、祈りが賛美となる」

その時を待望しているのである。

それは、全きものが来て、鏡に映して見るようにおぼろげではなく、顔と顔を合わせ  
て見るときに、止むのである。全き日が来、義人が完全になり、見られているように見る  
のは、まだ将来のことである。罪の人が、大人になり、「幼な子らしいこと」、すなわち、  
預言、異言、知識、また、原始的キリスト者たちの信仰と希望と愛とをも捨ててしまった  
ことは事実である。しかし、この聖句の中には、神が、教会の中に置かれた賜物を取り去  
ろうとされたことを示すものはなにもない。それは、教会の信仰と希望とがその頂点に達  
して、この地上のどんな輝かしい霊的力と知識の現われも不死の状態のすばらしい栄光に  
のみこまれてしまうまでは、取り去られない。

ある人々は、テモテ第二、三章十六節に基づいて、さも重大なことのようにならば、彼は、その瞬間  
において、なぜなお聖書につけ加えていたのだろうか。なぜ彼はこの文が終わったところ  
で、すぐに筆をおかなかったのだろうか。また、ヨハネは、それから三十年後に、黙示録  
を書いたのだろうか。黙示録には、また、霊の賜物は廃されたということを証明するため

に用いられるもう一つの聖句がある。「この書の預言の言葉を聞くすべての人々に対してわたしは警告する。しかしこれに書き加える者があれば、神はその人に、この書に書かれている災害を加えられる。また、もしこの預言の書の言葉をとり除く者があれば、神はその人の受くべき分を、この書に書かれているいのちの木と聖なる都から、とり除かれる」  
(黙示録二二ノ一八、一九)。

神は、むかしは預言者たちによりいろいろな時に、いろいろな方法で、先祖たちに語られた。また、福音時代の初めには、イエスと使徒たちによつて語り、その後は、このような方法では二度と語らないと厳粛に約束されたのである。この聖句に基づいて主張する人がある。したがって、その時以後の預言はすべて偽りであり、これで靈感による聖典は終わった、と主張するのである。もしそうだとすれば、なぜヨハネは、パトモスからエペソに帰ったあとで、彼の福音書を書いたのだろうか。彼は、福音書を書いて、パトモス島で書かれた書物の預言の言葉に加えたのであろうか。加えたり、取り除いたりしないようにという警告は、今日の聖書全巻のことではなくて、使徒が書いた黙示録のことを指していることは、聖句から明らかである。しかし、人間は、だれひとりとして、神の靈感によつて書かれた他のどの書にも加えたり、除いたりする権利をもっていない。ヨハネは、黙示

録を書いて、ダニエルの預言書に何かを加えたであろうか。いや、そういうことはなかった。預言者は神の言葉を変える権利を持たない。しかし、ヨハネの幻は、ダニエルの幻を確認し、そこで提示された主題に多くの追加的光を与えている。であるから、主は沈黙を余儀なくされるのではなく、なお自由にお語りになると考えられる。主よ、あなたが望まれる人を通して語って下さい。あなたのしもべは聞きますと、常に自分の心の中で言っていたいと思うのである。

こうして、霊の賜物は廃されたということを聖書から証明しようとする試みは、完全な失敗であった。そして、黄泉の力も教会に打ち勝たず、神は、この世になお民を持っておられるのであるから、われわれは、第三天使の使命に関連して、賜物が現われることを期待してよいのである。この使命は、教会を使徒時代の状態に引き戻し、世の、暗黒ではなくて、真の光とするものである。

また、われわれは、最後の時代には、偽預言者が起こるといふ警告を受けている。そして、聖書には、われわれがその真偽を見分けることができるように、彼らの教えをテストする方法が示されている。

預言者の預言とその道德的品性の両方に当てはまる大テストは、神の律法に照らしてみ



ることである。もし最後の時代に、真の預言がないとすれば、そのことを告げて、欺瞞が起る原因を絶ち切ることのほうが、ちょうど本物と偽物とがあるかのように、その見分けかたを示すよりも、どんなにやさしいことであろう。

イザヤ書八章十九、二十節は、現代の霊媒についての預言で、そのテストとして、律法があげられている。「ただ律法と証とを求むべし、彼らの言うところ**この言**にかなわすば、しのめあらじ」(文語訳)。もし、同時に、真の霊の現われ、または預言がなかったのであれば、なぜ、「彼らの言うところ、この言にかなわすば」と言うのであろうか。イエスは「にせ預言者を警戒せよ。……あなたがたは、その実によって彼らを見分けるであらう」と言われた(マタイ七ノ一五、一六)これは、山上の垂訓の一部であって、この説教は、福音時代を通じて、一般に教会にあてはまることは、明白である。偽預言者は、その実によって識別することができる。言いかえるならば、彼らの道徳的品性によってである。その実が善いか悪いかを決定する唯一の標準は、神の律法である。こうして、われわれは、律法と証の重要性を知るのである。真の預言者は、この言葉に従って語るだけでなく、それによって生活するのである。このように語り生活する人を、非難することはできない。

偽預言者の特徴は、常に、彼らが、平和の幻を見ることであつた。彼らが、「平和だ、

無事だ」と言っている時に、突如として滅びが彼らをおそってくる。眞実な者は、大胆に罪を譴責して、来たるべき怒りについて警告を発するのである。

聖書の明快で積極的な宣言に反する預言は、拒否しなければならない。救い主は、彼の再臨の模様について、弟子たちに警告を発せられたときに、そのようにお教えになった。イエスが弟子たちの見ている前で昇天されたとき、イエスは、天に上っていかれるのを彼らが見たのと同じ有様で、またおいでになると、天使たちははっきり言ったのである。であるから、イエスは、最後の時代の偽預言者たちの働きを予言して、「『見よ、彼は荒野にいる』と言っても、出て行くな。また『見よ、へやの中にいる』と言っても、信じるな」と言われた。この点についての眞の預言はすべて、彼が目に見える姿で天から来られるというものでなければならない。「その時には、すべての預言を拒否しなさい。なぜなら、その時、眞の預言者はいないからである」となぜ、イエスは、言われなかったのであろうか。「そして彼は、ある人を使徒とし、ある人を預言者とし、ある人を伝道者とし、ある人を牧師、教師として、お立てになった。それは、聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせ、わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さに

まで至るためである」(エペソ四ノ一一―一三)。

キリストは、天に上られたときに、人々に賜物をお与えになったことが、この聖句によってわかる。その賜物のなかに、使徒、預言者、伝道者、牧師、教師などが挙げられている。これらが与えられた目的は、聖徒たちをととのえて、一致と知識に至らせるためであった。今日、牧師であり教師であると言っている人々の中には、これらの賜物は、千八百年前にその目的を完全に達成したので、今はもう止んだのだと言う人がある。それではなぜ牧師や教師という称号も廃業しないのだろうか。もし、この聖句の預言者という務めが、原始教会だけに限られたものであるとすれば、伝道者やその他の務めもみなそうである。そこにはなんの区別もなされていないからである。

さて、この点について、少し考えてみたい。これらの賜物はみな、聖徒たちをととのえて、一致と彼を知る知識とに到達させるためであった。初代教会は、それらの影響のもとにあつて、しばらくの間、一致を保っていた。「信じた者の群れは、心を一つにし思いを一つにして」いた。そして、このような一致の当然の結果として、「使徒たちは主イエスの復活について、非常に力強くあかしをした。そして大きなめぐみが、彼ら一同に注がれた」(使徒行伝四ノ三一―三三)。今日、このような状態がなんと望ましいことであろう。しか

し、背教が起こって、分離と暗い影が美しい教会を傷つけ、教会は荒布をまとった。分裂と混乱が起きた。キリスト教会において、今日ほど、信仰が大きく分裂した時はなかった。原始教会において、一致を保つために賜物が必要であつたならば、今日、その一致の回復のために、賜物がどんなに必要なことであらうか。そして、神が、最後の時代に、教会の一致を回復しようとしておられることは、預言が明らかに示しているところである。見張びとは、目と目を相合わせて、主がシオンに帰られるのを見ると約束されている。また、終わりの時に、賢い者は悟ると約束されている。これが成就するとき、神が賢い者とみなされるすべての者の中に信仰の一致が起こる。なぜなら、実際に正しく理解する者たちは、必然的に同様の理解に到達するはずだからである。このような目的のために与えられた賜物を除外して、他にこの一致をもたらすものがどこにあるうか。

このように考えてくるときに、ここに予言されている教会の完全な状態というのは、まだ将来のことであることは明白である。従って、これらの賜物は、まだその目的を果たしていないのである。エペソ人への手紙は、紀元六十四年に書かれた。それは、パウロが、わたしは今や自分を犠牲にしようとしている。わたしが世を去るべき時はきたとテモテに言う約二年前のことである。背信の種は、今や、教会の中で発芽しつつあつた。なぜなら

彼は十年前に、テサロニケ人への第二の手紙のなかで、「不法の秘密の力が、すでに働いている」と書いたからである。狂暴なおおかみが、はいり込んできて、容赦なく群れを荒らそうとしていた。そのとき、教会は、この聖句に言われている一致による完全に向かつて進まず、党派に分かれて、分裂しようとしていた。使徒パウロは、これを知っていた。彼は、大背教のかなたを眺め、神の残りの民が集められるのを見て、「わたしたちすべての者が神の子を信じる信仰の一致」に到達すると言った（エペソ四ノ一三）。であるから、教会におかれた賜物は、まだ、その務めをなし終えていないのである。

「御霊を消してはいけない。預言を軽んじてはならない。すべてのものを識別して、良いものを守り」なさい（テサロニケ第一・五ノ一九―二一）。

この手紙のなかで、使徒パウロは、主の再臨のことを述べている。それから、彼は、その時の不信仰な人々が、「平和だ無事だ」と言っている時に、夜の盗人のように、突如として滅びが彼らをおそってくることを描写している。そして、彼は、このようなわけであるから、目を醒まして慎んでいるように勧めている。彼の勧告のなかに、前述の「御霊を消してはいけない」などの言葉がでている。この三つの聖句を、互いに全く関係のない別々の聖句であると考える人がある。しかし、これらは、その順序に従って、自然に結び合わ

されている。御霊を消す人は、御霊の結ぶ当然の実である預言を軽んじる。「わたしはわが霊をすべての肉なる者に注ぐ。あなたがたのおすこ、娘は預言を」する(ヨエル二ノ二八)。「すべてのものを識別して」という表現は、ここで扱われている預言という主題に限られているのであって、われわれは、神がみ言葉の中にお与えになった識別法によって、霊を試みなければならないのである。霊的欺瞞や偽りの預言が、現在満ちあふれている。そしてこの聖句は、この点についても特に当てはまるに違いない。しかし、使徒パウロが、すべてのものを拒否せよ、とは言わずに、すべてのものを識別して、**良いものを守れ**、と言っているのに注意しよう。

「その後わたしはわが霊をすべての肉なる者に注ぐ。あなたがたのおすこ、娘は預言をし、あなたがたの老人たちは夢を見、あなたがたの若者たちは幻を見る。その日わたしはまたわが霊をしもべ、はしために注ぐ。わたしはまた、天と地としるしを示す。すなわち血と、火と、煙の柱とがあるであろう。主の大きな恐るべき日が来る前に、日は暗く月は血に変わる。すべて主の名を呼ぶ者は救われる。それは主が言われたように、シオンの山とエルサレムとに、のがれる者があるからである。その残った者のうちに、主のお召しになる者がある」(ヨエル二ノ二八―三二)。

最後の時代に聖霊が注がれることを語っているヨエルのこの預言は、福音時代の最初にすべて成就したのではない。これは、「主の大いなる恐るべき日」を前に、天と地とにしるしが現われることを見ても明らかである。すでにこのしるしは現われたけれども、その恐るべき日はなお将来なのである。福音時代全体を、最後の時代ということができようが、過去千八百年間を**最後の時代**と言うことは不合理である。それは、主の日に及び、神の民の救済に至るものである。「それは主が言われたようにシオンの山とエルサレムとに、のがれる者があるからである。その**残った者**のうちに、主のお召しになる者がある」。

主の大いなる恐るべき日にさきがけるしと奇跡の中に存在するこの残りの者は、疑いもなく、黙示録十二章十七節に語られている女の残りの子らであって、地上の最後の世代のことである。「龍は、女に対して怒りを発し、女の残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っていてる者たちに対して、戦いをいどむために、出て行つた」。

福音教会の残りの者は、賜物を持っている。彼らは、神の戒めとイエスのあかしを持っているために戦いをいどまれるのである（黙示録一二ノ一七）。黙示録一九ノ一〇には、イエスのあかしは、すなわち預言の霊であると言われている。「わたしは、あなたと同じ僕仲間であり、またイエスのあかしびとであるあなたの兄弟たちと同じ僕仲間である」と天使は

言った。黙示録二二ノ九には、同じことが繰りかえされて、次のように言っている。「わたしは、あなたや、あなたの兄弟である預言者たちと同じ僕仲間である」。このような比較によって、「イエスのあかしは、すなわち預言の霊である」という言葉の意義の重要性を悟るのである。しかし、イエスのあかしとは、一つの霊のすべての賜物を含んでいる。「わたしは、あなたがたがキリスト・イエスにあって与えられた神の恵みを思って、いつも神に感謝している。あなたがたはキリストにあって、すべてのことに、すなわち、すべての言葉にも知識にも恵まれ、キリストのためのあかしが、あなたがたのうちに確かなものとされ、こうして、あなたがたは恵みの賜物にいささかも欠けることがなく、わたしたちの主イエス・キリストの現われるのを待ち望んでいる」(コリント第一・一ノ四―七)。キリストのあかしはコリントの教会において、確かなものとされた。そして、その結果は、どうであっただろうか。彼らは、恵みの賜物にいささかも欠けることがなかった。そこで、残りの民は、イエスのあかしに確く立ち、恵みの賜物に、いささかも欠けることがなく、われわれの主イエス・キリストの現われを待ち望んでいるのであるという結論を下してもよいのではなからうか。



## サタンの墮落

サタンは、以前、天においてキリストに次ぐ榮譽ある天使であつた。彼は、他の天使たちと同じように、幸福に輝く温和な顔つきをしていた。彼の広くひいでたひたいは、すぐれた知能を現わしていた。その体格は申し分がなく、態度にはけだかい威厳が備わっていた、しかし、神が、み子に、「われわれにかたどつて人を造」ろうと言われたときに、サタンは、イエスをねたんだ。彼は、人間の創造についての相談にあずかりたいと考えたが、相談を受けなかったために、彼の心は、しつととねたみと憎しみに満たされた。彼は、天において、神に次ぐ最高の榮譽を受けたいと思つた。

この時まで、全天には、秩序と調和とがあり、神の統治に対する完全な服従があつた。神の命令とみところに反逆することは最大の罪であつた。全天は、混乱状態に陥つた。天使たちは、いくつかの隊に分かれ、それぞれの隊に指揮をとる天使がいた。サタンは、自分自身を高めようとする野心を抱いて、イエスの權威に従おうとせず、神の統治に対する

反逆をほめかしていた。サタンの反逆に共鳴する天使もあったが、神のみ子に権威をお与えになった神のほまれと知恵を強く主張した天使たちもあった。天使たちの間に争いが起こった。サタンと彼の共鳴者たちは、神の統治を改革しようとしていた。彼らは、神のはかり知ることのできない知恵をさぐり、イエスを高めて彼にこのような無限の力と指揮権をお与えになった神のみこころを確かめようとした。彼らは、み子の権威に反逆した。

天の全天使は、天父の前に呼び出されて、各自の立場を決定させられた。そこで、サタンと彼の反逆に加わったすべての天使たちが、天から追放されなければならないことが決定された。そこで、天に戦いが起こった。天使たちは、戦いを交えた。サタンは、神のみ子と彼のみこころに従った天使たちに打ち勝とうとした。しかし、忠実な善天使たちは、この戦いに勝利をおさめ、サタンと彼に従った者たちは、天から追放された。

サタンと、彼と共に墮落した者たちとが、天から閉め出されたあとで、彼は、天の純潔と栄光とをみな永久に失ってしまったことに気づいて、それを悔い、また天に戻してもらいたいと望んだ。彼は、自分に適した地位、また、与えられるならどんな地位にでも喜んでつこうと思った。しかし、それはできないことであつた。天を、ふたたび危機にさらしてはならなかった。もし彼が、元に戻されたならば、全天は、損なわれてしまうのであつ

た。なぜなら、彼が罪の創始者であり、反逆の種は、彼のなかにあったからである。サタンと彼に従った者たちは、共に泣いて、もう一度神の恵みにあずかりたいと願った。しかし、彼らの罪、彼らの憎しみ、彼らのしつとねたみとは、あまりに大きくて、神はそれを消し去ることがおできにならなかった。それは、その最後の罰を受けるために、残されなければならなかった。

もう二度と神の恵みにあずかる可能性がなくなったことをはつきりとサタンが知ったとき、彼の悪意と憎しみが現われ始めた。彼は、彼の天使たちと謀って、なおも、神の統治に反抗する計画を立てた。アダムとエバが、美しい園におかれたときに、サタンは、彼らを滅ぼす計画を立てていた。この幸福な夫婦は、神に従ってさえおれば、その幸福を奪われることはできなかった。彼らがまず神にそむき、神の恵みを失うのでなければ、サタンは、彼らに働きかけることはできなかった。であるから、彼らを不服従に導き、彼らが神の不興を招いて、サタンと彼の天使たちの直接の影響のもとに陥るような計画をたてなければならなかった。サタンが姿を変えて、人間に対する関心を示すようにすることが決定された。彼は、遠回しに神の真実性を否定し、神が言われたことが真実であるかどうかを疑わせなければならなかった。次に、彼らの好奇心を起こさせて、神のはかり知ることが

できない計画をせんさくさせなければならなかった。これは、サタン自身が犯した罪そのものであった。そして、神はなぜ善悪を知る木について禁令を発せられたのかを、彼らに考えさせなければならなかった。

#### 人類の墮落

聖天使たちは、しばしば園を訪れて、アダムとエバに、彼らの仕事について、また、逆にサタンの墮落について教えた。天使たちは、サタンについて彼らに警告し、この墮落した敵に出会うといけないから、仕事をしているときに、互いに離れてはならないと注意した。天使たちは、また、神が彼らにお与えになった指示に厳密に従うように命じた。というのは、完全に服従するときのみ、彼らは安全であったからである。そうすれば、この墮落した敵は、彼らの上に力をふるうことはできないのであった。

サタンは、まずエバに働きかけて、そむかせようとした。彼女の第一の誤りは、夫から離れたことであつた。次に、禁じられた木のあたりをさまよい、さらに、誘惑者の声に耳

を傾けて、「それを取って食べると、きっと死ぬであろう」と神が言われたことをあえて疑った。彼女は、神が、その言葉どおりのことを意味してはあらまいと考えて、思い切って手をのばして、その実を取って食べた。それは、見た目に美しく、食べるのにおいしいものであった。彼女は、神が、実際は彼らのためになるものを禁じられたのだと邪推した。そして、彼女は、その実を彼女の夫に差し出して、彼を誘惑したのである。彼女は、へびが言ったことをみなアダムに告げ、へびが語る力をもっていたことに対する驚きを表した。わたしは、アダムの顔つきに悲しい影がさしたのを見た。彼は驚き恐れているように見えた。彼の心の中には、戦いが起こっているようだった。アダムは、これこそ警告されていた敵にちがいない、妻は死ななければならぬと感じた。彼らは別れなければならぬ。エバに対するアダムの愛は強かった。すっかり落胆してしまったアダムは、エバと運命を共にする覚悟をきめた。彼は木の実をつかんですばやく食べた。サタンは狂喜した。彼は天において反逆を起こし、彼を愛し彼の反逆に参加した共鳴者たちを得ていた。彼は、墮落し、他の者をも彼と共に墮落させていた。そして今、彼は、女を誘惑して神に対する不信を抱かせ、神の知恵をさぐって、全知であられる神の計画をきわめさせようとしたのであった。サタンは、女がただひとりで墮落するのではないことを知っていた。エバを愛す

るあまりに、アダムも神の戒めにそむき、彼女とともに墮落したのであった。

人類が墮落したという知らせば、全天にひろがった。琴は全部鳴りをひそめた。天使たちは悲しみのあまり、頭の冠を脱ぎすてた。全天は動揺した。罪を犯したふたりをどう処置したらよいかを決定するために、会議が開かれた。天使たちは、アダムとエバが命の木に手をのばしてその実を食べ、永遠の罪人になりはしないかと恐れた。しかし、神は、罪人たちを園から追放すると言われた。天使たちは、ただちに命の木にいたる道を守るように、命令を受けた。アダムとエバが、神に従わないで、神の不興をこうおつたのちも、命の木の実を食べて、罪と不服従をいつまでも続け、罪を永遠に伝えようというのが、サタンのたくらんだ計画だった。しかし、聖天使たちが、命の木にいたる道をさえぎるためにつかわされた。これらの力強い天使たちは、おのおのその右手に輝く剣のようなものを持っていた。

こうしてサタンは勝利を収めた。彼は、自分の墮落によって、他の者たちを苦しみに陥れた。彼は天から閉め出され、彼らは楽園から閉め出されたのであった。

## 救いの計画

人類が失われ、神の創造なさった世界が不幸と病氣と死の運命を背負った人間によって満たされ、罪びとにとつてのがれる道のないことがわかったとき、天は悲しみに満たされた。アダムの全家族は死なねばならない。わたしは美しいイエスのお姿を見、その顔つきに同情と悲しみの表情をみとめた。まもなくわたしは、イエスが、天父をつつんでいる非常に輝かしい光に近づかれるのを見た。わたしにつきそっていた天使は、イエスが天父と親しく語っておいでになると言った。イエスが天父とお話しになっている間、天使たちは心配で緊張しているようにみえた。イエスのお姿は、天父のまわりの輝く光の中に、三度見えなくなった。三度目に、天父のところから出てこられるイエスのお姿がみられた。イエスの顔つきは落ちついて、困惑や疑いの影は少しもみられず、言いあらわしようのない慈愛に満ちていた。その時イエスは、失われた人類のためにのがれの道が備えられたことを天使の万軍にお知らせになった。イエスは、ご自分の生命を身代金として提供し、死の

宣告をご自身に引きうけたいと天父に嘆願なさったことを語られた。それは、イエスを通して人類が罪のゆるしを得、イエスの血の功績を通し、また神の律法に従うことによって神の恩恵をあたえられ、美しい園へつれて行かれて生命の木の實を食べることができるようになるためだった。

最初天使たちはよろこぶことができなかった。というのは、イエスが彼らに何一つかくさないで、救いの計画をうち明けたもうたからだ。イエスは、ご自分が天父の怒りと罪を犯した人類との間に立たれることや、ご自分が不義とあざけりを一身に負われても、彼を神のみ子として受け入れる者は少ないことなどを、天使たちにお語りになった。ほとんどすべての人が、イエスを憎みしりぞけるであろう。それにもかかわらずイエスは、天の一切の栄光を捨てて、この地上に人としてあらわれ、人として身をいやすくし、人の受けるすべての誘惑を自らの経験を通して知り、どうしたら試みられる人々を救助することができかねることを知るのである。そして最後に、教師としてのイエスの使命が達成されてからは、人の手に渡され、サタンと悪天使たちが悪人たちをそそのかして、苦しめることのできるかぎりのあらゆる残虐と苦難を加えるのを忍び、最も残酷な死に方によって、不義な罪びととして天と地との間にかけられ、天使たちすら目をそむけ、顔をおおうような恐る



べき苦悶にあわれるのである。イエスは肉体的な苦痛を経験されるばかりでなく、それとは比べものにならないほどの精神的な苦痛を味わわれる。全世界の罪の重荷が彼の上にのしかかるのである。イエスは、ご自分が死んで三日目にふたたび甦えり、わがままで不義な人類の執り成しをするために、天父のもとに昇天されるということをお語りになった。

天使たちはキリストの前にひれ伏した。彼らは自分たちの生命を捧げたいと申し出た。イエスは、天使の生命では負債を払うことができないから、自分が死んで多くの人を救うのだと仰せになった。キリストの生命だけが、人類の身代金として天父に認められるのである。イエスは、天使たちにも果たさねばならない役割があることをお語りになった。すなわち、彼らはイエスと一緒にいて、幾度かイエスを力づけるのである。イエスは人間の墮落した性情をとられるので、その力は天使たちに匹敵することさえできない。天使たちが、イエスの屈従や大きな苦難の目撃者となり、イエスの苦難や彼に対する人々の憎悪を目に見るときに、彼らは、魂の奥底までゆり動かされ、イエスを愛するあまり、彼を殺害者の手から救い出そうと思うのだが、手出しをして目の前に起こるどんな事柄も妨げてはならないのである。天使たちはまた、キリストの甦えりにあたって、一のつの役割を演じなければならぬ。イエスは、このように、救いの計画がすでに立てられて、天父がその計

画を承認したもうたことなどをお語りになった。

イエスは、聖なる悲しみの中にも、天使たちを慰めはげまし、今後は彼のあがないたもう人々が彼とともにいることや、彼はご自分の死によって多くの者をあがない、死の権力をもっている者を滅ぼしたもうことなどをお知らせになった。そのとき天父は、王国と、全天における王国の尊厳をキリストにあたえ、彼はそれを永遠に保ちたもうのである。サタンと罪びとは滅ぼされ、天やきよめられた新しい地を、もう決して妨害するようなことはなくなる。イエスは、天父の承知したもうたこの計画に天使たちが同意し、墮落した人類が、彼の死により、ふたたび高められて、神の恩恵にあずかり、天にうけ入れられることをよろこぶようにとお命じになった。

そのとき、言いあらわしようのないよろこびが天を満たした。天使たちは、賛美と崇敬の歌をうたった。彼らは、神が、反逆した人類のために愛し子を死なせたもう、その大きないつくしみとへりくだりのゆえに、立琴をかきならして、これまでよりも一段と高い調べをかなでた。イエスが、天父のひざまとを離れることを承知し、苦難と苦悶の一生をえらび、屈辱的な死を通して、人に生命をあたえたもうその克己と犠牲に対して、賛美と崇拜がわき起こった。

天使は言った、「あなたは、天父が何の苦しみもなく愛し子を手離されたと思いますか。決してそうではありません。罪の人類を滅ぼすか、それとも人類のために愛し子を死なせるかということは、天の神にとっても戦いでした」と。天使たちの中には、滅びる人類のために自分の栄光と生命をささげたいと思うほど、人類の救いに関心を持っている者がみられた。「けれども、それでは何の益もないのです。罪は余りに大きいので、天使の生命では負債を払えないのです。み子の死と執り成しよりほかには、負債を払って、失われた人類を、望みのない悲しみと不幸から救うことのできるものはないのです」と、わたしに同伴している天使は言った。

しかし天使たちには、なすべき働きが定められた。それは、苦難の中にある神のみ子に仕え、その苦痛をやわらげるために、力をつける天の栄光の香油をもって、天からくだったり、天へのぼったりすることだった。また彼らの働きは、サタンがたえず投げかける暗黒や、悪天使たちの手から、恩恵の民を守ることであった。失われ、滅びる人類を救うために、神の律法を改めたり、変えたりすることはできないので、神が愛し子を人類の罪のために死なせられたことを、わたしは示された。

サタンは、人類を墮落させたことによって、神のみ子をその高い地位から引きおろすこ

とができるというて、悪天使たちと一緒によろこんだ。イエスが墮落した人間の性情をとられるなら、彼を圧倒して救いの計画の成就をさまたげることができると、サタンは悪天使たちに語った。

わたしは、かつて位の高い幸福な天使だったサタンをみせられた。それから現在のサタンをみせられた。彼は今もなお王者らしい姿をしている。彼はもと天使だったので墮落した今でも、まだりっぱな顔かたちをしている。しかし彼の顔つきは、心配、苦勞、不幸、悪意、憎しみ、害意、欺瞞、そしてあらゆる悪に満たされていた。わたしは特に、かつてあれほどりっぱだった彼のひたいに目をとめた。そのひたいは目の上からうしろへひっこんでいた。彼は長い間悪いことばかりに専念してきたので、あらゆるよい性質は損なわれて、あらゆる悪の傾向が発達しているのを、わたしは示された。彼は陰險な、悪がしこい何でも見抜かないではおかぬような目つきをしていた。彼は大きな体格をしていたが、手や顔の肉はたるんでいた。わたしが彼を見たとき、彼はあごを左の手の上にのせて、何か深い考えにふけているように見えた。その時彼はうす笑いを浮かべたが、わたしはその笑いが、いかにも悪魔的な悪がしこさを表わしているのに身ぶるいした。このうす笑い、彼が獲物を確保したときにもらす笑いで、獲物がそのわなにかかって身動きがでな

くならと、それは身の毛のよだつような笑いとなるのだった。

### キリストの初臨

わたしは、キリストが人間の性質をとり、ひとりの人間としていやしい者となり、サタンの誘惑を経験されるときのことを見せられた。

キリストの誕生には、世俗的なすばらしさは何もなかった。彼は、馬小屋に生まれ、飼葉おけをゆりかごとなさったが、その誕生は、どんな人の子の誕生よりもはるかに光栄あるものとされた。天使たちは天からくだって、牧羊者たちにイエスの来臨を告げ知らせたが、そのことばには神からの光と栄光がともなった。天使の群れは立琴をかきならして、神をほめたたえた。彼らは、神のみ子が贖いの働きをなし遂げるために、墮落した世界に来臨し、その死によって人類に平安と幸福と永遠の生命をもたらしたもうことを、誇らしげにふれ知らせた。神はみ子の誕生に光栄をあたえ、天使たちはみ子をおがんだ。

神の天使たちはイエスのバプテスマの場面の upper 上を舞いかけた。聖霊は、はとの形をな

してくだり、イエスの上にとどまった。人々が非常に驚いて、イエスに目をそそいでいると、「これはわたしの愛する子、わたしの心になう者である」という神のみ声が天からきこえてきた。

ヨハネは、ヨルダン川にバプテスマを受けに来た人が救い主だということに確信がなかった。しかし神は、これが神の小羊キリストだということがわかるしるしをあたえ、神に約束しておられた。そのしるしは、天からくだったハトがイエスの上にとどまり、神の栄光がイエスのまわりを照らしたときに与えられた。ヨハネは、手をさしのべてイエスを指し、大きな声で、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」と叫んだ。

ヨハネは自分の弟子たちに、イエスが約束のメシヤ、世の救い主であると知らせた。ヨハネの働きが終わりに近づいたとき、彼は弟子たちに、イエスを大教師として仰いで、これに従うように教えた。ヨハネの一生は、悲しみと犠牲に満ちていた。彼はキリストの初臨を先ぶれしたが、キリストの奇跡を目に見、キリストによってあらわされる力を受けることはゆるされなかった。イエスが教師として立ちたもうときには、自分は死なねばならないことがヨハネにはわかっていた。ヨハネの声は、荒野よりほかにはほとんどきかれなかった。彼の一生は孤独だった。彼は、父親の家庭で家族との交わりを楽しむことに執着

しないで、使命を果たすために家族を離れた。多くの人々が忙しい町や村を離れて、この不思議な預言者のことばをきくために荒野へ集まってきた。ヨハネは木の根元におのを置いた。彼は結果をおそれずに罪を責め、神の小羊キリストのために道を備えた。

ヘロデは、ヨハネの力強く、するどいことばをきいて心を動かされ、深い興味をもって彼の弟子になるにはどうすべきかを問うた。ヘロデは、自分の兄弟がまだ生存しているのに、その妻をめとろうとしていた。ヨハネはそのことを知っていたので、それが正しくないことを忠実にヘロデに告げた。ヘロデはどんな犠牲もはらいだくなかった。ヘロデは兄弟の妻と結婚し、彼女の影響で、ヨハネを捕えて投獄した。しかし、いづれヨハネを釈放するつもりだった。牢にとじこめられている間にヨハネは、弟子たちを通してイエスの偉大な働きをきいた。彼は自分ではイエスの慈悲深いことばを聞くことはできなかったが、しかし弟子たちが聞いたことを彼に知らせて慰めた。まもなくヨハネは、ヘロデの妻のさしがねで首をはねられた、イエスに従い、イエスの奇跡を目に見、イエスの唇から出る慰めのことばを耳にききたいやしい弟子たちさえも、バプテスマのヨハネよりはまさっていたこと、すなわちヨハネよりも高められ、光栄を与えられ、生活によるこびをもっていたことをわたしは見た。

ヨハネは、エリヤの精神と力をもってやってきて、イエスの初臨を宣伝した。わたしは末の世を示され、ヨハネが、神の怒りとイエスの再臨の日を先づれするために、エリヤの精神と力をもつて出て行く者を代表していることを示された。

イエスは、ヨルダン川でバプテスマを受けてから、み霊にみちびかれて荒野へ行き、悪魔に試みられた。聖霊は、その激しい誘惑の特別な場面のために、イエスを準備しておられた。イエスは、四十日の間サタンに試みられ、その間何も食物をとられなかった。キリストの周囲のものは、どれも気持ちのよくないものばかりで、人間の性質のひるみそうなものはかりだった。彼は荒れ果てたさびしい場所に、野の獣や悪魔と一緒におられた。神のみ子は断食と苦難のために、顔色は青く、やせておられた。しかしイエスの道は、はっきり示されていた。彼は、ご自分がなすためにこられた働きをなし遂げられねばならなかった。

サタンは神のみ子の苦難に乗じて、さまざまな誘惑をもってイエスを攻めたとしようと計画し、イエスが身をひくくして人となりたもうたので、イエスに対する勝利を得ようと望んだ。サタンはやってきてこう誘惑した、「もしあなたが神の子であるなら、この石に、パンになれと命じてごらんさい」。サタンは、イエスが天来の力を働かせることによって、



ご自分がメシヤであるという証拠を示されるようにと誘いかけた。イエスはおだやかに、「『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある」とお答えになった。

サタンは、イエスが神のみ子であることについて論争しようとしていた。彼は、イエスの弱い、悩める状態をさして、自分はイエスよりも強いのだと自慢げに断言した。しかし「あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」という天来の声は、あらゆる苦難に際してイエスをささえるのに十分だった。キリストはご自分の力や、ご自分が世の救い主であることなどをサタンに確信させるために、何もされるにはおよばないことを、わたしは示された。神のみ子の高い地位と権威について、サタンは十分な証拠をもっていった。キリストの権威に従いたくなかったばかりに、彼は天から閉め出されたのだ。

サタンは、自分の力を示すために、イエスをエルサレムにつれて行き、神殿のてっぺんにのせて、目のくらむような高いところから身を投げて、ご自分が神のみ子である証拠を示すように誘惑した。サタンは、「『神はあなたのために、御使たちに命じてあなたを守らせるであろう』『あなたの足が石に打ちつけられないように、彼らはあなたを手でささえるであろう』とも書いてあります」との靈感のことばをもち出した。イエスはこれに答えて「『主なるあなたの神を試みてはならない』と言われている」と言われた。サタンは、イエ

スガ天父のいつくしみにつけあがって、使命を達成しないうちに生命を危うくされるのを望んだ。彼は救いの計画が失敗するように望んできたが、しかしその計画の基礎は非常に深くすえられているので、サタンはこれを倒すことも損なうこともできなかった。

キリストはすべてのクリスチャンにとって模範である。誘惑を受けたり、自分の権利が論議されたりする場合には、辛抱強く堪えなければならない。われわれの勝利が直接に神の栄えとなるのでないかぎり、敵に対する勝利をおさめるために、神の力のあらわれを神に呼び求める権利があると思っではならない。イエスがもし神殿のてっぺんから身を投げられても、その行為を見ているのはサタンと天使たちでしかないのだから、それは天父の栄えとはならない。またそれは、神がその能力を最も苛酷な敵にあらわされるように、神を誘惑することにもなってしまう。それはイエスが征服しようとしてこられた敵の、言う通りになることだった。

「それから、悪魔はイエスを高い所へ連れて行き、またたくまに世界のすべての国々を見せて言った、『これらの国々の権威と栄華とをみんな、あなたにあげましょう。それらはわたしに任せられていて、だれでも好きな人にあげてよいのですから。それで、もしあなたがわたしの前にひざまずくなら、これを全部あなたのものにしてあげましょう』。イエス

は答えて言われた、『「主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ」と書いてある』。』  
サタンはイエスの目の前に、世の諸国を最も美しい光の中に示した。もしイエスがサタンを拝されるなら、サタンは地上の所有権をゆずり渡そうと申し出た。救いの計画が実行されて、イエスが人類を贖うために死なれたら、自分の能力は制限され、ついにはとり去られて、自分は滅びなければならぬことを、サタンは知っていた。そこで、神のみ子によって始められた大いなる働きの完成を、できるだけ妨げようというのが、彼の研究した計画だった。もし人類の贖いの計画が失敗したら、彼がそのとき自分のものとして主張した王国は、彼の手に保たれる。事がうまくはこべば、天の神に反対した統治ができると彼はうめられた。

イエスが力と栄光をすてて天を去られたとき、サタンはこおどりしてよろこんだ。彼はそのとき神のみ子が自分の勢力の下におかれたと思った。彼はエデンの聖なる夫婦をたやすく誘惑することができたので、その悪魔的な能力とずるさによって、神のみ子まで倒して、自分の生命と王国を救いたいと望んだ。イエスを誘惑して、天父のみこころから離れさせることができれば、彼の目的は達せられる。しかしイエスは、誘惑者を戒めて、「サタンよ退け」と言われた。イエスの拝すべきお方は天父だけだった。サタンは、地上の王

国を自分のものとして主張し、イエスは苦難を受けられなくてもよい、この世の国々を手に入れるために、イエスが死なれる必要はないのだ、もしイエスがサタンを拝されるならイエスは地上の一切の所有権と光栄ある統治権を手に入れることができる、とほのめかした。しかしイエスは堅固だった。彼は、ご自身の生命によってサタンから王国を贖い、やがて天と地の一切が彼に服する時が来ることを知っておられた。彼は、地上の諸国の正當な世継ぎとなり、それらの国々を永遠の所有としてご自分の手におさめるために、天父によって指定された道として、苦難の一生と恐るべき死をえらばれた。サタンもまた彼の手に渡されて、死をもつて滅ぼされ、イエスや栄光の中にある聖徒たちをもはや決して悩ませることはなくなるのであった。

#### キリストの伝道

サタンは、誘惑を終えると、しばらくの間イエスのもとから離れた。すると、天使たちが荒野に食物を持ってきて、イエスを力づけ、天父の祝福がイエスの上におかれた。サタ

ンはどんなに激しく誘惑しても失敗した。しかしサタンは、イエスの伝道の期間中に、幾度も時をかえてイエスに巧妙に働きかけることができた時を待ち望んだ。イエスを受け入れようとしなない人々を扇動して、イエスを憎ませ、イエスを滅ぼさせて勝利しようという望みを依然として抱いていた。サタンは悪天使たちと特別な相談会を開いた。彼らは神のみ子に全然勝てないので失望し、怒っていた。彼らはもっと狡猾にもっと全力をつくしてキリストが世の救い主であるということについての不信の念をユダヤ国民の中にうえつけそうすることによって、イエスをご自分の使命に失望させねばならないと決めた。ユダヤ人がどんなに儀式やささげ物に忠実であつても、もし彼らの目を預言からおおい、メシヤはこの世の偉大な王として現われるはずだと信じさせることができるなら、彼らはイエスを軽べつし、排斥するようになるからであつた。

わたしは、キリストの伝道の期間中、サタンと悪天使たちが、人々の心に不信と憎悪と軽べつの念をいそがしくうえつけてまわるのを見せられた。イエスが何か心に刺さるような真実を語って、人々の罪を責められると、民はよく怒った。サタンと悪天使たちは、神のみ子の生命をとるように彼らをけしかけた。人々が石を手にとって、イエスに投げつけようとしたことが一度ならずあつたが、天使たちはイエスを守り、怒った群衆の中から、

イエスを安全な場所へつれて行った。またある時は、明白な真実がイエスの唇から語られたので、群衆がイエスを捕らえて、山の崖のところへつれて行き、そこからつき落とそうとした。そのとき、イエスをどうしたらよいかということについて、人々の間に論争が起こり、天使たちがイエスを、群衆の目から見えないようにかくしたので、イエスは彼らの真ん中を通して立ち去られた。

サタンは依然として大いなる救いの計画が失敗するように望んでいた。彼は、人々の心をかたくなにし、イエスに対して悪感情をいだかせようと、全力をつくした。サタンは、イエスを神のみ子として信じる者がごく少数で、そんな少数の人々のために苦難と犠牲をしのぶことは、あまりにもつたいないとイエスが考えられるように望んだ。しかし、イエスを神のみ子として、また自分の魂を救ってくださるお方として信ずる者が、たとえふたりしかなかったとしても、イエスは救いの計画を実行されることがわたしに示された。

イエスは、悩める者の上に加えられているサタンの力をうち破ることから働きを始められた。彼は病める者に健康を回復し、盲の目を開き、足のなえたる者をいやして、彼らがこおどりしてよろこび、神をあがめるようになさった。長年の間、病弱でサタンの残酷な力につながれていた者を、イエスは健康へと回復させられた。彼は恵みのことばをもって

弱い者や、ふるえる者や、落胆している者を慰められた。イエスは、勝ち誇ったサタンに捕えられている弱い者や悩める者を、サタンの手からもぎとって、彼らに健康な身体と大きなよろこびと幸福をお与えになった。彼は死人を生命に甦えらせられ、彼らはイエスの大いなる力のあらわれのゆえに神を賛美した。イエスを信ずるすべての人々のために、イエスは偉大なるわざをなさった。

キリストの一生は、思いやりと同情と愛のことばと行為に満ちていた。イエスは、ご自分のみもとに来る人々の訴えに耳をかたむけ、彼らの不幸をおいやしになった。多くの人は、キリストの天来の力の証拠を彼ら自身の身に帯びていた。しかしその働きがなされたあとで、謙遜にして偉大な教師イエスを恥じる者が多かった。役人たちがイエスを信じなかった。民はイエスを受け入れようとしなかった。彼は悲しみの人で、悲哀を知ってあられた。人々は、イエスのまじめな自己犠牲的な生活に支配されるのに耐えられなかった、人々はこの世が与える名誉を望んだ。しかし、それでもなお神のみ子にしたがい、イエスの教えに聞き、イエスの唇から出る恩恵のことばを心の糧とする者が少なくなかった。彼のことは深い意味に満ちていたが、しかしそれは明りようで、どんな愚かな者にも理解された。

サタンと悪天使たちは、ユダヤ人の目をめくらにし、その理解力をくもらせ、民の指導者や役人たちを扇動して、救い主の生命を絶とうとした。ある人々は、イエスをひっぱつて来るためにつかわされたが、イエスのおられるところにきてみて非常に驚いた。彼らはイエスが人類の不幸をござんになつて、同情とあわれみに満たされておられるのを見た。彼らは、イエスが弱い者や苦しんでいる者に、やさしい愛のことばをかけて、彼らをはげましておられるのを聞いた。彼らはまた、イエスが権威の声をもってサタンの力を戒め、サタンの力に虜にされている者に自由をおあたえになるのを見た。イエスの唇から出る知恵のことばを聞いて、彼らは心をひきつけられ、イエスに手をかけることができなかった。彼らはイエスをそのままにして、祭司や長老たちのもとへかえった。「なぜ、あの人を連れてこなかったのか」と聞かれて、彼らは自分たちが見たイエスの奇跡や、聞いた知恵と愛と知識の聖なることばについて述べ、「この人の語るように語った者は、これまでにありませんでした」とおすんだ。大祭司たちは、お前たちもだまされているのだと言って、彼らを責めた。下役どもの中には、イエスを捕えなかったことを恥じる者もあった。祭司たちは嘲弄的な態度で、つかさたちの中にイエスを信じている者があるかとたずねた。つかさや長老たちの中には、実際イエスを信じている者も少なくなかったが、しかしサタンが、



そのことを承認させないようにしているのをわたしは示された。彼らは、神をおそれるよりも、民の非難をおそれた。

これまではサタンの狡猾さと憎しみは、まだ救いの計画を破壊していなかった。イエスがこの世にこられた目的が成就される時は、間近に迫っていた。サタンと悪天使たちは一緒に相談し、キリスト自身の国民を扇動して、イエスの血をもとめてやかましく叫ばせイエスの上に残酷と嘲笑を浴びせようときめた。このようにあしらわれることにイエスが憤って、謙遜と柔和を保たれなくなるようにと彼らは望んだ。

サタンが計画をねっている一方、イエスは、ご自身の経験しなければならぬ苦難——ご自身が十字架につけられ、三日目にふたたび甦えられることを、注意深く弟子たちの前に示してあられた。しかし、彼らは理解力がにぶいとみえて、イエスの語られることを理解することができなかった。

## 変貌の山

弟子たちの信仰は、変貌の山で一段と成長した。彼らは、そこで、キリストの栄光を目に見、キリストの神性を証拠だてる、天来の声を聞くことを許された。キリストが十字架につけられたとき、弟子たちが、悲しみと失望のあまり確信をすっかり投げすててしまうことのないように、神は、キリストが約束のメシヤであるという確実な証拠を、イエスの弟子たちに与えようとなさった。変貌の山で、神は、モーセとエリヤをつかわして、イエスの苦難と死について、イエスと語らせられた。神は、み子と語らせるのに、天使たちをえらばないで、地上の試練を自ら経験したモーセとエリヤをえらばれた。

エリヤは神と共に歩いた。神は、彼を通してイスラエルの罪を責めたもうたので、彼の働きは、苦痛と試練の多い働きだった。彼は神の預言者だった。しかし彼は、自分の生命を救うために、ここかしこ逃げまわらねばならなかった。彼は自分の国民に、生命をねらわれて、野の獣のように追いまわされた。しかし神は、エリヤを天に移された。栄光と

勝利の中に、彼は天使たちにつれられて天へのぼった。

モーセは、それまでこの地上に生存していたどんな人よりも偉大だった。彼は、神から高い榮譽を与えられ、友だちと話し合うように、神と顔を合わせて語る特権に恵まれた。彼は、天父をつつんでいる輝かしい光と、とうとい栄光を見ることを許された。神はモーセを通して、イスラエルの民をエジプトの奴隷生活から救い出された。モーセは、幾度も神の怒りと民との間に立って、民のために執り成した。イスラエルの不信と不平と重大な罪に対して、神が激しく怒られたとき、民に対するモーセの愛が試みられた。神は、彼らを滅ぼして、モーセを偉大な国民にしようと仰せになった。モーセは、彼らのために熱心に懇願して、イスラエルへの愛をあらわした。彼は、神がそのはげしい怒りをすてて、イスラエルを許してくださるように、さもなければ自分の名前を天の書から消し去ってくださいと、悩みのうちに祈った。

イスラエルの人々が、水を得ることができなかつたために、神とモーセに向かつてつぶやいたとき、彼らは、モーセが彼らと彼らの子供たちを導き出して、彼らを殺そうとしたのだと非難した。神は、彼らのつぶやきを聞いて、人々に水を与えるために、岩に語るようにお命じになった。モーセは、怒って岩を打ち、その栄光を自分に帰した。イスラエルの人々

が、絶えずわがままにふるまい、つぶやくので、モーセは、大きな悲しみに沈んだ。そして彼は、神がどんなに彼らを忍ばれたか、また彼らのつぶやきが自分に対するものではなくて、神に対するものであるということを、しばし忘れた。彼は、彼らに対する深い愛にもかかわらず自分は彼らから正当な扱いも受けず、感謝もされないと、自分自身のことだけを考えた。

しばしば神の民を困難なところに導き、彼らをその窮地から、み力によって救い出して彼らに対する神の愛と保護とを認めさせ、神に仕えて神に栄光を帰すように彼らを導くことが、神のご計画であった。しかし、モーセは、人々が神に栄光を帰すように人々の前で神を崇めて、神のみ名を高めることをしなかった。このために、彼は、主の不興をこうむった。

モーセが、二枚の石の板をもって山からおりて来て、イスラエルの人々が金の子牛を拝んでいるのを見たとき、彼は非常に怒って、石の板を地に投げつけてこわしてしまった。わたしは、モーセが、このことにおいては、罪を犯さなかったのを見た。彼は、神のために激怒したのであって、神の栄光を汚すまいと努めたのである。しかし、彼が自分の心の生まれながらの感情に負けて、神に帰すべき栄光を自分に帰したときに、彼は、罪を犯し

た。そして、その罪のために神は、彼がカナンの国に入ることをお許しにならなかったのである。

サタンは、天使たちの前でモーセを非難するための口実を見つけようとしていた。彼はモーセに、神の不興をこうむらせることに成功したことを大いに喜んだ。そして、サタンは、もし世の救い主が人間を贖うために来られるならば、彼に勝利することができると、天使たちに語った。モーセは、彼の罪のゆえに、サタンの権力の下、すなわち死の支配に陥った。もし、彼が、堅く立っていたならば、主は、彼を約束の国に導き入れて、それから死を見ることなくして、彼を天に携え上げられたことであろう。

モーセは死を経験したが、しかし彼の肉体が朽ちないうちに、ミカエルが天からくだって生命をお与えになった。サタンは、モーセのしかばねを自分のものだと言って押えておこうとしたが、ミカエルがモーセを甦えらせて天につれて行かれた。サタンは、自分の虜が天につれてゆかれるのを神が許されるのは不当だと非難して、神を激しく罵ったが、キリストは、神のしもべが墮落したのはサタンの誘惑のせいだったにもかかわらず、この敵を責めようとはなさらなかった。キリストはおだやかに天の父をさして、「主がおまえを戒めて下さるように」と言われた。

イエスは、以前弟子たちに、ここに立っている者の中には、死を経験しないうちに神の国が力をもってくるのを見る者があると言われたことがあった。変貌の山でこの約束は成就された。そのときイエスの容貌は変わって、太陽のように照り輝いた。イエスの衣は白くきらきらと光った。モーセは、キリストの再臨の時に死から甦えらされる人々を代表してそこに立ち会った。死を経験しないで天に移されたエリヤは、キリストの再臨のときに不死のからだに変わって、死を経験しないで天へ移される人々を代表していた。弟子たちは、驚きとおそれの入りまじった思いのうちに、イエスのすぐれた威光と自分たちを覆っている雲を目のあたりに見、「これはわたしの愛する子、わたしの心になう者である。これに聞け」と、仰せになるおごそかなみ声を聞いた。

### キリストに対する裏切り

わたしは、イエスが逾越節の晩餐を弟子たちと共にされた時のことを示された。ユダはサタンにだまされて、自分はキリストの真の弟子のひとりだと思いこんでいたが、しかし

彼の心はいつも世俗的だった。ユダはイエスの偉大なみわざを見、イエスが伝道されている間じゅう、一緒にそばにあり、イエスがメシヤである有力な証拠を認めていたが、しかし彼は勘定高く貪欲だった。彼は金銭を愛した。ユダはイエスに高価な香油がそがれたとき、怒って文句を言った。マリヤは主を愛した。イエスがマリヤの多くの罪をゆるし、彼女の最愛の弟を死から甦えらせられたので、マリヤはイエスに何をさし上げても高価すぎるとは思わなかった。香油が貴重であればあるだけ、それを救い主にささげることによって感謝の気持ちを一層よく表すことができるのであった。ユダは、自分の貪欲心の言いわけに、その香油を売れば貧しい人々にお金を恵むことができるのではないかと主張した。といっても、それは彼が貧しい人々に関心をもっていたからではなかった。彼は利己的で、貧しい人々に恵むために自分に預けられている金銭を、私用に使いこんでしまうことがよくあった。ユダは、イエスの安楽や、またイエスの必要に応ずることさえも無関心だった。そして自分の貪欲心の言いわけに、よく貧しい人たちをひきあいに出した。マリヤのこのような物惜しみをしない態度は、ユダの貪欲な性質にとって最も鋭い譴責だった。サタンの誘惑がわけなくユダの心に入りこみ道が開かれていた。

ユダや人の祭司や役人たちはイエスを憎んでいたが、群衆はイエスのまわりにおしよせ

て、彼の知恵のことばに耳をかたむけ、その大いなるみわざを目に見た。人々は深い興味をおぼえて、熱心にイエスに従い、この偉大な教師の教えをきいた。役人たちの中にも、イエスを信ずる者が多かったが、会堂からしめ出されることを恐れて、信仰を告白しようとしなかった。祭司や長老たちは、民の関心をイエスからひきはなすために、何か手をとるなければならぬときめた。そうしなければ、いまに全部の者がイエスを信ずるようになるに恐れた。また自分自身の立場も安全に思えなかった。自分たちの地位を失うか、それともイエスを死に処すかのどちらかだった。しかしイエスを死に処しても、イエスの能力の生ける記念が依然として後に残る。イエスはラザロを死から甦えらせておられた。もしイエスを殺しても、ラザロがイエスの大いなる能力についてあかしをたてるだろうと、彼らは恐れた。死から甦えらされたラザロを見ようとして、人々が集まって来るので、つかさたちは、ラザロも殺してしまって、人々の興奮をしずめようと決心した。そうすれば民の心を、人間のつくった伝統と教え、什一のはつかといのんどに向けさせ、ふたたび彼らの上に勢力を及ぼすことができる。イエスがひとりであられるときに捕らえることに、彼らの意見が一致した。なぜなら、人々がみなイエスに関心をよせている時に、群衆の中でイエスを捕らえようものなら、人々から石で打たれるにちがいがなかったからである。



ユダは、彼らがどんなにイエスを捕らえたがっているかを知って、大祭司や長老たちに幾枚かの銀でイエスを売り渡そうと申し出た。彼がイエスを最も残酷な敵の手に売り渡すことに同意するようになったのは、金銭欲からだった。サタンは直接ユダを通して働いていた。感動的な最後の晩餐の席にあって、この裏切り者は、主を売り渡す計画をあれこれと思いめぐらしていた。イエスは、今夜弟子たちがみなイエスのためにつまずくと、悲しげに仰せになった。しかしペテロは、たとえ他の人たちはみなイエスのためにつまずくようなことがあっても、自分だけはつまずかないと、熱烈な口調で断言した。するとイエスはこう言われた。「シモン、シモン、見よ、サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」。

わたしは、イエスが弟子たちとゲッセマネの園におられるのを見た。深い悲しみの中にイエスは、誘惑に陥らぬように目をさまして祈れと弟子たちに命じられた。イエスは、彼らの信仰が試みられ、その望みが砕かれることを知っておられた。彼はまた彼らが、たえず目をさまして熱心に祈ることによって、あらゆる力を手に入れなければならないことをご存じだった。イエスは涙を流し、声をはげまして祈られた。「父よ、みこころならば、ど

うぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください」。

神のみ子は苦悶のうちに祈られた。大粒の血の汗が、イエスの顔から地にしたり落ちた。天使たちはその場を舞いかけつて、その光景を目撃したが、苦悩しておられる神のみ子のところへ行って力づけるように命じられたのは、ただひとりの天使だけだった。天にはよろこびがなかった。天使たちは冠と立琴を投げすて、深い関心をもって沈黙の中にイエスを見守った。彼らは神のみ子をと리카こみたいと思ったが、天使の指揮者たちはそうさせなかった。イエスが売り渡されるのを見たら、彼はイエスを敵の手から救い出してしまふにちがいないからである。救いの計画は定められた通りに成就されねばならなかった。

祈りをおえて、イエスが弟子たちのところへ戻られると、弟子たちは眠っていた。このような苦悩の時にあって、弟子たちすらイエスに同情しイエスのために祈ろうとしなかった。ちよつと前まではあれほど熱心だったペテロも、深く眠っていた。イエスはペテロにさっきの積極的なことばを思い出させて、「あなたがたはそんなに、ひと時もわたしと一緒に目をさましていることが、できなかったのか」と言われた。神のみ子は苦悩のうちに三

度祈られた。そのとき、武装した一隊をひきつれたユダが現われた。彼はいつものようにイエスに近づいてあいさつした。一隊はイエスをと리카こんだ。しかしイエスは、そこで天来の能力をあらわされて、「だれを捜しているのか」「わたしがそれである」と言われた。そのとき彼らは地に倒れた。イエスがこのような問いをなさったのは、彼らがイエスの能力を目に見、イエスが彼らの手からご自身を救い出そうとお思になれば、それがあできになるという証拠を示すためだった。

こん棒や剣をもった群衆がたちまち倒れたのを見て、弟子たちは望みをもちはじめた。人々が起き上がってまた神のみ子をと리카こむと、ペテロは剣を抜いて大祭司のしもべにきりつけ、その片耳を切り落とした。イエスはペテロに剣をおさめるように命じて、「わたしに父に願って、天の使たちを十二軍団以上も、今つかわしていただくことができないと、あなたは思うのか」と言われた、このことばが語られると、天使たちの顔色が望みによみがえって来るのが見られた。彼らは、今こそイエスをと리카こんで、怒れる群衆を追ひ散らそうと望んだ。しかしイエスが、「しかし、それでは、こうならねばならないと書いてある聖書の言葉は、どうして成就されようか」とつけ加えられたとき、天使たちはふたび悲しみにとざされた。イエスが黙って敵につれ去られるのを見て、弟子たちの心はま

たもや絶望とにがい失望にしずんだ。

弟子たちは自分たちの生命に危険を感じて、みなイエスを捨てて逃げた。イエスは、残酷な敵の手にただひとり残された。そのときサタンはどんなに勝ち誇ったことだろう。そして天使たちは、どんなに嘆き悲しんだことだろう。聖天使たちの多くの隊が、それぞれ背の高い指揮者の天使を長として、その場の光景を見るためにつかわされた。彼らは、神のみ子に加えられる侮辱と残酷な行為、またイエスの経験されるあらゆる精神的な苦悩を一つ残らず記録するように命じられた。この恐るべき場面に加わった人々は、この光景をもう一度、全部生きた姿のままに見せられるのである。

### キリストの裁判

天使たちは、天を出発するとき、悲しみのあまり光り輝く冠をぬいだ。指揮者であられるキリストが苦難を受け、いばらの冠をかぶられねばならないのに、天使たちが光り輝く冠をかぶっているわけにはいかなかった。サタンと悪天使たちは、法廷で人々の人間ら

しい感情と同情を消失させてしまうのに忙しかった。彼らの影響で、その場の空気は重苦しく、汚されていた。サタンと悪天使たちに扇動された大祭司と長老たちは、人間性の堪えられないようなやり方で、イエスを侮辱し虐待した。サタンは、神のみ子がこのような嘲笑と暴力をうけて、不平やつぶやきを口にされるか、あるいは天来の力をあらわして群衆の手からのがれ、ついに救いの計画が水泡に帰してしまうようにと望んだ。

ペテロは、イエスが売り渡されてからも、その後について行った。彼は、人々がイエスをどうしようとするのか見たかった。しかしペテロは、イエスの弟子のひとりであることをとがめられると、身の安全を計るために、自分はその男を知らないと断言した。イエスの弟子たちは、純潔なことを使うので有名だったので、ペテロは、自分をとがめた者に、自分がキリストの弟子のひとりではないことをなっとくさせるために、三度目にはのろいと誓いのことを吐いてその攻撃を否定した。ペテロから少し離れたところにおられたイエスはふりかえって、悲しみに満ちたしなめるようなまなざしで、ペテロをじっとごらんになった。そのときペテロは、あの二階座敷で語られたイエスのみことばと、「たとい、みんなの者があなたにつまずいても、わたしは決してつまずきません」と熱心にかたく言い張った自分のことばを思い出した。ペテロは、のろい、誓ってまで主をこばんだのであった。しかしイエス

のそのまなざしは、ペテロの心を溶かし、彼を救った。彼は、激しく泣いて、自分の大きな罪を悔い、改心した。そしてその時彼は、兄弟たちを励ます準備ができたのであった。

群衆は、イエスの血を求めてわめきつづけた。彼らは残酷にもイエスを鞭うち、イエスに古い紫の王衣を着せて、その聖なる頭にいばらの冠をくくりつけた。彼らはまたイエスの手に葦をもたせ、その前におじぎをしてあざけりながら、「ユダヤ人の王、ばんざい」とあいさつした。それから彼らは、イエスの手から葦をとって、イエスの頭をたたいた。するといばらはイエスの頭につきささり、イエスの顔とあごひげに血がしたたった。

天使たちは、その光景を見るにしのびなかった。彼らはイエスを救いたいと思ったが、指揮者の天使は彼らをとどめて、これは人類のために払われる大きな代償で、死の能力をもっているサタンは、この完全な代償によって滅ぼされるのだと言った。イエスは、天使たちがこの屈辱の光景を見ているのをご存じだった。どんなに弱い天使でも、このあざける群衆をやすやすと倒して、イエスを救い出すことができるのだった。天父に願いさえしたら、天使たちがすぐに救ってくれることを、イエスは知っておられた。しかし救いの計画を実行するためには、イエスは悪人たちの暴力をしのばねばならなかった。

イエスは、狂暴な群衆があらんかぎりの悪口雑言をあびせるのに、その前に柔和にへり

くだって立っておられた。彼らはイエスの顔につばをはきかけた。それは彼らがいつかはその前から身をかくしたいと願うみ顔であり、また神の都を照らして太陽よりも明るく輝くみ顔なのであった。キリストは暴徒たちに怒った顔を向けられなかった。彼らは古い衣をイエスの頭にかぶせて目かくしをし、その顔をたたいて、「言いあててみよ。打ったのは、だれか」と叫んだ。天使たちはいきり立った。彼らは、すぐにもイエスを救助したいと思っただが、しかし指揮の天使たちにひきとめられた。

弟子たちの中には、大胆にイエスのおられる場所へはいり、さばきの光景を見た者たちがいた。彼らは、イエスが天来の能力をあらわして、敵たちの手からご自身を救い出し、残虐な仕打ちをした敵をこらしめられることを期待した。いろいろな光景が起こるたびに彼らの望みは明るくなったり消えたりした。ある時は、自分たちはだまされているのではないかと疑ったり、恐れたりした。しかし変貌の山で耳にきいた声や、そこで目に見た栄光によつて、イエスは神のみ子であるという信仰が強められていた。彼らは、自分たちの目に見た光景や、イエスが奇跡を行って、病人をいやし、盲人の目をひらき、耳の聞こえない人の耳を聞こえるようにし、悪鬼を戒めて追い出し、死者を生命に甦えらせ、風と海さえしずめられたことなどを心に思い浮かべた。弟子たちは、イエスが死なれるとは信じ

ることができなかった。彼らは、イエスが力をもって立ち上がり、ちょうど彼が神殿にはいられたときに、神の家を商売の場所としていた連中を追い出し、彼らが一団の兵士にでも追跡されるかのようにイエスの前から逃げ出したあの時のように、いまこの血にうえた群衆を、威厳のある声で追い散らされるように望んだ。弟子たちは、イエスが力をあらわして、ご自分がイスラエルの王であることを、みんなにさとらせられるように望んだ。

ユダは、イエスを売り渡した自分の卑劣な行為について、激しい後悔と恥辱に満たされた。彼は、救い主が虐待に堪えておられるのを見たときに、打撃をうけた。彼はイエスを愛したが、しかしそれよりもっと金銭を愛したのだった。彼は、イエスが自分のつれて行った暴徒たちに黙って捕らえられるとは思っていなかった。イエスはきっと奇跡を行ってご自身を救われるだろうと、彼は期待したのだった。しかし、いま法廷で怒りに燃え狂う群衆が血にうえているのを見ると、ユダは深く自分の罪を感じた。大勢の人々が激しくイエスを訴えている間に、ユダは罪なき者の血を売り渡した自分の罪を口に叫びながら、人の間をおしわけて進んだ。彼は自分に支払われた金を祭司たちの前にさし出して、イエスには全く何の罪もないのだと断言し、イエスを釈放してほしいと大声で嘆願した。

ちよつとの間、祭司たちは困惑と混乱を感じてだまった。彼らは、イエスの弟子たるこ



とを名乗っている者のひとりを買収して、イエスを自分たちの手に売り渡させたことを、民衆に知られたくなかった。泥棒でもさがすかのようにイエスをさがしもとめてこっそりつかまえたことを、彼らはかくしておきたかった。しかしユダの告白と、罪にやつれた顔とは、祭司たちのやったことを群衆の前に暴露し、彼らが憎しみのあまりイエスを捕らえたことを明らかにした。イエスに罪はないのだと、ユダが大声で叫ぶと、祭司たちは、「それは、われわれの知ったことか。自分で始末するがよい」と答えた。彼らは、イエスを自分たちの手中におさめることができたので、彼を確保しておこうと決心した。苦悩に逆上したユダは、自分を買収した人々の足元に、いまや軽べつすべきその金を投げつけ、苦悩と恐怖のあまり外へ出て行つて首をつつて死んだ。

イエスのまわりの群衆の中には、多くの同情者があつた。イエスはどんなことを聞かれても何も言わないので、人々は驚いた。暴徒たちがどんなにあざけり、どんなに暴力をふるっても、イエスは顔をしかめたり、困惑の表情をしたりなさらなかった。見物人たちは、驚きの目をみはった。彼らは、姿勢をくずさない厳然たるイエスの態度と、法廷にすわってイエスをさばいている人々の様子を見比べて、イエスがどんな役人たちよりも王者らしく見えるとささやきあつた。イエスには、犯罪者の表情はなかった。イエスの目はあ

だやかに澄んでいて、ひるんだところがなく、そのひたいは広くひいでていた。イエスの顔かたちのどの部分にも、慈悲と気高い原則があらわれていた。彼の忍耐と寛容は、多くの者がふるえあがったほど超人的だった。ヘロデやピラトさえ、イエスのりっぱな神のよきな態度には非常なおそれをおぼえた。

ピラトは初めから、イエスが普通の人間ではないことを確信していた。彼は、イエスがりっぱな人格の持ち主で、人々から告発されているような罪など全然ない人であることを信じていた。その場の光景を見ていた天使たちは、ローマ総督の確信に注目した。キリストを十字架の死にひき渡すこの恐ろしい行為を、彼に犯させまいとして、ひとりの天使がピラトの妻のもとにつかわされ、彼女の夫がいまさばいているのは神のみ子で、罪なき受難者であるということを通し夢を通して教えた。彼女は、イエスのために夢の中で多くのことに苦しめられたから、聖なる人であるイエスにかかわりあいをもたないようにとのことを伝える使者を、すぐにピラトのもとへ送った。使者は、あわただしく群衆の間をおしわけて進み、ピラトの手にその手紙を渡した。手紙を読んだピラトは、身ぶるいして顔色をかえ、キリストを死刑に処すことには何のかかわりも持つまいと、その場で決心した。もしユダヤ人がイエスの血を求めるなら、彼はそれに力をかさないで、イエスを救い出すた

めに骨折りたいと思った。

ピラトは、ヘロデがエルサレムに居ると聞いたとき、すっかり安心した。彼は、イエスの裁判と罪の宣告に関する一切の責任からのがれたいと望んだからである。彼はすぐにイエスを、告発者たちと一緒にヘロデのもとへ送った。この統治者ヘロデの心は、罪のためにかたくなになっていた。バプテスマのヨハネを殺害したことは、彼の良心に、ぬぐい去ることのできない汚点を残していた。彼は、イエスとその大いなるわざについてきいたときに、バプテスマのヨハネが死から甦ったのにちがいないと信じ、ふるえあがって恐れた。ピラトからイエスを自分の手に渡されると、ヘロデはそのことを、自分の権力と権威と判断が認められた証拠であると思なした。このことは、それまで敵同志であつたふたりの統治者を友とするうえに効果があつた。ヘロデは、イエスが自分を満足させるような、何か偉大な奇跡をおこなうものと期待して、イエスに会うことをよろこんだ。しかしイエスの働きは、好奇心を満足させたり、ご自身の安全を求めるためになされるのではなかつた。彼の天来の奇跡的な能力は、ご自身のためではなくて、他人の救いのために用いられるのであつた。

イエスは、ヘロデが問いかけたいろいろな質問に何もお答えにならなかつた。また、激

しくイエスを責める敵たちにも答えられなかった。ヘロデの権力をおそれる様子がイエスに見えないので、ヘロデは怒った。彼は部下の兵士たちと一緒に、この神のみ子を嘲笑し侮辱し、虐待した。しかし彼は、このように屈辱的な虐待をうけておられるときの、イエスのりっぱな神のような顔つきに驚いた。そしてヘロデは、イエスに罪の宣告をくだすことを恐れて、イエスをピラトのもとへ送りかえした。

サタンと悪天使たちは、ピラトをそそのかして、彼を破滅へ陥れようとしていた。彼らは、もしピラトがイエスの処刑に関係しないなら、他の人が処刑するだろう、群衆はイエスの血にかわいているのだ、もしピラトがイエスを十字架につけなかったら、彼は権力と世間の名声を失い、詐欺師の信者として非難されるだろうと、ほのめかした。ピラトは、自分の権力と権威が失われることを恐れたために、イエスの死刑に同意した。ピラトがイエスの血を告発者たちの手に帰し、群衆もそれを受けて、「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってよい」と叫んだにもかかわらず、ピラトは罪をまぬがれるわけにはゆかなかった。彼はキリストの血について罪を犯した。彼は自分の利己的な打算と、地上の権力者たちから受ける名誉への欲望から、ひとりの罪なき人間を死刑に処した。ピラトが、もし自分の確信に従っていたら、彼はイエスの処刑とは何のかかわりも持たな

かったであろう。

さばきを受けておられる間のイエスの態度とことばは、そこに居合わせた多くの人々の心に深い感銘をあたえた。このような影響の結果は、イエスの復活後にみられた。そのとき教会に加えられた人々の中には、イエスの裁判の時から確信に基づいた人々が少なくなかった。

ユダヤ人を通して、あらゆる残酷な仕打ちで、イエスを苦しめても、イエスの口からは一言のつぶやきももれないのを見て、サタンは非常に怒った。イエスは人性をとってはおられるものの、神のような勇氣によってささえられ、天父のみこころから少しも離れられなかった。

### キリストの十字架

神のみ子は、十字架につけられるために、人々に引き渡された。彼らは、勝利の叫びを出して、救い主を連れ去った。彼は、おちで打たれ、殴打されたための、疲労と苦痛と出

血から、弱り衰弱しておられた。それにもかかわらず、彼がまもなく釘づけにされる重い十字架が、彼に負わせられた。イエスは、その重荷の下で気を失われた。彼の肩の上に十字架が三度ものせられ、三度とも彼は倒れられた。それで、まだキリストに対する信仰を公にしてはいなかったが、彼を信じていた、弟子のひとりが捕らえられた。十字架が彼に負わせられた。そして、彼は、処刑の場までそれを運んだ。その上空には、天使の群れが並んでいた。多くのキリストの弟子たちは、カルバリーまで、悲しみと深い嘆きの中に彼に従った。彼らは、ほんの数日前、彼がエルサレムへの勝利の入城をされたのことを思い出した。その時は、彼らは、「いと高き所に、ホサナ」と叫びながら、そして、彼らの衣服や美しいしゅろの枝を道に敷きながら、主についていったのであった。そのとき彼が王国を手に入れて、イスラエルの地上の王として治められると、彼らは考えたのであった。光景はなんと変わったことであろう。彼らの予想はなんとはかなくも碎かれたことであろう。彼らは、喜びと明るい希望ではなくて、恐怖と失望に打ちひしがれて、今、はずかしめられ、いやしめられて、まさに死のうとしておられるかたのあとを、ゆっくりと、悲しみに沈んで従っていった。

イエスの母もそこにいた。愛する母のみが知る苦悩によって、彼女の心はさし貫かれた。

それでもなお、彼女は、弟子たちと同様に、彼が何か大きな奇跡を行って、殺害者たちの手から自分自身を救い出されると期待していた。彼女は、イエスが、ご自分を十字架につけられるままにしておかれるなどとは、とうてい考えることができなかった。しかし、準備はなされて、イエスは十字架の上に横たえられた。金づちと釘が運ばれてきた。弟子たちは、気を失いそうになった。イエスの母は、耐えきれない苦悩に身をかがめた。弟子たちは、救い主が十字架に釘づけにされる前に、その場から彼女を連れ出し、彼の柔らかい手と足の骨や筋肉に釘が打ちこまれる大きな音を聞かすまいとした。イエスは、つぶやかれなかったが、苦痛のあまりうめき声を出された。彼の顔は青ざめ、その顔には、大きな汗のしずくが浮かんでいた。サタンは、神のみ子の苦悩を見て狂喜したが、救いの計画を妨害する彼の努力が無駄になり、彼の王国は失われ、彼はついに滅びなければならないのではないかと恐れた。

イエスが、十字架に釘づけられたあとで、それは持ち上げられ、すでに地面に用意されてあった場所に勢いよく突き立てられたので、肉を引き裂いて、耐えがたい苦痛を与えた。イエスの死を、できるだけ屈辱的なものにするために、ふたりの強盗がイエスと一緒に、ひとりには右に、ひとりには左に、十字架につけられた。強盗たちは、激しく抵抗して、力ず

くで押えられ、腕を広げられて十字架に釘づけられた。しかし、イエスは、おとなしく従われた。十字架の上に彼の腕をのばしておさえる者は、だれもいらなかった。強盗たちが、処刑者たちをのろっていたときに、救い主は、苦悩のなかにあつても、ご自分の敵たちのために祈り、「父よ、彼らをおゆるしくください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」と言われた。キリストが耐えられたのは、単に肉体の苦痛だけではなかった。全世界の罪が、彼の上に置かれた。

イエスが十字架にかかっておられたとき、そこを通りかかった者たちは、あたかも王に頭を下げるかのように頭をふりながら、イエスをののしって言った。「神殿を打ちこわして三日のうちに建てる者よ。もし神の子なら、自分を救え。そして十字架からおりてこい」。サタンは、荒野で、キリストに同じ言葉を用いて、「もしあなたが神の子であるなら」と言った。祭司長たち、長老たち、律法学者たちは、嘲弄して、「他人を救ったが、自分自身を救うことができない。あれがイスラエルの王なのだ。いま十字架からおりてみよ。そうしたら信じよう」と言った。キリストの十字架の場面の上空を飛びかっていた天使たちは、役人たちが、「彼は他人を救ったが、自分自身を救うことができない」と言ったときに、憤りをおぼえた。彼らは、そこで、イエスを助けに来て、彼を救い出したいと願ったが、



そうすることは許されなかった。彼の任務の目的は、まだ達せられていなかった。

イエスは、十字架にかかって、長時間にわたって苦悩しておられたときに、ご自分の母親をお忘れにならなかった。彼女は、恐ろしい場面にもどってきていた。なぜなら、彼女は、自分の子から長く離れていることができなかった。イエスの最後の教訓は、思いやりとやさしい心遣いに関するものであった。彼は彼の母の悲嘆に暮れた顔をごらんになった。そして、それから、彼の愛する弟子ヨハネをごらんになった。彼は、彼の母に、「婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です」と言われた。それから、彼は、ヨハネに「ごらんなさい。これはあなたの母です」と言われた。そのとき以来、ヨハネは、イエスの母を自分の家に引きとった。

イエスは苦悩のために、のどがかわかれた。すると、彼らは苦味をまぜた酢を彼に与えた。しかし、彼は、それをなめてみて、お飲みにならなかった。天使たちは、彼らの愛する指揮官の苦悩を見ていたが、ついに耐えられなくなって、その光景から顔をそむけた。太陽は、恐ろしい光景を見ることを拒んだ。イエスは、彼の殺害者たちの心を恐怖に陥れるような大声で、「**すべてが終った**」と叫ばれた。その時、神殿の幕が、上から下まで裂けた。また、地震があり、岩が裂けた。大いなる暗黒が、地の上をおおった。イエスの死に

よって、弟子たちの最後の希望は消え去ったように思われた。多くの弟子たちが彼の苦難と死の光景を目撃し、彼らの悲しみの杯はあふれた。

その時、サタンは、彼が前に喜んだようには喜ばなかった。彼は、救いの計画を粉碎したいと思っていた。しかし、それは、あまりにも深くすえられていた。そして、今、彼はキリストの死によって、彼自身が、ついに、死ななければならないこと、そして、彼の王国をイエスに引き渡さなければならないことを知った。彼は、彼の天使たちと会議を開いた。彼は、神のみ子に対して、何も勝利することができなかった。そこで、今度、彼らは、いっそう力をふりしぼって策を練り、彼の弟子たちに向かわなければならないかった。彼らは、できるだけ多くの人々が、イエスによって買い取られた救いを受けないように妨害しなければならなかった。サタンは、こうすることによって、なお、神の統治に反対して働くことができるのであった。イエスからできるだけ多くの人々を引き離しておくことは、彼の利益のためでもある。なぜなら、キリストの血によって贖われた人々の罪は、ついには、罪の創始者である彼の上に負わせられて、彼がその罰を受けなければならないからである。一方、イエスによる救いを受け入れない者は、彼ら自身の罪の罰を受けるのである。

キリストの生涯には、この世の富、栄誉、虚飾が伴ったことはなかった。彼の謙遜と自

己犠牲は、祭司や長老たちの誇りと放縦とに對して、著しく対照的なものであつた。彼のしみのない純潔さは、彼らの罪に對する絶え間ない譴責であつた。彼らは、彼が謙遜で清く純潔であられるために、彼を侮つた。しかし、この世で彼を軽べつした人々は、いつか、天の威光と、彼の父のこの上もなく輝かしい栄光に包まれた彼を見るのである。

彼は、審判廷において、彼の血にかわいていた敵に取りかこまれていた。しかし、「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかつてよい」と叫んだそれらの無情な人々は、栄光を受けられた彼を見るのである。全天の天使たちは彼に従い、ほふられたけれども、また生きかえつた偉大な征服者に、勝利と威光と権力とがあるようにと歌うのである。

哀れむべき弱々しい人間が、栄光の王の顔につばきをかけ、その下劣な侮辱の行為に、群衆は、野獸のような勝利の叫びをあげた。彼らは、全天を賛美に満ちあふれさせたあの顔を打ち、残酷にあしらつて傷つけた。彼らは、もう一度、真昼の太陽よりも輝かしいその顔を見て、そのみ前から逃れることを願うようになる。彼らは、あの野獸のような勝利の叫びのかわりに、彼のゆえに泣きわめくのである。

イエスは、十字架の傷がついた手をお示しになる。彼は、この残酷な行為の傷跡を永久

におとどめになる。ひとつひとつの釘のあとは、人間の贖罪の驚くべき物語と、そのために払われた高価な値とを語るのである。生命の主のわき腹にやりをつきさしたその当人たちは、やりのあとを見て、彼の体を傷つけるために自分たちが果たした役割を、深く嘆くのである。

彼の殺害者たちは、十字架上の彼の頭の上に、「ユダヤ人の王」と書いてあったのが、非常に不服であった。しかし、その時には、彼が栄光に輝き、王の権力を持つておられるのを見なければならぬ。彼らは、彼の着物にも、そのもにも、「王の王、主の主」と生きた文字で書かれているのを見るのである。彼らは、彼が十字架にかかっておられたときに、嘲笑して、「あれがイスラエルの王なのだ。いま十字架からおりてみよ。そうしたら信じよう」と叫んだ。しかし、その時、彼らは、王の力と権威をもった彼を見る。彼らは、彼がイスラエルの王であるというなんの証拠も求めない。彼らは、その威光と大いなる栄光に圧倒されて、「主の御名によってきたる者に、祝福あれ」と認めなければならなくなる。

イエスが声高く「すべてが終った」と叫んで、息をひきとられたとき、地震が起こり、岩が裂け、暗黒が地をおおったのを見て、敵たちはうろたえ、殺害者たちはふるえた。弟子たちは、こうした不思議な現象に驚いた。しかし、彼らの希望は、くじかれていた。彼

らは、ユダヤ人が彼らをも殺そうとするだろうと恐れた。神のみ子に対してあらわされたこのような憎しみが、ただ彼だけで終わるはずはないと、彼らは思った。彼らは、自分の失望を嘆きながら、淋しく時間を過ごした。彼らは、イエスが、この世の王として支配されることを期待していたが、その希望は、イエスの死とともに消え去った。彼らは悲しみと失望の中で、自分たちは、彼に欺かれていたのではないかと疑った。彼の母でさえ、彼がメシヤであるという信仰に動揺をきたした。

弟子たちは、イエスのことについて失望はしたけれども、なお、彼を愛していた。そして、彼の遺体を、丁重に葬りたいと思ったが、それを受けとる方法を知らなかった。金持ちでユダヤ人の有力な議員であり、また、イエスの真の弟子であった、アリマタヤのヨセフが、ひそかにしかも大胆にピラトのところへ行つて、救い主のからだの引き取り方を願ひ出た。彼は、ユダヤ人の憎しみのゆえに、公然と行くことはしなかった。弟子たちは、キリストの体を丁重に安息の場所に葬ることを彼らに妨害されるのではないかと恐れた。ピラトは、その願いを許した。弟子たちは、イエスのなきがらを十字架からおろした。彼らは非常な苦悶のうちに、彼らの希望がくじかれたことを嘆いた。彼らはなきがらを麻布で念入りに巻いて、ヨセフの新しい墓に納めた。

キリストが生きておられたときに、彼のいやしい弟子たちであつた女たちは、彼が墓に納められ、敵が彼のなきがらを奪い去るといけないので、重い大きな石がその入口の前におかれるまで、彼のそばを離れようとしなかった。しかし、恐れる必要はなかった。なぜなら、わたしは、天使の軍勢が、言葉では言い表せないような深い関心をもって、イエスの安息の場所を見守っているのを見たからである。彼らは、栄光の王が、その獄屋から解き放たれるときに、自分たちの果たすべき役割に対する命令を、今やおそしと待ちかまえていた。

キリストの殺害者たちは、彼が生きかえって、彼らから逃亡するのではないかと恐れた。そこで、彼らは、三日目まで墓に番兵をおくことをピラトに願い出た。この願いは許された。そして、彼の弟子たちが、彼を盗み出して、彼が死人の中からよみがえったのだと言うことができないように、入口の石には封印がおされた。

## キリストの復活

弟子たちは、主イエスの死を悲しみながら、安息日を休んだ。栄光の王イエスは、墓の中に横たわっておられた。夜になると、兵士たちが、イエスの墓を警護するために部署についた。一方、目に見えない天使たちも、その神聖な場所の上を舞いかけていた。夜はだんだんふけて行つた。見守っていた天使たちは、まだ暗いうちに、神の愛し子であり彼らの司令官である主イエスの解放の 때가近づいていることを知っていた。彼らが、キリストの勝利される時を、深い感動をもって待ちうけていると、ひとりの大いなる天使が、非常な勢いで天から飛んで来た。彼の顔はいなずまのようで、その衣は雪のように白かった。彼の光は、その通路のやみを四散させ、これまで勝ち誇ってイエスのなきがらを自分たちのものにしていた悪天使たちは、この天使の光輝と栄光に恐れて逃げ出した。キリストの屈辱の光景を目撃し、そのいこいの場所を見守っていた天使軍の中のひとり、天から飛んできた天使と一緒に、墓所へおりてきた。彼らが近づくと地が揺れ動き、大

地震が起こった。

ローマの番兵は恐怖にとりつかれた。イエスのなきがらを守る彼らの力は、今や消えうせた。彼らは、自分たちの任務とか、弟子たちがイエスのなきがらを盗み去りはしないかなどということは、考えなかった。天使たちの光が、太陽よりも明るく照りわたると、ローマの番兵たちは、死んだように地面に倒れた。天使のひとり、大きな石に手をかけて墓所の入口からころがし、その上に腰かけた。もうひとりの天使は、墓にはいつて、イエスの頭から布をとり去った。天からきた天使は、そのとき地をゆるがす大声で、「神のみ子よ、父があなたを呼んでおられます。出てきてください」と叫んだ。死はもはやイエスを支配する権を保つことができなかった。イエスは、勝ち誇った勝利者として、死から立ち上げられた。天使の軍勢は、厳粛なおそれをもって、その光景を見守った。イエスが墓から姿を現わされると、光かがやく天使たちは地にひれふしてイエスを拝し、勝利の凱歌をあげて歓呼した。

サタンの悪天使たちは、善天使たちの鋭く輝く光の前に、逃げうせなければならなかった。彼らは虜にしていたイエスをむりに奪いとられ、あんなに憎んでいたイエスが死からよみがえったことについて、王のサタンに激しく不平を言った。サタンと悪天使たちは、



墮落した人類に対する彼らの権力によって生命の君を墓に横たわらせることができたことを、得意になってよろこんでいたが、彼らの悪魔的な勝利のよろこびもつかのまだった。イエスが偉大な勝利者として獄から歩いて出てこられたとき、サタンは、ある時期がすぎると自分は死なねばならないことや、自分の王国が、正当な権利をもっておられるイエスの手に移らねばならないことを知った。あらんかぎりの努力をしたにもかかわらず、イエスはうち負かされるどころか、かえって人類のために救いの道を開き、その道を歩む者はだれでも救われるようになったことを、サタンは嘆き、怒った。

悪天使たちと首長のサタンは集まって会議を開き、どうしたらさらに神の統治に対抗できるかを協議した。サタンは部下の者たちに、祭司の長と長老たちのところへ行くように命じた。彼はこう言った、「われわれは彼らを欺き、イエスに対して彼らの目をおおい、その心をかたくなにすることに成功した。われわれは彼らに、イエスが詐欺師だと信じさせた。あのローマ人の番兵は、キリストがよみがえったという憎むべき知らせをひろめるだろう。われわれは祭司や長老たちにイエスを憎ませ、殺させた。だから、もしイエスがよみがえったことが知れわたったら、彼らは罪のない人間を殺したかどで石で打たれると、彼らに思わせるがよい。」

天使の軍勢が墓所から離れ去り、光と栄光が消えうせると、ローマ人の番兵たちは、おそるおそる頭をあげてまわりをみまわした。あの大きな石が墓所の入口からころがされ、イエスのなきがらは見えなくなっているのに気がついて、彼らは仰天した。彼らに見た通りのことを祭司や長老たちに知らせるために、町へ急いだ。虐殺者たちは驚くべき知らせを聞いて、だれも彼も色を失った。彼らは自分たちのしたことを思って、恐怖にとりつかれた。知らせが事実だとすれば、彼らは滅びてしまう。しばらくの間、彼らはどうしたらよいのか、どう言ったらよいのかわからないで、ただ顔を見合わせたまま黙ってすわっていた。その知らせを信じることは、自分たち自身に罪の宣告をくだすことになる。彼らはしりぞいて、どうしたらよいかを相談した。番兵たちのもってきた報告が、もし民衆の間にひろがるようなことにでもなったら、キリストを死刑にした者たちは、虐殺者として殺されてしまうだろうと彼らは推測した。そこで兵士たちを買収して、この事を秘密にしておこうときめた。祭司と長老たちは、多額の金銭を兵士たちに提供して、「『弟子たちが夜中にきて、われわれの寝ている間に彼を盗んだ』と言え」と言った。番兵たちは、任務についていて眠ったということになると、どんなことになるのだろうとたずねたが、ユダヤの役人たちは、総督を説得してお前たちの身の安全を保証してやると約束した。金銭の

ために、ローマ人の番兵たちは名誉心を売り、祭司と長老たちの勧めに従うことを承知した。

イエスが十字架につけられて、「**すべてが終った**」と叫ばれたとき、岩は裂け、地はふるい、墓のいくつかが開かれた。地がゆれ動き、天の栄光が聖なる場所のあたりに輝いている中を、イエスが、死と陰府に勝利したお方としてよみがえられたとき、キリストの召しに従った者として死んだ多くの義人が、キリストのよみがえりの証人として姿を現した。これらの恵まれた、よみがえった聖徒たちは、栄化された姿で現れた。彼らは、創造の時からキリストの時代までにいたる、各時代のえらばれた聖徒たちだった。こうしてユダヤの指導者たちが、キリストのよみがえりの事実をひたかくしにかくそうとしていたときに神は一団の人々を墓からよみがえらせて、イエスのよみがえりを立証させ、神の栄光を宣言させられたのであった。

よみがえったこれらの聖徒たちは、身長も姿も一様ではなく、ある者は他の者よりも高貴な容貌をしていた。わたしは、地の住民が退化して、力と美しさを失いつつあることを知らされた。サタンは病気と死の能力を持っていて、時代が進むにしたがって呪いの結果はますます目だち、サタンの力はますますはつきり目に見えるようになってきている。ノ

アやアブラハムの時代に住んでいた人々は、姿も美しさも力も天使に似ていた。しかし、次々と時代が進むにつれて、人間はだんだん弱くなって病氣にかかりやすくなり、一生の期間がだんだん短くなってきた。サタンは、どうしたら人類を弱め、困らせることができるかということの研究している。

イエスのよみがえりについて出てきた人たちは、多くの人々に現れて、人類のために犠牲のささげ物が完成されたことと、ユダヤ人が十字架につけたイエスが死からよみがえられたことを告げた。そして、そのことばの証拠として、「われわれは彼と共によみがえった者である」と宣言した。彼らは、自分たちが墓から呼び出されたのは、イエスの大いなる力によるものだと言った。偽りの知らせが言いふらされたにもかかわらず、キリストのよみがえりは、サタンも悪天使たちも祭司長らもかくすことができなかった。なぜなら墓からよみがえったこの聖徒の一団が、不思議なうれしい知らせをひろめ、イエスもまた悲嘆にくれた失意の弟子たちに現れて、彼らの心配を払いのけ、その心によるこびを満たされたからである。

この知らせが、都市から都市に、町から町に伝わったときに、今度は、ユダヤ人たちが自分たちの生命の危険を感じて、弟子たちに対して抱いた憎しみをかくした。彼らの唯一

の望みは、偽りの知らせを広めることであつた。そして、この偽りを眞実であるようにと望んだ人々が、それを受け入れた。ピラトは、キリストのよみがえりを聞いたときにふるえた。彼は、なされた証言を疑うことができなかった。そして、その時から、彼は心の平安を永久に失つた。彼は、世の栄誉のため、彼の権威と生命とを失うことを恐れたため、イエスを死に渡したのであつた。彼は、ただ単に、罪のないではなくて、神のみ子の血を流した罪を、はつきりと認めるに至つた。ピトラの生涯は、その最後まで、実に悲惨なものであつた。彼の心は絶望と苦悶にさいなまれて、希望も喜びもなくなつてしまつた。彼は、だれからも慰められることを拒んで、最も悲惨な死にかたをした。

ヘロデ(注)の心は、さらにかたくなになつていた。そして彼は、キリストのよみがえりについて聞いたとき、それほど気にもかけなかった。彼は、ヤコブの生命を取り、これがユダヤ人を喜ばせたのを見て、ペテロをも捕らえ、彼を殺そうとしていた。しかし、神は、ペテロになすべき仕事をお与えになつていたので、天使を送つて彼を救い出された。ヘロデは、神の刑罰を受けた。彼は、大群衆の前で、自分自身を賞賛していたときに、主の天使に打たれて、最も恐ろしい死にかたをした。

週  
の  
初  
め  
の  
日  
の  
朝  
早  
く、  
夜  
明  
け  
前  
に、  
き  
よ  
い  
女  
た  
ち  
が  
イ  
エ  
ス  
の  
か  
ら  
だ  
に  
油  
を  
塗  
る  
た  
め  
に  
香  
料  
を  
も  
っ  
て  
や  
っ  
て  
き  
た。  
見  
る  
と  
重  
い  
石  
は  
墓  
所  
の  
入  
口  
か  
ら  
こ  
ろ  
が  
さ  
れ  
て、  
イ  
エ  
ス  
の  
な  
き  
が

注

キリストの裁判に関係したのは、ヘロデ・アンテパスで、ヤコブを処刑したのは、ヘロデ・アグリッパであった。アグリッパは、アンテパスのあいであり、義兄弟であった。彼は、陰謀をめぐらして、アンテパスの王位を獲得し、権力を得てからは、アンテパスと同様にキリスト者たちを迫害した。ヘロデ王朝の中で、ヘロデという王が六人あった。ヘロデというのは総称であって、個々の名前として、アンテパス、ピリポ、アグリッパなどがあつた。それは、皇帝ということで、例えばニコラス皇帝、アレキサンダー皇帝などというのと同じである。この場合、ヤコブを殺したアグリッパは、その少し前に、キリストの裁判に関係のあつたアンテパスの王位につき、彼と同じ精神をあらわしていることから、この言葉が用いられているのは妥当である。黙示録一二ノ二七の「龍」と、三節の龍とが同じものであつて、その背後的力量が、九節の龍であるのと同様に、人間は、別であるが、同じヘロデ家の精神が現されている。そして、それは、異教ローマによって働くと共に米国の政府によっても働くのである。

らはそこになかった。女たちの心は重く沈んだ。彼女たちは、イエスのなきがらが敵に持ち出されたのではないかと心配した。すると突然、光り輝く顔をしたふたりの白衣の天使が目についた。天使たちは女たちの用事を知っていて、すぐに、イエスがそこにあられないことを告げた。イエスはよみがえってあられたが、彼女たちは、イエスがこれまで横たわってあられた場所を見ることができた。天使は彼女たちに、行って弟子たちに、イエスは先にガリラヤに行かれたと告げよと命じた。心配と非常なよろこびのいりまじった思いで、女たちは、悲しんでいる弟子たちのもとにいそいでひきかえし、いま見聞きしたことを語った。

弟子たちは、キリストがよみがえられたことを信じることができなかつたが、その知らせをもってきた女たちと一緒に、いそいで墓所へかけつけた。イエスはやはりそこにあられなかつた。イエスの亜麻布がそこにあつたが、彼らは、イエスが死からよみがえられたといううれしい知らせを、信じることができなかつた。彼らは、目に見たことや、女たちのもってきた知らせに驚きながら、家へもどつた。しかしマリヤは、自分の見たことについて考え、だまされているのではないかという思いとたたかいながら、墓所のあたりにたずんでいた。彼女は、新しい試練が自分を待ちかまえているのを感じた。するとまた悲

しみがこみあげてきて、彼女ははげしく泣いた。マリヤがもう一度腰をかがめて、墓の中をのぞきこんで見ると、そこに白い衣を着たふたりの天使が見えた。ひとりの天使は、イエスが横たわっていたその頭のあたりに、ひとりの天使は、イエスの足のあたりにすわっていた。天使たちは優しい声で、マリヤに、なぜ泣くのかとたずねた。彼女は、「だけれが、わたしの主を取り去りました。そして、どこに置いたのか、わからないのです」と答えた。

墓の中を見ていたマリヤがふりかえると、イエスが近くに立っておられるのが見えたがしかしマリヤには、それがイエスであるとはわからなかった。イエスは、彼女がなぜ泣いているのか、まだだれをさがしているのかと、優しくおたずねになった。マリヤはその人を園の番人だと思って、もしあなたがイエスを運び去ったのだったら、イエスをどこにおいたのか、自分がイエスをはこびたいからその場所を教えてほしいとたのんだ。イエスは、ご自身の天来の声で「マリヤよ」と言われた。マリヤは、そのなつかしい声の調子をよく知っていたので、すぐに「主よ」と答えて、よろこびのあまり、イエスにだきつこうとした。するとイエスは、「わたしにさわってはいけない。わたしは、まだ父のもとに上っていないのだから。ただ、わたしの兄弟たちの所に行って、『わたしは、わたしの父また



あなたがたの父であつて、わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上つて行く」と、彼らに伝えなさい」と言われた。マリヤはうれしい知らせをもって、大よろこびで弟子たちのもとへ急いだ。イエスは、神が犠牲を受け入れてくださったことを神の口からきき、天と地の一切の権力を受けるために、すぐに天父のもとへおのほりになった。

天使たちは、雲のようにおらがって神のみ子をかこみ、栄光の王がお入りになるために永遠の門に開けと命じた。イエスは神の御前にあつて、光り輝く天使の群れと一緒におられる間も、地上の弟子たちのことを忘れず、ふたたびもどつて彼らに力を授けるために、その力を天父からお受けになった。同じ日にイエスは地上にもどつて、弟子たちの前に姿をあらわされた。イエスは、天父のもとにのほつて力をお受けになったので、こんどは弟子たちが自分のからだにさわるのをお許しになった。

その時には、トマスはそこにいなかった。彼は弟子たちの報告を謙虚な心で信じようとせず、自分の指をイエスの手の釘あとに、自分の手を残酷な槍につきさされたイエスのわき腹にさしこんでみるまでは信じないと、自信に満ちてきっぱりと断言した。このことによつて、彼は兄弟たちに対する信頼に欠けていることを示した。もしみんなが同じように証拠をもとめたら、いまイエスを受け入れ、イエスのよみがえりを信じる者はひとりもい

ないだろう。しかしよみがえられた救い主を自分で見たり聞いたりすることができなかった者は、弟子たちの報告を信ずるようになってというのが、神のみこころだった。神はトマスの不信をおよろこびにならなかった。イエスがふたたび弟子たちとお会いになったとき、トマスもそこにいた。彼はイエスを見て信じた。しかし彼はただ見るだけでなく、さわってみなくては満足できないとかねて宣言していたので、イエスは彼の希望通りの証拠をお与えになった。トマスは「わが主よ、わが神よ」と叫んだ。しかしイエスは「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」とおっしゃって、トマスの不信をお責めになった。

それと同じように、第一天使の使命と第二天使の使命の経験がない人々は、それらを経験し、それに最後まで従っていった他の人々から、それらを受けなければならぬ。イエスが拒否されたのと同じように、これらの使命も拒否されるのを、わたしは見た。そして、弟子たちが、わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないと宣言したのと同じように、神のしもべたちも、忠実に恐れることなく、第三の天使の使命に関連した真理の一部だけを受け入れた人々に対して、警告を発し、神が彼らにお与えになったすべての使命を喜んで受け入れるべきであって、さもないとこれとはなん

の関係もない、と言わなければならない。

聖なる婦人たちが、イエスの復活の知らせを伝えていたときに、ローマの番兵たちは、祭司長たちや長老たちに言われたように、弟子たちが夜中にきて、われわれの寝ている間に彼を盗んだという偽りを広めていた。サタンが、この偽りを祭司長たちの心と口にいった。そして、人々は、彼らの言葉をすぐに信じた。しかし、神は、この事を確実なものにしておられ、われわれの救いがかかっているこの重要な事件を、疑う余地のないものにしておられた。そして、祭司たちや長老たちは、これをおおいかくすことができなかった。キリストの復活をあかしするために、証人たちが死人の中からよみがえらされたのである。

イエスは弟子たちと四十日間とどまって、神の国の実在をますますはつきりと彼らに示し、彼らの心に喜びをお与えになった。イエスは、弟子たちが、キリストの苦難と死とよみがえりについて見たり聞いたりした事から、すなわち、望む者はすべてキリストのもとにきて生命を得るように、キリストが罪のために犠牲になられたことを、証言するようにとその任務を彼らにお与えになった。弟子たちが迫害と困難に会うこと、それでもなお彼らは自分たちの経験を思い起こし、イエスが自分たちに語られたみことばを思い出して安心するようにということを、イエスはいつもとかわらない優しさで彼らに語られた。イエ

スはまだ、ご自分がサタンの誘惑にうち勝ち、試練と苦難をへて勝利をかちとられたことをお語りになった。サタンはもはやイエスの上に権力をとることができないので、弟子たちの上に、またイエスの名を信ずるすべての者の上に、ますます直接に誘惑をしおけるようになる。しかしイエスが勝利されたように、彼らも勝利することができる。イエスは弟子たちに、奇跡を行う能力をさずけられた。イエスは弟子たちに、彼らが悪人から迫害されても、イエスがその時々には天使を送って助けてくださることや、使命を達成し終わるまでは彼らの生命はとられないことや、自分のたてた証言を最後に自分の血をもって印しなければならぬことなどを、お語りになった。

熱心な弟子たちは、よろこんでイエスの教えに耳をかたむけ、イエスの聖なる唇から出る一言一言を心から喜び受けた。今こそ彼らは、イエスが世の救い主であることを確かに知った。イエスのみことばは、彼らの心の奥深くにはいつていった。彼らは、まもなくこの天来の教師と別れなければならないこと、そして、イエスの唇から恵みにあふれた慰めのことばをもう聞くことができなくなることを悲しんだ。しかしイエスが、彼らのために行って住居を備えたら、彼らを迎えにふたたびきて、こんどはいつまでも一緒に居ることができると言われたとき、彼らの心はふたたび愛と大いなる喜びに暖められた。イエ

スはまた、助け主すなわち聖霊を送って、彼らをすべての真理にみちびくと約束なされた。そしてイエスは、「手をあげて彼らを祝福された」。

### キリストの昇天

全天は、キリストが天父のもとに昇られるその勝利の時を待っていた。天使たちは、栄光の王を迎えて、勝利の中に彼を天まで護衛するためにやってきた。イエスは弟子たちを祝福なさると、彼らから離れて天へ上げられた。イエスが天へのぼって行かれると、イエスの復活と一緒によみがえられた多数の虜がこれに従った。多数の天使の軍勢が随行するとともに、一方天では、無数の天使の群れがイエスの到着を待っていた。一行が聖都にのぼって行くと、イエスに共奉していた天使たちが、「門よ、こうべをあげよ。とこしえの戸よ、あがれ。栄光の王がはいられる」と叫ぶ。すると都の中の天使たちが、歓喜の声をあげて、「栄光の王とはだれか」と叫ぶ。護衛の天使たちは勝利の中に、「強く勇ましい主、戦いに勇ましい主である。門よ、こうべをあげよ。とこしえの戸よ、あがれ。栄光の王が

はいられる」と答える。もう一度待ちうけている天使たちは、「この栄光の王とはだれか」とたずねる。護衛の天使たちは、歌声の調子で、「万軍の主、これこそ栄光の王である」と答える。こうして天の一行は神の都にはいつていった。そのとき全天の天使たちが、威風堂々としたこの司令官をとり囲み、深い尊敬の思いをこめてイエスの前に頭をたれ、光り輝く冠をイエスの足元に投げる。そして彼らは、黄金の立琴をとりあげてかきならし、美しい楽の調べが、殺されてなお威厳と栄光の中に再び生きておられる小羊イエスへささげられる美しい音楽と歌となって、全天を満たす。

弟子たちが、天へ昇られたイエスの最後の面影を見失うまいとして、悲しい思いのうちに天をみつめていると、白い衣を着たふたりの天使が彼らのかたわらに立ち、「ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう」と言った。弟子たちは、神のみ子の昇天と一緒に目に見たイエスの母と共に、その晩、イエスの不思議な行動と短い期間に起こった不思議な輝かしいできごとについて語り合った。

サタンはもう一度悪天使たちと相談し、神の統治に対する激しい憎しみをこめて、自分

が地上の権力と権威をにぎっているかぎり、これまでの十倍もの努力をもってイエスの弟子たちに反対しなければならぬと彼らに語った。自分たちは、キリストに対して一度として勝ったことはないが、しかしできれば、その弟子たちを倒さねばならない。各時代にわたって、自分たちは、イエスを信じる者をわなにかけるために努力しなければならない。サタンは、イエスが弟子たちに、悪天使をいましてこれを追い出し、悪天使どもに苦しめられる者をいやす能力をお与えになったことを語った。こうしてサタンの天使たちは、ほえたけるししのように、イエスを信じる者たちを滅ぼすために出て行った。

### キリストの弟子たち

大いなる力をもって、弟子たちは、十字架にかけられよみがえられた救い主を宣べ伝えた。彼らは、イエスの名によって、しるしと奇跡を行った。病人はいやされた。生まれながらの足なえが完全な健康を回復し、すべての人々の前で、あるき回ったり踊ったりして神を賛美しながら、ペテロとヨハネと一緒に宮にはいって行った。この知らせが広がって

人々は、弟子たちの回りに押し付けてきた。多くの人々が走り寄ってきて、行われたいやしのわざを見て、大いに驚いた。

祭司たちは、イエスが亡くなったときに、もう奇跡は、彼らの間で行われることはなく、興奮もさめて、人々はふたたび人間の言い伝えにかえってくるものと思った。ところが、どうであろう。弟子たちは、彼らのまっただ中で、奇跡を行い、人々は、驚きに満たされている。イエスは十字架にかけられたのに、彼の弟子たちは、一体どこからこの力を得たのだろうか、彼らは不思議に思った。彼が生きていた時には、彼が彼らに力を与えたのだと彼らは思っていた。彼は、もう死んでしまったのであるから、奇跡もそれで終わるものと彼らは予想していた。ペテロは、彼らの当惑した様子を見て言った。「イスラエルの人たちよ、なぜこの事を不思議に思うのか。また、わたしたちが自分の力や信心で、あの人を歩かせたかのように、なぜわたしたちを見つめているのか。アブラハム、イサク、ヤコブの神、わたしたちの先祖の神は、その僕イエスに栄光を賜ったのであるが、あなたがたは、このイエスを引き渡し、ピラトがゆるすことを決めていたのに、それを彼の面前で拒んだ。あなたがたは、この聖なる正しいかたを拒んで、人殺しの男をゆるすように要求し、いのちの君を殺してしまった。しかし、神はこのイエスを死人の中から、よみがえら



せた。わたしたちは、その事の証人である。そして、イエスの名が、それを信じる信仰のゆえに、あなたがたのいま見て知っているこの人を、強くしたのである」。

祭司長たちや長老たちは、このような言葉を聞くに耐えず、命令を下して、ペテロとヨハネを捕え、投獄した。しかし、弟子たちのただ一度の説教を聞いただけで、幾千の人々が悔い改め、キリストの復活と昇天を信じるようになった。祭司たちや長老たちは、困惑した。彼らは、人々の心を自分たちに向けるために、イエスを殺したのであった。しかし、事態は、以前よりも悪化した。弟子たちは、公然と、彼らが神の子の殺害者であると非難した。そして、この事態がどのように発展するのか、また、人々からどのように思われるのか、見当がつかなかった。彼らは、ペテロとヨハネを殺害したかったけれども、人々を恐れて、あえて手を下さなかった。

その次の日、使徒たちは、議会の前に引き出された。イエスの血を求めてやまなかったその当人たちがそこにいた。彼らは、ペテロが、彼の弟子のひとりであろうとがめられたときに、のしり誓って、彼の主を拒んだことを聞いていた。それで彼らは、もう一度彼をおどそうとした。しかし、ペテロは悔い改めていた。そして、今、彼は、これを機会に、軽率にも臆病に主を拒んだ汚名を除き、以前に傷つけたみ名を高めようとした。彼は、

聖なる勇氣と聖霊の力によって、恐れることなく、彼らに宣言した。「この人が元気になるってみんなの前に立っているのは、ひとえに、あなたがたが十字架につけて殺したのを、神が死人の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの御名によるのである。このイエスこそは『あなたがた家造りらに捨てられたが、隅のかしら石となつた石』なのである。この人による以外に救いはない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである」。

人々は、ペテロとヨハネの大胆なのに驚き、彼らが、イエスと共にいた者であることを認めた。彼らの氣高く、恐れるところのない行動は、敵の前に立たれたイエスの行動のようであつた。イエスは、ペテロが彼を拒んだときに、哀れみと悲しみの一べつによって彼を責められた。今、ペテロは勇敢に彼の主を認めて、主の是認と祝福にあずかつたのである。彼は、イエスの是認にあずかつたしるしとして、聖霊に満たされた。

祭司たちは、彼らが弟子たちに対して抱いた憎しみをあえてあらわさなかつた。彼らは、ふたりに議会から退場するように命じてから、互いに協議をつづけて言った。「あの人たちを、どうしたらよからうか。彼らによって著しいしるしが行われたことは、エルサレムの住民全体に知れわたっているので、否定しようもない」。彼らは、この善行の知らせが、

人々の間にひろがるのを恐れていた。祭司たちは、もしもこれが一般に知れ渡れば、彼ら自身の権力は失われ、彼らはイエスの殺害者とみなされることだろうと感じた。だが、彼らがあえてしたことは、使徒たちをおどして、今後は、イエスの名によっていっさい語ってはならぬ、さもないと死刑であると命じただけであつた。しかし、ペテロは、自分の見たこと聞いたことを、語らないわけにはいかないと、勇敢に宣言した。

弟子たちは、イエスの力によつて、彼らのところに連れて来られる苦しんでいる者や病人をいやしつづけた。毎日、幾百人という人々が、十字架につけられ、よみがえり、昇天された救い主の旗の下に加わつた。祭司長や長老たち、そして、特に彼らと行動を共にしていた者たちは驚いた。彼らは、人々の興奮が冷却することを望んで、ふたたび使徒たちを投獄した。サタンと彼の天使たちは喜んだ。しかし、神の天使が牢獄の戸を開いて、祭司長や長老たちの命令とは逆に、使徒たちに命じて言った。「さあ行きなさい。そして、宮の庭に立ち、この命の言葉を漏れなく人々に語りなさい」。

議会が召集され、囚人たちを引き出すために人をつかわした。下役どもが、獄の戸の錠をはずしてみると、彼らがたずねている者は、そこにいなかった。彼らは、祭司長や長老たちのところへ引き返して「獄には、しっかりと錠がかけてあり、戸口には、番人が立つ

ていました。ところが、あけて見たら、中にはだれもいませんでした」。「そこへ、ある人がきて知らせた、『行ってごらんさい。あなたがたが獄に入れたあの人たちが、宮の庭に立って、民衆を教えています』。そこで宮守がしらが、下役どもと一緒に出かけに行って、使徒たちを連れてきた。しかし、人々に石で打ち殺されるのを恐れて、手荒なことはせず、彼らを連れてきて、議会の中に立たせた。すると大祭司が問うて、言った。『あの名を使って教えるはならないと、きびしく命じておいたではないか。それなのに、なんという事だ。エルサレム中にあなたがたの教を、はんらんさせている。あなたがたは確かに、あの人々の血の責任をわたしたちに負わせようと、たくらんでいるのだ』」。

これらのユダヤの指導者たちは偽善者であった。彼らは、神を愛するよりは、人々の賞賛を愛していた。彼らの心は、かたくなになってしまい、使徒たちの行った最も大きな働きも、ただ彼らを激怒させるだけだった。彼らは、もし弟子たちが、イエスと彼の十字架と復活と昇天を宣べ伝えたならば、自分たちがイエスの殺害者として罪に定められることを知っていた。彼らは、「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってもよい」と言ったが、イエスの血の責任をとろうとしなかった。

使徒たちは、勇敢に、自分たちは、人間に従うよりは、神に従うべきであると宣言した。

「わたしたちの先祖の神は、あなたがたが木にかけて殺したイエスをよみがえらせ、そして、イスラエルを悔い改めさせてこれに罪のゆるしを与えるために、このイエスを導き手とし救主として、ご自身の右に上げられたのである。わたしたちはこれらの事の証人である。神がご自身に従う者に賜わった聖霊もまた、その証人である」。このような恐れを知らぬ言葉を聞いて、殺害者たちは激怒し、使徒たちを殺して、ふたたび彼らの手を血に染める決意を固めた。彼らが、殺害の計画を立てていたときに、神の天使が、ガマリエルの心に働いて、祭司たちや役人たちに次のように勧告させた。「あの人たちから手を引いて、そのなすままにしておきなさい。その企てや、しわざが、人間から出たものなら、自滅するだろう。しかし、もし神から出たものなら、あの人たちを滅ぼすことはできまい。まかり違えば、諸君は神を敵にまわすことになるかも知れない」。悪天使たちは、祭司長たちや長老たちに働きかけて、使徒たちを殺そうとしていた。しかし、神は、天使を送って、ユダヤ人の指導者自身の中から、神のしもべたちに味方する声をあげて、それを防がれたのである。使徒たちの働きは、終わっていなかった。彼らは、イエスの名と、彼らが見たり聞いたりしたことについて、あかしをするために、王たちの前に立たなければならなかったのである。

祭司たちは、使徒たちをむち打って、今後はイエスの名によって語ってはならぬと命じた後、不本意ながら彼らを釈放した。「使徒たちは、御名のために恥を加えられるに足る者とされたことを喜びながら、議会から出てきた。そして、毎日、宮や家で、イエスがキリストであることを、引きつづき教えたり宣べ伝えたりした」。こうして、神の言葉は、ふえひろがった。弟子たちは、大胆に、彼らが見たり聞いたりしたことをあかしした。そして彼らは、イエスの名によって、大きな奇跡を行なった。弟子たちは、恐れることなく、神のみに対して力をふるうことを許されたときイエスの血の責任を進んでと言った人々に、その責任を負わせた。

わたしは、各時代のキリストの弟子たちにとって、錨の役割を果たす、神聖で重要な真理を、特別に注意して守るようと、神の天使たちが任命を受けるのを見た。イスラエルの希望となるべき重要な真理、すなわち、われわれの主の十字架、復活、昇天などの証人である使徒たちの上に、聖霊が特別にくだった。すべての者は、世の救い主を彼らの唯一の希望とし、彼がご自分の生命を犠牲にしてお開きになった道に従って歩き、神の戒めを守って生きるものであった。わたしは、イエスが、ご自分がそのためにユダヤ人に憎まれ、殺されたところのその同じ働きを、弟子たちに推し進めさせるために、彼らに、力をお与

えになったのは、イエスの知恵であり恵みであることを見た。彼らは、イエスの名によって、サタンの働きに勝つ力が与えられた。イエスの死と復活の時を中心にして、光と栄光の輪が輝き、彼が世の救い主であるという聖なる真理を永久に記念しているのである。

## ステパノの死

弟子たちは、エルサレムで大いに増加し、祭司たちも多数、信仰を受け入れるようになった。ステパノは、信仰に満ちあふれて、人々の間で、大きなしるしや奇跡を行っていた。ユダヤの指導者たちは、祭司たちが彼らの言い伝えを捨て、犠牲や供え物を捨てて、イエスを大いなる犠牲として受け入れているのを見て、非常な怒りに燃えた。ステパノは、上からの力をもって、不信仰な祭司や長老たちを譴責し、彼らの前でイエスを高めた。彼らは、彼の語る知恵と力に対抗することができず、彼に対して何一つ打ち勝つことができないことを悟ると、彼がモーセと神に対して不敬な言葉を語ったという偽りの証言をさせるために、人々を買収した。彼らは、人々を扇動してステパノを捕えた。そして、偽りの証

人たちによって、彼が宮と律法に逆らって語ったと非難した。彼らは、このナザレのイエスは、モーセが彼らに与えた習慣を変えてしまうだろうと彼が言うのを聞いたと証言した。

ステパノが、裁判官たちの前に立ったとき、神の栄光の光が、彼の顔に輝いた。「議会で席についていた人たちは皆、ステパノに目を注いだが、彼の顔は、ちょうど天使の顔のように見えた。」彼は、彼に対する告訴に答えるように求められたときに、モーセと預言者たちから始めて、イスラエルの民の歴史と彼らに対する神の取り扱いを回顧し、キリストが預言の中にいかに予告されていたかを示した。彼は、神殿の歴史をふりかえって、神は、手で造った家の内にはお住みにならないと言った。ユダヤ人は、神殿を礼拝していた。だから彼らは、その建物に反対して語られることには、神に反対して語られること以上に、大きな怒りを感じた。ステパノは、キリストについて語り、神殿について語ったが、その時彼は、人々が彼の言葉を拒んでいることを知った。しかし、彼は、恐れることなく彼らを譴責した。「ああ、強情で、心にも耳にも割礼のない人たちよ。あなたがたは、いつも、聖霊に逆らっている。」彼らは、宗教の外面的儀式を行ってはいいたけれども、彼らの心は腐敗し、恐ろしい悪に満たされていた。彼は、彼らの先祖たちが残酷に預言者たちを迫害したことに触れ、今彼が語りかけている人々は、キリストを拒んで十字架につけて、さらに



大きな罪を犯したのだと言った。「いったい、あなたがたの先祖が迫害しなかった預言者がひとりでもいたか。彼らは正しいかたの来ることを予告した人たちを殺し、今やあなたがたは、その正しいかたを裏切る者、また殺す者となった」。

こうした率直で心を刺すような言葉が語られたとき、祭司たちや役人たちは激しく怒って、歯ぎしりをしながら、ステパノに飛びかかった。「しかし、彼は聖霊に満たされて、天を見つめていると、神の栄光が」見えた。そこで彼は「ああ、天が開けて、人の子が神の右に立っておいでになるのが見える」と言った。人々は彼の言葉を聞こうとしなかった。「人々は大声で叫びながら、耳をおおい、ステパノを目がけて、いっせいに殺到し、彼を市外に引き出して、石で打った。」彼は、ひざまずいて、大声で叫んだ、「主よ、どうぞ、この罪を彼らに負わせないで下さい」。

わたしは、ステパノが、教会の中で重要な位置を占めるために特別に立てられた偉大な神の人であったことを見た。サタンは彼の死を喜んだ。なぜなら彼は、弟子たちが大いに彼の損失を感じることを、知っていたからである。しかし、サタンの勝利は短かった。ステパノの死を目撃したあの群れの中に、イエスがご自分をあらわされる者がいたからである。サウロは、ステパノを石で打つことに加わらなかったけれども、ステパノを殺すこ

とに賛成していた。彼は、熱心に神の教会を迫害し、彼らを捜し、家々において彼らを捕らえて、死刑の執行人に彼らを引き渡していた。サウロは、能力と学識をもった人であった。彼は、その熱心と学識とを、ユダヤ人から高く評価されていた。一方、キリストの弟子たちの多くは、彼を恐れていた。彼の才能は、サタンが、神のみ子と彼を信じる者に対しての反逆を推進するために、効果的に用いられた。しかし、神は、大いなる敵の力を破り、彼に捕らえられたものを解放することがおできになる。キリストは、サウロを選んで、彼のみ名を伝える「選びの器」となし、弟子たちの働きを強め、ステパノの代わりになるだけでなく、それ以上のことをさせられたのである。

#### サウロの回心

イエスを宣べ伝えている男女を捕らえて縛りあげ、エルサレムに連れてくる権限を与えた添書を携えて、サウロがダマスコへ旅立ったとき、彼の回りの悪天使たちは喜んだ。しかし、突然、天から光がさして彼をめぐり照らし、悪天使たちを追い払い、彼をすぐさま

地に打ち倒した。彼は、「サウ□、サウ□、なぜわたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。サウ□は、「主よ、あなたは、どなたですか」とたずねた。すると主は、「我はなんじがせむるところのイエスなり。なんじとげある鞭をけるは難し（元訳）」と言われた。サウ□は、ふるえ、驚いて、「主よ、われに何をなさしめんとしたもうや（元訳）」と言った。すると主は、「さあ立つて、町にはいつて行きなさい。そうすれば、そこであなたのなすべき事が告げられるであろう」と言われた。

彼と共にいた人々は、声だけ聞こえたが、だれも見えなかった。ので、物も言えずに立っていた。サウ□は、光が消えたときに、地から起き上がって目を開いてみたが、何も見えなかった。彼は、天からの光の栄光に目がくらんだのである。そこで、人々は、彼の手を引いてダマスコへ連れて行った。彼は三日間、目が見えなかった。また、彼は食べることも飲むこともしなかった。それから、主は、サウ□が捕らえようとしていた人々のひとりに天使を送り、幻の中で、彼に真すぐという通りへ行つて、「ユダの家でサウ□というタルソ人を尋ねなさい。彼はいま祈っている。彼はアナニヤという人がはいつてきて、手を自分の上において再び見えるようにしてくれるのを、幻で見たのである」と言われた。アナニヤは、これは何かの間違いではないかと思つて、彼がサウ□について聞いたこと

を主に言おうとした。しかし、主は、アナニヤに言われた。「さあ、行きなさい。あの人は、異邦人たち、王たち、またイスラエルの子らにも、わたしの名を伝える器として、わたしを選んだ者である」。アナニヤは、主の指示に従って、その家にはいり、手をサウ□の上において、「兄弟サウ□よ、あなたが来る途中で現れた主イエスは、あなたが再び見えるようになるため、そして聖霊に満たされるために、わたしをここにおつかわしになったのです」と言った。

するとただちに、サウ□は視力を回復して、立ち上がり、バプテスマを受けた。そして、彼は、会堂において、イエスが真に神のみ子であることを教えた。これを聞いた人々は、みな驚いて、「あれは、エルサレムでこの名をとなえる者たちを苦しめた男ではないか。その上ここにやってきたのも、彼らを縛りあげて、祭司長たちのところへひっぱって行くためではなかったか」とたずねた。しかし、サウ□は、ますます力が増し加わって、ユダヤ人たちをうるたえさせた。彼らは、またもや困惑した。すべての人々は、サウ□の、イエスに対する敵対と、彼の名を信じるすべての者をさがし出して、死刑にするために引き渡していた熱心さを知っていた。そして彼の奇跡的回心は、多くの人々に、イエスが神の子であることを堅く信じさせた。サウ□は、聖霊の力のうちに彼の経験を語った。彼は、

男女を問わず逮捕して投獄し、死に至るまで迫害していたが、ダマスコ途上において、突然天からの大いなる光が彼をめぐり照らし、イエスがご自分を彼にあらわし、ご自分が神のみ子であることをサウロにお示しになったのである。

こうして、サウロは、大胆にイエスを宣べ伝えて、力強い感化を及ぼした。彼は、聖書をよく知っていた。そして、回心後、イエスに関する預言について天来の光が与えられて、彼は、真理を明白、大胆に伝え、聖書についての誤った解釈を正すことができた。彼は、彼に与えられた神の聖霊によつて、はつきりと力強く、キリストの初臨に至るまでの預言を聴衆に説明し、キリストの苦難と死と復活に関する聖書の言葉が成就したことを示したのである。

### ユダヤ人、パウロを殺そうとする

祭司長たちや役人たちは、パウロの経験の物語りの効果が著しいのを見て、彼に対して憎しみを抱いた。彼らは、パウロが大胆にイエスを宣べ伝え、イエスの名によつて奇跡を

行い、群衆が彼に聞き従って、彼らの言い伝えから離れ、ユダヤ人の指導者たちを神のみの殺害者と見なすようになったのを見た。彼らは怒りを燃やして、会議を開き、騒ぎを静める最善の方法について協議した。そこで、彼らは、パウロを殺すことが唯一の安全な方法であるということに、意見が一致した。しかし、神は、彼らの考えを知っておられて、天使たちを送って彼を守り、彼が生きて、その任務を果たすことができるようにされた。

不信仰なユダヤ人たちは、サタンの指図のもとに、昼も夜もダマスコの門を見張り、パウロが通りがければ直ちに彼を殺そうとしていた。しかし、パウロは、ユダヤ人が彼の生命をねらっていることを知らされた。そして、弟子たちは、夜かごに乗せて彼を町の城壁づたいにつりおろした。ユダヤ人たちは、彼らの目的が達せられなかったので、屈辱と激しい怒りを感じた。そしてサタンが果たそうとしたことは挫折した。

その後、パウロは、弟子たちに加わろうとしてエルサレムへ行ったが、弟子たちはみな、彼を恐れていた。彼らは、パウロが弟子であることを信じることはできなかった。彼は、ダマスコにおいては、ユダヤ人に生命をねらわれた。そして、彼自身の同信者たちは、彼を受け入れようとしなかった。しかし、バルナバは、彼を伴って、使徒たちのところへ行き、彼がダマスコ途上で主にお目にかかり、主の名によって大胆にダマスコで説教したこ

とを告げた。

しかし、サタンは、ユダヤ人をそそのかして、パウロを殺そうとしていた。そして、イエスは、彼に、エルサレムを去ることを命じられた。彼は、バルナバと共に、他の町々へ行き、イエスを宣べ伝え、奇跡を行い、多くの人々を改心させた。生まれつき足なえであつた人が癒されたときに、偶像を拜んでいた人々が、弟子たちに犠牲をささげようとした。パウロは、心を痛めた。そして、彼と彼の仲間とは、ただの人間であつて、天と地と海とその中のすべてのものをお造りになつた神だけを礼拝すべきであると、彼らに告げた。こうして、パウロは、人々の前で神を崇めた。しかし、彼は、なかなか人を制止することができなかつた。その神に対する信仰と、神に帰すべき礼拝と栄光の最初の理解が、彼らの心の中に形造られつつあつた。そして、彼らがパウロの言葉に耳を傾けている間に、サタンは、他の町々の不信仰なユダヤ人に働きかけて、彼のあとをつけさせ、パウロの行つたよい働きを破壊させようとした。これらのユダヤ人たちは、パウロに反対する偽りの報道を流して、これらの偶像礼拝者たちの心をかきたてた。人々の驚きと賞賛は、今や、憎しみにかわり、つい先ほどまでは、弟子たちを礼拝するばかりであつた人々が、パウロを石で打つに至つた。そして、死んでしまったと思つて、彼を町の外に引きずり出した。し

かし、弟子たちがパウロを取り囲んで悲しんでいると、有難いことに彼は起き上がって彼らと一緒に町にはいった。

また、パウロとシラスが、イエスを宣べ伝えていると、占いの霊につかれた女が、彼らについて来て、「この人たちは、いと高き神の僕たちで、あなたがたに救の道を伝えるからだ」と叫んだ。こうして、彼女は、弟子たちに幾日もついて来た。パウロは困りはてた。なぜならば、彼らのあとからこのように叫ぶことは、真理から人々の心をそらしてしまうからであつた。サタンが、彼女にこうさせたのは、人々に嫌悪感を抱かせて、弟子たちの影響をそこなうためであつた。パウロは、心を奮い起こし、その霊にむかつて、「イエス・キリストの名によって命じる。その女から出て行け」と言った。すると、悪霊は、その叱責によって彼女を離れた。

彼女の主人たちは、彼女が弟子たちのあとから叫ぶのを喜んでいた。しかし、悪霊が彼女から離れて、彼女が柔和なキリストの弟子になったのをみて、激怒した。彼らは、彼女の占いによって、多くの利益を得ていた。ところが、今は、利益を得る望みが絶えた。サタンの目的は挫折した。しかし、サタンのしもべたちは、パウロとシラスを捕らえて、広場に引きずって行き、役人たちに引き渡して、長官たちに、「この人たちはユダヤ人であ



りまして、わたしたちの町をかき乱し」と言った。群衆もいっせいに立って、ふたりを責めたので、長官たちは、ふたりの上衣をはぎ取り、おちで打つことを命じた。それで、ふたりに何度もおちを加えさせたのち、獄に入れ、獄吏にすっかり番をするようにと命じた。獄吏はこの厳命を受けたので、ふたりを奥の獄屋に入れ、その足に足かせをしっかとかけておいた。しかし、主の天使が、彼らと共に獄屋の中にまではいっていった。そして、彼らの投獄によって、神の栄光をあらわし、神が神の働きの中におられ、その選ばれたしもべたちとともにおられることを示されたのである。

パウロとシラスは、真夜中に祈り、神に賛美の歌を歌った。すると、突然、大きな地震が起こって、牢獄の土台が揺れ動いた。そして、わたしは、神の天使たちが、すべての鎖を解くのを見た。獄吏は目をさまして、獄の戸が開いてしまっているのを見て、ふるえあがった。彼は、囚人が逃げてしまい、自分は死刑にならねばならぬと考えた。しかし、彼が今にも自殺しようとした時、パウロは、大声をあげて、「自害してはいけない。われわれは皆ひとり残らず、ここにいる」と言った。

ここで、神の力が、獄吏の心を強く打った。彼は、あかりを持って来させ、獄に駆け込んできて、おののきながらパウロとシラスの前にひれ伏した。それから、ふたりを外に連

れ出して、「先生がた、わたしは救われるために、何をすべきでしょうか」と言った。ふたりは言った。「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」。それから、獄吏は、全家族を集めた。そして、パウロは、彼らにイエスのことを宣べ伝えた。こうして、獄吏の心は、神の兄弟たちの心と一つになった。そして彼は彼らの傷を洗った。彼と全家族は、その晩、バプテスマを受けた。それから、彼は、彼らに食事のもてなしをして、神を信じる者となったことを、全家族と共に心から喜んだ。

神の力があらわれて牢獄の戸が開き、獄吏とその全家族が改心したという驚くべき知らせは、たちまち至るところに知れ渡った。役人たちは、この事を聞いて恐れた。そして、獄吏に、パウロとシラスを釈放するように命令を送った。しかし、パウロは、牢獄をひそかに出ようとはしなかった。彼は、神の力のあらわれが隠されることを快しとしなかった。パウロは、彼らに言った。「彼らは、ローマ人であるわれわれを、裁判にかけもせず、公衆の前でおち打ったあげく、獄に入れてしまった。しかるに今になって、ひそかに、われわれを出そうとするのか。それは、いけない。彼ら自身がここにきて、われわれを連れ出すべきである」。この言葉が長官たちに伝えられ、使徒たちがローマ人であることがわかったときに、役人たちは、彼らの不当な取り扱いが皇帝に訴えられるのではないかと恐

れた。彼らは、自分でやってきてわびた上、ふたりを獄から連れ出し、町から立ち去るよ  
うにと頼んだ。

### パウロ、エルサレムを訪問する

パウロは、回心後、エルサレムを訪問して、そこで、イエスと彼の恵みによる奇跡について説教した。彼は、自分の奇跡的回心について語ったが、それを聞いた祭司たちや役人たちは激しく怒って、彼の命をとろうとした。しかし、イエスは、彼の命を助けるために、彼が祈っているときに、幻の中で、ふたたび現れ「急いで、すぐにエルサレムを出て行きなさい。わたしについてのあなたのあかしを、人々が受けいれないから」と彼に言われた。パウロは答えて言った。「主よ、彼らは、わたしがいたところの会堂で、あなたを信じる人々を獄に投じたり、おち打ったりしていたことを、知っています。また、あなたの証人ステパノの血が流された時も、わたしは立ち会っていてそれに賛成し、また彼を殺した人たちの上着の番をしていたのです」。パウロは、エルサレムのユダヤ人たちは彼の

あかしを拒むことができないだろうと考えた。また、彼のうちに起きた大きな変化は、ただ神の力によるほかはないと彼らが思うことだろうと彼は考えた。しかし、主は、これまでによりも断乎として、「行きなさい。わたしが、あなたを遠く異邦の民へつかわすのだ」と言われた。

パウロは、エルサレムを離れていた間に、いろいろの所へ多くの手紙を送って、彼の経験について書き、力強いあかしを立てた。しかし、これらの手紙の影響力をこぼとうとする者もあった。彼らは、彼の手紙は重味があって力強いことを認めたが、会ってみると外見は弱々しく、話はつまらないと評した。

実は、パウロは、偉大な学識の持ち主で、彼の知恵と態度は、聴衆を魅了した。学者たちは、彼の知識を喜んで聞き、多くの人々が、イエスを信じた。王たちや大聴衆を前にしたときには、彼は、非常な熱弁で、満場の聴衆を魅了した。これは、祭司や長老たちを激怒させた。パウロは、深遠な理論を究明し、最も崇高な思想にまで人々の心を高揚し、神の恵みの深い富と驚くべきキリストの愛とを、彼らの前に描写することができた。次に、彼は、単純な言葉を用いて、一般の人々の理解できるところにおりて来て、自分の経験を力強く話し、彼らにキリストの弟子になりたいという熱望を起こさせるのであった。

主は、ふたたび、パウロに現れて、彼がエルサレムに行き、そこで彼は捕らえられて、主の名のために苦しまなければならないことをお示しになった。パウロは非常に長い間捕らわれの身だったが、それでもなお神は、彼を通して特別な働きをお進めになった。彼が捕らわれの身だったことは、キリストの知識をひろめ、神をあがめる手段となるはずだった。裁判をうけるために町から町へ送られて行く先々で、彼は王や総督の前で、イエスについて証言し、自分自身の回心における興味深いできごとを述べて、彼らがイエスについて口実を設ける余地がないようにした。幾千の人々がキリストを信じ、キリストのみ名をよるこんだ。わたしは、パウロの海上の旅行を通して、神の特別な目的が果たされたことを示された。すなわち、パウロを通して船員たちが神の力を目に見、異教徒たちがイエスのみを耳にきき、多くの人々がパウロの教えとパウロのおこなった奇跡を通して改心するように、神は計画されたのであった。王や総督たちは、パウロの議論にひきつけられ、彼が熱心に聖霊の力をもってイエスのことを説き、自分の経験した興味深いできごとを語るのを聞いて、イエスが神のみ子であるという確信にとらえられた。パウロの話を聞いて、ある人々は驚きあやしんだ。そのひとりには、「おまえは少し説いただけで、わたしをクリスチャンにしようとしている」と言った。しかし、聴衆の大部分は、彼らの聞いたことをそ

のうちいつか考えてみようと思うだけであった。サタンは、人々が決定を延ばしているのにつけ込んだ。そして人々が、心の柔らかな間に機会を捕らえないでいるうちに、それは永遠に失われてしまった。彼らの心は固くなつたのである。

わたしは、サタンが働いて、まず第一にユダヤ人の目をくらませて、イエスを彼らの救い主として受け入れないようにさせ、その次に、イエスの大きな働きに対するねたみを心に抱かせて、彼の生命をとろうとさせるのを示された。サタンは、キリストご自身の弟子たちのひとりの中にはいり込み、彼にキリストを敵の手に売り渡させ、生命と栄光の主を十字架にかけたのである。

イエスが死からよみがえられたあとで、ユダヤ人たちは、ローマの番兵たちを買収して偽りのあかしをさせ、彼の復活の事実を隠そうとして罪に罪を重ねた。しかし、イエスの復活は、それと同時に多くの証人が復活したことによって二重に確かなものにされた。イエスは、復活後、弟子たちに現れ、また、同時に五百人以上の人々にお現れになった。一方、彼がご自分と共によみがえさせられた人々は、多くの人々に現れ、イエスの復活を宣言した。

サタンは、ユダヤ人に神のみ子を拒否させ、その手を彼の尊い血で染めさせることによつ

て、彼らを神に反逆させたのであった。イエスが神のみ子であり、世の救い主であるというどんなに強力な証拠があっても、彼らは、主を殺害してしまっていたのであり、彼を支持するどんな証拠をも受け入れようとはしなかった。彼らは、墮落後のサタンと同様に、神のみ子に打ち勝つことを何よりの望みとし、慰めとしていた。だから、彼らは、キリストの弟子たちを迫害し、彼らを殺すことによって、反逆を続けたのである。彼らが十字架にかけたイエスの名を聞くことほど、彼らの耳に痛いことはなかった。そして、彼らは、イエスを支持する証拠には、何も耳を傾けまいと決心した。聖霊が、ステパノによって、イエスが神のみ子であるという大いなる証拠を宣言したときに、彼らは、それに説得されまいとして、耳をふさいだ。サタンは、イエスの殺害者たちの心を捕らえて離さなかった。彼らは、悪行を行って、サタンの従順なしもべたちになってしまった。そしてサタンは、彼らを通して、キリストを信じる人々を苦しめ悩ました。サタンは、ユダヤ人を用いて、異邦人を扇動し、イエス・キリストに従う人々に反対させた。しかし、神は、天使たちを送って、弟子たちの働きを強め、彼らが見たり聞いたりしたことをあかしし、ついには信仰に固く立って、その血によって彼らのあかしに印を押させられたのである。

サタンは、ユダヤ人が、彼のわなにしっかりと捕らえられていることを喜んだ。彼らは、

なお、無益な形式や犠牲や儀式を継続していた。イエスが十字架の上で、「すべてが終わった」と叫ばれたときに、神殿の幕が上から下へ二つに裂けて、神はもはや神殿において祭司にお会いになることなく、彼らの犠牲や儀式をもお受けにならないことを示した。それはまた、ユダヤ人と異邦人との間の隔ての壁も砕かれたことを示していた。イエスは、両者のためにご自分をおささげになった。そして、救われるためには、両者ともに、彼を罪のための唯一の犠牲、世の救い主として信じなければならなかったのであった。

十字架上のイエスの脇腹を兵卒が突きさしたときに、二つのはっきりしたものが流れ出た。その一つは血であり、もう一つは水であつた。血は彼の名を信じる者の罪を洗い去るためであり、水は、信じる者が生命を得るためにイエスから受ける生ける水を代表していたのである。

## 大 背 教

わたしは、異教の偶像礼拝者たちが、残酷にクリスチャンたちを迫害して、殺した時代



に連れて行かれた。血は、川のように流れた。貴族も学者も一般の人々もみな、同様に、容赦なく殺された。富裕な家族たちは、信仰を捨てようとしなかったために、零落して貧しくなった。これらのクリスチャンたちは、迫害と苦難に会ったにもかかわらず、標準を下げようとしなかった。彼らは、彼らの信仰を純粋に保った。わたしは、サタンが、彼らの苦難をみて喜び勝ち誇るのを見た。しかし、神は、ご自分の忠実な殉教者たちを、大いなる満足をもってごらんになった。あの恐るべき時代に住んでいたクリスチャンたちは、神のために喜んで苦しみ会ったために、大いに神に愛された者であつた。彼らが会った苦しみは、すべて、天における報賞を増したのである。

サタンは、聖徒たちの苦難をみて喜んだとは言つても、それで満足していなかった。彼は、肉体だけでなく、心をも支配したいと思つた。しかし、彼らが耐えた苦難は、彼らをますます主に近づけ、互いに愛し合わせ、以前にもまして、神のみこころを痛めることを恐れさせるだけであつた。サタンは、彼らに神の不興を被らせようと望んだ。そうすれば、彼らは、その力と不屈の精神と堅固さを失うのであつた。幾千の者が殺されても、なお他の者が立ち上がつて、彼らの場所を埋めた。サタンは、自分が臣下たちを失いつつあることに気づいた。なぜならば、彼らは、迫害と死にあつても、なお、イエス・キリス

トに確保され、彼の王国の市民となるからであつた。だから、サタンは、神の統治と戦つて教会をくつがえすために、もっと勝算のある計画をたてた。彼は、異教の偶像礼拝者たちに、キリスト教の信仰の一部を信じさせた。彼らは、キリストの十字架と復活を信じる」と告白した。そして、心の改変を経験することなくして、イエスの弟子たちに加わりたいと申し出た。ああ、これは、教会にとって恐るべき危機であつた。これは、精神的苦悩の時代であつた。彼らが標準を下げて、キリスト教の一部を受け入れたこれらの偶像礼拝者と合同することは、彼らを完全な改心に導く手段であると考える者たちもあつた。サタンは、聖書の教理を腐敗させようとしていた。

わたしは、ついに標準が下げられて、異教徒たちがクリスチャンたちと合同するのを見た。こうした偶像礼拝者たちは、改心したと言つてはいたが、教会のなかに自分たちの偶像礼拝を持ちこみ、自分たちの礼拝の対象を、聖徒たちやキリストやキリストの母マリヤなどの像の礼拝に変えただけであつた。キリスト信者たちも、次第に彼らと一つになって、キリスト教は腐敗し、教会は、その純潔と力を失つた。彼らと合同することを拒んだ者たちもあつた。こうした人々は、彼らの純潔を保ち、ただ神のみを礼拝した。彼らは、上は天にあるもの、下は地にあるもののどんな形をも拝まなかつた。

サタンは、多くの者が墮落したのを喜んだ。そして、彼は、墮落した教会を扇動して、信仰の純潔を保つ人々に対して、像の礼拝や儀式を強制し、従わない者は、死刑に処したのである。キリストの真の教会に対して、ふたたび迫害の火が点ぜられ、幾百万の人々が、無残にも殺された。

その光景が、わたしに次のように示された。異教の偶像礼拝者たちの大群が、日、月、星を描いた黒い旗をもっていた。この一団は、非常に癡猛で怒った顔つきをしていた。それから、わたしは、「主のために純潔で聖別されたもの」と書かれた、真白な旗をもった別の一団を示された。彼らは、その固い決心と神にすべてを委ねた気持ちをその顔にあらわしていた。わたしは、異教の偶像礼拝者たちが、彼らに接近し、大虐殺が行われるのを見た。クリスチャンたちは、彼らの前に消え失せた。しかし、クリスチャンの一団は、ますます結束を固めて、いっそうしっかりと旗を確保した。倒れる者があれば、それだけまた他の者が旗のまわりに集まって、その場所を埋めた。

わたしは、偶像礼拝者たちの一団が、相談しているのを見た。彼らは、クリスチャンたちを負かすことができなかったので、別の計画を立てることにした。彼らは、自分たちの旗をおろして、堅く立っているクリスチャンの一団に近づき、彼らに和平を申し入れてい

るのを見た。最初、彼らの提案は、全然受け入れられなかった。次に、わたしは、クリスチャンの一団が相談しているのを見た。中には、旗をおろして提案を受け入れ、自分たちの生命を保てば、やがて力を増して異邦人の間に旗をかかげることができると言う者もあった。しかし、少数の者は、この計画に従わず、旗を下げるよりはむしろそれを固く死守することを選んだ。それから、わたしは、多くの人々が、旗をおろして、異邦人に加わるのを見た。しかし、固く立って動かなかった人々は、ふたたび、その旗をとって高くかげた。わたしは、純潔な旗を持った一団の中から人々が絶えず去って行って、黒い旗のもとにある偶像礼拝者たちに加わり、白い旗を持った人々を迫害するのを見た。多くの人々が殺された。しかし、白い旗は高くかかげられた。そして、信じる人々が起こって来て、その回りに集まった。

異邦人たちにイエスに対する激怒を最初に抱かせたユダヤ人たちは、その罰を逃れることができない。ピラトが裁判廷において、イエスを罪に定めることを躊躇したときに、怒り狂ったユダヤ人たちは、「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってよい」と叫んだ。自分たちの頭の上に、みずからが下したこの恐るべきのろいは、現実となってユダヤ民族に臨んだ。異教徒たち、またキリスト教徒と称する人々も共に、彼らの

敵となった。これらの自称キリスト教徒たちは、ユダヤ人が殺したキリストに対する熱心のあまり、彼らに迫害を加えれば加えるほど、それは神を喜ばすことであると考えた。そういうわけで、不信仰なユダヤ人の多くが殺され、他の者は、あちらこちらに追放されて、あらゆる手段によって罰せられた。

彼らが殺したキリストと弟子たちの血は、彼らの上に帰し、恐るべき刑罰を受けた。神のろいは彼らにつきまとい、彼らは、異教徒といわゆるキリスト教徒の中で、物笑いの種となって、あざけられた。墮落し、人に忌み嫌われて、彼らは、あたかも、カインの烙印を押されたようなものであった。しかし、わたしは、神が、驚くばかりに、この民族を保ち、全世界に離散させて彼らが特別に神のろいを受けたものとして見られるようにされたのを見た。わたしは、神がユダヤ人たちを国家としてお捨てになったのを見た。しかし、彼らの中の個々の人々は、まだ悔い改め、心の幕を破って、自分たちに関する預言が成就したことを悟ることができるのである。彼らは、イエスを世の救い主として受け入れ、イエスを拒んで十字架につけた自分たちの国民の大いなる罪を認めることができるのである。

#### 不法の秘密

人々の心を、イエスから引き離して、人間にむけさせ、個人の責任感を失わせることが、サタンの計略であつた。サタンは、神のみ子を誘惑したときには、その計画は失敗に終わった。しかし、彼が墮落した人間のところに来たときには成功を収めた。キリスト教は腐敗した。法王や司祭たちは、高い地位を占めており、人々が自分自身でキリストを仰ぐかわりに、彼らは罪のゆるしを求めるように教えた。

人々は、全く欺かれた。人々は、法王や司祭たちがキリストの代表者であると教えられ、たが、実は、彼らはサタンの代表者であつた。そして、彼らを礼拝した人々は、サタンを礼拝したのであつた。人々は聖書を求めたが、司祭たちは、彼らに聖書を持たせて自分で読ませることは危険であると考えた。それは、彼らが真理を知って、彼らの指導者たちの罪を暴露するといけないからであつた。人々は、これらの欺瞞者たちのすべての言葉を、神のみ口から出たものとして受け入れるように教えられた。彼らは、人心の上に力を奮つ

だが、これは、神のみのなさるべきことであつた。もし自己の信念にあえて従おうとする者があれば、サタンとユダヤ人たちとがイエスに対してあらわしたのと同様の憎しみが彼らに対して燃やされて、権威者たちはその血を渴望するのである。

わたしは、サタンが特に勝利を収めたときを示された。多くのクリスチャンたちが、恐ろしい方法で殺された。それは、彼らが彼らの信仰を純潔に保とうとしたからであつた。聖書は憎まれ、聖書を地上から一掃しようとする努力がなされた。人々は、聖書を読むことを禁じられ、読む者は死刑であつた。そして、発見されたものはみな焼き棄てられた。しかし、わたしは、神が、神のみ言葉を特別に保護されるのを見た。神は、聖書を保護された。各時代を通じて、聖書は、ほんのわずかしき存在しなかつた。しかし、神は、神のみ言葉が失われることをお許しにならなかつた。なぜならば、最後の時代に、その冊数が増し加わって、各家庭が聖書を持つようになるからであつた。聖書は、それがわずかしかなかつた時代には、迫害の中にあつてイエスに従う人々にとって、かけがえのない慰めであつたことをわたしは見た。それは、極秘のうちに読まれた。そして、この尊い特権を持つた人々にとって、それは神とみ子イエスにお目にかかることであり、弟子たちと面接することであると感じられた。しかし、この祝福された特権を持ったために多くの人々は、そ

の生命を失った。もし発見されると、彼らは、首切台、火刑柱に送られるか、それとも獄に投ぜられて、餓死させられるかであった。

サタンは、救いの計画を妨害することはできなかった。イエスは、十字架につけられ、三日目に復活された。しかし、サタンは、十字架と復活を彼に都合のよいように利用するのだと、彼の天使たちに語った。イエスを信じると告白する人々が、ユダヤの犠牲とささげ物に関する律法はキリストの死によって廃されたと信じても、さらに進んで、十誡の律法もキリストと共に死んだと彼らに信じさせることができるならば、サタンはそれをいわないのであった。

わたしは、多くの人々が、たやすくサタンのこの策略に負けるのを見た。全天は、神の聖なる律法がふみにじられるのを見て、憤りを感じた。イエスと天のすべての天使たちは、神の律法の性質をよく知っている。彼らは、イエスが、それを変更したり、廃止したりなさらないことを知っている。墮落後の人類の絶望的状态は、天に深い悲しみを感じさせた。そして、イエスはみ心を動かされて、神の聖なる律法の違反者たちのために死ぬことを申し出られたのである。しかし、もしその律法が、廃されうるものであれば、人間は、イエスの死がなくても救われることができたのである。したがって、イエスの死は、天の



父の律法を廃したのではなくて、それを大いなるものとし、光栄あるものとし、そのすべての聖なる戒めに対する服従を要求するものであった。

もし、教会が、純潔で堅固であつたならば、サタンは、彼らを欺いて、神の律法をふみにじらせることはできなかったであろう。サタンはこの大胆な計画において、天と地における神の統治の基礎を直接攻撃したのである。彼は反逆したために、天から追放された。彼は、墮落後、自分を救うために、神の律法が変更されることを願つたが、彼は全天使軍の前で、神の律法は変えることができないことを知らされた。サタンは、他のものに神の律法を犯させることができるならば、彼らを自分の側に引き入れることを知っている。なぜならば、その律法の違反者は、みな死ななければならぬからである。

サタンは、なお、計画を推進することにした。サタンは、彼の天使たちにおかい、ある者は神の律法を熱心に擁護するから、このわなで彼らを捕えることはできない。十誡は明瞭なので、多くの者は、十誡が今なお守るべきものであることを信じている。だから、戒めの中のただ二つを腐敗させるように努力しなければならぬと言った。こうして、彼は、彼の代表者たちを導いて、第四条、すなわち、安息日の戒めを変更するように努力させ、十誡の中で、真の神と天地の創造者とを示している唯一の戒めを変更しようとしたのであ

る。サタンは、彼らの前に、イエスの輝かしい復活を示し、彼が週の第一日に復活されたのであるから、彼は安息日を七日目から週の第一日目に変更されたのであると、彼らは告げた。

こうして、サタンは、復活を自分の目的にかなうように用いた。サタンと彼の天使たちは、彼らの準備した誤りが、キリストの信者と称する人々によく受けたことを喜んだ。あゝる者が宗教的に嫌悪するところのものを、他の者は、受け入れるのである。こうして、いろいろの誤りを、人々は受け入れて、それらを熱心に擁護したのである。神のみ言葉の中に明らかに示された神のみこころは、神の戒めとして教えられる誤りと伝説とにおおいかくされた。この天をも恐れぬ欺瞞は、イエスがふたび出現されるときまで続くことが許されるけれども、この誤りと欺瞞の全期間を通じて、神は、証人なしであられたのではない。教会の暗黒と迫害のさ中であって、神のすべての戒めを守った真実で忠実な人々が、常に存在していたのである。

わたしは、栄光の王の苦難と死を見たときに、天使の万軍が驚きに満たされたのを見た。しかし、全天を喜びと輝きで満たした生命と栄光の主が、死の束縛を破って、牢獄から勝ち誇った勝利者として出て来られることは、彼らにとって少しも驚きではなかったことを、

わたしは見た。それだから、もしこれらの事件のどちらかが、休日によって記念されるべきであるとすれば、それは十字架である。しかし、この二つの事件は、どちらも神の律法を変更、または廃止するために計画されたものでないことを、わたしは見た。逆に、これらは、その不変性の最も強力な証拠となるのである。

この重大な事件には、いずれも、その記念が設けられている。主の晩餐の時に、裂かれたパンとぶどうの実をいただくことにより、われわれは、彼が来られる時まで、主の死を告げ知らせるのである。こうして、主の苦難と死の光景が、われわれの心に新たに思い起こされる。キリストの復活は、われわれがバプテスマを受けて、彼と共に葬られ、彼の復活の样に従って水の墓から起き上がり、新しい生涯に入ることによって記念されている。

わたしは、神の律法が、永遠に固く立ち、新天地においても永遠に存在することを示された。地の基が定められた創造の時に、神の子らは、創造主のみわぎを賛美し、天の万軍は、喜び呼ばわった。安息日の基礎が置かれたのは、この時であつた。神は、六日間の創造の終わりにおいて、その造られたすべてのわぎを終えて七日目に休まれた。神はその第七日を祝福して、これを聖別された。神がこの日に、そのすべての創造のわぎを終わって休まれたからである。安息日は、墮落以前に、エデンにおいて制定された。そして、アダ

ムとエバおよび天の万軍によって守られた。神は七日目に休んで、その日を祝福し、聖別された。わたしは、安息日が決して廃止されないことを見た。贖われた聖徒たちと天の万軍は、偉大な創造主をたたえて、安息日を永遠にわたって守るのである。

#### 死は永遠の責苦ではない

サタンの欺瞞はエデンに始まった。彼はエバに、「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう」と言った。これは、サタンが靈魂不滅について最初に教えたことで、彼はその時から現在にいたるまでこの欺瞞をつづけ、それはまた、虜となっている神の子供たちが解放されるまでつづけられる。わたしはエデンのアダムとエバをさし示された。彼らは禁断の木の実をとったので、エデンの園から追い出され、命の木のまわりには炎の剣が置かれた。それは彼らが命の木の実を食べて永遠に死なない罪びととならないようにするためだった。命の木の実は永遠の生命をあたえるのであった。ひとりの天使が、「アダムが家族の中で、炎の剣を通り越して命の木の実をとった者があろうか」とたずねているのがきこえた。すると他の天使が、「アダムが家族の中で、炎の剣を通り越して命の木の実

をとった者はだれもない。だから永遠に死なない罪びとはひとりもないのだ」と答えているのが聞かれた。罪を犯した魂は、永遠に死なねばならない。その死は、よみがえりの望みのない死である。その時神の怒りはやわらげられる。

サタンが「罪を犯した魂は必ず死ぬ」という神のみことばを、罪を犯した魂は死ぬことはなくて、苦しみの中に永遠に生きるのだというように、人々にうまく信じこませていることは、驚くばかりである。天使は言った、「苦痛であろうが幸福であろうが、生命は生命である。死には苦痛もなければ、よろこびもなく、また憎しみもない」と。

サタンは、最初にエデンでエバに「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう」と言った。そのうそを広めるために、特に努力するように悪天使たちに命じた。この誤謬を信じた人々は、人間は死なない者だと信じるようになった。サタンは、罪びとが永遠に苦しみの中に生きると人々に信じさせた。その時、サタンが自分の代表者たちを通して働き、神を復讐心の強い暴君として人々の前にかかげる道が備えられた。すなわち神は、氣に入らない者はみな地獄に投げ込んで、神の怒りをいつまでも感じさせ、彼らが言い知れない苦悶を受けて永遠の炎にもがいているのを、満足気に見おろしておられるようなお方だというのである。このようなまちがった考えが受け入れられさえすれば、多くの人々は神を愛

しあがめるところか、かえって神を憎むようになること、また、神が自分でお造りになつた者を永遠の責苦の中に投げ込むなどということは、神の愛と憐れみのご品性に反することだから、神のみことばの予告は文字通りに成就することはないのだと、多くの人々が信じるようになることを、サタンは知っていた。

サタンが人々に信じこませているもう一つの極端な考えは、神の正義とみことばの予告を全然無視して、神は憐れみに富みたまうお方だから、ただのひとりも滅びることなく、聖徒も罪びとも全部、最後にはみ国に救われるという考え方である。

霊魂不滅と無限の苦しみという誤った考え方が一般に信じられるようになった結果、サタンは別な種類の人々をだまして、聖書は靈感を受けた書ではないと思わせるようにした。彼らは、聖書によいことがたくさん教えられているとは考えるが、しかし、永遠の責苦の教えがあると教え込まれているので、聖書に信頼することも聖書を愛することもできないのである。

サタンはまた他の種類の人々をもっと深みにみちびいて、神の存在さえ否定させようとする。もし神が人類家族の一部を永遠に恐るべき責苦の運命にあわせられるなら、それは聖書にあらわされている神のご品性に矛盾するといふのである。そこで彼らは聖書とその

著者を否認し、死は永遠の眠りだと教える。

このほかに、びくびくした臆病な種類の人々がいる。サタンは彼らを誘惑して罪を犯させる。サタンは、彼らが罪を犯すと、罪の値は死ではなく恐るべき責苦を伴った生命で、永遠にわたってかぎりなくその責苦を忍ばねばならないのだと彼らの前に示す。このようにして、彼らの弱い心の前に、永遠の地獄の恐怖を拡大することによって、サタンが彼らの心を占領し、彼らは理性を失ってしまう。その時サタンと悪天使たちはこおどりしてよろこび、不信心な者や無神論者たちと一緒にになって、キリスト教を非難する。こうした不幸は、世間一般のまちがった説を信じた結果なのに、かえって聖書とその著者を信じた当然の結果だと彼らは主張するのである。

サタンのこの大胆な働きに、天の万軍が憤りに満たされたのをわたしは見た。神の天使は強い力をもっているので、命じられさえしたら、容易に敵の力をうち破ることができるのに、どうして、こうしたすべての惑わしが人々の心を動かすのをそのままにしておかれるのだろうか、わたしはたずねてみた。すると、神はサタンがあらゆる手段を使って人を滅ぼそうとするのをご存じであることがわかった。そこで神は、みことばを書きとらせて、人類に関する神のみこころをはっきりと示し、どんなに鈍い者もまちがうことがないよう

になさったのであった。神は、人類にみことばをおあたえになってから、そのみことばが、サタンや悪天使やサタンの代表者たちによって滅ぼされることがないように、注意深く守ってこられた。他の本は滅ぼされることはあっても、聖書だけは不朽のものでなければならなかった。そして、世の終わりが近づいて、サタンの惑わしが増えるときに、聖書の数は幾倍にも増えて、希望者はだれでも聖書を手に入れることができ、その気にさえなれば、サタンの欺瞞と偽りの不思議に対して、身を武装することができるようになるべきだった。

わたしは、神が聖書を特別に守ってこられたことを示された。しかし聖書の数が少なかった時に、学者たちがそのことばを変えたことがあった。彼らは、もっとわかりやすくしたつもりだったが、しかし実際は、言い伝えに支配された既成の観念に依存したために、明白なものをかえって神秘的にしてしまった。しかし神のみことばは、全体として完全な鎖で、一つの部分は、他の部分につらなってそれを説明しているのをわたしは見た。真心から真理を求める者はまちがう余地がない。なぜなら神のみことばには、生命にいたる道が明白に単純に宣言されているばかりでなく、そこに明らかにされている生命の道を理解するうえに、聖霊が案内者としてあたえられているからである。



神の天使たちは、決して人の意志を支配しないことをわたしは示された。神は、人の前に生命と死を置かれた。人間は自分で選択することができる。生命を欲しながら、依然として広い道を歩む人が多い。神が大いなる愛と憐れみをもって、人類のためにみ子を与えて死なせられたにもかかわらず、人間は神の統治に反逆しようとする。高い代価を払って買われた救いを受け入れようとしないうちは、罰を受けねばならない。しかし神は、彼らを地獄に閉じこめて、果てしない苦難に会わせようとはなさらない。あるいはまた、天国へつれて行こうともなさらない。彼らを純潔で聖なる人々の中へつれて行くことは彼らを非常にみじめにするからである。神は、彼らを完全に滅ぼして、彼らが全然いなかったかのようにしてしまわれる。その時、神の義は満たされる。神は地の土をもって人間をお造りになった。そして、神に従わない、きよくない人間は、火で焼きつくされてふたたび土に帰るのである。この問題について、神の恵みと憐れみは、すべての人々をして神のご品性を賞賛させ、神の聖なるみ名をあがめるにいたらせるのをわたしは見た。悪人が地上から滅ぼしつくされると、天の万軍はみな「アーメン」ととなえるのである。

□ではキリストのみ名をとえながら、サタンの始めた惑わしを堅く信じている人々を、サタンは非常な満足をもってながめる。サタンの働きは、依然として新しい惑わしを考え

出すことで、彼の力と策略はこの方面に向かって絶えず増し加えられている。彼は、自分の代表者である法王や司祭たちに高い地位を占めさせ、人々を扇動して、サタンの惑わしを受け入れようとし、ない人々を激しく迫害し、滅ぼそうとする。キリストに従う尊い人たちは、苦難と苦痛にあわねばならないのである。天使たちはそうしたすべてのことを記録にとっている。サタンと悪天使たちは、苦難の中にある聖徒たちに仕えている天使たちに向かって、彼らはみな殺されて、地上に真のクリスチャンは残らないと、得々として言うのだった。その時、神の教会が純潔なのをわたしは見た。墮落した心を持った人々が教会に入り込む危険はなかった。なぜなら、大胆に信仰を公言する真のクリスチャンは、身体を引き裂かれたり、火あぶりの刑にされたり、その他サタンと悪天使たちが考えつくかぎりの、また人間の心に思いつかせることができるかぎりの、あらゆる責苦を受ける危険があったからである。

## 宗教改革

聖徒たちに対して、あらゆる迫害が加えられたにもかかわらず、神の真理のための生きた証人たちが、至るところから立ち上がった。主の天使たちは、彼らにゆだねられた働きをなしつつあった。彼らは、最も暗黒な場所をさがし、その暗黒の中から、心の正しい人を選んでいった。これらの人々は、みな、誤りの中に埋もれていたが、神は、サウロを召されたように、彼らを召して、神の真理を伝え、神の民と称する人々の罪を譴責する声を挙げる、選びの器とされた。神の天使たちは、マルチン・ルター、メランヒトンや各地の他の人々の心を動かして、神の言葉の生きたあかしに対する渴望をお起こしになった。敵は、洪水のように押し寄せてきていたので、敵に対して高く旗を掲げなければならなかった。ルターは、大胆に暴風に当面し、墮落した教会の怒りに対抗して立ち上がり、神聖な告白に忠実なわずかの人々を強めるために選ばれた者であった。彼は、常に、神の不興をこうむることを恐れていた。彼は、行為によって神の恵みを得ようと努めた。しかし、彼

は、天からの光が彼の心の暗黒を追い払って、行為ではなくて、キリストの血の功績に頼るように導かれた時初めて、心に満足が与えられた。その時、彼は、法王や聴罪司祭によらず、ただイエス・キリストのみによって、自分で神に近づくことができたのである。

ああ、ルターの暗い理解に夜明けをもたらし、迷信を追い払ったこの新しい輝かしい光は、彼にとって、なんと尊いものであったことだろう。彼は、それを、この世の最も高価な宝以上に尊んだ。神の言葉は新しいものとなった。すべてのものは、一変した。その美しさを見ることができなかったために、恐ろしいものであったこの書物は、今、彼にとって、生命であり、永遠の生命であった。それは、彼にとって、喜びであり慰めであり、祝福に満ちた教師であった。何ものも彼をこの研究から引き離すことはできなかった。彼は、死を恐れていた。しかし、彼が神のみ言葉を読んだときに、彼のすべての恐怖は去った。そして、彼は、神のご品性を賛美し、神を愛した。彼は、自分で聖書をさぐり、その中にあ  
る豊かな宝をたのしんだ。それから彼は、教会のために、聖書をさぐった。彼は、自分が救いを委託していたその人々の罪に、愛想をつかした。そして、他の多くの人々が、彼と同様の暗黒に包まれているのを見て、世の罪を取り除く唯一のおかたである神の小羊を、彼らに指し示す機会を熱心に求めた。

ルターは、ローマ教会の誤りと罪とに抗議の声をあげて、幾干という人々を閉じ込めて、彼らを行爲による救いに依存させていた暗黒の鎖を、打破しようと熱心に努力した。彼は、人々の心に、神の恵みの真の富と、イエス・キリストによつて与えられる救いの尊さを悟らせることができるようにと願った。彼は、聖霊の力によつて、教会の指導者たちの罪に對して抗議の声をあげた。そして、彼は、司祭たちから暴風のような反対を受けたが、彼の勇氣はくじけなかった。なぜなら、彼は、神の強い腕によりたのみ、神にあつて勝利することを確認していたからである。彼が戦いを押し進めていくにつれて、司祭たちの怒りは、さらに激しく彼に對して、燃えさかった。彼らは、改革を欲さなかった。彼らは、安逸、奔放な快樂、邪惡なままであることを選んだ。また彼らは、教会も暗黒の中に置いて、おかれることを望んだのであつた。

わたしは、ルターが、熱心に、熱烈に、恐れることを知らず、大胆に罪を責め、真理を擁護したことを示された。彼は悪人や惡魔を氣にかけなかった。それよりも、もっと偉大なお方が自分と一緒におられることを、彼は知っていた。ルターは熱心と勇敢さと大胆さのあまり、ときには極端に走る危険があつた。しかし神は、ルターと性格のちょうど反対なメラnhitonを起用して、ルターが改革の働きを進めるのを助けさせられた。メラnhiton

トンは内気で、臆病で、用心深くて、非常に忍耐強かった。彼は神から非常に愛された。彼の聖書の知識は深く、その判断と知恵はすぐれていた。神の働きを愛することはルターと変わらなかった。神はこのふたりの心をかたく結びつけられた。ふたりは離れることのできない友だちだった。臆病で、ぐずぐずするおそれのあるときには、ルターがメランヒトンにとってよい助けとなり、行き過ぎるおそれのあるときには、メランヒトンがルターにとってよい助けだった。

ルターだけにまかせておけば、改革運動にやっかいな問題が起こったかもしれないように、遠い先のことまで見通すメランヒトンの用心深さのおかげで、そうしたやっかいな問題が起これずにすんだことが幾度かあった。また、メランヒトンだけにまかせておけば、改革運動はいつまでも前進しなかったにちがいない。わたしは、こうした兩人を選んで改革運動の働きを進められた神の知恵を示された。

それから、わたしは、使徒時代に連れもどされて、神が熱誠あふれるペテロと穏やかで忍耐深いヨハネを仲間として選ばれたのを見た。ペテロは時折性急であつたので、そのような場合には、愛する弟子ヨハネが、彼を引き止めたものであつた。しかし、これは彼を改革するに至らなかった。だが、彼は、主を拒み、悔い改め、改心したあとでは、彼の熱

情と熱心を制するためには、ヨハネの穏やかな注意だけで十分であつた。キリストの働きは、ヨハネだけにゆだねられていたならば、行き詰まつたことであろう。ペテロの熱心も必要であつた。ペテロの大胆さと精力は、しばしば、彼らを困難から救い、敵を沈黙させた。ヨハネは、人をひきつけた。ヨハネは、彼の忍耐強さと、愛情深さによって、多くの人々をキリストの教えに導いた。

神は、ローマ教会の罪に対する叫びをあげ、改革を推進するために、人々をおこされた。サタンはこのような生きた証人たちを殺そうとした。しかし、主は、彼らの回りに防壁をつくられた。ある者は、神のみ名の栄光のために、彼らが立てたあかしに血の印を押すことが許された。しかし、ルターやメランヒトンのように、生命をながらえて、司祭や法王や王たちの罪を暴露し、神の栄光をあらわすことができた力強い人々も他にあつた。司祭や法王や王たちは、ルターや彼の仲間たちの声を聞いて震えた。これらの選ばれた人々によつて、光が闇の中に照り出した。そして、多くの人々が、喜んで光を受け入れ、それに従つて歩いた。そして、ひとりの証人が殺されたならば、ふたりまたは、それ以上の人々が現れて、その場所を埋めるのであつた。

しかし、サタンは、満足しなかつた。彼は、ただ、肉体に権力をふるうことができないだ

けであつた。彼は、信者たちに信仰と希望を棄てさせることができなかった。そして、死に臨んだ時・でさえ、彼らは、義人の復活の際の、不死の輝かしい希望をもつて勝利した。彼らは、人間の力以上のものを持っていた。彼らは、一瞬でも眠ることをせず、クリスチャンの武具を身にまとい、ただ霊的敵だけでなく、「あなだがたの信仰を捨てよ、さもないと死刑だ」と叫ぶ人々の姿をとつたサタンと戦う用意をしていた。これらわずかのクリスチャンたちは、神にあつて雄々しかつた。そして彼らは、キリストの名は称えていても神のみわざにおいて臆病な世の大半の人々よりも、神のみ前に尊かつた。教会は迫害を受けだが、教会員たちは、一致して愛し合つた。彼らは、神にあつて強かつた。罪人は、教会に加わることが許されなかつた。キリストのために、すべてを捨てることができる人々だけが、彼の弟子になることができた。この人々は、貧しく、謙遜で、キリストのようであることを愛した。



## 教会と世俗の結合

その後、わたしは、サタンが、彼の天使たちを集めて、その成果について相談しているのを見た。確かに彼らは、死の恐怖によって、幾分かの臆病な人々に真理を受けさせずにおくことはできた。だが、多くの人々は、その中の最も臆病な者でさえも、真理を受け入れたときに、立ちどころに彼らの恐怖も臆病も消え去ってしまったのである。これらの人は、彼らの兄弟たちの死を目撃し、彼らの固い信仰と忍耐を見たときに、神と天使たちが、このような苦難に耐える力を彼らに与えたことを知り、ますます大胆、果敢になった。そして、彼らもその生命を献げるように召しを受けた場合には、堅忍不拔の信仰を保って、殺害者たちをさえ震え上がらせた。サタンと彼の天使たちは、魂を滅ぼすのにもっと効果的で、もっと決定的な方法があると決意した。クリスチャンたちは、どんなに苦難にあっても、強く信仰に立ち、輝かしい希望に勇気づけられていたので、どんなに弱い者でもそれに励まされて、恐れることなく、拷問台や火刑柱に近づくことができた。彼らは、殺害

者たちの前でのキリストの気高い態度にならって、その堅固さと、彼らに宿った神の栄光によって、他の多くの人々に真理を信じさせた。

そこで、サタンは、もっと穏やかな手段をとるべきであると考えた。彼は、すでに聖書の教理を腐敗させていた。そして、無数の人々を滅びに陥れる言い伝えが、深く根をおろしていた。そこで、彼は、彼の憎しみをおさえて、彼の手下たちを激しい迫害にかり立てるのではなくて、聖徒たちにひとたび伝えられた信仰とは異なった、種々の言い伝えについての争いを、教会の中に起こすことにした。サタンが教会の利益のためであるという口実の下に、世俗の支持と栄誉を教会が受けるようしおけたときに、教会は、神の恵みを失い始めた。快樂を愛する者や世を友とする者を拒絶する、率直な真理を宣言することを避けて、教会は次第に、その力を失っていった。

教会は、迫害の火の手があがっていた時のような、世とは分離した特選の民ではなくなつた。黄金は、なんとその光を失ったことだろう。精金は、なんと変化したことだろう。もし教会が、常にその独特の神聖な性格を保っていたならば、弟子たちに与えられた聖霊の力は、なお教会と共にあることを、わたしは見た。病人はいやされ、悪鬼は譴責されて追い出され、そして教会は大いなる力を持ち、教会の敵にとっては恐るべき存在となつたで

あろう。

わたしは、キリストの名を称える大群を見たが、神は、彼らをご自分のものとはお認めにならなかった。神は、彼らをお喜びにならなかった。サタンは、敬神深い様子をしていて。そして、人々が自分たちはキリスト者であると考えていることを、非常に喜んでいて。彼は、人々がイエスと彼の十字架と復活を信じることを切望してさえいた。サタンと彼の天使たちは、こうしたことをみな完全に信じて、震えているのである。しかし、この信仰が善行をもたらさず、その信仰を告白する者たちが、キリストの自己犠牲的な生涯をまねないかぎり、サタンは、それを気にしないのである。なぜなら、彼らの心はまだこの世的であるのに、ただキリストの名を称えるだけだからである。そしてサタンは、彼らが信仰の告白をしない場合より一層有効に、彼らを自分の働きに利用することができる。彼らは、クリスチャンという名の下に彼らの醜さをかくし、彼らの清められていない性質をしずめられていない邪悪な情欲を持ったまま生活する。そのため、信仰を持っていない人々は、彼らの不完全なことを理由に、キリストを非難する。そして、清く汚れない信心を持っている人々を辱めるのである。

牧師たちは、世俗的信仰者に迎合して、耳ざわりのよいことを語る。彼らは、イエスの

ことや聖書の鋭い真理を説教しようとしなない。もしそうすれば、これらの世俗的信仰者たちは、教会に残っていないであろう。しかし、彼らの多くは金持ちであるために、サタンや彼の天使たちと同様に全く不適当な者であるにもかかわらず、教会に留めておかなければならない。これは、サタンが望むところのことである。イエスの宗教は、一般に受けがよいものにされ、世間的に尊敬を受けるものにされている。信仰を告白する者は、世の中から一層尊敬されると人々は言い聞かされている。このような教えは、キリストの教えとは、非常にかけ離れたものである。キリストの教えと世の中とは、相容れないものであった。彼に従うものは、世を捨てなければならなかったのである。こうした当たりのいいことは、サタンと彼の天使たちにその源を発している。彼らが計画をたてて、名目だけの信仰者たちがそれを実行するのである。耳ざわりのよい作り話が語られて、人々は、それをすぐに受け入れた。そして、偽善者と公然たる罪人たちが教会に加わった。もし真理が、その純粋なままで説教されたならば、すぐにこの種の人々を追放してしまったのであろう。しかし、キリストの信者であると自称する者たちとこの世との間には、なんの違いもなかった。もし教会の信者たちから偽りのおおいが取り去られてしまったならば、驚くべき不正、墮落、腐敗が暴露されて、どんなに思慮深い神の子であつたとしても、これらの自称クリ

スチャンたちを、その当然の名で呼び、彼らは彼らの父、悪魔の子であるというのを躊躇しないだろうということを、わたしは見た。なぜならば、彼らは、悪魔の働きをしたからである。

イエスは、全天の天使たちと共に、この光景をながめて嫌悪の感をいだかれた。しかし、神は、神聖で重大な使命を教会に与えようとしておられた。もし教会がそれを受け入れるならば、教会内に徹底的改革が行われて、偽善者と罪人たちとを一掃する生きたあかしが復活し、教会は、ふたたび、神の恵みにあずかることができるようになるのであった。

### ウィリアム・ミラー（付録参照）

神は、天使をつかわして、聖書を信じていなかった一農夫の心を動かし、彼に預言の研究をするように導かれた。神の天使たちは、この選ばれた人を度々訪れて指導を与え、これまで神の民にとって不可解であった預言に対する理解を与えた。彼に一連の真理の鎖の糸口が与えられた。そして、彼は、一つの環から次の環へと研究に導かれるにつれてついに、

神のみ言葉を驚異と賛嘆の眼をもって見るようになった。彼は、そこに完全な真理の連鎖を見た。彼がこれまで靈感によるものではないと考えていたそのみ言葉が、今彼の目の前に美と栄光に輝いて展開されたのである。彼は、聖書の一部分が他の部分を説明し、彼が理解できなかった聖句は、聖書の他の部分が、それを説明していることを見出した。彼は、神のみ言葉に対して、喜びと非常な尊敬と畏怖の念を抱いた。

彼は、預言の研究をしているうちに、地球の住民たちが、世界歴史の最後の時代に臨んでいるのを悟ったが、人々は、まだ、それを知らないでいた。彼は、諸教会をながめた。そして、それらが腐敗しているのを見た。彼らは、イエスを愛さず、世俗を愛していた。彼らは、上からの栄誉のかわりに、世俗的栄誉を求めている。また、天に宝を積むかわりに、世俗の富を貪っていた。彼は、至るところに、偽善と暗黒と死を見ることができた。彼は、心を揺り動かされた。神は、牛と畑を捨ててエリヤに従うようにエリシャを召されたように、彼に農園を捨てるように召されたのである。ウィリアム・ミラーは、恐れおのきながら、神の国の神秘を人々に語り始めた。そして、預言を解き進めて、聴衆にキリストの再臨を示した。努力するたびに、彼は力を増していった。バプテスマのヨハネが、キリストの初臨の道を備えたように、ウィリアム・ミラーと彼の働きに参加した人々は、神

のみ子の再臨を宣べ伝えたのである。

わたしは、使徒時代にさかのぼって、神が愛する弟子ヨハネになさせようとされた働きがあったことを示された。サタンは、この働きを妨害しようと決意して、彼の手下たちにヨハネを殺害させようとした。しかし、神は、天使をつかわして、驚くべき方法で彼を保護された。ヨハネの救出に当たってあらわされた神のたいなる力を見た者はみな、非常に驚いた。そして、神が彼と共におられることを信じ、イエスに関する彼のあかしの正しさを信じた者が多くいた。彼を殺そうとした者たちも、恐れて二度と彼の生命をとろうとしなかった。こうして、彼は、イエスのためにさらに苦難を受けることが許された。彼は、敵の偽証のために、間もなく、寂しい島に流された。そこにおいて、主は、天使を送って、地上に起こる出来事と、時の終わりに至るまでの教会の状態とその背信とを示し、もし教会が、神を喜ばせ、ついに勝利を得るためには、どのような立場に立つべきかを、彼に示されたのである。

天からの天使が、非常な荘厳さのうちに、ヨハネのところに来た。彼の顔は、神の驚くべき栄光に輝いていた。天使は、神の教会の歴史の中の、非常に感動的な場面をヨハネに示し、キリストを信じる人々が耐えなければならぬ危険な争闘を彼の前に示した。ヨ

ハネは、彼らが火のような試練を経て、白く精練され、ついに、勝ち誇る勝利者となり、神の国に救われるのを見た。天使が神の教会の最後の勝利をヨハネに見せたときに、その顔は、喜びと非常な栄光に輝いた。ヨハネは教会の最後の勝利を見たときに、その光景の栄光に感激して、深い畏敬の念に満たされ、天使の足もとにひれ伏して、彼を拝そうとした。天使は、直ちに彼をかかえ起こし、譴責して、「そのようなことをしてはいけない。わたしは、あなたや、あなたと同じしもべ仲間であり、またイエスのあかしびとであるあなたの兄弟たちと同じしもべ仲間である。ただ神だけを拝しなさい。イエスのあかしは、すなわち、預言の霊である」と言った。それから、天使が、壮麗で栄光に輝く天の都をヨハネに見せたところ、ヨハネは全くそれに魅せられ圧倒されて、天使のさきほどの譴責も忘れて、ふたたび彼の足もとにひれ伏して拝そうとした。するとまた、やさしい譴責が与えられた。「そのようなことをしてはいけない。わたしは、あなたや、あなたの兄弟である預言者たちや、この書の言葉を守る者たちと、同じしもべ仲間である。ただ神だけを拝しなさい」。

説教者と一般の人々は、黙示録を不可解なものとし、聖書の他の部分よりも重要でないと考えている。しかし、わたしは、本書が、終末時代に生存する人々に特別の利益をもたらすために与えられた啓示であって、彼らが真の立場と義務とを確認するためのもの



であることを見た。神は、ウィリアム・ミラーの心を預言に向けさせ、黙示録に関する大きな光をお与えになった。

人々が、ダニエルの幻をよく理解していたならば、ヨハネの幻をもよく理解したことであろう。神は、ちょうどよい時に、神が選んだしもべの心を動かされた。彼は、聖霊の力によって、明快に預言を説明し、ダニエルの幻とヨハネの幻、その他の聖書の部分の調和を示して、人の子イエスの再臨に備えるようにという、聖書の神聖で恐るべき警告を人々の心に印象深く語った。彼の言葉を聞いた人々は、心の底から厳粛な思いになった。牧師も、一般の人々も、罪人も無神論者も、神に立ち帰り、審判の前に立つ準備をしようとした。

神の天使たちは、ウィリアム・ミラーの働きに伴って行った。彼は、堅忍不拔の精神をもって、恐れるところなく、彼に託されたメッセージを宣言した。邪悪な世界と冷淡で世俗的な教会とは、彼の全精力を活動させるのに十分な刺激であった。そして、彼は、快く労苦と窮乏と苦難とに耐えた。自称クリスチャンたちと世俗とから反対され、また、サタンと彼の天使たちの攻撃を受けながらも、彼は招かれるところはどこへでも行って、群衆に永遠の福音を宣べ伝え、遠い所でも近い所でも、「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである」という叫びを鳴りひびかせたのである。

第一天使の使命（付録参照）

一八四三年に叫ばれた、時についての宣言には、神が共におられたことを、わたしは見た。人々の目を醒まし、彼らに真理を受け入れるか否かを決めさせる決定的瞬間に至らせることは、神の計画であつた。牧師たちは、預言的期間に関する論拠の正確なことを確信した。そして、ある者は、高慢な心を放棄し、彼らの職業を捨て、教会を去って、メッセーヂを伝えるために東奔西走した。しかし、天からのこの使命を心に受け入れた牧師はごくわずかであつたので、働きは、牧師ではない多くの人々にゆだねられた。メッセーヂを伝えるために、農園を売ったものもあれば、仕事場や商店を去ったものもあつた。また、ある知的職業人たちでさえ、彼らの職業を捨てて、第一天使の使命を伝えるというあまり人の喜ばない働きに従事した。

牧師たちは、彼らの教派的見解や感情を捨てて、一つになってイエスの再臨を宣言した。そのメッセーヂは、どこであつても、人々の心を動かした。罪人は悔い改め、涙を流して、

罪の許しを祈り求めた。そして、不正直な生活を送っていた人々は、なんとかして償いしようとした。親たちは、子供たちのことを深く憂えた。メッセージを信じた人々は、まだ悔い改めていない友人や親せきのために働き、その厳粛な使命の重要性を心に強く感じて、人の子の来臨に備えるように警告し訴えた。このような心からの警告によって示された重大な証拠をも信じなかった人々は、まことに頑固な人々であった。この魂を清める働きは、人々の愛情を世のものから取り去って、これまでになかったような献身へと導いたのである。

多くの人々が、ウィリアム・ミラーの伝えた真理を受け入れた。そして、エリヤの霊と力をもってメッセージを宣言する神のしもべたちが起こった。イエスの先駆者ヨハネのように、この厳粛なメッセージを伝えた人々は、おのを木の根におかねばならぬと感じた。そして、人々に悔い改めにふさわしい実を結ぶように呼びかけた。彼らのあかしは、諸教会を目覚めさせて、強い影響を及ぼし、それらの本性を明らかにするように計画されたものであった。そして、来たるべき怒りから逃れるようにという厳粛な警告が発せられたときに、諸教会に連なっていた多くの人々が、その癒しのメッセージを受け入れた。彼らは、自分たちの背信を認めて、悔い改めの激しい涙と、魂の深刻な苦悩とによって、神の前に

謙虚になった。そして、神の霊が彼らの上に宿って、彼らは、「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである」という叫びをあげるのに加わった。

特定の時についての宣教が行われたときに、講壇に立つ牧師から、神を恐れぬ無謀きわるる罪人に至るまで、あらゆる階級の人々から大きな反対が起こった。「その日、その時は、だれも知らない」という言葉が、偽善的牧師や大胆な嘲笑者たちから発せられた。預言的期間が終了したと信じた人々がその年と、キリストが来られる時が間近に迫っているというしるしを指し示しても、彼らは、その教えを受け入れず、考えを正そうとしなかった。イエスを愛すると言っていた、多くの、群れの指導者たちは、自分たちはキリストの再臨を説教することには反対ではないが、特定の時を定めることには反対であると言った。すべてをgoranになる神の目は、彼らの心を見通しておられた。彼らは、イエスがそば近くにこられることを好まなかった。彼らは、自分たちのクリスチャンらしくない生活が、テストに合格しないことを知っていた。彼らは、イエスがお定めになった謙遜な道を歩いていなかったのである。このような偽りの牧者たちは、神の働きを妨害していた。説得力をもって語られた真理は、人々を目ざめさせた。そして、人々は、獄吏のように、「わたしは救われるために、何をのすべきでしょうか」とたずね始めた。しかし、このよう

な牧者たちは、真理と人々の間に立ちふさがって、彼らを真理からそらすために、なめらかな言葉を説いた。彼らは、サタンとその天使たちと一緒にになって、平安がないのに、「平安、平安」と叫んだ。安楽を愛し、神から遠く離れていることに満足していた人々は、彼らの現世的安定感から覚まされることを好まなかった。わたしは、神の天使たちが、それらすべてに注目したことを見た。これらの清められていない牧者たちの衣服は、魂の血でおおわれていた。

この救いのメッセージを自ら受け入れようとしなかった牧師たちは、それを受け入れようとする人々を妨害した。魂の血は、彼らに負わせられている。牧師たちと人々とは一つになって、この天からのメッセージに反対し、ウィリアム・ミラーと彼の働きに参加した人々を迫害した。彼の感化を損なおうとして、虚偽の噂が広められた。彼が、神の勧告を明白に宣言し、聴衆の心に痛烈な真理を伝えたあとで、彼に対して激しい怒りが燃え上がることにがしばしばあった。そして、彼が集会の場所を去ったときに、彼の生命を奪おうとして待ち伏せる者もあった。しかし、神の天使が送られて、彼を保護し、怒り狂う群集から安全な場所に彼を連れ去った。彼の働きは、まだ終わっていないかった。

最も信仰のあつい人々は、喜んでメッセージを受け入れた。彼らは、そのメッセージが

神からのものでありの、正しい時に与えられたものであることを知っていた。天使たちは、天からのメッセージがどんな結果をもたらすかを、非常な関心をもって見守っていた。そして、諸教会がそれに背を向けて拒否したときに、彼らは、悲しみながら、イエスと相談した。彼は、諸教会から顔をそむけられ、天使たちに、あかしを拒否していない貴重な人々をよく見守るようにお命じになった。彼らには、さらに別の光が照り輝くからであった。

もし、自称クリスチャンたちが、救い主の出現を願い、彼に愛情を注ぎ、この地上において彼と比べることができる者はだれもいないと感じていたならば、彼らは、彼の来臨の最初の告知を喜んで迎えていたであろう、ということわたしは示された。しかし、彼らが、主の来臨について聞いたときに表した嫌悪は、彼らが彼を愛していない明白な証拠であった。サタンと彼の天使たちは、勝ち誇った。そして、彼らは、キリストと彼の天使たちの前で、神の民であると称する人々が、イエスをこのように愛することが少なく、彼の再臨を望んでいないのだと、言うのであった。

わたしは、神の民が、喜んで、彼らの主を待望しているのを見た。しかし、神は、彼らを試みようとしておられた。神は、彼らの預言の期間の計算の誤りを、手でおおわれた。主を待望していた人々は、この間違いに気づかなかった。そして、時に関して反対してい

た最も優れた学者たちもそれを発見しなかった。神は、神の民が失望に出会うように計画された。定められた時は、経過した。そして、喜んで救い主を待望していた人々は、悲しみと失望に陥った。そして一方、イエスの来られるのを望んではいなかったが、恐怖心からメッセージを受け入れていた人々は、予期していた時に主が来られなかったことを喜んだ。彼らの告白は、心に何の影響も及ぼしておらず、生活を清めてもいなかった。時の経過は、このような人々の心を暴露するためのものであった。彼らは背き去り、救い主の出現を真に望んで悲しみと失望に陥っている人々を嘲笑した。神が、この試練の時に当たって、いったいだれがおじ恐れて離れ去って行くかを発見するために厳しいテストをお与えになって、神の民を試されたことは、神の知恵であったことを、わたしは見た。

イエスと天の万軍は、心から愛する主を喜びに満ちて待望していた人々を、同情と愛をもって見つめた。天使が彼らの回りに飛びかかって、試練のうちにある彼らを支えていた。天からのメッセージを受けるのことを怠っていた人々は、暗黒の中に取りのこされた。そして、彼らが天からの光を受けようとしなかったために、神の怒りが彼らに対して注がれた。失望に陥った忠実な人々は、なぜ主が来られなかったかを理解することはできなかったが、暗黒の中に取り残されはしなかった。彼らは、ふたたび、預言的期間を研究するように、

聖書に導かれた。数字の上から主の手が除かれて、誤りが説明された。彼らは、預言的期間が、一八四四年に及んでいるのを認めた。そして、彼らは、預言的期間が一八四三年に終わることを示すのに用いたのと同じ証拠を用いて、それが、一八四四年に終了することを証明しているのを認めた。神のみ言葉からの光が彼らの立場を照らした。そして、「もしおそれれば待つておれ」という遅延の時があることを発見したのである。彼らは、キリストが直ちに来られることを望み慕うあまりに、幻の中の遅延の時をみのがしていた。これは、真に待望する者を明らかにするために計画されたものであった。彼らは、ふたたび、一定の 때가、与えられた。しかし、彼らの中の多くの人々は、彼らの苦い失望を乗り越えて、一八四三年に彼らの信仰があらわしたような熱と活力を持つことができなかったのをわたしは見た。

サタンと彼の天使たちは、彼らに対して勝利を収めた。そして、メッセーヂを受け入れようとしなない人々は、自分たちが欺瞞と呼んでいたものを受け入れなかった自分たちの先見の明と知恵とを誇った。彼らは、自分たちが、自分たちに対して与えられた神の勧告を拒み、サタンや彼の天使たちと一緒に頑張って働き、天からのメッセーヂを実践する神の民を悩ましていることを、自覚しなかった。



このメッセージを信じた人々は、諸教会のなかで迫害された。メッセージを受け入れない人々は、一時、心の感情のままに行動することを恐れて、抑制していたが、時の経過が彼らの本性を明らかにした。彼らは、預言的期間が一八四四年まで延びたと証言せずにはおれない待望者たちのあかしを、沈黙させようとした。信者たちは、明白に彼らの間違いを説明し、一八四四年に主を待望する理由を述べた。反対者たちは、この強力な理由に対して反論することができなかった。しかし、諸教会の怒りが燃え上がった。彼らは、証拠に耳を傾けないことに決め、他の者がそれを聞かないように、あかしを教会から閉め出してしまうた。神がお与えになった光を他の人々に伝えてやまぬ人々は、教会から閉め出された。しかし、イエスは、彼らと共におられた。そして、彼らは、み顔の光の中で喜びにあふれた。彼らは第二天使の使命を受ける用意ができたのである。

## 第二天使の使命 (付録参照)

諸教会が、第一天使の使命を受けることを拒んだときに、彼らは、天からの光を拒否し、

神の恵みを失った。彼らは、自分たち自身の力に頼った。そして、彼らは、第一天使の使命に反対することによって、第二天使の使命の光を見ることができない状態に陥ってしまった。しかし、神に愛された者たちは、圧迫に会い、「バビロンは倒れた」というメッセージを受け入れて、諸教会を去った。

第二天使の使命の終わり近くに、天からの大きな光が、神の民を照らすのをわたしは見た（付録参照）。この光は、太陽よりも明るく見えた。そして、わたしは、天使が「さあ花婿だ、迎えに出なさい」と叫ぶ声を聞いた。

これは、第二天使の使命に力を与えるべき夜中の叫びであつた。天使たちが天から送られて、失望した聖徒たちを覚醒させ、彼らの前にある大いなる仕事に対する準備を彼らにさせた。最も才能ある人々が、このメッセージをまず最初に受けたものではなかった。天使たちは謙遜で敬神深い人々のところに送られ、「さあ花婿だ、迎えに出なさい」という叫びを彼らにあげさせた。この叫びをあげることゆだねられた人々は、急いで出て行き、聖霊の力によって、メッセージを鳴りひびかせ、失望した兄弟たちをふるい立たせた。この働きは、人間の知恵や学識によって行われたものではなく、彼の力によつたのである。そして、叫びを聞いた神の聖徒たちは、それに抵抗することができなかった。最も霊的な人

人がまずこのメッセージを受け入れた。そして、以前この働きを指導していた人々は、「さあ花婿だ、迎えに出なさい」という叫びを受け入れて、それに参加するのがいちばんあとであつた。

各地において、第二天使の使命の光が伝えられ、その叫びは、幾千という人々の心を感動させた。それは、町から町、村から村へと伝えられ、ついには神を待望している人々がみな覚醒した。多くの教会においては、メッセージを語ることが許されなかった。そして、生きたあかしをもった大群衆がこれらの墮落した教会を去つた。夜中の叫びによつて、大いなる働きが成し遂げられた。このメッセージは、深く心を探るものであり、信者たちに自分自身で生きた経験を求めるよう促した。彼らは、お互いに他人に依存できないことを知つた。

聖徒たちは、断食と目をさまして絶えず祈ることによつて、ひたすら彼らの主を待っていた。罪人の中にさえ、その時を、恐れながら待っている者があつた。しかし、大多数の者は、メッセージに反対して、サタンの精神をあらわした。彼らは、至るところにおいて、「その日、その時はだれも知らない」と言つて、あざけり、笑つた。悪天使たちは、彼らの心をかたくなにさせて、天からの光をすべて拒否させて、彼らをサタンのわなに捕らえて

おこうとした。キリストを待望すると称していた人々の多くは、この使命の働きに加わらなかった。彼らが目撃した神の栄光、待望する人々の謙遜と深い敬神の念、証拠の圧倒的な重みなどが、彼らに、真理を受け入れると公言させた。しかし、彼らは悔い改めていなかった。彼らは、主の再臨の準備ができていなかったのである。

聖徒たちは、至るところで、厳肅で熱烈な祈りの精神を感じた。聖なる厳肅さが彼らの上に宿った。天使たちは、深い関心をもってメッセージの結果を見守り、それを受け入れた人々を高尚にし、この世のものから彼らを引き離して、救いの泉から豊かな供給を得るようにと導いていた。その時、神の民は、神に受け入れられた。彼らの中には、イエスのお姿が反映されていたので、イエスは、喜びをもって彼らをごらんになった。彼らは、完全な犠牲と全的献身をしており、不死の姿に変えられることを期待していた。しかし、彼らは、ふたたび悲しい失望を経験しなければならなかった。彼らが、救いを待望して待っていたその時は、過ぎ去ったのである。彼らは、なお、地上にいた。そして、呪いの結果が、この時ほど著しく思われたことはなかった。彼らは、その愛情を天に向けていた。そして、すでに楽しい予想によって、永遠の救いを味わっていた。しかし、彼らの希望は実現しなかった。

多くの人々が抱いた不安は、すぐには消えなかった。彼らは、失望した人々に対して、直ちに勝ち誇ることはできなかった。しかし、神の怒りが目に見えて現れなかったのも、彼らは、恐怖も薄らぎ、嘲笑や嘲弄をし始めた。神の民は、ふたたび、試練に出会った。世の人々は、彼らをあざ笑い、ひやかし、責めた。その時まで、イエスは間違いなく来られて、死者をよみがえらせ、生きている聖徒を変えて天国へ携えていき、天国を永遠に彼らのものとしてくださると信じていた人々は、かつての弟子たちが、キリストの墓において、「だれかがわたしの主を取り去りました。そしてどこに置いたのか、わからないのです」と言った時に彼らが感じたのと同じような気持ちを味わったのであった。

### 再臨運動の説明

わたしは、綱で結ばれているように見えるたくさん群れを見た。こうした群れの中にいる多くの人々は、真っ暗闇の中にいた。彼らの目は、下の地球に向けられていた。そし

て、彼らとイエスとの間には、なんのつながりもないように見えた。しかし、これらのさまざまな群れのなかに、その顔は輝き、その目は天に向けられている人々が散在していた。イエスからの光が、太陽の光のように彼らに注がれていた。天使がわたしによく見るように言った。そして、わたしは、光を持っている人々を、天使がひとりずつ守護しているのを見たが、一方、悪天使たちは、暗黒の中にいる人々を取り囲んでいた。わたしは、ひとりの天使が、「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである」と叫ぶのを聞いた。

その時、これらの群れに輝かしい光が輝き、それを受けるすべての者を照らした。暗黒の中にいる人々の中には、光を受けて喜んだ人々があつた。他の人々は、天からの光を拒んで、それは彼らを誤った道に導くために送られたのだと言った。光は、彼らを過ぎ去って、彼らは暗黒の中に残された。イエスから光を受けていた人々は、彼らに与えられる尊い光が増し加わるのを喜んで大切にした。彼らの顔は、聖なる喜びに輝いていた。そして、彼らは、非常な関心をもつてイエスを仰ぎ見、「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである」という天使の声に合わせて、彼らの声をあげていた。彼らが、この叫びをあげた時に、暗黒の中にいる人々が、彼らを横腹や肩で押しのけるのを、わた

しは見た。すると、聖なる光を信じた多くの人々は、彼らをつないでいた綱を切って、それらの群れから離れて立った。彼らがこうしていた時に、いろいろの群れに属し、その尊敬を受けていた人々が、そこを通りがかった。その中には、愛想よく話しかける人もあれば、また、怒りを顔にあらわし、威嚇するような態度で、弱りかかった綱を引きしめる人もあった。この人々は、絶えず、「神は、われわれと共にあられる。われわれは光の中にある。われわれは真理を持っている」と言っていた。わたしは、この人々がだれであるかを聞いたところ、彼らは、光を拒絶した牧師や指導者であって、他の人々が光を受け入れることを好まないものであると知らされた。

光を信じた人々が、イエスが来られて彼らを彼のところへ連れて行かれることを期待して、熱望をもって天を仰いでいるのをわたしは見た。やがて、雲が彼らをおおい、彼らの顔は悲しくなった。わたしが、この雲はどうしたわけであるかをたずねたところ、それは、彼らの失望であることを示された。彼らが救い主を期待した時は過ぎてしまい、イエスは来られなかった。彼らが失望に陥ったときに、前述の牧師や指導者たちは、喜んだ。そして、光を拒んだ者たちは、大いに勝ち誇り、サタンとその天使たちも狂喜した。

それから、わたしは、別の天使が「倒れた、大いなるバビロンは倒れた」というのを聞

いた。失望した人々に光が輝いた。彼らは、イエスの現れを熱望して、ふたたび彼らの目をイエスに向けた。わたしは、「バビロンは倒れた」と叫んだ天使と多くの天使たちが話し合うのを見た。そして、彼らは、彼と一緒にになって、「さあ花婿だ、迎えに出なさい」と叫んだ。この天使たちの音楽的な声は、至るところに響きわたった。与えられた光を信じた人々の回りには、燦然とした栄光の光が輝いていた。彼らの顔は、非常な栄光に輝き、彼らは天使たちと一緒にになって、「さあ花婿だ、迎えに出なさい」と叫んだ。彼らが、いろいろの群れの中で、声を一つにして叫びをあげたとき、光を拒否した人々は、彼らを圧迫し、怒りを顔にあらわして、彼らを軽べつし嘲笑した。しかし、神の天使たちは、迫害される人々の上に翼を拡げた。他方では、サタンとその天使たちが、彼らの回りを暗黒でおおい、天からの光を彼らに拒否させようとしていた。

その時、わたしは、圧迫され嘲笑されている人々にむかって、「彼らと分離せよ、汚れたものに触れてはならない」と叫ぶ声を聞いた。多くの人々が、この声に従って、彼らを縛っていた綱を切って、暗黒の中にあつた群れを離れ、先に自由を得ていた人々に加わり、喜びに満ちて彼らと声を合わせた。わたしは、暗黒の中にある群れにまだ残っている幾人かの人々が、熱心に心を悩ましながら祈りをささげているのを聞いた。牧師や指導者たちは、



こうした群れの間を回って、綱を引きしめていた。しかし、依然として、熱心な祈りの声が聞こえた。そして、わたしは、祈っていた人々が、すでに自由を得て神にあって喜びを味わっている一団の人々に手を伸ばし、助けを求めているのを見た。すると彼らは、熱心に天を仰ぎ、天を指さして、「彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ」と答えるのであった。わたしは、人々が、自由を求めて苦闘し、ついに、彼らを縛っていた綱を断ち切るのを見た。彼らは、綱をますます引きしめようとする力に抵抗し、「神はわれわれと共にある」―われわれは真理を持っている―と繰り返し主張されるのを聞くことを拒んだのである。

人々は、暗黒の中にある群れから続々と離れて、地上から離れた広い野原にるように見える自由な一団に加わりつつあった。彼らの目は天に向けられ、彼らの上に神の栄光が宿っていた。そして、彼らは喜びに満ちて神を賛美していた。彼らは、固く結ばれ、天の光に包まれているように見えた。この一団のまわりに、光の感化は受けられども、特にこの一団に加わらなかった人々がいた。与えられた光を受け入れた者はみな、非常な熱心をもって天を仰いでいた。そして、イエスは優しい是認をもって彼らをごらんになった。彼らは、イエスが来られるのを期待し、その出現を待望していた。彼らは、地上の方には

少しも目を向けなかった。しかし、ふたたび、雲が、待ち望んでいる人々をおおった。そして、わたしは、彼らが、疲れた目を地上に向けるのを見た。わたしは、この変化がどうして起きたのかたずねた。すると、わたしにつきそっていた天使が言った。「彼らは、ふたたび、期待がはずれて失望した。イエスは、まだ、地上においでになれない。彼らは、主のために大きな試練に会わなければならない。彼らは、人間から受けた誤りや言い伝えを捨てて、全く、神と神の言葉に立ち帰らなければならない。彼らは、清められて白くされ、精練されなければならない。この苦い試練に耐える者が永遠の勝利を得るのである」。

イエスは、喜びに満ちて待望していた人々の期待したように、火で地を清めて、聖所を清めるためには来られなかった。わたしは、預言の期間についての彼らの計算は正しかったことを見た。預言の時は、一八四四年で終わり、イエスは、その期間の終わりに、聖所を清めるために、至聖所に入られた。彼らの間違いは、聖所とは何であり、その清めとは何であるかを理解しなかったことであつた。わたしが、ふたたび、待望して失望に陥った一団の人々を見ると、彼らは悲しそつであつた。彼らは、綿密に、彼らの信仰の証拠を調べ、預言的期間の計算を十分に行ったが、間違いを見つけることができなかった。時は満ちたのに、救い主はどこにおられるのであろうか。彼らは、主を見失ってしまった。

わたしは、弟子たちが墓に来て、イエスのみ体を見つけられなかったときの失望を見せられた。マリヤは、「だれかが、わたしの主を取り去りました。そして、どこに置いたのか、わからないのです」と言った。天使は、悲しんでいる弟子たちに、彼らの主がよみがえり、彼らに先だってガリラヤへ行かれたことを告げた。

それと同様に、イエスは、彼の来臨を待望して失望に陥った人々を、最も深いあわれみをもって見つめておられた。そして、彼は、天使を送って、彼がおられるところへ彼らがついて来るように、指導をお与えになった。イエスは、この地上が聖所ではなくて、彼は、彼の民のために贖いをなし、天父からみ国を受けるために、天の聖所の至聖所にはいられなければならないこと、そして、それからこの地上に来て、彼らを天に携えていき、永遠に彼と共に住むようにされることを、彼らに示された。最初の弟子たちの失望は、一八四四年に主を待望した人々の失望をよくあらわしていた。

わたしは、主がエルサレムに凱旋入城をなさった時へと連れもどされた。喜びに満ちた弟子たちは、主がその時み国を受けて、この世の王として支配されるものと信じた。彼らは、大いなる希望を抱いて、彼らの王に従った。彼らは美しいしゅろの枝を切り、彼らの上着をぬいで、熱狂的にそれらを道に敷いた。彼らは、先になり、後になって、「ダビデの

子に、ホサナ。主の御名によってきたる者に、祝福あれ。いと高き所に、ホサナ」と叫んだ。パリサイ人たちは、喜びの声を快く思わず、イエスに、彼の弟子たちを譴責するように願った。しかし、彼は、「もしこの人たちが黙れば、石が叫ぶであろう」と彼らに言われた。ゼカリヤ九章九節の預言が、成就しなければならなかった。しかし、弟子たちは、苦い失望に陥らねばならなかった。その後、数日で、彼らは、イエスについてカルバリーへ行き、悲惨な十字架にかけられて血を流される彼を見たのである。彼らは、彼の苦悩の死を見、そして彼を墓に横たえた。彼らの心は、悲しみに沈んだ。彼らの期待は、何一つ実現せず、彼らの希望は、イエスと共に失せ去った。しかし、彼が死からよみがえられて、悲しむ弟子たちにお現れになったときに、彼らの希望は、よみがえった。彼らは、ふたたび、イエスを見出したのである。

わたしは、一八四四年の主を待望する人々の失望は、最初の弟子たちの失望とは比べものにならないことを見た。預言は、第一天使の使命と第二天使の使命において成就した。これらのメッセージは、正しい時に発せられて、神が成し遂げようと計画された働きを成し遂げたのであった。

## 再臨運動の説明―続

わたしは、地上で行われている働きに対する全天の関心を示された。イエスは、大いなる天使に、地上に行つて、彼の再臨の準備をするよう地の住民に警告を発することを命じられた。天使が、天上のイエスのみ前を去ったときに、非常に光り輝く栄光が、彼に先立つて行つた。彼の任務は、彼の栄光をもって地を照らし、来たるべき神の怒りについて人類に警告することであることを、わたしは知らされた。多くの人々が光を受けた。その中のある人々は、非常に厳粛であつたが、他の人々は、喜びに満ちてうつとりとしていた。光を受けた者はみな、彼らの顔を天に向けて、神に栄光を帰した。光は、すべての者の上に輝いていたけれども、ある者は、ただその力に触れただけで、心から光を受け入れなかった。多くの人々は、激しい怒りを抱いた。牧師たちと人々は、悪人たちと一緒に、大いなる天使が輝かした光に頑強に反抗した。しかし、光を受けた者はみな、世から離れて、お互いに固く結び合わされた。

サタンと彼の天使たちは、できるだけ多くの人々の心を光から引き離そうと忙しく働いていた。それを拒否した人々は、暗黒の中に取り残された。わたしは、神の天使が、神の民と称している人々を深い関心をもってながめ、天来のメッセージが彼らに示されたときに彼らが形成した品性を、記録しているのを見た。そして、イエスを愛すると公言していた人々の非常に多くが、軽べつと嘲りと憎しみをもって、天来のメッセージを拒否したときに、手に羊皮紙をもった天使は、その恥ずべき記録を書き残した。全天は、イエスがどのように、彼の弟子であると称する人々に軽んじられたのを見て、憤りに満ちた。

わたしは、期待していたときに主にお目にかからなかった信仰のあつい人々の失望を見た。将来を見せず隠しておいて、神の民を決断の地点に導くことは、神の計画であった。キリストの再臨の明確な時を宣べ伝えずに、神が計画された働きを成し遂げることはできなかったりサタンは、審判と恩恵期間の終わりに関する大事件を、はるか遠い将来のことのように多くの人々に考えさせていた。人々に、今準備をすることを熱心に求めさせることが必要であった。

時が経過したときに、天使の光を十分に受けなかった人々は、メッセージを軽べつした人々と一つになり、失望した人々を嘲るようになった。天使はキリストの弟子と称する人

人の状態を記録した。定められた時の経過は、彼らを試み、証明したのであって、非常に多くの者は、量られて、その量が足りないことが明らかになった。彼らは、キリスト者であるとして主張していたが、ほとんどあらゆる点において、キリストに従っていないかったのである。サタンは、イエスの弟子と称する人々の状態に狂喜した。サタンは、彼らを、彼のわなに捕えていた。彼は、大部分の者を、まっすぐな道から離れさせていた。そして、彼らは、別の方法で天にのぼろうとしていた。天使たちは、純潔で聖なる人々が、シオンの中の罪人たちや、世俗を愛する偽善者たちと共にいるのを見た。天使たちは、イエスの真の弟子たちを保護していた。しかし、墮落した人々が、聖なる人々に影響を及ぼしていた。イエスにお目にかかるという熱烈な願いに燃えていた人々は、彼らの兄弟と称する人々に、イエスの再臨について語ることを禁じられた。天使たちは、この光景をながめて、彼らの主の出現を愛する残りの民に同情を寄せた。

もうひとりの力ある天使が、地にくだっていくように任命を受けた。イエスは、彼の手に書き物を渡された。そして、彼は、地に来て、「倒れた、大いなるバビロンは倒れた」と叫んだ。すると、失望した人々は、もう一度目を天に向けて、信仰と希望をもって、主の出現を待望した。しかし、多くの者は、眠っているかのように、ぼう然としていた。しか

し、彼らの顔には、深い悲しみのあとがあるのを、わたしは見た。失望した人々は、聖書によって、自分たちが、今、遅延の時にあることを知った。そして、幻が成就するまで忍耐強く待っていないければならないことを悟った。一八四三年に主を待望するように彼らを導いたのと同じ証拠が、一八四四年に主を待望するように彼らを導いた。しかし、多くの者は、一八四三年における彼らの信仰の特徴であつたあの活力を、持っていないのをわたしは見た。彼らの失望は、彼らの信仰を衰えさせていた。

神の民が、一つになつて第二天使の叫びをあげたときに、天の軍勢は、深い関心をもつて、メッセージの結果を見守つた。彼らは、クリスチャンと称する人々の多くが、失望した人々を軽べつし嘲るのを見た。嘲笑するくちびるが、「あなたはまだ昇天していない」と言つたときに、天使はそれを書き留めた。天使は、「彼らは、神をあざけている」と言つた。わたしは、昔、人々が同じような罪を犯したときのことを示された。エリヤは天に移され、彼の外とうはエリシャの上に落ちていた。その時、親たちから神の人を軽べつすることを学んでいた悪い少年たちがエリシャについて来て、あざけりながら、「はげ頭よ、のぼれ。」はげ頭よ、のぼれ」と叫んだ。こうして、彼らは、彼のしもべを侮辱することによつて、神を侮辱し、直ちに罰せられた。それと同様に、聖徒たちの昇天について嘲り笑つた人々は、神の怒りを



こうおり、創造主を侮ることは、ささいなことではないことを感じさせられるのである。

イエスは、他の天使たちに、速やかに飛んでいって、神の民の弱った信仰を復興させて力づけ、第二天使の使命と間もなく天で起ころうとしている重要な動きを彼らによく理解させるように、お命じになった。わたしは、これらの天使が、イエスから大いなる力と光を受け、第二天使の働きを助ける彼らの任務を完結するために速やかに地上へと飛んでいくのを見た。天使たちが、「さあ、花婿だ、迎えに出なさい」と叫んだときに、大いなる光が神の民に輝いた。それから、わたしは、これらの失望に陥った人々が立ち上がって、第二天使に声を合わせて、「さあ、花婿だ、迎えに出なさい」と叫ぶのを見た。天使たちから出た光は、暗黒をくまなく照らした。サタンと彼の天使たちは、この光が広がって、その目的とする結果があらわれるのを妨害しようとした。彼らは、天からの天使たちと争い、神は人々を欺かれたのだ、彼らのすべての光と力をもつてしても、キリストが来られることを世界に信じさせることはできないのだ、と言った。しかし、サタンが道をふさぎ、人々の心を光から離反させようとしたにもかかわらず、神の天使たちは、彼らの働きを続けた。

光を受けた人々は、非常に幸福そうに見えた。彼らは、じっと天を仰いで、イエスの出現を待望した。非常な苦悩のうちに、涙を流して祈っている人々もあった。彼らの目は自

分たちに注がれているらしく、彼らは上を見ようとしなかった。天からの光が、彼らの暗黒を追い払い、彼らは失望して自分を見つめていた目を上に向けた。すべての者の顔には、感謝と聖なる喜びが表れた。イエスは、すべての天使たちと共に、主を待つ忠実な人をごらんになって満足なされた。

第一天使の使命の光を拒んでそれに反対した人々は、第二天使の光を失い、「さあ、花婿だ、迎えに出なさい」というメッセージに伴う力と栄光の利益にあずかることができなかった。イエスは、まゆをしかめて、彼らから顔をそむけられた。彼らは、イエスを侮り、拒んだのである。メッセージを受け入れた人々は、栄光の雲に包まれた。彼らは、神に対して罪を犯すことを大いに恐れ、神のみこころを知ろうと神を仰ぎ、目をさまして祈っていた。わたしは、サタンと彼の天使たちが、神の民をこの天来の光から遮断しようとしているのを見た。しかし、待望している人々が、光を心に抱いて、彼らの目を地上から離してイエスを見上げているかぎり、サタンは、この尊い光を彼らから奪うことができなかった。天から与えられたメッセージは、サタンと彼の天使たちを怒らせた。そして、イエスを愛すると称しながら、彼の来臨を侮った人々に、神を信頼する忠実な人々を軽べつし嘲笑させた。しかし、神の子らが、彼らの自称兄弟たちから受けたすべての侮辱、すべての軽

べつ、すべての不正行為は、みな、天使が記録していた。

非常に多くの人々が、「さあ、花婿だ」という叫びをあげた。そして、彼らは、イエスの出現を愛さず、彼らにキリストの再臨のことを強調することを許さなかった兄弟たちから離れた。わたしは、イエスが、彼の来臨を拒み軽べつした人々から顔をそむけられるのを見た。そして、イエスは、彼の民が汚れに染まらないように、彼らを汚れた人々の中から連れ出すよう天使にお命じになった。メッセージに従った人々は、自由になり一致して立ち上がった。彼らの上には、聖なる光が輝いた。彼らは、世を捨て、地上の利益を犠牲にし、地上の財産を捨てて、彼らの愛する贖い主に会うことを待望して、彼らの眼をひたすら天に向けていた。彼らの顔には、聖なる光が輝き、彼らの心の中の平和と喜びとをあらわしていた。イエスは、彼らのところへ行って彼らを強めるよう天使にお命じになった。というのは、彼らの試練が迫っていたからである。わたしは、待望する人々が、まだ、十分に試練を受けていないことを見た。彼らは、誤りからまだ解放されていなかった。神は、恵みとあわれみをもって、地の住民に警告を発し、メッセージを繰り返し与えて、彼らに、熱心に心をさぐって、聖書を研究させ、異教徒やカトリック教徒から受けついで来た誤りを彼らが放棄するようになさったのである。神は、これらのメッセージによって、神の大

いなる力を彼らのために働かせることができるところへと彼らを導き、神のすべての戒めを彼らに守らせようとされたのである。

## 聖所

わたしは、神の民が、期待していたときにイエスにお目にかかることができなかつた悲痛な失望を示された。彼らは、預言的期間が終了していないという証拠が見ることができなかつたので、救い主が来られなかつた理由がわからなかつた。天使は言った。「神の言葉は、間違っていたであろうか。神は約束を成就されなかつたのだろうか。いや、神は、約束されたことをみな成就された。イエスは、立って、天の聖所の聖所の門を閉じ、至聖所の門を開いて、聖所の清めを行うために、その中に入られた。忍耐して待つ者は、みな、神秘を理解するであろう。人間が間違つたのである。しかし、神の側には、なんの間違いもなかつた。神の約束はみな成し遂げられた。しかし、人間は、この地が、預言的期間の終わりに清められる聖所であると、誤って信じた。誤っていたのは、神の約束ではなくて、

人間の期待であつた。」

イエスは、失望した人々の心を至聖所にむけるために、彼の天使たちをお送りになった。彼は、聖所を清め、イスラエルのために特別の贖いをするために、そこに入られたのである。イエスは、彼を見いだす者はみな、彼がなさるべき働きを理解するであろうと、天使たちに言われた。わたしは、イエスが、至聖所におられるときに、新エルサレムと結婚なさることを見た。そして、至聖所における働きが終わったあとで、王の権威をもって地にくんだり、忍耐深く彼の再臨を待望していた貴重な人々を、ご自分のところにお迎えになるのである。

わたしは、一八四四年の預言的期間が終了したときに天で何が起きたかを示された。イエスが、聖所における働きを終わり、その部屋の戸口を閉じられたときに、彼の再臨のメッセージを聞いてそれを拒んだ人々の上に、大いなる暗黒がたれこめた。そして、彼らは、主を見失った。その時、イエスは、立派な衣服を着ておられた。彼の衣服のすその回りには、鈴とざくろ、そしてまた鈴とざくろがついていた。彼の肩からは、見事な細工を施した胸当がかかっていた。彼が動かれると、これがダイヤモンドのように輝き、胸当に書かれたか、または刻まれたかと思われる、名前のような文字を浮き上がらせていた。ま

た、主は冠のようなものを頭にかぶっておられた。彼が衣服を完全に整えられたときに、彼は、天使たちにかこまれて、火の車に乗り、第二の幕の中に入って行かれた。

それからわたしは、天の聖所の二つの部屋に注目するように命じられた。幕、すなわち戸口が開かれて、わたしは、中にはいることを許された。わたしは、第一の部屋の中に、七つの燈台と供えのパンの机と香壇と香炉とがあるのを見た。この部屋の器具はみな純金のようで、そこに入る人の姿を映し出していた。二つの部屋を分けている幕は、いろいろな色彩と材料から成り、美しく縁取りがしてあって、その金色の模様は天使をあらわしていた。幕があげられて、わたしは、第二の部屋の中を見た。わたしは、そこに、純金で造られたように思われる箱を見た。箱の上部の回りの縁には、冠をあらわした見事な細工が施されていた。箱の中には、十誡を記した石の板がおさめられていた。

箱の両端には、ふたりの美しいケルビムが、翼を高く伸べて立ち、イエスが贖罪所の前に立たれるとき、彼の頭上で、翼が触れあった。彼らの顔は、互いに向かい合い、箱を見下ろしていて、全天使軍が、神の律法に深い関心を抱いていることをあらわしていた。ケルビムの間に金の香炉があつて、聖徒たちが信仰をもってささげる祈りが、イエスのところに達し、彼がそれを父なる神の前におささげになったときに、色鮮やかな煙のように

香炉から香がたちのぼった。箱の前で、イエスが立っておられるところの上の方に、わたくしが見ることのできない光り輝く栄光があった。それは、神の御座のように見えた。香が、父なる神のみ前にのぼると、輝かしい栄光が御座からイエスのほうへ輝き、それが、彼から、香ばしい香りのような祈りをささげた人々の上に注がれた。イエスの上には、光があら、まねく照り映えて、贖罪所をおおった。そして、栄光が神殿に満ちた。わたくしは、その驚くべき栄光を長く見ていることができなかった。それは言葉で言い表すことができない。わたくしは、圧倒されてしまった。そして、莊嚴と栄光に満ちた光景から目をそむけた。

わたくしはまた、地上の聖所に二つの部屋があるのを示された。それは、天にある聖所に似ていた。そして、それは天にあるものにかたどられたものであることが告げられた。地上の聖所の第一の部屋の器具は、天の聖所の第一室のものと似ていた、幕が上げられて、わたくしは至聖所の中を見た。その器具は、天の聖所の至聖所にあるものと同じであった。祭司は、地上の聖所の両方の部屋で務めを行つた。彼は、毎日、第一の部屋に入つたが、至聖所には、一年に一度だけはいり、そこに持ちこまれた罪の清めを行つた。わたくしは、イエスが、天の聖所の両方の部屋で務めを行われるのを見た。祭司たちは罪のための供え物として動物の血をもって、地上の聖所にはいった。キリストは、ご自分の血の供え物によつ

て、天の聖所にはいられた。地上の祭司は、死ねばその任務を解かれた。だから、彼らは長く続けることはできなかった。しかし、イエスは、永遠に祭司であった。イスラエルの人々は、地上の聖所に犠牲や供え物を持つてくることによって、来たるべき救い主の功績を理解すべきであった。そして、神は知恵のうちに、この働きの細かな点をわれわれに与えになり、それによってわれわれが、天の聖所におけるイエスのお働きをよく理解するようになさったのである。

イエスが、カルバリーで、「すべてが終った」と叫んで、なくなられたときに、神殿の幕が、上から下まで真つ二つに裂けた。これは、地上の聖所の働きが永遠に終わったことを示し、神はもう地上の聖所において、祭司たちと会って彼らの犠牲をお受けにならないことを示した。その時にイエスの血が流されたのであって、彼は、天の聖所において、それをご自分でおささげになるのであった。地上の聖所の清めのために、祭司が、一年に一度至聖所にはいったように、イエスは、ダニエル書八章の二千三百日の終わり、すなわち、一八四四年に、天の至聖所にはいり、彼の仲保の働きによって恵みにあずかるすべての者のために最後の贖いをなし、こうして、聖所をお清めになるのであった。



## 第三天使の使命（付録参照）

イエスは、聖所における奉仕を終わり、至聖所には行って、神の律法を納めた箱の前に立たれたときに、世界に対する第三の使命をたずさえたもうひとりの力強い天使を、お送りになった。天使の手には、羊皮紙が渡された。そして、彼は、力と威光とをもって地に下り、これまで人類に伝えられたことのない、恐怖すべき威嚇をもった恐るべき警告を発した。このメッセーじは、神の民の前にある試みと苦悩の時を彼らに示して、彼らに用心させるためのものであった。「彼らは、獣とその像と激しく戦わなければならない。彼らが永遠の生命を得る唯一の希望は、堅く立つことである。彼らは、その生命が危機にひんしても、真理に固く立たなければならない」と天使は言った。第三の天使は、「ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある」と言って、メッセーじを終わっている。彼は、この言葉を繰り返したときに、天の聖所を指さした。このメッセーじを信じるすべての者の心は、至聖所に向けられる。イエスはそこで箱の前に立つ

て、恵みがなお与えられているすべての人々と、知らずして神の戒めを破った人々のために最後の仲保をしておられるのである。この贖罪は、生きている義人とともに、死んだ義人のためにも行われる。これは、キリストを信じて死んだすべての人を含んでいるが、彼らは神の戒めに関する光を受けなかったために、知らずして戒めを破って罪を犯したのである。わたしは、第三の天使が、上の方を指さして、失望した人々に、天の聖所の至聖所への道を示しているのを見た。信仰によって彼らが至聖所にはいるときに、彼らはイエスを見出して、新たな希望と喜びを味わうのである。わたしは、彼らが、過去を振りかえって、イエスの再臨の宣言から一八四四年における時の経過に至るまでの、彼らの経験を回顧しているのを見た。彼らは、彼らの失望が解き明かされて、ふたたび喜びと確信に活気づけられた。第三の天使は、過去と現在と未来を照らした。そして、彼らは、神が不思議な摂理によって、彼らを導いてこられたことを知るのであった。

わたしは、残りの民が、イエスに従って至聖所にはいり、箱と贖罪所を見て、その栄光に魅了されているのを示された。それから、イエスは、箱のふたを持ち上げられた。すると、そこに十誡が書かれた石の板があった。彼らは、その生きたお言葉をたどって行って、第四条が、十の聖なる戒めの中で、他の九条よりも明るく光り輝き、その回りに栄光の輪

がかかっているのを見て、恐れおののいて後ずさりする。彼らは、そこに、安息日が廃止されたとか、あるいは週の第一日に変更されたとか言うことを示すものを、何も見ない。戒めは、神が山の上で、いなずまとかみなりの中で、恐るべき崇厳さをもって語られた時のとおりである。それは、神が石の板に、ご自身の指をもって、「六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ、七日目はあなたの神、主の安息である」と書かれた時と同じである。彼らは、十誡が大切に取り扱われているのを見て驚く。彼らは、それが、神のそばにおかれて、聖なるご臨在におあわれ、保護されているのを見る。彼らは、自分たちが、十誡の第四条をふみにじり、神が清められた日ではなくて、異教徒とカトリック教徒から受けついだ日を守ってきたことに気づく。彼らは、神の前に自分たちを低くして、彼らの過去の罪を悲しむのである。

わたしは、イエスが彼らの告白と祈りを、父なる神におささげになったときに、香炉の香が煙るのを見た。そして、それが昇ったときに、輝かしい光がイエスと贖罪所のうえに宿った。そして、自分たちが神の律法の違反者であることに気づいて心を悩まし熱心に祈っていた人々は、祝福を受けて、彼らの顔は、希望と喜びに輝いた。彼らは、第三の天使の働きに参加し、厳粛な警告を宣言するために彼らの声をあげた。しかし、初めのうち

は、それを受け入れる人は少なかった。それでも、忠実な人々は、力強くメッセーヂを宣言しつづけた。それから、わたしは、多くの者が、第三天使の使命を受け入れて、最初に警告を発した人々と声を合わせ、神が清められた休みの日を守って神に栄光を帰すのを見た。

第三天使のメッセーヂを受け入れた人々の多くは、前の二つのメッセーヂの経験を持っていなかった。サタンは、これを知っていて、その邪悪な目を光らせて、彼らを陥れようとした。しかし、第三の天使は、彼らを至聖所に導いた。そして、過去のメッセーヂの経験を経た人々も、彼らを天の聖所へと指さしていた。多くの人々は、天使たちのメッセーヂの中に、完全な真理の連鎖を見、喜んでその順序に従って受け入れて、信仰によってイエスに従い、天の聖所にはいったのである。わたしは、これらのメッセーヂが、神の民の錨であることを示された。それらを理解して信じた人々は、サタンの多くの欺瞞に押し流されないように守られるのである。

一八四四年の大失望後に、サタンと彼の天使たちは、忙しく働いて、この一団の人々の信仰をくつがえすためにわなを仕かけた。彼は、メッセーヂに経験のある人々や謙遜な様子をした人々の心を動かした。ある人々は、第一、第二天使の使命は、将来成就するもの

であると言ひ、他の人々は、ずっと過去にさかのぼって、その時すでに成就したのだと言つた。この種の人々は、まだ経験の浅い人々に影響を及ぼし、彼らの信仰をくつがえした。ある人々は、団体とはかわりなく独立して、自分たち独自の信仰を打ち立てるために聖書を探究していた。これらすべての事は、サタンを喜ばせた。なぜなら、彼は、錨から離れた人々を、いろいろの誤りに陥れ、様々な教えの風によつてふきまわすことができることを、知っていたからである。第一、第二天使のメッセージを指導した人々の多くは、今、それらを拒んでしまった。そして、団体のいたるところに、混乱と分裂が起こった。

その時、わたしの注意は、ウィリアム・ミラーに向けられた。彼は、心を悩ましているようであつた。そして、彼に従つた人々のことを憂えて苦しんでいた。一八四四年には一致し愛し合つていた人々が、愛を失ひ、互いに反対し合つて、冷たい背信状態に陥つていた。彼がこれを見たときに、彼は悲しみの余り、体力が衰弱していった。わたしは、彼が第三天使の使命と神の戒めを受け入れはしまいかと、指導的立場にある人々が彼を見張つているのを見た。そして、彼が天からの光を受け入れそうになると、これらの人々は、彼の心をそれから引き離すように策を弄するのであつた。彼を暗黒の中において、彼の影響力を、真理に反対する人々の間に留めておくように、人間的努力が行われた。ついにウィ

リアム・ミラーは、天からの光に反対する声をあげた。彼は、メッセージを受け入れなかったのであるが、このメッセージこそ、彼の失望を十分に解明し、過去の出来事を光と栄光で照らして、彼の衰えた体力を活気づけ、彼の希望を燃やし、神に栄光を帰させるものだのである。彼は、神の知恵ではなくて、人間の知恵にたよった。彼は、主のご用のために熱心に働いて挫折し、また老齢でもあったために、彼を真理から引き離れた人々ほどの責任は彼にはなかった。責任は彼らにある。彼らが罪を負わなければならない。

もしウィリアム・ミラーが、第三天使のメッセージの光を見ることができたならば、暗く不思議に思われた多くの事が、解明されたことであろう。しかし、彼の兄弟たちは、彼に対する深い愛と関心を示したので、彼は彼らから離れることができなかったのである。彼の心は、真理に引き寄せられた。それから彼は、兄弟たちを見た。彼らは、それに反対であった。彼は、イエスの再臨を彼と共に結束して宣言した人々から、離れ去ることができただろうか。彼は、この人々が自分を誤った道に導くことはないと確信していた。

神は、彼がサタンの力の下、すなわち死の支配下に陥ることをお許しになった。そして、常に彼を真理から引き離そうとする人々から、彼を墓に隠されたのである。モーセは、約束の国に入ろうとする時に誤りに陥った。そのように、ウィリアム・ミラーもまた、彼が

間もなく天のカナンに入ろうとする時に誤りに陥って、真理に反する影響を及ぼした。他の人々が彼に、そうするように仕向けたのである。他の人々がその責任を負わなければならない。しかし、天使たちが、この神のしもべの尊い遺体を守っている。そして彼は、最後のラッパが鳴るときに出てくるのである。

### 堅固な土台

わたしは、一群の人々がしっかりと守られて堅く立ち、確立された教団の信仰をぐらつかせようとする人々には目もくれないのを示された。神は彼らをごらんになってよみされた。わたしは、第一、第二、第三の天使による三段階の使命を示された。わたしにつきそっていた天使は言った。

「この使命をすこしでも変える者はわざわざいだ。この使命を本当に理解することが非常に大切だ。魂の運命は、この使命をどう受け入れるかにかかっている」。わたしはふた

び三重の使命を示され、神の民がどんなに高い代価を払ってその経験を得たかを示された。それは多大な苦難と激しい戦いを経て得られたものだ。神は、彼らを一步一步みちびいて、ついに彼らを動くことのない固い土台の上に置かれたのである。わたしは、各人がこの土台にやってきて、その基礎を調べるのを見た。ある者は、よろこんですぐにそこにとびのった。ある者は、この基礎の欠点をさがしはじめた。彼らは、この基礎に手を加えて、土台をもっと完全にし、人々をもっと幸福にしようと望んだ。ある者は土台からとび降りて調べ、置き方がちがっていると断言した。しかしわたしは、ほとんどすべての者が土台の上にしっかり立って、台からとび降りた人たちに向かつて、土台を作られたのは神なのだから、文句を言うのをやめるように、そうでないと神と戦っていることになるのだと、説きすすめているのを見た。彼らは、自分たちが神の不思議な働きによってこの堅固な土台にみちびかれてきた次第を詳しく語り、いっせいに目を天へあげて、大きな声で神を賛美した。文句を言って台からとび降りた人々の中には、これに影響されて、謙遜な面持ちで、もう一度とびのる者も幾人かあった。

わたしは、キリストの最初の降臨が宣布された当時のことを示された。イエスのために道を備えるために、ヨハネがエリヤの霊と力をもってつかわされた。ヨハネの証言を否定



した人たちは、イエスの教えから何の益も受けなかった。キリストの来臨を予告する使命に反対だった者たちは、キリストがメシヤだという最大の証拠すら容易に信じることできなかった。サタンは、ヨハネの使命を拒んだ人たちを、さらに深みへひっぱりこみ、キリストを拒んで十字架につけさせた。ペンテコステの祝福は、人々に天の聖所へ至る道を教えるはずだったが、キリストに反対した人々は、その祝福を受けることのできない立場に、われとわが身を追いやった。神殿の幕が裂けたことは、ユダヤ人の犠牲と儀式がもはや神に受け入れられなくなった証拠であった。大いなる犠牲であられるキリストがささげられて、神に受け入れられたのであった。そして、ペンテコステの日にくだった聖霊によって、弟子たちの心は地上の聖所から天の聖所へ向けられた。イエスはご自身の血によってそこへ入り、贖いの恩恵を弟子たちにそそがれるのであった。しかし、ユダヤ人は、真つ暗闇の中にとり残された。彼らは、救いの計画について光をもつことができはずだったのに、それらの光を全部失って、依然として無用な犠牲とささげものに頼っていた。天の聖所が地上の聖所に代わったのに、彼らは、その変更について何も知らなかった。したがって彼らは、聖所におけるキリストの仲保によって、何の恩恵も受けることができなかった。

ユダヤ人が、キリストを拒んで十字架につけた行為を、多くの人たちは、恐ろしいことだと思う。キリストが恥ずかしめられ虐げられた歴史を読んで、彼らは、自分たちはキリストを愛しており、自分だったら、ペテロのようにキリストを拒んだり、ユダヤ人のようにキリストを十字架につけたりはしないのと思う。しかし、すべての人間の心をお読みになる神は、彼らが口になえているキリストへの愛をためしてごらんになる。全天は、深い関心をもって、第一天使の使命が受け入れられるかどうかを見守った。しかし、口ではイエスを愛すると告白し、涙を流して十字架の話を読みながら、イエスの再臨というよろこばしいおとずれを馬鹿にする人が多い。彼らは、再臨使命をよるこんで受け入れようとしないうで、かえってそれを迷信だと公言した。彼らはキリストの再臨を慕っている人々を憎んで、教会からしめ出した。第一の使命を拒んだ者は、第二の使命からも益を受けることができなかった。夜中の叫びによって、人々は、信仰によってイエスとともに天の聖所の至聖所に入る準備をなすべきであつたが、その夜中の叫びも役には立たなかった。初めの二つの使命を拒んだために、理解力の暗くなった彼らは、至聖所に至る道を照らしている第三天使の光を見ることができなかった。名目的諸教会は、ユダヤ人がイエスを十字架につけたように、これらの使命を十字架につけ、そのために彼らは、至聖所へはいる道を知らず、

そこにおられるイエスの仲保の恵みを受けることができないことを、わたしは見た。彼らは、無益な犠牲をささげていたユダヤ人のように、イエスが去ってしまったれた部屋に向かつて、彼らの無益な祈りをささげている。そして、この欺瞞に満足したサタンは、宗教的性格を装って、彼の力としるしと奇跡を行い、これらの自称クリスチャンたちの心を、彼自身に引きつけ、しっかりと彼のわなに捕らえてしまうのである。彼は、ある者はある方法で欺き、他の者はまた別の方法で欺く。彼は、さまざまな性質の人々を陥れるために、さまざまな欺瞞を用意している。ある人々は、ある欺瞞は嫌悪しながらも、他の欺瞞はやすやすと受け入れる。サタンはある人々を心靈術で欺く。彼はまた、光の天使を装って現れ、偽りの改革によって、彼の勢力を地上に拡大する。教会は、意気盛んになって、神が彼らのために驚くべき働きをしておられると考えるのであるが、それは、別の霊の働きなのである。興奮はさめて、世界も教会も、以前よりはさらに悪化した状態に陥るのである。

わたしは、神が、名目的再臨信徒たちと、墮落した教会の中に、心の正しい人々を持つておられるのを見た。そして、牧師や信者たちが、災害が、くだされる前に、これらの教会から呼び出されて、喜んで真理を受け入れることをわたしは見た。サタンは、この事を知っている。第三天使の大いなる叫びがあがる前に、サタンは、これらの宗教団体に、興

奮を起こさせ、真理を拒んだ人々に、神が彼らと共におられると思わせるのである。サタンは、心の正しい人々を欺いて、神がなお教会のために働いておられると彼らに思わせたいと願っている。しかし、光が輝き出る。そして、心の正しい人はみな、墮落した諸教会を去り、残りの民に加わるのである。

#### 心 霊 術

心霊術の惑わしが、わたしに示された。そして、サタンは、イエスにあって眠っているわれわれの身内や友人たちをよそあって、われわれの前に姿を現す力を持っているのを、わたしは見た。これらの友人は、あたかも実際にそこにいるかのように現れ、彼らがこの世にいた時に、われわれが聞きなれていた言葉を話し、彼らが生きていたときと同じ語調が耳に聞こえるのである。これらの事は、みな、世界を欺いて、わなに陥れ、この欺瞞を信じさせようとするものである。

わたしは、聖徒たちが、現代の真理を十分に理解して、聖書を基礎にしてその真理を堅

く保持しなければならぬことを見た。彼らは、死の状態をよく理解しなければならぬ。なぜなら、悪鬼の霊が、これから、愛する身内の者や友人の姿をよそあって彼らに現れ、非聖書的な教理を彼らに宣言するからである。彼らは、その全力をあげて、共感を呼び起こし、自分たちの言っていることの確証として奇跡を行うのである。神の民は、死者は何も知らない、また、こうして現れるのは悪鬼の霊である、という聖書の真理によって、これらの霊に対抗する用意がなければならない。

われわれは、われわれの希望の根拠をよく調べなければならない。なぜなら、われわれは、聖書からその説明をしなければならないからである。この欺瞞は広がり、われわれは、真正面からそれと戦わなければならない。それに対する準備がなければ、われわれは、わなに陥り、打ち負かされてしまうであろう。しかし、われわれが、できる限りをつくして自分たちの分をつくし、われわれの目前に迫った争闘に対して準備をしているならば、神は、神の分をしてくださり、神の全能の腕をもってわれわれを保護してくださるのである。もし神の忠実な人々が、サタンの偽りの奇跡に欺かれ、連れ去られるくらいならば、神は、天のすべての天使をつかわして、彼らの回りに防壁を設けてくださることであろう。わたしは、この欺瞞が、急速に広がるのを見た。電光のような速度で走る列車が、わた

しに示された。天使は、わたしに、注意深く見るようにと命じた。わたしは、列車をみつめた。全世界がそれに乗っているように見えた。それから、天使は、乗客の全員が仰ぎ尊んでいる立派で堂々とした車掌をわたしに示した。わたしは、よくわからなくて、それが一体だれなのかを、一緒にいた天使にたずねた。天使は答えて言った。「それは、サタンである。彼は、光の天使を装っている車掌である。彼は全世界を捕虜にしまった。彼は、強力な欺瞞に惑わされ、偽りを信じて滅びに陥る。彼の次に高い地位にある彼の手下は、機関士であって、その他にも、彼の手下たちが、必要に応じていろいろの役についている。そして、彼らはみな電光の速度で、滅びに向かっている。」

わたしは、天使に、だれも残っていないのかとたずねた。彼は、わたしに、反対の方角を見るように命じた。すると、わたしは、せまい道を進んでいる小さな群れを見た。彼らは、みな、堅く真理によって結ばれているようであった。この小さい群れは、ちょうどその時、激しい試練と争闘を通過しているかのように、疲れ果てて見えた。ちょうどその時、太陽が雲の背後から昇って、彼らの顔を照らしたので、彼らは、すでに勝利を得たかのようになり、勝ち誇って見えた。

わたしは、主が、わなを発見する機会を世にお与えになったのを見た。クリスチャンに

とつて、ほかになんの証拠がなくても、この一つの証拠だけで、十分である。それはすなわち、そこには尊いものと汚れたものとの区別が全くないということである。トマス・ペインの肉・体は、今、土に帰り、彼は、千年間の終わりの第二の復活の時によみがえらせられて報いを受け、第二の死に会わなければならないが、サタンは、彼が今、天にあつて、非常な榮譽を受けているかのように言っている。サタンは、この世において、彼をできるだけ利用した。そして、今度は、トマス・ペインが天において非常に高められ、崇められていると称して、同じ働きを続けているのである。また、サタンは、彼がこの世で教えたように、天でも教えているように見せかけている。そして、彼の生涯と死、また、彼が生きていた時の彼の墮落した教えに対して、恐怖を抱いた人々が、今は、最も下劣で最も墮落して神と神の律法をあなどつた彼に従つて教えを受けるのである。

偽りの父であるサタンは、彼の天使たちを送つて、使徒たちにかわつて語らせ、彼らが地上にいた時に聖霊の指示によつて書いたこととは矛盾するようなことを言わせ、世を盲目にして欺く。これらの偽りの天使たちは、使徒たちに彼ら自身の教えを改悪させ、それらは正しいものではなかつたと宣言させる。サタンは、このようにして、自称クリスチャンたちと全世界とに神の言葉に対する不信を抱かせて喜ぶのである。聖書は、真正面から

彼の進路をさえぎり、彼の計画を挫折させる。であるから、彼は、人々に、聖書が神によって与えられたものであることを疑わせようとしている。そこで彼は、無神論者のトマス・ペインを立てて、彼は死んだ時に、あたかも天に迎え入れられて、今は、この地上で彼が憎んでいた使徒たちと共に、世界を教える仕事に従事しているかのように見せかける。

サタンは、彼の天使たちにそれぞれ、果たすべき役割をふり当てる。彼は、彼らすべてに、悪賢く、巧妙、狡猾であるように命じる。彼は、彼らのある者には、使徒に代わって語らせ、他の者には、神をのろって死んだ無神論者や悪人が、今は非常に敬神深くなっているかのような役を果たさせるのである。最も聖なる使徒たちも、最も下劣な無神論者たちも、なんの区別もない。彼らは、両方とも同じことを教えるようにされている。サタンは、彼の目的さえ達成すれば、だれに語らせるかは問題ではない。サタンは、ペインが地上にいた時に、彼の働きを助けて、彼と密接に関係していた。だから、このように忠実に自分に仕えて、自分の目的を巧みに達成した者の語る言葉や筆跡を知ることが、サタンにとってやさしい事である。サタンは、ペインの著書の多くを口述したのであるから、今、自分の天使によって、ペインのかわりに意見を発表させ、それをトマス・ペインが言ったもののように思わせることは、やさしい事である。これは、サタンの傑作である。死んだ使徒



たち、聖人たち、また、悪人たちから出たものであると言われるこの教えはみな、サタンから直接でたものである。

サタンが大いに愛したと主張している者、そして、神を徹底的に憎んだ者が、今、聖なる使徒たちと共に天国にいるという事だけで、すべての人の心からおおいを取り除いて、サタンの不思議な陰謀を見破るのに十分であるといわなければならない。サタンは、世界と無神論者たちに向かつて、「あなたがたがどんなに悪人であり、また、あなたがたが、神や聖書を信じようが信じまいが、勝手気ままの生活をすればよい。天国はあなたがたの故郷である。なぜなら、トマス・ペインが天国にいて、栄誉を受けているのであれば、あなたがたは必ず天国へ行けるのだ」と言っているようなものである。これは、見抜こうと思えば、だれにでもわかる、明白な事実である。サタンは、彼が墮落して以来試みてきたことを、トマス・ペインのような人物を用いて、今も行っている。サタンは、彼の力と不思議とによって、クリスチャンの希望の基礎を破壊し、天への狭い道を照らす太陽を消し去ろうとしている。彼は、聖書は靈感を受けた書ではなく、一般の物語となんのかわるところがないと、世界に信じさせようとしている。その反面、彼は、それに代わるもの、すなわち、心霊の現象を提示しているのである。

これは、サタンの支配下にあつて、全く彼の意のままになる手段である。そして、彼は、自分の思いどおりのことを世界に信じさせることができる。サタンは、彼と彼に従う者たちを裁くべき書物を、ちょうど、彼が置いておきたいと願っている暗い場所においやってしまう。彼は、世の救い主を、一般の人間と同じにしてしまう。そして、イエスの墓を守っていたローマの兵卒が、祭司長や長老たちから言い含められた偽りを広めたように、これらの偽りの心靈現象に惑わされた哀れな人々は、救い主の誕生、死と復活には、なんの奇跡的なこともなかったのだと、人々に思わせようとするのである。イエスを背後におしやった彼らは、世界の注目を自分たちと自分たちの奇跡や不思議なわざに引きつけて、こうした働きは、キリストの働きよりも偉大であると言うのである。こうして、世界は、わなに捕らえられて、安心して夢をむさぼり、ついに、最後の七つの災害がくだるまで、彼の恐ろしい欺瞞に気づかないのである。サタンは、彼の策略が成功し、全世界がわなに捕らえられているのを見てほえむのである。

## 貪欲

わたしは、サタンが彼の天使たちに命じて、キリストの再臨を待望し、神の戒めをみな守っている人々を陥れるために、特にわなをしかけるのを見た。サタンは、彼の天使たちに、諸教会は眠っていると云った。サタンは、彼の力と偽りの奇跡を大に行つて、彼らを捕らえておくことができるのである。彼は言つた。「しかし、われわれは、安息日を守る一派を憎む。彼らは常に、われわれに反抗し、われわれの民を奪つて行つて、憎むべき神の戒めを守らせる。行つて、土地や金銭を持つている人々をこの世の思い煩いで夢中にさせよ。もし彼らの思いを土地や金銭に執着させることができれば、われわれは、まだ彼らを捕らえることができる。彼らには言いたいことを言わせておけばよい。ただ、キリストの天国が勝利を収め、われわれの憎む真理が拡がることよりも、もっと金銭を愛するようにさせよ。彼らの前に、この世を最も魅力的に見せて、彼らがそれを愛し、偶像化するようにさせよ。われわれは、われわれが管理できるだけの財産を、みなわれわれの陣営の中に

保っておかなければならない。キリストの弟子たちが、神の奉仕のために財産をささげればささげるほど、彼らはわれわれの民を奪って、われわれの王国に損害を与える。彼らが、いろいろの所で集会を開くとき、われわれは危険にさらされている。その時は、大いに警戒せよ。できれば、騒ぎと混乱を起こせ。互いの愛を失わせよ。彼らの牧師たちを失望落胆させよ。なぜなら、われわれは、彼らを憎んでいるからだ。財産を持っている人々には、それを出させないように、あらゆる口実を設けよ。できれば、金銭の関係点を手中に収めて、牧師たちを欠乏と苦難に陥れよ。そうすれば、彼らの勇気と熱心が衰えるだろう。どんな小さい領土でも戦い取れ。貪欲と地上の宝に対する愛を、彼らの品性の主な特質とせよ。このような性質が優勢である限り、救いと恵みは、あとにひきさがっている。彼らの回りにあらゆる誘惑を設けよ。そうすれば、彼らは間違いなく、われわれのものである。そして、ただ彼らを手に入れるだけでなく、彼らの憎むべき感化によって他の人々が天国に導かれることもなくなるのである。もしだれかが、ささげようとするならば、わずかしかささげないように、物惜しみする気持ちを起こさせよ」。

わたしは、サタンが、彼の計画を巧みに実行するのを見た。神のしもべたちが、集会を開くときに、サタンと彼の天使たちは、そこに来て働きの邪魔をする。彼は、常に、神の

民の心にささやきかける。サタンは、常に兄弟姉妹たちの邪惡な性質を利用し、彼らの陥りやすい罪を刺激して、ある者はこちらへ、他の者はあちらへと導いていく。もし彼らが利己的で貪欲な性質であれば、サタンは、彼らのそばに立って、全力をあげて、彼らのこの陥りやすい罪にふけるように彼らを導くのである。神の恵みと真理の光は、彼らの貪欲で利己的な感情を少しは溶かしたことであろうが、もし彼らがそれに完全な勝利を得ないならば、彼らが救いの影響力のもとにないときにサタンがいり込んできて、すべての氣高くて惜しみなくささげる心を衰えさせてしまう。そして、彼らは、あまりにも要求が多すぎると考えるようになるのである。彼らは、善を行うのに疲れてしまう。そして彼らをサタンの力と絶望的な悲慘な状態から贖うためになされたイエスの大いなる犠牲を忘れるのである。

サタンは、ユダの貪欲で利己的な性質を利用して、マリヤが、イエスに高価な油を注いだ時に、彼につぶやきを言わせた。ユダは、これが、非常な浪費であると考え、その油を売って、貧しい人たちに施すことができのと言った。彼は、貧しい人々のことを心に留めていたのではなかったが、イエスに対する惜しみなきささげ物は、ぜいたくであると考えた。ユダは、わずかの銀貨で主を売り渡すほどにしか、主を尊んでいなかった。そし

て、わたしは、主を待つと言っている人々の中にも、ユダと同じような人たちがいるのを見た。サタンが彼らを支配しているが、彼らはそれを知らない。神は、少しでも貪欲や利己心をお許しにならない。そして神は、このような悪癖にふける者の祈りや勧告を憎まれる。サタンは、自分の時が短いのを知って、人々をますます利己的で貪欲になるようにしむける。そして、彼らが、閉鎖的になり、物を出し惜しんで、利己的になるのを見て喜ぶのである。もしこのような人々の目が開かれるならば、彼らは、サタンの言うままになつて彼のわなにかかる人々の愚かさを、サタンが大いに喜び、あざ笑って、陰險な勝利の声をあげるのを見るであろう。

サタンと彼の天使たちは、これらの人々のすべての卑劣で貪欲な行動に注目していて、それらをイエスと彼の天使たちの前に示して、彼らを非難し、「この人々は、キリストの弟子たちである。彼らは生きながら天にあげられる準備をしているのだ」と言う。サタンは、彼らの行動と、それを明白に譴責している聖書の言葉とを比較して、天使たちをののしりながら、「この人々は、キリストと彼の言葉に従っている。これが、キリストの犠牲と贖罪の結果である」と言うのである。天使たちは、それを聞くに耐えられず、その光景から顔をそむける。神は、神の民に忠実な行為をお求めになる。そして、彼らが、善を行うのに

うみ疲れてくると、神も彼らに対してうみ疲れられる。わたしは神の民の側において、利己心が少しでも表われることを、神は大いにきらわれることを見た。なぜなら、彼らのために、ご自身の尊い命を惜しまれなかったからである。利己的で貪欲な人はみな、途中で倒れてしまう。彼らは、主を売ったユダのように、この地上のわずかな利益のために、正しい原則と高貴で物惜しみしない性質を売り渡してしまうのである。このような人々は、神の民からふるい落とされてしまう。天国に入りたいと思う者は、彼らの全力をあげて、天国の原則を推進しなければならない。彼らの心は、利己心のために衰えるのではなくて、慈悲深い思いに満ちあふれなければならない。互いに善をなすために、あらゆる機会を活用しなければならない。こうして、天の原則を大切に育てていくのである。イエスは、完全な模範であられることが、わたしに示された。イエスの生涯には、利己心がなかった。そして、常に、私心のない慈愛に満ちていた。

ふ  
る  
い

わたしは、深い信仰と苦悶の叫びをあげて、神に嘆願している人々を見た。彼らの顔は青ざめ、深い憂いの色を帯びていて、彼らの内的苦悶を表していた。その表情には、堅忍不拔の精神と非常な熱心さとがあらわれていた。彼らの額からは、大きな汗のしずくが落ちた。彼らの顔には、時々、神の嘉納のしるしが輝くのであったが、また、元の同じ厳粛で熱心と憂慮に満ちた表情にもどるのであった。

悪天使たちは、彼らを取り囲み、彼らを闇の中に閉じこめて、イエスを見えないようにしていた。それは、彼らが回りの暗黒に目を向けて、神に信頼せず、神に対してつぶやくようになるためであつた。彼らの唯一の安全な方法は、目を上に向けていることであつた。神の天使たちは、神の民を守っていた。そして、悪天使たちの悪影響がこれらの熱心な人の回りに迫ってくるときに、天使たちは、絶えず彼らの翼を動かして、濃い暗黒を追ひ



払っていた。

祈っている人々が、彼らの熱心な叫びをつづけていると、時々、イエスからの光が彼らに輝き、彼らの心を励まし、彼らの顔を輝かせた。ある人々は、この苦闘と祈りに加わらないのをわたしは見た。彼らは、不注意で無関心なように見えた。彼らは、回りの暗黒に抵抗しようとしなかったので、暗黒が厚い雲のように彼らを囲んだ。神の天使たちは、この人々を去って、熱心に祈っている人々を助けに行った。悪天使たちに抵抗するために全力をあげて闘い、忍耐強く神を呼び求めて努力しているすべての者を助けるために、神の天使たちが急いでいくのをわたしは見た。しかし、神の天使たちは、自らを助けようと努力しない人々を去った。そして、わたしは彼らを見失ってしまった。

わたしは、わたしが見たふるいの意味をたずねた。そして、それは、ラオデキヤ教会へのまことの証人の勧告が生じさせた率直なあかしによるものであることを、わたしは示された。これは、受ける者の心を動かして、高く旗をかかげさせ、率直な真理を語らせる。ある者は、この率直なあかしを聞くにたえない。彼らは、それに反対して立ち上がる。そして、これが、神の民の間にふるいが行われる原因となるのである。

わたしは、真の証人のあかしが、その半分も注意されないのを見た。教会の運命がかか

っている厳肅なあかしが全く無視されないとしても、軽視されている。このあかしは、深い悔い改めを呼び起こすべきものである。それを真に受け入れるすべての者は、それに従って清められるのである。

天使は、「聞きなさい」と言った。やがて、わたしは、多くの楽器が、完全に調和して、美しい音楽をかなでているのを聞いた。それは、わたしがこれまでに聞いたこともない美しい音楽で、恵みとあわれみに満ち、高尚で聖なる喜びにあふれていた。それは、わたしの全身を感動に震わせた。天使は「見なさい」と言った。すると、わたしは前に大いにふるわれるのを見たその一団の人々に注目した。わたしは、前に涙を流し、苦悶しているのを見たその人々を見せられた。彼らの回りの守護の天使は二倍に増やされた。そして人々は、頭から足まで、武具をまとっていた。彼らは、兵卒の隊のように、規律正しく動いた。彼らの顔は、彼らの耐えてきた激しい争闘と経てきた苦悶とを表していた。しかし、彼らの容貌は、激しい内的苦悶のあとがあつたとはいえ、今は、天の光と栄光に輝いていた。彼らは、勝利を得た。そして、彼らは、深い感謝にあふれ、聖なる喜びにみたまされていたのである。

この一団の数は減少していた。ある者は、ふるい落とされて、途中に残された。勝利と

救いを尊んでそのために忍耐強く嘆願し苦悩した人々に加わらなかった不注意で無関心な人々は、それにあずからず、暗黒のうちに取りのこされた。そして、彼らの場所は、真理を信じて隊列に加わる人々によって、直ちに補充された。悪天使たちは、なお彼らの回りにつめ寄ったが、彼らに打ち勝つ力はなかった。

わたしは、武具をまとった人々が力強く真理を語るのを聞いた。それは効果的であった。多くの人々が縛られていた。夫に縛られていた妻もあれば、親に縛られていた子供もあった。真理を聞くことを妨害されていた心の正しい人々は、今、熱心に真理を自分たちのものにした。親族を恐れる気持ちは全くなかった。そして、真理だけが彼らの前で高められたのである。彼らは、飢え渴くように真理を求めていた。真理は、生命よりも愛すべく尊いものであった。わたしは、何がこのような大きな変化をもたらしたのかをたずねた。「それは後の雨、主のみ前からの慰め、第三天使の大いなる叫びである」と天使は言った。大いなる力が、これらの選ばれた人々と共にあった。天使は、「見なさい」と言った。わたしの注意は、悪人たち、すなわち信じない者たちに向けられた。彼らは騒ぎ立っていた。神の民の熱心と力とが彼らを刺激し怒らせた。どこを向いても、混乱、また混乱であった。わたしは、神の光と力を持った一団に対して処置がとられるのを見た。暗黒は、彼らの回

りで深まった。しかし、彼らは、堅く立って、神に嘉せられ、神に信頼していた。わたしは、彼らが困惑するのを見た。次に、わたしは、彼らが、熱心に神に叫び求めるのを聞いた。彼らは、昼も夜も叫びつづけた。「ああ、神よ、あなたのみ心が行われますように。もしあなたのみ名の栄光のためであるならば、あなたの民のために逃れの道を備えてください。われわれのまわりの異教徒から、われわれを助け出してください。彼らは、われわれを死に定めました。しかし、あなたの腕は、救いをもたらすことがおでになります」。わたしがい出し出すことができる言葉は、これだけである。彼らは、みな、自分たちの無価値なことを深く悟って、神のみこころに対する絶対の服従をあらわしていた。しかし、ヤコブのように、すべての者が、ひとりの例外もなく、熱心に嘆願して、救いを得るために格闘していた。

彼らが熱心な叫びをあげ始めて間もなく、天使たちは、彼らに同情して、彼らの救済に出かけようと望んだ。しかし、背の高い、指揮をとっていた天使は、彼らに行くことを許さなかった。「神のみ心がまだ成就していない。彼らは杯を飲まなければならない。彼らは、バプテスマを受けなければならない」と天使は言った。

間もなく、わたしは、天地を震動させる神のみ声を聞いた。大きな地震が起こった。建

物はいたるところで倒れた。その時わたしは、大きな、音楽のような、はっきりした勝利の叫びを聞いた。わたしは、ついさきほどまで困惑と捕われの中にあつた一団の人々を見た。彼らの束縛は解かれた。彼らの上には栄光の光が輝いていた。その時彼らは、なんと美しく見えたことだろう。心労と苦労のあとはすべて消え、すべての者の顔に健康と美がみなぎっていた。彼らの回りの敵や異教徒は、死人のように横たわっていた。彼らは、救われた聖なる人々の上に輝いた光に耐えられなかったのである。イエスが天の雲にのつて来られ、忠実で試みを経た一団の人々がまたたく間に一瞬にして栄光から栄光へと変えられるまで、この光と栄光とは、彼らの上にとどまった。そして、墓は開かれ、聖徒たちが、不死をまとして、「死と墓に対する勝利」を叫んで出てきた。彼らは、生きている聖徒たちと共に天に携えられて、空中で主と会った。そして、すべての死ぬことのない者は、美しい音楽のような栄光と勝利の叫び声をあげたのである。

## バビロンの罪

第二天使が諸教会の墮落を宣言して以来、諸教会は、ますます墮落していったことを、わたしは見た。彼らはキリストの弟子であると称している。しかし、彼らを世俗から区別することはできない。牧師たちは、神の言葉から聖句を引用はするが、人の耳に聞きよいことを説教する。肉の心は、それに対してなんの反対もない。肉の心が憎むものは、真理の霊と力とキリストの救いだけである。一般牧師の説教には、サタンを怒らせ、罪人を震えさせるものはない。また、切迫した恐るべき審判の現実を人々の良心に訴えるものはない。悪人たちは一般に、真の敬神の伴わない信心深い様子を喜び、このような宗教を支持するのである。

「人間は、正義の武具を全部身につけるのでなければ、暗黒の力に打ち勝ち、彼らに勝利することはできない。サタンは、諸教会を一つにまとめて、全部占領してしまった。神の言葉の明快で率直な真理のかわりに、人間の言葉や行為が尊重されている。世の精神をも

ち、世の友となることは、神に敵対することである。真理が、イエスにあるがままの単純さと力をもって、世俗の精神に向けられると、それは直ちに迫害の精神を引き起こすのである。クリスチャンと称する非常に多くの人々は、神を知らない。生まれつきのままの心は変えられず、肉の心は、神に敵対したままである。彼らは、クリスチャンとは言いながらもサタンの忠実なしもべである」と天使は言った。

イエスが、天の聖所の聖所を出て、第二の幕の中にはいられてから、諸教会は、あらゆる汚れた、憎むべき鳥に満たされたのを、わたしは見た。わたしは、諸教会の中に、大いなる不法と不道徳を見た。それなのに、その教会員は、クリスチャンであると言っている。彼らの信仰の告白、彼らの祈り、彼らの勧告は、神の前に憎むべきものである。「神は、彼らの集会の中で祈りをお聞きにならない。利己心、欺瞞、虚偽が、良心の可責もなく行われている。そしてこうしたすべての悪い特質の上に彼らは、宗教の衣をかけるのである」と天使は言った。わたしは、名目だけの諸教会の誇りを示された。彼らの思いの中に神はない。彼らの肉の心は自分たちのことを考えている。彼らは、自分たちのあわれな死ぬべき肉体を飾って、それをながめて満足し喜んでいる。イエスと天使たちは、彼らをながめて怒りを感じる。「彼らの罪と誇りは天に達した。彼らの罰は定められている。正義と公平

は長く眠っているが、間もなく目覚める。復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復すると主は言われる」と天使は言った。第三天使の恐るべき警告の言葉は、実現し、すべての悪人たちは、神の怒りの杯を飲まなければならない。無数の悪天使たちが、全地に広がって、教会に満ちている。これらのサタンの手下たちは、宗教団体を見て狂喜している。なぜならば、宗教の衣が、最大の犯罪と不正とをおおいかかっているからである。

全天は、神のみ手のわざである人間が、彼らの同胞によつて、墮落のどん底に陥れられて、動物同様にされているのを見ていきどおっている。人々の苦しみを見て非常に深いあわれみの情を示された、愛する救い主の弟子であることを告白している者が、この極悪非道な罪を平気で犯し、奴隷や人間の魂を売買している。人間の苦悩が場所から場所へと運ばれ、売り買いされている。天使たちは、これをみな記録している。それは書物に書かれている。敬神深い奴隷の男女、父母、子供、兄弟姉妹の涙は、みな、天の皮袋のなかにたぐわえてある。神が、その怒りを抑えられるのも、あとわずかである。この国、特にこの恐るべき売買を承認し、また、自ら従事していた宗教団体に対して、神の怒りが燃えているのである。このような不正、このような圧迫、このような苦難を、柔和で心のへりくだったイエスの弟子であると称する多くの人々が、無情な無関心をもってながめているので



ある。そして、彼らの中の多くの者は、彼ら自身で、憎むべき満足感をもって、このような描写することのできないあらゆる苦悩を加えながらも、なお、神を礼拝することができるのである。これは恐るべき侮りである。サタンは、これを非常に喜んでゐる。そして、このような矛盾をあげてイエスと彼の天使たちを非難し、「この人々がキリストの弟子だ」と憎々しげに、勝ち誇って言うのである。

こうした自称クリスチャンたちは、殉教者たちの苦難を読んで、涙を流す。そして、同胞に対してこのような残酷なことをするほどに人間の心がたくなになることができるものであるうかと、不思議に思う。しかし、このように考え、語る人々が、同時に、人間を奴隷にしているのである。そして、ただそれだけではない。彼らは、自然のきずなを断ち切って、同胞を残酷に取り扱うのである。彼らは、カトリック教徒や異教徒がキリストの弟子たちに与えたのと同じ無情な残酷さをもって、非人道的迫害を加えることができる。「神の審判が行われる日に、この人々よりは、カトリック教徒や異教徒のほうが、ゆるやかに扱われるであろう」と天使は言った。圧迫された人々の声は天に達している。そして、天使たちは、創造主の形に造られた人間が、同胞に対して言葉では表現することができない苦悩を与えるのを見て、驚いている。「圧迫者の名は、血で書かれ、おちでしるしをつけ

られ、苦悶と苦難の熱い涙にひたっている。神の怒りは、この光に輝く国が神の怒りの杯を飲みつくし、バビロンに二倍の罰を与えるまでは止まないだろう。彼女がしたとおりに彼女に返し、そのしわざに応じて二倍に報復し、彼女が混ぜ入れた杯の中に、その倍の量を、入れてやれ」と天使は言った。

わたしは、奴隷の主人が無知のままにしておいた奴隷の魂の責任を負わなければならぬことを見た（付録参照）。そして、奴隷の罪は、主人に負わせられる。神は無知と墮落の中に放置され、神も聖書も知らず、主人のむちだけを恐れて、動物よりも低い立場におかれた奴隷を天国に入れることはおできにならない。しかし、あわれみ深い神は、奴隷のため、なし得る最善のことをなさるのである。神は、彼が初めからなかったもののよう扱われる。しかし、主人は、七つの災害にあい第二の復活の時によみがえって、最も恐るべき第二の死にあわなければならない。こうして、神の義は満足するのである。

## 大いなる叫び

わたしは、天使たちが地上へくだったり、天へのぼったりして、天をあちらこちらかけめぐり、ある重要な事件の成就のために準備しているのを見た。それからまた、もうひとりの力の強い天使が、地上へくだって第三天使と声をあわせ、その使命に力と勢いを与えるように、任務を受けているのが見られた。この天使には大いなる力と栄光がさずけられた。彼がくだっていくと、地上はその栄光に照らされた。この天使が強い声で、「倒れた、大いなるバビロンは倒れた。そして、それは悪魔の住む所、あらゆる汚れた霊の巣くつ、また、あらゆる汚れた憎むべき鳥の巣くつとなった」と力をこめて叫んだとき、彼をとりまいていた光は四方を照らした。第二の天使によつて与えられた、バビロンが倒れたという使命は、一八四四年以来教会に入りこんでいる墮落についての警告がつけ加えられて、くりかえされている。この天使の働きは、最後の大いなる働きにおいて第三天使の使命が大いなる叫びとなつてもりあがるちようどその時に始められる。神の民はこのようにして、

まもなく会わねばならない誘惑の時に立つ準備ができるのである。わたしは、彼らの上に  
大いなる光がとどまり、彼らが恐れる色なく、第三天使の使命の宣布に協力しているのを  
見た。

大いなる力をもったこの天使をたすけるために、天から天使たちがつかわれた。そして  
「わたしの民よ。彼女から離れ去って、その罪にあずからないようにし、その災害に巻  
き込まれないようにせよ。彼女の罪は積み積って天に達しており、神はその不義の行いを  
覚えておられる」と叫んでいる声が、いたるところにきかれた。一八四四年に第二天使の  
使命に夜中の叫びが合流したように、この使命は、第三天使の使命に追加されて一緒にな  
ったものようであった。忍耐強く待っている聖徒たちの上には神の栄光がとどまり、彼  
らは、バビロンが倒れたことを宣布し、神の民がバビロンの恐るべき運命からまぬがれる  
ために、その中から出て来るように呼びかけ、恐れるところなく、最後の厳粛な警告を与  
えた。

待ち望んでいる人々の上にそがれていた光は、至る所に輝きわたった。諸教会の中で、  
幾らかでも光を持っている人々や、三重の使命を聞いてこれを拒まなかった人々は、呼び  
声に応じて、墮落した教会を離れた。この三重の使命が与えられてから、責任を負う年ご

るに成人した者が多かった。光は彼らの上を照らし、彼らは生か死かをえらぶ特権にめぐまれた。ある者は生をえらんで、主を待ち望んでそのすべての戒めを守っている人々の側に立った。第三天使の使命はその働きをしなければならなかった。全部の者がこの使命によって試みられ、とうとい者たちが宗教団体から呼び出されるはずだった。正直な人たちは、やむにやまれぬ力に動かされた。神を信じない肉親の者や友人たちは、神の力のあらわれを見て恐れ、自制し、神の靈の働きを感じた人々を妨害しようとする気持ちも、またその力もなかった。最後の招きの手は、貧しい奴隷にまでさしのべられた。彼らの中の敬虔な者たちは、幸福な救いの予想に歓喜の歌をばくはつさせた。彼らの主人たちは、恐れと驚きのために、だまってしまって、彼らをとめることができなかった。大いなる奇跡が行われ、病人がいやされ、信ずる者にしるしと不思議なわざが伴った。その働きの中には、神があられた。そして、聖徒たちはみな、結果を恐れることなく、自己の良心の確信にしたがって、神のすべての戒めを守っている人々と一つとなった。そして彼らは、第三天使の使命を広く力強く叫んだ。わたしは、この使命が、夜中の叫びにはるかにまさる力と勢力をもって閉じられるのを見た。

天から力をさずけられた神のしもべたちは、聖なる献身の念に顔を照り輝かせながら、

天来の使命を伝えるに出て行った。あらゆる宗教団体の中にちらばっていた魂は、呼び声に  
応じた。そしてちょうど、ロトが滅亡前のソドムから急いで出たように、とうといしもべ  
たちが、運命の尽きた諸教会から急いで出た。天来の栄光は神の民の上に豊かにとどまっ  
て、誘惑のときに耐え忍ぶ備えをさせた。彼らはその大いなる栄光によって力づけられた。  
いたるところで、多くの群衆が「神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖  
徒の忍耐がある」と言っている声がきかれた。

### 第三天使の使命の終了

わたしは、第三天使の使命が終わろうとしている時をさし示された。神の民には天来の  
力がやどり、彼らは働きを完成して、目の前の試練の時に対する備えができていた。彼ら  
は、後の雨、すなわち神のみ前より来る慰めを受け、生けるあかしが復活していた。最後  
の大いなる警告が至る所で叫ばれ、それは警告を受け入れたくない地上の住民をわき立た  
せ、怒らせた。

わたしは天使たちが、天をあちこちと飛びまわっているのを見た。墨入れを持ったひとりの天使が、地上から帰ってきて、自分の働きの終わったことを報告した。そこで聖徒の数がかぞえられて封印された。すると、それまで十誡の納められている箱の前で奉仕しておられたイエスが、香炉を投げ捨てられるのをわたしは見た。彼は両手をあげて、大きな声で、「**事はすでに成った**」と言われた。イエスが「不義な者はさらに不義を行い、汚れた者はさらに汚れたことを行い、義なる者はさらに義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うままにさせよ」と厳粛に宣告されると、天使の万軍は冠をぬいだ。

各人の判決は生か死かのいずれかにきまっていた。イエスが聖所で奉仕しておられた間に、審判は死せる義人から次に生ける義人へとつづけられていたのである。キリストは、ご自身の民のために贖いをなして彼らの罪を消し去り、み国を受けておられた。み国の民はもうできあがっていた。小羊なるキリストの婚姻は終わった。「**国と……全天下の国々の権威とは**」みなイエスと救いを継ぐ者にと与えられ、イエスは王の王、主の主として治められることになった。

イエスが至聖所から歩いてこられると、衣の鈴が鳴るのが聞こえた。そして外へ出られると、暗黒の雲が地上の住民をおおった。その時は、もう、不義な人類と神の怒りとの間

には仲保者がおられない。イエスが神と不義な人類との間に立つておられた時には、地上の住民は抑制されていた。しかしイエスが、人類と天父との間からしりぞかれた時に、その抑制はとり除かれ、サタンは、最後まで悔い改めない人々を完全に支配するようになった。イエスが聖所の中で奉仕しておられる間は、七つの災害を地上に注ぐことはできなかった。しかし聖所におけるイエスの働きが終わり、その執り成しが終わると、もう神の怒りをとどめる何ものもなく、それは、これまで救いを軽んじ、譴責を憎んできた不義な罪びとの、おおいなき頭上にはげしく破裂した。イエスの執り成しが終わった後の、恐ろしい時に、聖徒たちは、仲保者なしで、聖なる神の御目の前に生きていた。各人の判決はきまり、宝はかぞえられた。イエスは天の聖所の第一室に、ちよつとの間とどまられた。イエスが至聖所におられる間に告白された罪は、罪の創始者であるサタンの上に置かれ、彼がその刑罰を受けねばならなかった。

それからわたしは、イエスが祭司の服をぬいで、王の衣を身につけられるのを見た。イエスの頭上には、幾つもの冠がかさなり合っていた。イエスは天使の万軍にとりかこまれて、天を出発された。苦難は地の住民にふり注いでいた。ある者は神の不当を鳴らし、ある者は神をのろっていた。また中には、神の民にとびついて、神の刑罰からのがれるには



どうしたらよいか教えてほしいとたのむ人たちもあった。しかし聖徒たちは、彼らのためにどうすることもできなかった。罪びとのために最後の涙が流され、最後の苦悩の祈りがささげられ、最後の重荷が負われ、最後の警告があたえられていたのであった。彼らを招く恵みのやさしい声は、もう聞かれなかった。聖徒たちと全天が彼らの救いに関心を示していた時に、彼らは、自分自身に関心を持たなかった。生と死とが彼らの前に置かれていたのであった。多くの者は生を望みながら、それを手に入れるために努力しなかった。彼らは生をえらばなかったもので、もはや不義をきよめる贖いの血もなければ、「いましばらく罪びとをゆるしたまえ」と叫んで、訴えてくださる憐れみ深い救い主もおられない。「事すでに成った」という恐ろしいことばを聞いた時に、全天はイエスと一つになったのである。救いの計画は成し遂げられたが、しかし、えらばれて救いにあずかった者は少なかった。恵みのやさしい声が消えると、悪人たちは恐怖にとりつかれた。「遅すぎた！遅すぎた！」ということばを、彼らは恐ろしい気持ちではつきりきいた。

神のみことばを尊んでいなかった人々が、海から海へ、北から東へとさすらいながら、神のみことばを求めて、あちらこちらへと急いでいた。天使は言った。「あの人たちは、神のみことばを見つけない。地にはききんがある。それは、食物に飢え、水に

かわくききんではなくて、神のみことばを聞くことのできないききんである。彼らは、神からただ一言のおほめのことばをいただくことさえできるなら、何ものも惜しまないだろう。しかし彼らは飢え渴きつづけねばならない。彼らは来る日も来る日も救いを軽んじ、天の宝や勧めよりも、この世の富やこの世の快樂を大事にしていた。彼らはイエスをこばみ、彼の聖徒たちをあざけた。けがれたものはいつまでも、けがれたままなのだ」と。

災害の結果に苦しんで、悪人たちの多くは怒りに燃えた。それは恐ろしい苦悶の光景だった。親は子供たちを激しく非難し、子供たちは親を、兄弟は姉妹を、姉妹は兄弟を非難していた。「あなたがわたしに真理を信じさせまいとしたのだ。そうでなければ、こんな恐ろしい目に会わずにすんだものを」と言って、大声で泣きわめくのが、四方から聞こえた。人々は、激しい憎しみをもって牧師たちに向かい、「あなたは、わたしたちに警告してくれなかった。あなたは、全世界の人が悔い改めて救われる時が来ると言ったではないか。あなたは、平和だ、平和だと叫んで、恐怖心の起きるたびに、それを静めてしまつて、こんなことになるとは言わなかったではないか。わたしたちに警告する人があると、あれは狂信者で、わたしたちを滅ぼす悪い人たちだと、あなたは言ったではないか」と言って、彼らを責めた。しかしわたしは、牧師たちも神の怒りをまぬかれないのを見た。彼らの苦し

みは、人々の苦しみよりも十倍も激しかった。

## 悩みの時

わたしは、聖徒たちが都会や村を去り、互いに共同して団体をつくり、人里離れた場所に生活するのを示された。悪人たちが飢えと渇きに苦しんでいる時に、天使たちは聖徒たちに食物と水をあたえた。次にわたしが見たのは、地上の有力な人たちが一緒に相談しているまわりを、サタンと悪天使たちが忙しく飛びまわっている光景だった。わたしはまた、聖徒たちがその特殊な信仰を捨て、安息日をやめて、週の初めの日を守らなければ、一定期間の後には、だれでも彼らを自由に殺してもよいという命令が書かれ、その写しが各地にばらまかれるのを見た。しかしそうした試練の時にも、聖徒たちは神を信頼し、のがれるべき道が備えられるという神の約束にすがって、冷静に落ちついていた。ある土地では、その法令が実施される時期よりも前に、悪人たちが聖徒を殺そうとして襲いかかったが、天使たちが兵士の姿をとって聖徒たちのために戦った。サタンはいと高き神の聖徒たちを

滅ぼす特権を得たいと望んだが、イエスが天使たちに命じて彼らを見守らせられた。神は、まわりの異教徒が見ている前で、神の律法を守った人々と契約を結ぶことによって、あがめられるのであった。またイエスは、長い間イエスを待ち望んでいた忠実な人々を、死を経験させないで天国へ移すことによって、栄えをうけられるのであった。

まもなくわたしは、聖徒たちが非常な心の苦しみに会うのを見た。彼らは地上の悪い住民にとりかこまれているように見えた。どこを見ても、何もかも彼らに敵対していた。聖徒のある者は、神がついに自分たちを悪人の手に滅ぼされるがままにまかせられたのではないかと心配しはじめた。しかし、もし彼らの目が開かれさえしたら、彼らは自分たちのまわりが、神の天使たちによってとりかこまれているのを見ることができたであろう。次に、怒り狂った悪人の群れが、それからまた、その悪人たちに聖徒を殺させようと飛びまわる悪天使の群れがやってきた。しかし彼らが神の民に近づくには、まずこの力の強い聖天使たちの間を突破しなければならなかった。これは不可能だった。神の天使たちは、悪人たちを追いはらい、押し寄せて来る悪天使たちを撃退していた。

それは聖徒たちにとって、恐ろしい苦悩の時だった。夜も昼も、彼らは神に救いを求めて叫んだ。見たところ、とてものがれるすべはなかった。悪人たちは、すでに勝利しはじ

めて、「お前たちの神はなぜ、われわれの手からお前たちを救い出さないのか。天へのぼつて行って、自分の生命を救ったらどうだ」と叫ぶのだった。しかし聖徒たちは、悪人たちには目もくれなかった。彼らは、ヤコブのように、ひたすら神と格闘していた。天使たちは彼らを救いたいという思いに駆られたが、もうしばらく待たねばならなかった。神の民は杯を飲み、バプテスマを受けねばならなかった。天使たちは、任務を忠実に守って、見張りをつづけた。神はご自身の名が異教徒から辱しめられるのをお許しにならない。神がご自身の偉大な力をあらわして、聖徒の輝かしい救済を成し遂げられる時がほとんど来ていた。神は、ご自身のみ名の栄光のために、神を忍耐づよく待ち望み、その名を生命の書にしるされたひとりびとりを、お救いになるのである。

わたしは、昔の忠実なノアをさし示された。雨が降って大洪水になったとき、ノアとその家族はすでに箱舟に入って、神が彼らの中に閉じこめておかれた。ノアは洪水前の世界の住民に忠実に警告したのだが、彼らはノアをあざけり笑った。水が地に落ちて、人々がつぎつぎにおぼれた時に、彼らは自分たちがこれまで嘲笑していた箱舟が、忠実なノアとその家族をのせて、安全に水の上に浮かんでいるのを見た。同じように、神の怒りがくだることを忠実に世に警告した神の民が救われるのをわたしは見た。神は、天に移されるの

を待っている民、すなわち獣の法令に服従したり、そのしるしを受けたりすることを承知しない民が、悪人たちによって滅ぼされるのをお許しにならなかった。もし悪人たちが聖徒たちを殺すことをゆるされたら、サタンや悪天使たちや、また神を憎むすべてのものたちは満足したのであろう。最後の決戦において、これまで長い間神を愛して待ち望んでいた人々の上に、サタンの権威が力をふるうようになったら、それはなんたる勝利だろう。天にのぼるといふ聖徒たちの考えをあざけていた人々は、神がご自身の民を守られ、彼らが輝かしい救いを受けるのを、目で見るのである。

聖徒たちが都会や村を立ち去ると、悪人たちが彼らを殺そうとして後を追った。しかし、神の民を殺そうとしてふりあげられた剣は、わらのように折れて落ちた。神の天使たちが聖徒たちを守った。聖徒たちが夜も昼も、救いを求めて叫ぶ声は、神のみにのぼっていた。

## 聖徒たちの救出

神がご自身の民を救おうとされた時は真夜中だった。悪人たちが聖徒たちのまわりであざけていると、突然光り輝く太陽が現れ、月は静止した。悪人たちは驚いてその光景を見上げたが、聖徒たちはそれを自分たちの救出のしるしとして、厳粛なよろこびをもって見守った。しるしと不思議が短時間につづいて起こった。何もかもが自然の軌道からはずれてしまったように思えた。川の流れはとまった。暗い濃い雲があらわれて互いにぶつかり合った。しかし、一とこだけ栄光の輝く晴れ渡ったところがあって、そこから神のみ声が、流れの音のように、天地をふるわせて聞こえてきた。大地震が起こった。墓が開かれた。そして、第三天使の使命を信じ、安息日を守って死んだ人々が、栄化された姿で土の寢床から現れた。彼らは、神がご自身の律法を守った人々と結びたもう平和の契約を聞くのであった。

天は開いたり閉じたりして揺れ動いた。山々は風の中の葦のように揺れ、ごつごつした

岩をあたり一面に投げとばした。海は湯わかしの湯のように沸きたって、石を陸地へ投げあげた。そして、神が、イエスのおいでになる日時を告げ、ご自身の民に永遠の契約を宣言なさるとき、神は一節ずつ区切りながら、一語一語天地にひびきわたるような声でお語りになった。神の民は、目を天に向けて、エホバの口から出ることばが、すさまじい雷鳴のひびきのように天地にひびき渡るのを聞いた。まことに莊嚴そのものだった。一節の切れ目ごとに聖徒たちは、「ハレルヤ、栄光あれ」と叫んだ。彼らの顔は神の栄光に照らされ、ちようどモーセがシナイ山から降りてきた時にそうだったように、栄光に輝いていた。悪人たちは栄光にうたれて彼らの顔を見ることができなかった。神の安息日を清く守って神をあがめた人々の上に、つぎることのない祝福が宣告されると、獣とその像に対する勝利の叫びが高らかにあがった。

それからヨベルの年がはじまり、土地は休まねばならなかった。わたしは、神を敬う奴隷が勝利と歓喜の中に立ち上がって、身をしばりつけていた鎖を振り落とし、一方には、悪い主人がどうしてよいかわからずに、うろたえているのを見た。なぜなら悪人たちは、神の語られたみことばがわからなかったからである。

まもなく、人の子の乗っておられる大きな白い雲が現れた。その雲は、空の遠くに現れ



たときには初め小さく見えた。天使は、それが人の子のしるしだと告げた。その雲が地上に近づくと、わたしたちは、勝利を収めるためにこられるイエスの、欠けるところのない栄光と権威をまのあたりに見ることできた。きらきら輝く冠を頭の上にいただいた供奉の聖天使たちが、イエスの道を護衛していた。それは、どんなことばにも言いあらわすことのできない荘厳な光景だった。尊厳と無上の栄光につつまれた生ける雲はいよいよ近づき、イエスの美しいお姿がはっきり見えた。イエスの額には、いばらの冠とはちがって、栄光の冠がのせられていた。イエスの衣とももには、「王の王、主の主」という名前が書かれていた。イエスのお顔は、真昼の太陽のように輝き、その目はほのおのようにみえ、そのみ足は輝く真鍮のようだった。イエスのお声は多くの楽器のようにはびいた。地はその前に揺れ、天は巻き物をまくように去っていき、山々と島々はその所を離れた。「地の王たち、高官、千卒長、富める者、勇者、奴隷、自由人らはみな、ほら穴や山の岩かげに、身をかくした。そして、山と岩とにおかたって言った、『さあ、われわれをおあって、御座にいますかたの御顔と小羊の怒りから、かくまってくれ。御怒りの大いなる日が、すでにきたのだ。だが、その前に立つことができようか』」。ちよっと前までは、神の忠実な子らを地上から滅ぼそうとしていた人々は、神の子たちの上におかれた栄光をまのあたりに見

た。そして、あらゆる恐怖のさなかに、彼らは、聖徒たちがよろこびの調べにあわせて、「見よ、これはわれわれの神である。わたしたちは彼を待ち望んだ。彼はわたしたちを救われる」と叫ぶ声をきいた。

神のみ子の声が、眠っている聖徒たちを呼び起こすと、地は激しく揺れた。彼らはその呼び声に応じて、輝かしい不死を身にまとい、「死は勝利にのまれてしまった。死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。死よ、おまえのとげは、どこにあるのか」と叫びながら現れた。それから、生ける聖徒たちと、よみがえった聖徒たちが声をあわせ、無我夢中になつて高らかに勝利の叫びをあげた。病氣と死のしるしを負つて墓にくだつていた人々は、不死と健康と活力をもつて現れた。生ける聖徒たちは、またたく間に変えられ、よみがえつた聖徒たちと一緒に、空中において主に会つた。なんというすばらしい再会であろう。死別していた友だち同志は出会い、もう決して別れることがないのである。

雲の車の両側には翼があつて、その下には生ける輪があり、車が上の方へ動くとき、その輪は「聖なるかな」と叫んだ。翼もまた動くたびに「聖なるかな」と叫び、雲のまわりの供奉の天使たちも、「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、主なる全能の神」と叫んだ。すると雲の中の聖徒たちは、「ハレルヤ、栄光あれ」と叫んだ。車は聖都をめざして上へ上

へとぼって行った。都に入る前に、聖徒たちは、イエスをまん中にして、真四角な隊形をつくった。イエスの頭と肩は、聖徒たちや天使たちよりぬきんでてみえた。イエスの威厳のあるお姿と愛に満ちあふれたお顔は、真四角な隊列の中のどれからも見えた。

### 聖徒の報賞

その時わたしは、天使の大群が、都から、輝く冠を持って来るのを見た。それは聖徒たちのひとりびとりに与えられる冠で、各人の名前が書きこまれていた。イエスが冠を求められると、天使たちはそれをイエスのみ前にささげた。イエスは冠を右手で受けとられると、それを聖徒の頭にやさしく置かれた。同じように、天使たちが立琴を持ってきた。イエスはそれもまた聖徒たちにお与えになった。天使の中の指揮者たちが、まず最初の調べを奏した。するとみんなが声をあげて感謝とよろこびの歌をうたい、その手はたくみに立琴の糸をあやつり、そのメロデーは豊かな、完全な調べとなって流れた。それからわたしは、イエスが、救われた人々の群れを、都の門に導かれるのを見た。イエスは門に手をか

けて、そのきらめく蝶番のついた扉をさっと開き、真理を守った諸国民に、中に入るように命じられた。都の中には目を楽しませるあらゆるものがあつた。彼らは至る所に豊かな栄光を見た。それからイエスは、贖われた聖徒たちをgoranになった。彼らの顔は栄光に輝いていた。イエスは、彼らの上にじつとやさしい目をそいで、豊かな美しい声でこう言われた、「わたしは、自分の魂の辛苦を見ることができて満足だ。この豊かな栄光は永久にあなた方のものだ。あなた方の不幸は終わった。もはや死もなく悲しみ嘆きもなく、また苦しみもないのだ」。わたしは、贖われた人々の群れが、身をかがめ、そのきらめく冠をぬいで、イエスの足もとに置くのを見た。そして、イエスが手をのばして、やさしく彼らを起こされると、彼らは黄金の立琴を鳴らし、小羊にささげる歌と、豊かな音楽の調べで全天を満たした。

それからわたしは、イエスが民をいのちの木につれて行かれるのを見た。もう一度、イエスのやさしいお声が、これまで人間の耳に聞こえたどんな音楽の調べよりも美しく聞こえた。「この木の葉は、人々をいやすためにある。だれでもそれを食べなさい」と、イエスはあっしやつた。いのちの木には大そう美しい実がなっていた。聖徒たちはそれを自由に食べることができた。都の中には栄光に満ちたみ座があつて、そこから水晶のように透き

通ったいのちの水の川が流れ出ていた。この川の両側にいのちの木があった。川岸には、その他にも美しい木々があつて、食べるのによい果実をつけていた。

ことばというものはあまりに貧弱で、天国の光景を描写することができない。天国の光景がわたしの前に現れるにつれて、わたしはただ驚嘆するよりほかはない。そのすぐれた壮麗さと、そのすばらしい栄光に心を奪われたわたしは、筆を投げて叫んだ。「ああ、なんという愛！　なんという驚くべき愛ぞ」と。どんなことばでほめたたえてみても、天の栄光と比類のない救い主の愛の深さを描写することはできない。

### 地上の荒廃

わたしの注意はふたたび地上に向けられた。悪人は滅ぼされて、その死体がころがっていた。神の怒りは最後の七つの災害となつて住民に降りそそぎ、人々は苦痛のために舌をかみ、神をのろつた。エホバの怒りの特別な目標は偽りの牧者たちに向けられていた。目玉がその眼窩の中で、そして舌が口の中で焼けとけてもなお彼らは立っていた。聖徒たち

が神のみ声によって救い出されたあと、悪人の群れは怒りをお互い同志に向け合った。地は一面に血の洪水に見え、見渡すかぎり死体がころがっていた。

地上は荒れはてて荒野のように見えた。地震で倒れた都市や村々の廃墟がうず高くなっていた。山々がうつり去った跡には、大きな穴が口を開いていた。海からうちよせられ、地が裂けてころがり出たごつごつの岩石が、あちらにもこちらにもころがっていた。大きな木が根こそぎになって、地面に吹き倒されていた。ここがサタンと悪天使たちにとって、千年間の住居になるのである。ここに彼は閉じこめられて、その荒れはてた地上をさまよい歩き、神の律法に対する自分の反逆の結果を見せられる。彼は、自ら招いたわざわいの結果を、千年の間、存分に味わうことができる。この地上から外へは出られないサタンは、他世界を飛びまわって、墮落したことのないその住民を誘惑したり、妨害したりすることは許されない。この期間中、サタンは極度に苦痛をおぼえる。墮落して以来、彼の悪の能力はたえず働いていた。しかし今、彼はその能力をとりあげられ、放置されるままに、墮落以来自分の果たしてきた役割について回顧し、また恐怖すべき自分の将来を、恐れとおののきをもって待ちうけねばならない。その恐るべき将来において、彼は自分がこれまでやってきたすべての悪について、さばきをうけ、また彼が人に犯させたすべての

罪について処罰をうけねばならないのである。

天使たちと救われた聖徒たちの勝利の叫びが、幾万の楽器を奏する音のようにひびきたるのをわたしは聞いた。彼らは、これから後サタンに苦しめられたり、誘惑されたりすることはなくなるのである。また他世界の住民たちも、サタンの存在と誘惑から救われるのである。

それからわたしは、イエスと救われた聖徒たちがみ座にすわっているのを示された。聖徒たちは、王としてまた神の祭司として統治した。キリストは、ご自分の民とともに、死せる悪人を裁かれた。彼らは、悪人たちの行為を、法令の書すなわち聖書に照らしあわせて、その行ったわざにしたがって各々に判決をくだした。それから彼らは、悪人たちがそのわざにしたがって受けねばならない運命を各々に割りあて、それを死の書の各目の名前のところに記入した。サタンと悪天使たちもまたイエスと聖徒たちによつてさばかれた。サタンの刑罰は、彼が欺いた者たちの刑罰よりもはるかに重かった。サタンの苦しみは、比べものにならないほど彼らよりも大きかった。サタンは欺かれた人々がみな滅びてしまった後まで生き残つて、長い間苦しみつづけるのである。

千年期の終わりに、死せる悪人たちの審判が終わると、イエスは聖徒たちと天使の大軍

をひきつれて都を出発された。イエスがある大きな山の上にあり立ち、足を地面につけると同時に山は裂けて大いなる平地となった。そのとき上を仰いで見ると、そこには十二の基と十二の門のある大いなる美しい都が見られた。門は四方の側に各々三つずつあって、門ごとに天使がついていた。わたしたちは、「都だ、大いなる都が天の神のみもとからおりてくる」と叫んだ。都は、目もくらむばかりにまぶしく照り輝く栄光のうちに、イエスが備えられた大いなる平地に落ちついた。

#### 第二の復活

それから、イエスと供奉の聖天使たちの全員およびすべての聖徒たちは、都を出発した。天使たちは総指揮官のイエスをかこんで道中を護衛し、救われた聖徒たちの隊列がこれにつづいた。それから、恐るべき大いなる莊嚴さのうちに、イエスは死せる悪人たちを呼び起こされた。彼らは墓に入った時と同じ病弱なからだをもって現れた。それはなんという光景、なんという場面であろう。第一の復活にあずかった人々は、若々しい不死の姿で現れたのに、第二の復活には、どの人にもものろいの跡がみられた。地の王たちや貴族たち、



卑しい者たち、学問のある人ない人、みな一緒に出てきた。だれもがみな人の子を仰いで見た。キリストをあざけり軽んじた人々も、その聖なる額にいばらの冠をかぶせた人々も、彼を葦で打ちたたいた人々も、みな王者の威厳をそなえられたキリストを仰いで見た。審判の庭でイエスにつばをはきかけた者は、いまイエスの刺し通すような眼光とみ顔に顔をそむける。イエスの手と足に釘を打ちこんだ者は、いまそのはりつけの跡を目の前に見る。イエスのわき腹をやりで刺した者は、そのおからだに自分たちの残酷な跡を見る。彼らはみな、いま目の前にあるお方こそ、自分たちがはりつけにし、その死の苦しみを愚弄したイエスその人であることを知って、苦悶の長いうめき声をあげ、王の王、主の主なるキリストの前からのがれようとする。

みんなは、岩の間に逃げこんで、かつて自分たちがあざけたイエスの、恐るべき栄光から身をかくそうとする。彼らはキリストの威厳と非常な栄光に圧倒されて苦痛を感じ、声をそろえて、恐ろしいまでにはつきりと、「主の御名によってきたる者に、祝福あれ」と叫ぶ。

イエスと聖天使たちが、すべての聖徒たちをしたがえて、ふたたび都の中に入ると、あたりの空気は、死の運命に定められた悪人たちの嘆き悲しむ声に満たされた。そのときわ

たしは、サタンがふたたび働きはじめのを見た。彼は人々の間を走りまわって、弱っている者を力づけ、自分や部下の天使たちは力があるのだと告げた。彼はよみがえった無数の群衆を指さした。その中には戦闘に熟練し、国々を征服した強力な戦士や王たちがいた。またそこには、戦いに一度も負けたことのない大いなる巨人たちもいた。そこには、接近しただけで諸国をふるえあがらせた高慢で野望に満ちたナポレオンもいた。そこにはまた、征服欲にかられて戦争を起こした堂々たる体格とりっぱな容貌の人々もいた。彼らは死ぬまで征服欲に支配されていたが、いまもなお、その同じ征服欲をもちつつづけている。サタンは部下の天使たちと相談し、またこれらの王たちや征服者たちや有力者たちと相談する。それからサタンは、自分の巨大な軍勢をみわたして、都の中の一団は少数で弱い勢力だから、攻め上って都を占領し、住民を追い出して、その富と栄光を手に入れることができると告げる。

サタンは人々をだますことに成功する。彼らはすぐに戦闘準備をはじめめる。その巨大な軍隊の中には多くの技術者がいて、彼らはあらゆる種類の武器をつくる。それからサタンを将として大軍が行動を起こす。王や戦士たちがサタンのすぐあとに従い、群衆はそれぞれ隊をなしてつき従う。各隊には指揮者がいて、彼らは整然と、神の都を目ざして、荒廃

したでこぼこな土地を進軍する。イエスが都の門を閉じられると、この大軍は都を包囲し激戦を予期して戦闘態勢をとる。

イエスとすべての天使軍、および、すべての聖徒たちは、彼らの頭に輝かしい冠をいただき、都の城壁の上に立つ。イエスは、威厳をもって、「お前たち、罪人よ。義人の報いを見よ。わたしに贖われた者よ、悪人の報いを見よ」と言われる。大群衆は、城壁の上の輝かしい一団を見る。そして、彼らが、この人々の輝かしい冠と、彼らがイエスの姿を反映して、顔を栄光に輝かせているのを見、また王の王、主の主であられるイエスの、比類のない栄光と威厳とを見るときに、彼らは、勇気を失ってしまう。彼らは、自分たちがどんな宝と栄光を失ったかを実感し、罪の支払う報酬は、死であることを知るのである。彼らは自分たちが軽べつしていた清く幸福な一団が、栄光と誉れと不死と永遠の生命を着せられているのを見る。一方、自分たちは、あらゆる卑しい憎むべきものと共に都の外にあることを見るのである。

## 第二の死

サタンは、部下の者たちの中にとびこんで行って、群衆に行動を起こさせようとする。しかし天から彼らの上に火がくだって、大いなる人、力ある人、高貴な人や卑賤な人の區別なく、すべての者が焼き尽くされる。ある者は、速やかに焼きつくされたが、長く苦しむ者もあるのを、わたしは見た。彼らは、それぞれの行為に従って罰せられた。ある者は焼きつぎるのに何日間もかかった。まだ焼け尽きていない部分がある限り、苦痛感も残っているのであった。「生命の虫は死なない。わずかでも焼き尽くすものが残っているかぎり、火は消えない」と天使は言った。

サタンと彼の天使たちが最も長く苦しんだ。サタンは、彼自身の罪の重荷と罰だけでなく、贖われた人々の罪をも負わせられて苦しむのであった。彼は、また、自分が陥れた魂のためにも苦しまなければならない。こうして、サタンとすべての悪の軍勢が焼き尽くされ、神の正義が満足するのをわたしは見た。そして、すべての天使の軍勢とすべての贖わ

れた聖徒たちは、大きな声で「アーメン」と言った。

「サタンは根であって、彼の子供たちは枝である。彼らは、今、根も枝も焼き尽くされた。彼らは永遠に死んだのである。彼らは復活することはない。そして、神は、清い宇宙を持たれるのである」と天使は言った。そして、わたしは、悪人たちを焼き尽くした火が、不用のものを焼いて、地を清めるのを見た。わたしが、もう一度見たところ、地は清められていた。そこには、のろいのあとは一つもなかった。裂けたり、でこぼこのあった地球の表面は、今、平坦で広々とした平野になった。神のすべての宇宙は清まり、大争鬭は、永遠に終わりを告げた。どこを見ても、何を見ても、すべては美しく聖であった。そして、贖われたすべての人々は、老いも若きも、大なる者も小なる者も、彼らのきらめく冠を贖い主の足もとに投げ出して、彼の前にひれ伏して彼をあがめ、永遠に生きておられるかたを礼拝した。栄光に輝く美しい新しい地球は、聖徒たちの永遠の嗣業であった。国と主権と全天下の国々の権威とは、いと高き者の聖徒たちに与えられた。そして、彼らは、それをつつまでも、永遠に所有するのであった。

付 録

付

録

六一―七一ページ、「最初の幻」―この章の記事は、「メイン州ポートランド、一八四五年十二月二十日」付の「ハーモン姉妹からの手紙」という題のもとに、一八四六年一月二十四日に、「デースター」の編集者によって、初めて公にされた。これは、また、一八四六年、一八四七年、一八五一年に、「広く散らされた残りの民へ」と題して印刷された。現在の標題は、「経験と幻」の再版に際して、一八八二年につけられた。

一八六〇年と一八八五年に出版された詳しい自叙伝によれば、ここに書かれていることは、二つの別の幻である。（「霊の賜物」第二卷三〇―三五ページの「最初の幻」、教会へのあかし第一卷五八―六一ページ、「霊の賜物」第一卷五二―五五ページの「新しい地の幻」、教会へのあかし第二卷六七―七〇ページ参照。）

六三―七一ページ、**将来の出来事の描写**——ホワイト夫人は、神が将来の出来事について、彼女に示されたことを描写するときに、それが、過去、現在、将来のことであっても、その事件の中に自分が参加しているかのように、しばしば述べている。ホワイト夫人は、幻を見ている時の状態についての質問に答えて、次のように書いた。

「主が、わたしに幻を与えることをよしとされるときに、わたしは、イエスのみ前と天

使たちの前に連れていかれ、地上のことは全く感じなくなる。……わたしの注意は、時々、地上で起こっている出来事に向けられる。時には、はるか将来に連れていかれて、起こるべき出来事を見せられる。また、過去に起こった出来事も、わたしに示された。」——霊の賜物第二卷二九二ページ

エレン・ホワイトは、彼女自身、再臨信徒であって、これから起こるべき出来事をそこにおいて見聞きしたものとして書いたのである。たとえば、初代文集の次の言葉である。

「やがて、われわれは、多くの水の音のような神の声を聞いた。その声が、イエスの再臨の日と時とをわれわれに知らせた。」——六三、六四ページ

「われわれは、一緒に雲の中に入り、七日間のぼって行って、ガラスの海に着いた。そのとき、イエスは、冠を持って来られて、ご自分の右の手で、それをわれわれの頭にのせてくださった。」——六六ページ

「われわれはみな進み入り、都に入る完全な権利が自分たちにあるのだと感じた。」

「ここで、われわれは、命の木と神のみ座とを見た。」

「われわれはみな、イエスを先頭にして、都からこの地上の大きな山におりてきた。」

——六七、六八ページ



「われわれが聖なる神殿に入ろうとすると……」

「わたしは、そこで見た数々の驚くべきものを、描写することができない。」―七〇ページ

ホワイト夫人は、幻の後で、彼女に見せられたことの多くを思い出すことができた。しかし、隠されたことと、あらわすべきでないことは、思い出すことができなかった。神の民が救われる時に起きる光景の一部として、彼女は、「イエスの再臨の日と時」の発表を聞いた（六三、六四ページ、九四ページ参照）。しかし、ホワイト夫人は、この事について、あとで、次のように書いた。

「わたしは、神の声によって語られた時については、全く何も知らない。わたしは、その時が宣言されるのを聞いたが、わたしは、幻から出て来たあとで、その時については何も覚えていなかった。非常に感激的で厳粛な興味深い光景が、わたしの前を過ぎていったが、それを十分に言葉では描写することができない。それはすべて、わたしにとって生きた現実であった。」（エレン・G・ホワイト手紙三八、一八八八年。セレクトッド・メツセージズ第一巻七六ページに発表された。）

ホワイト夫人が、ある出来事に参加していたように思ったとしても、その事件が起きるときに彼女がそれに参加しているという保証にはならなかった。

六七ページ、**フィッチ兄弟とストックマン兄弟**——ホワイト夫人は、最初の幻の記述の中で、彼女が、新エルサレムで会って話した人々として、「フィッチ兄弟とストックマン兄弟」をあげている。この二人はともに、エレン・ホワイトがよく知っていて、キリストが間もなく来られるという使命の宣布に活発に参加していた牧師であった。しかし、彼らは、一八四四年、十月二十二日の失望の少し前に亡くなってしまったのである。

チャールズ・フィッチは、長老教会の牧師であった。彼は、ウィリアム・ミラーの講演集を読み、また、ミラーがジョサイア・リッチと共に開いた集会を通して再臨使命を受け入れた。彼は、二千三百年の期間の終わりにキリストの再臨があるという宣言に、心から身を投じた。そして、彼は、再臨覚醒運動の有力な指導者になった。一八四二年に、彼は、預言の図表を作り、それを効果的に活用した。「初代文集」の一五五ページに、その事が書かれている。彼は、一八四四年、十月二十二日の一週間余りに亡くなった。彼は、冷え冷えする秋の日に三つのバプテスマ式を行い、寒さに身をさらしたことが原因でかかっ

た病気のために亡くなった。（われらの父祖たちの預言的信仰第四卷五三三―五四五ページ参照。）

リーバイ・Ｆ・ストックマンは、メイン州の若いメソジストの牧師であつた。彼は、一八四三二年に、他の約三十人のメソジストの牧師とともにキリストの再臨を信じて、説教しはじめた。彼は、メイン州、ポートルランドで働いていたが、一八四三年に健康が衰えた。彼は、一八四四年、六月二十五日に結核で亡くなった。ホワイト夫人が、少女時代に、失望に陥つたときに、神が二つの夢の中で彼女に語られたことがあつたが、その時彼女が勧告をもとめて行つたのが、彼であつた。（初代文集五八、一六一―一六六ページ、われらの父祖たちの預言的信仰、第四卷七八〇―七八二ページ。）

七三ページ、**催眠術**——初期のころ、幻に反対した人々は、自分たちの反対を正当化するため、エレン・ホワイトの経験は催眠術によるものであると言つた。催眠状態は、暗示力によって引き起こされた睡眠に似た状態で、催眠術をかけられた人は、催眠術をかけたと一つになつて、その人の暗示に従うのである。しかし、ホワイト夫人がここに書いてゐるように、催眠術師が彼女に催眠術をかけようとしたが、彼は、彼女の前では何もで

きなかった。

エレン・ホワイトは、彼女の経験の初期において、催眠術の危険についての警告を与えられた。そして、後年、度々、それに関しての教えを受けた。彼女は、人間の心が他の人間の心に支配される行為の恐ろしい危険について、警告している。(ミニストリー・オブ・ヒーリング二一九―二二一ページ、医療伝道一〇〇―一二ページ、セレクトエッド・メッセーجز第二巻三四九、三五〇、三五三ページ参照。)

九三ページ、**名目的再臨信徒**(ノミナル・アドベンチスト)―これは、第一、第二天使の使命の宣布には参加したけれども、安息日の真理を含んだ第三天使の使命を拒んだ人々である。しかし、彼らは、再臨の希望を信奉しつづけていたのである。ホワイト夫人は、この人々を、「現代の真理を拒否している人々」(一四六、一四七ページ)、また、「再臨信徒であると公言している種々の団体」(二三〇ページ)と言われた。われわれの初期の文書の中で、これらの人々は「ファーストデー(第一日)アドベンチスト」とも言われている。

一八四四年の秋に、人々が予期したようにキリストが来られなかったとき、多くのクリス

チャンたちが失望に陥った。再臨信徒たちは、幾つかのグループに分かれた。その時の残ったものが、アドベンチスト・クリスチャン教会という小さい団体と、セブンスデー・アドベンチストとである。

再臨信徒の中で、一八四四年に預言が成就したことを確信し続けたものは、ごくわずかであった。しかし、第七日安息日を含んだ第三天使の使命へと進んでいったのは、この人々であった。エレン・ホワイトは、この危機について、次のように書いた。

「再臨信徒が、一八四四年の大失望のあとで、彼らの信仰を固く保ち、神の摂理が開かれるままに一致して従い、第三天使の使命を受け入れ、聖霊の力によって、それを世界に宣布したならば、彼らは、神の救いを見、主は、彼らの努力とともに、大いなるわざをなし、働きは完成し、キリストは、ずっと前に、ご自分の民に報いを与えるためにおいでになっていたことであろう。」

しかし、失望に続く疑いと不安の時に、多くの再臨信徒たちは、信仰を失った。紛争と分裂が起こった。大多数の者は、神の摂理に従って安息日改革を受け入れ、第三天使の使命を宣べ伝え始めた少数の者に、声と筆をもって反対した。世界に警告を発するという一つの目的のために、時間と才能とを献げるべき多くの者が、安息日の真理に反対するため

に心を奪われていた。そのために、真理の支持者たちは、必然的に、反対者に答えたり、真理を擁護したりするのに労力を用いなければならなかった。こうして、働きは妨害され、世界は暗黒の中に取り残された。もしも、再臨信徒全体が、神の戒めとイエスを信じる信仰について一致していたならば、われわれの歴史は、どんなに大きく変化していたことであらう。」(セレクトッド・メッセージズ第一巻六八ページ。)

一〇五——ページ、**開かれた門と閉ざされた門**——ホワイト夫人が「各時代の大争闘」のなかで、大再臨運動と、一八四四年十月二十二日の失望について述べたときに、失望直後の立場に言及して、しばらくの間、「恵みの扉は閉ざされた」と考えたことは、止むを得ぬ結論であつたと言っている。しかしホワイト夫人は、「聖所の問題を研究するにつれて、より明白な光が与えられた」と言っている。(「本書の歴史的背景」各時代の大争闘下巻一四六、一四七ページ及び「天の至聖所における大事件」一三八—一五〇ページ参照。)

この点に対するホワイト夫人自身の個人的関係について彼女は、一八七四年に、「もうこれ以上罪人は悔い改めないと言う幻は、決して見なかった」と言っている。また彼女は、

このような見解を教えたことはなかった。彼女は、他の時に、「われわれの誤りを正し、真の立場をわれわれに理解させてくれたのは、神から私に与えられた光であった」と書いた。（セレクトッド・メッセージズ第一巻七四、六三ページ。）

一〇七ページ、一七四ページ、ニューヨークにおける不思議なたたく音、「ロチェスター・ノッキング」——これは、現代心霊術が起きた出来事に関するものである。ニューヨーク州、ロチェスター市の約三十五マイル東にあるハイズビルという町のフォックス家で、一八四八年に、不思議な音が聞こえた。このたたく音について、様々の推測が行われていたときに、エレン・ホワイトは、彼女に与えられた幻の権威に基づいて、それは、心霊術のあらわれであって、この現象は、急速に普及し、宗教という名目のもとに、二股に歓迎されて、大衆を欺き、最後の時代におけるサタンの欺瞞の傑作になると言った。

一一八ページ、**使命を持たない使命者**——この言葉は、一八五〇年一月二十六日にエレン・ホワイトに与えられた幻の記事に出てくる。当時、安息日を守っていた再臨信徒たちは、教会の組織を持っていなかった。たいていの人は、組織と名のつくものは、信者の間

に形式主義をもたらすものであるとして恐れていた。しかし、時の経過と共に、彼らの中に不調和な分子があらわれてきた。エレン・ホワイトは、警告の言葉を発した。そして、安息日を守っている再臨信徒たちは、徐々に教会組織の形態を採用するようになった。こうして、信徒の集団が、以前よりは、さらに親密に結び合わされた。使命を説教する力があり、またそれを自分たちの生活によって支持することができるとを証拠立てた牧師たちを、承認する方法が考案された。そして、真理を教えるという口実のもとに誤りを教えていた人々を除外する方法が設けられた。（「本書の歴史的背景」参照。）

一三五ページ、**牧師たちの一致**―前項「使命を持たない使命者」の注参照

一五六ページ、**古い都エルサレムへ行く義務**―ホワイト夫人は、ここで、当時、ごくわずかの人々であつたが、彼らが抱いていた誤った考えについて言っている。その次の年、一八五一年、十月七日のレビュー・アンド・ヘラルドの中で、ジェームズ・ホワイト長老は、「古い都エルサレムやユダヤ人に関して、人々の心をそらす無益な意見がいま、はやっている。」また「聖徒たちは古い都エルサレムへ行くべきである」という奇妙な意見を述べ



る人があると言っている。

一五九、一六〇ページ、**デースターの編集者**——オハイオ州、シンシナティ市在住のイーノック・ジェイコブスが、デースターの発行者であつた。これは、キリスト再臨を宣布した初期の刊行物の一つであつた。エレン・ハーモンは、一八四五年の十二月にイーノック・ジェイコブスに彼女の最初の幻の記事を送つて、彼の信仰が確立することを望んだのである。再臨運動における神の導きについて、彼の確信がゆらいでいるのに、彼女は気づいていた。編集者が、ホワイト夫人の最初の幻を出版したのは、一八四六年一月二十四日のデースターであつた。彼の雑誌の特別号、一八四六年、二月七日の「デースター、エキストラ」には、ハイラム・エドソン、ドクター・ハーンとO・R・L・クロージャーなどが書いた、天の聖所とその清めに関する記念すべき記事が公にされた。それは、一八四四年十月二十二日に、天の至聖所において始まつたキリストの奉仕に関する聖書の教えを示したものであつた。一八四六年三月十四日のこの雑誌には、エレン・ホワイトが書いた第二の通信が掲載された（初代文集九〇―九六ページ参照。）この記事の中で言われていることは、後でジェイコブス氏が抱いた見解と彼が支持した精神主義的惑わしについてであ

る。

一七四ページ、一〇七ページについての注を参照。

一七九ページ、トマス・ペイン——トマス・ペインの著作は、一八四〇年代に米国において、よく知られ広く読まれていた。彼の、「理性の時代」という本は、理神論的著作で、キリスト教的信仰と行為に対して有害なものであった。その本は、「わたしは、ひとりの神を信じ、ほかに何も信じない」という言葉で始まっている。ペインは、キリストを信じなかった。そして、彼は、巧みにサタンに用いられて、教会を攻撃した。ホワイト夫人が指摘しているように、もしペインのような人が、天に行けて、天で大いなる栄誉を受けているとすれば、どんな罪人でも、生活を改めず、イエス・キリストを信じることもしないで、天国に入ることができるのであろう。ホワイト夫人は、この誤りを、強い言葉で明らかにし、心霊術の不合理性を指摘した。

一九六ページ、**完全主義**——一八四四年の経験のしばらくあとで、初期の再臨信徒の中

には、神を見失って、狂信主義に走った人々があつた。エレン・ホワイトは、このような極端主義者に対して、「主はこう言われる」をもって答えた。肉における完全な状態に達したのだから罪を犯すことはありえないと教える人々を、ホワイト夫人は譴責した。そのような人々について、ホワイト夫人は、後に次のように書いた。

「清められた者は、罪を犯すことができないと彼らは考えた。そして、これは当然のことながら、清められた者の愛情や欲望は常に正しく、彼らを罪に陥れる危険は決してないという思いを抱かせた。こうした詭弁のもとに、彼らは、聖潔という衣のかけで最悪の罪を行っていた。そして彼らは、その欺瞞的催眠術の影響によって、彼らの仲間のある人々に対して不思議な力を及ぼしていた。彼らは一見立派ではあるが、欺瞞的なこうした説の害悪を見ることができなかつた。

これらの偽教師たちの欺瞞が、はっきりとわたしの前に示された。そして、わたしは、記録の書のなかに、彼らに対して恐るべきことが記されているのを見た。そして、その日常の行為が、神のみ前に憎むべきものであるにもかかわらず、完全な清めに到達したと主張する人々に負わせられる恐るべき罪を、わたしは見たのである。」（ライフスケッチズ 八三、八四ページ。）

二一九、二二〇ページ、**主の聖餐、女子が男子の足を洗う、きよい接吻**——セブンスデー・アドベンチスト教会の開拓者たちは、安息日の真理を信じてから、熱心に、すべての点において、神の言葉に従おうと努めたが、それと共に、み言葉の誤った解釈や極端なことや狂信主義に走らないように注意した。彼らは、主が教会のために制定された主の聖餐の特権と義務とを明らかに理解した。洗足と清い接吻についての質問が出た。主は、この幻の中で、出発しようとする教会を導き守るために、微妙な点をいくつか明らかにされたのである。

聖餐式を幾度行うべきかについて、ある人々は、一年に一回を主張した。しかし、主の聖餐は、それよりはもっと回を重ねて行うべきであるという勧告が与えられた。今日、教会では聖餐式を一年に四回行うことになっている。

洗足についても勧告が与えられた。どのように行うべきかについて、意見が分かれていたようである。無分別な行動をとる人々があつて、混乱が起きた。そこで、洗足式は、人々に偏見を抱かせないように、注意深く、敬虔な態度で行うべきであるという勧告が与えられた。男女が互いの足を洗うのは適当かどうかという問題があつた。エレン・ホワイトは、この点について、ある事情の下においては、女子が男子の足を洗うことは適当であるとい

う聖書の証拠を示している。しかし、男子は女子の足を洗うべきではないと彼女は勧告している。

きよい接吻について、S D A 聖書コメンタリーは次のように言っている。

「特に、オリエントにおいて、接吻は、あいさつの時、愛と友情とを表す一般的方法であつた（ルカ七ノ四五、使徒行伝二〇ノ三七参照）。『きよい接吻』または、『愛の接吻』は、クリスチャンの愛情の象徴であつた（ペテロ第一、五ノ一四）。初代のクリスチャンたちは、主の聖餐の時に、このあいさつを交わす習慣があつたようである（殉教者ユスティノス、第一弁証論六五）。後の文書を見ると、この『きよい接吻』を異性に対して行う習慣はなかつたことを示している（使徒教憲第二卷五七章第八卷一章）」（S D A 聖書コメンタリー第七卷二五七、二五八ページ）。

初期の安息日を守る再臨信徒たちは、洗足式のときに、きよい接吻を交わす習慣があつた。男女間においてきよい接吻を交わすという明らかに穏当でない行為があつたわけではないが、すべての悪と思われるようなものから遠ざかるようにという注意がなされている。

二二一ページ、**音をたてること**——福音の網は、あらゆる種類の人々を引き寄せる。音

を立て、神に対する賛美をあらわに示して叫び、大声で興奮した祈りをし、活発にアームンと言うのでなければ、真の宗教経験を持っていると感じない人々があつた。ここにおいても、また、その初期に、神の礼拝には、礼節と厳粛さがなければならないという警告が教会に与えられた。

三七八―三八二ページ、ウィリアム・ミラー——一八三〇年代と一八四〇年代のアメリカの大再臨運動に関連して、ウィリアム・ミラーの名がよく挙げられる。「各時代の大争闘」においては、「最も重要な預言」という題名のもとに、一章全体がウィリアム・ミラーの生涯とその活動にあてられている（下巻一―三三ページ）。ウィリアム・ミラーは、一七八二年、マサチューセッツ州、ピッツフィールドで生まれ、一八四九年、ニューヨーク州、ローハンプトンで亡くなった。彼は四才の時に、両親と共にニューヨーク州、チャンプレン湖近くのローハンプトンに移り、開拓地の農園で育った。彼は、いつも勉強好きでよく本を読んだ。彼は、村の指導者になった。彼は、一八一六年に、神の言葉を注意深く研究し始め、時に関する大預言とキリストの再臨に関する預言とを研究するようになった。彼は、キリストの再臨が近いという結論に達した。彼は、彼の論旨を長年にわたって

検討し、その確實さをたしかめた上で、一八三一年の初夏、預言に関する彼の見解を公に発表する招きに応じた。その後彼は、再臨の使命を宣布するために、彼の時間の大部分を献げた。やがて、幾百という他の新教の牧師たちが彼に加わり、一八四〇年代の大再臨運動に参加した。

一八四四年十月二十二日の失望の時に、ミラーは、疲労し病氣であつた。彼は、再臨使命を彼と共に宣言した若い同僚たちに依存するところが多かつた。失望後間もなく、安息日の真理に彼が気づいたときに、彼らは、彼にそれを拒否させたのである。これは、ウィリアム・ミラーではなくて、彼らが責任を負わなければならない。エレン・ホワイトは、この経験を四二〇ページに記し、ミラーは、最後のラッパが鳴るときに、墓から呼び出される者の中にいると確言している。

三八三―三九三、四一四―四一九ページ、**黙示録一四章の三天使の使命**——三八三ページから始まる三つの章の中で、エレン・ホワイトは、第一、第二、第三天使の使命について書いている。彼女は、彼女と共に大再臨運動と二八四四年の春と秋の失望を経験した人々のために書いた。彼女は、三天使の使命を説明しようとしているのではなくて、自分

の読者たちは、もちろんこの経験について十分な知識を持っているものと考えた。エレン・ホワイトは、このような経験に照らして、自分の同信の友だちに、このような経験に照らして、勇気と理解を与えようとしているのである。これらの使命の主題の詳細に関しては、「各時代の争闘」を参照しなければならない。神のさばきの時の接近について警告を発した、第一天使の使命については、「各時代の争闘」の中の「最大の希望」(上巻三八五―四〇七ページ)、「最も重大な預言」(下巻一―三三ページ)、「十九世紀の世界的再臨運動」(下巻四九―七四ページ)を参照。第二天使の使命については、「真理の拒否とその結果」(下巻七五―九四ページ)を参照。失望に関しては、「預言の成就と大いなる試練」(下巻九五―一八ページ)、「聖所とは何か」(下巻一九―一三七ページ)、「天の至聖所における大事件」(下巻一三八―五〇ページ)を参照。第三天使の使命は、「預言に現れたアメリカ合衆国」(下巻一五一―一七三ページ)、「安息日の意義とその回復」(下巻一七四―一八五ページ)を参照。

三九一ページ、**第二天使の使命の終わり**——われわれは、第一、第二、第三天使の使命は、今日にも当てはまる使命であることを、明確に理解する一方、それらが最初に宣言さ



れたときには、第一天使の使命の「神のさばきの時がきた」という叫びは、一八三〇年代と一八四〇年代のキリスト再臨の切迫の宣言と関連があったことも認めるのである。第二天使の使命は、一八四四年の初夏、再臨信徒たちに、第一天使の使命の宣言を拒否した名目的教会から出るようにと呼びかけたときに始まった。第二天使の使命は、現代の真理として継続することは事実であるが、一八四四年十月二十二日の直前に、その頂点に達して終結したのである。キリストの再臨の直前、三天使の使命が、もう一度世界に広く伝えられるとき、黙示録一八章一節の天使が「バビロンは倒れた」「わたしの民よ。彼女から離れ去れ」という第二天使の使命の宣言に加わる。「各時代の大争闘」の中の「世界への最後の警告」(下巻三七ー三八三ページ)を参照。

四一四ページ、三八三ー三九三ページについての注を参照。

四四七ページ、**奴隷と主人**——黙示録六ノ一五、一六によれば、キリストの再臨の時には奴隷がいる。ここには「奴隷、自由人らはみな」と書いてあるのである。エレン・ホワイトが、この場所で言っていることは、彼女が幻の中で、キリストの再臨のときに奴隷と

奴隷の主人を見たことを示している。この点において、彼女は、聖書と完全に一致している。ヨハネとホワイト夫人は両方とも、主の再臨の時の状態を示された。米国における黒人奴隷たちが、この文章が書かれてから六年後に効力を発した奴隷解放宣言によって解放されたことは事実であるが、それによってこの言葉がその効力を失ったわけではない。なぜならば、今日においてさえ世界各国には幾百万という男女が、実際に、あるいは実質的に、奴隷状態にあるからである。将来についての預言に関しては、その預言が成就する時に至るまでは、判断を下すことができないのである。

5 : 22 ..... 220		6 : 16 ..... 158
5 : 26 ..... 220	ペテロの第二の手紙	12 : 3 ..... 183
テモテへの 第一の手紙	3 : 11, 12 ..... 206	14 : 1 ..... 90
5 : 10参照 ..... 219	ヨハネの第一の手紙	14 : 4, 5 ..... 88, 89
ヘブル人への手紙	3 : 3 ..... 206	14 : 7 ... 382, 385, 395
4 : 9 ..... 89	3 : 22 ..... 152	14 : 8 ..... 391, 396
4 : 10-12 ..... 80	ユダの手紙	14 : 12 ..... 414, 451
10 : 35-39 ..... 79, 80	9 ..... 282	14 : 14-17 ..... 89
ヤコブの手紙	ヨハネの黙示録	18 : 2 ..... 468
5 : 7, 8 ..... 89	3 : 7, 8 ..... 106, 173	18 : 4, 5 ..... 449
ペテロの第一の手紙	3 : 7-13 ..... 88	18 : 6参照 ..... 447
1 : 5-7 ..... 85	3 : 14-20参照 ... 205	19 : 10 ..... 381
1 : 22 ..... 82	3 : 17 ..... 221, 222	21 : 2 ..... 90
	4 : 8 ... 95, 218, 463	22 : 1-5 ..... 90
	6 : 15-17 ..... 462	22 : 2 ..... 465
		22 : 9 ..... 381
		22 : 11 ..... 452
		22 : 14 ..... 96

22 : 64 .....	292
23 : 34 .....	301
24 : 50 .....	322

#### ヨハネによる福音書

1 : 29 .....	267
7 : 45, 46 .....	277
9 : 20-27 .....	86
13 : 34, 35 .....	82
14 : 13-15 .....	87
15 : 7 .....	152
15 : 7, 8 .....	87
16 : 15 .....	78
18 : 4, 6 .....	288
19 : 6 .....	207
19 : 26, 27 .....	302
19 : 30 ... 302, 305, 312	
	349, 413, 454
20 : 13 .....	400
20 : 13, 16, 17... 317, 318	
	394
20 : 28, 29 .....	319

#### 使徒行伝

1 : 11 .....	323
2 : 4 .....	78
3 : 12-16 ... 325, 326	
4 : 10-12 .....	327
4 : 16 .....	327
4 : 29-31 .....	78
5 : 20 .....	328

5 : 23, 25-28 ... 328, 329	
5 : 30-32 .....	330
5 : 38, 39 .....	330
5 : 41, 42 .....	331
6 : 15 .....	333
7 : 51, 52 ... 333, 334	
7 : 55-58, 60 ... 334	
9 : 4-6 .....	336
9 : 11, 12 .....	336
9 : 15, 16, 17... 337	
9 : 21 .....	337
10 .....	161
16 : 17 .....	341
16 : 18 .....	341
16 : 20 .....	341, 342
16 : 28 .....	342
16 : 30, 31 ... 343, 385	
16 : 37 .....	343
20 : 28-30 .....	83
22 : 18-21 .....	344
26 : 28 .....	346

#### ローマ人への手紙

7 : 12 .....	141
8 : 38, 39 .....	87

#### コリント人への 第一の手紙

3 : 10-13 ... 82, 83	
15 : 51 .....	209
15 : 55 .....	463

#### コリント人への 第二の手紙

2 : 16 .....	136
4 : 6-9 .....	85
4 : 17, 18 .....	85
6 : 17 .....	397
13 : 5 .....	82

#### ガラテヤ人への手紙

1 : 6-9 .....	83
---------------	----

#### エペソ人への手紙

4 : 32 .....	81, 82
6 : 10-18 .....	81

#### ピリピ人への手紙

1 : 6, 27-29 ... 80	
2 : 13-15 .....	81
3 : 20 .....	89
3 : 21 .....	89

#### コロサイ人への手紙

2 : 6-8 .....	79
---------------	----

#### テサロニケ人への 第一の手紙

3 : 8 .....	85
-------------	----

# 聖句索引

## 創世記

1 : 26 ..... 254  
3 : 4 ..... 361  
16 : 13 ..... 212

## 出エジプト記

20 : 9, 10 ..... 416  
20 : 10 ..... 93  
20 : 10 ..... 145

## 民数記

14 : 10 ..... 62

## 詩篇

24 : 7-10 ... 322, 323  
126 : 5, 6 ..... 138

## イザヤ書

8 : 19, 20 参照 ... 131  
25 : 9 ..... 209, 463  
52 : 11 ..... 136  
53 : 5 ..... 212  
66 : 5 ..... 61

## ダニエル書

8 : 12 ..... 155

## アモス書

8 : 11 参照 ... 454, 455

## ハバクク書

2 : 3 ..... 389

## ゼカリヤ書

9 : 9 参照 ..... 401

## マタイによる福音書

3 : 17 ..... 270  
4 : 6, 7 ..... 270  
7 : 6-12, 15 ... 78, 79  
12 : 36 ..... 212  
19 : 16-22 ..... 116  
21 : 9 ..... 470  
24 : 24 ..... 79  
25 : 6 ... 391, 397, 406, 407  
26 : 33 ..... 290  
26 : 40 ..... 287  
26 : 53, 54 ..... 288

27 : 4 ..... 294  
27 : 25 ... 304, 329, 353  
27 : 42 ..... 305  
27 : 29 ..... 291  
27 : 40, 42 ..... 301  
28 : 13 ..... 311

## マルコによる福音書

1 : 23-25 ..... 87  
11 : 9 ..... 305  
11 : 9, 10 ... 400, 401  
11 : 24 ..... 151  
15 : 26 ..... 305  
16 : 17, 18 ..... 86

## ルカによる福音書

1 : 20 ..... 78  
4 : 3 ..... 269  
4 : 4 ..... 270  
4 : 5-8 ... 271, 272  
4 : 10, 11 ..... 84  
9 : 35 ..... 283  
12 : 3-7 ..... 84  
12 : 33 ..... 129, 187  
19 : 37-40 ... 207, 208  
19 : 40 ..... 401  
22 : 31 ..... 286  
22 : 42 ..... 286, 287

# 初 代 文 集

NDC 194/501P/22cm

---

1976年5月1日 初版発行

著 者 エレン・G・ホワイト  
発 行 者 広 田 実  
印 刷 所 福 音 社

---

〒241 横浜市旭区上川井町1966

発 行 所 福 音 社  
振替横浜7-599番

---

〒241 横浜市旭区上川井町846

発 売 所 健康と品性向上協会本部

---

転載複製を禁ず 製本・関山製本社 PRINTED IN JAPAN